彼岸の絆

一色　強兵

彼岸の絆　目次 ⅲ
登場人物 1
第一章　余計なお世話 1
失恋 4
頼み 17
第二章　みどりの牧場 17
突然の誘い 26
農機具置き場 39
ウォーキングアラウンド 50
宣誓 54
嫉妬と食事と 62
第三章　ラ・マンチャの男 62
花の応援団 64
ドンキホーテの価値 64
ドルシネアの秘密 71
ドルシネア姫とドンキホーテ 94
女のおそろしさ 101
第四章　一夫多妻 108
黒猫 108
知恵の希望 117
リベンジ 123
再会 134
犬 152
家族 157
三者同衾 163
三人の風景 175
暗雲 186
崩壊 195
宴の後始末 202
第五章　豊穣多産 214
人と人間 214
夜叉の夕食 221
地底の奇蘭 233
捧げられしもの 246
奇蘭から淑子へ 264
困惑 278
高座の秘密 284
清玄の不安 294
第六章　意志と情熱と 301
お見合い話 301
燃える女 311
尾行 319
夜叉の力 326
描かれた世界 340
迷走 350
変貌 356

淑子の推理 362
第七章　救出 365
不審人物 365
山中の密会 370
それぞれの苦悩 375
鞘当て 378
邪神の夢 382
希望 385
合意 389
第八章　克服 392
出発 392
山寺 395
知恵の覚悟 398
陽子と淑子 401
廃屋 404
池 408
別離 415
終章 420
夜叉の正体 420
夜叉の思いやり 431
目覚め 440
彼岸の淵 446
涙 450
前世 455
肉体 457
展望 463
祈り 467
幻想 471
告白 475
エピローグ 485
一 485
ウェイフさんからのあとがき 485
三 485
作者あとがき 485

登場人物

龍造寺浩一
伊集院啓作
高沢亜紀
早川知恵
伊藤芳子
佳織
嵯弥香
赤城孝人（たかと）
伊集院十三
中川勝則
中川美智子
高坂健
川野千鶴
山岡隆太郎

霊山（よしおか）清玄
奇蘭（きらん）　霊山淑子（よしおかとしこ）
仁科陽子
及川健三
吉田修平
米村京介
田中みさ恵
岩下正道
京子
みっちゃん
坂田某
久米某
石井某

一色強兵

第一章　余計なお世話

失恋

―　やっとせいせいできた……

それが亜紀の偽らざる本心だった。

昭和五十三年のようやく梅雨も明けた頃、龍造寺浩一はショッピングモールの脇を通るオレンジ色のカラータイルで覆われた歩道を歩いていた。一見一人で歩いているように見えたが、一人ではなく、実は彼女、高沢亜紀が一緒に歩いていた。が、その距離は大きく、よほど注意してみないと二人連れには見えなかった。

「ねえ、浩一さん、もう少し私に近づいてくださらない？」

「え、あ、うん」

そんな返事をした直後は多少亜紀との距離は近づくのだが、三十メートルも歩くともう元の距離に戻っていた。

歩きながら亜紀はため息をついた。浩一には何度も同じ言葉をあらゆる機会に言っていた。付き合いはまもなく三ヶ月になろうというのに、亜紀と浩一の距離は一向に縮まらないのである。亜紀は無力感を感じていた。自分を受け入れてもらえないのだといつ頃か思うようになっていた。

もともとは、友達の紹介で知り合った仲である。ルックスがいい浩一に亜紀はすぐ夢中になった。だが、浩一は一向に自分に前向きな姿勢を取らない。デートの誘いはたいていは亜紀からだった。亜紀はグラフィックデザイナーである。建築士である浩一と分野が近いので、こと美術や造形デザインに関しては話ははずんだ。が、それから外に出られなかった。プライベートな話題、とりわけ好き嫌いが判断基準になるような話題になると浩一の口は重くなり、会話が途絶えてしまうのである。

結局、私は、彼にとって勉強仲間にしかなれないんだ……、昨日あたりからそんな考えに亜紀は支配されていた。

彼と一緒に歩くときも、距離を置くのは、自分がパートナーだと思われたくないのに違いない、きっと別に好きな人がいるんだ、だから、好き嫌いの話題をしても乗ってこない、そして何より自分をちっとも口説こうとしない、身体を求めようともしないんだ……、この十八時間ぐらいのうちに亜紀の頭の中でこの考えは急速に勢いを増していた。

自分の考えの正否を確かめるつもりで、離れて歩く浩一の脇に駆け寄り、その左手をつかむと、強引に手をつないだ。

咄嗟のことに、案の定、浩一は躊躇いをみせ、慌てて手を引っ込めた。

亜紀の決心がついた。

「どうしたの？」

「ううん、何でもないの。ねえ、ちょっとお話したいことがあるんだけど……、ちょっとあそこに座らない？」

亜紀が視線で示した方向にはバスターミナルがあり、乗客のための待合い用のベンチがいくつか置いてあった。待つ人はほとんどおらず、大半のベンチは無人だった。

「あ、ああ、いいけど、あんなところでいいの？　もう少し行けば喫茶店もあるし……」

「いいのよ、あそこで。わたし今あなたとお話がしたいの」

「そ、そうか。じゃあ」

小さなベンチに亜紀が先に腰掛けた。その横に浩一は腰掛けた。が、そこには一メートルぐらいの隙間が出来た。

それを見て亜紀はまたため息をついた。

だが、そのため息の理由を告げることなく、唐突に亜紀は告げた。

「別れて欲しいの」

さきほどのため息のおかげで、肩から力が抜けていたせいか、すんなりとこの言葉が出た。言った後で亜紀はほっとした。

―　そうだ、それが一番いいことなんだ……

が、浩一の反応はそうではなかった。

「ど、どうしてそんなことを言うんだ、亜紀。ぼ、僕が何か、君の気に障るようなことをしたなら謝る。いきなりこんなふうに切り出すなんて、いくらなんでもひどいじゃないか。いったい何が原因なのか教えてくれ。僕は君とうまくやっていけるように最大限の努力はしてきたつもりなんだ……」

と、浩一にしては珍しく沢山の言葉を吐いた。が、亜紀には浩一の反応は読めていた。亜紀が浩一に付けたレッテルは、純粋だが無知で鈍感。内省的で相手の気持ちに気配りできない男。

今更、自分の気持ちを説明しても理解させるのは至難だと思った。

「悪いけどお付き合いしたい男の人ができたの。だから……」

「そんな……」

「悪いけど浩一さんは私の好みじゃなかったの。ごめんなさいね。あなたにはきっと私よりもふさわしい人がいるはず。だからもう別れましょう。さよなら」

亜紀は長居は無用と考えていた。浩一がこういう話題に入ると極端に無口になることを知っていた。時間の無駄だと思った。

呆気にとられる浩一を尻目に、亜紀は今まで歩いてきた歩道を逆方向に歩き始めた。

頼み

それから季節が一つ移り変わった頃、二人の男がスタンドバーの一角でグラスを交わしていた。夕方からの激しい雷雨は降り止まず、雨宿りがてらに訪れたバーであった。二人とも上着はつけず白シャツ姿だ。が、一人はそれでもきっちりと赤いネクタイを締めていた。もう一人の男、龍造寺浩一は開衿シャツのノーネクタイ姿である。赤いネクタイの男、伊集院啓作が口を開いた。

「なあ、浩一……。お前を見込んで頼みがある」

いつになく暗い、そして低く小さなつぶやきだった。それまでの明るい表情から突然一変した啓作の沈んだ声に、龍造寺浩一は驚きながら口元に運んだグラスを止め、啓作の目を見つめた。

「なんか、深刻そうだな……」

「ああ……、その通りだ。お前の一生の問題にもなる……」

浩一はグラスをカウンターに戻した。

「あ～ら、ダメじゃない。男ばっかり二人でこそこそ話なんて…。悪い噂が立っても知らないわよ。そんな暗いムードになってないで、もっとパーっとしなさいよ。ほら、そこ、グラス持ってちゃんと空ける」

突然、胸元が大きく開きくっきりと胸の谷間を浮かび上がらせた白いドレスを着込んだ京子がカウンターの向こうから二人の間に割り込んできた。

「やあ、そうだった。ちょっと暗かったかも。だいたい京子ちゃんが悪いんじゃないか。俺たちのことほったらかして、他の男のとこに行っちゃうんだから……」

啓作が先ほどとは全く違う、良く透る大きな声と明るい表情で京子に混ぜっ返した。

「あ～ら、寂しくさせてごめんなさいね。でもあちらもとっても大事なひとなのよ。分かってね。いい子だから」

京子と呼ばれた女はローズピンクのルージュがやけに目立つ顔で駄々をこねるこどもをあやすような言い方で返事をした。

「な～に～。大事な人！　京子ちゃんたら、また俺以外に男作ったのか！」

「や～ね。そんなんじゃないわよ。だけど啓作ちゃんだって、このとこ、お見限りだったじゃない。おあいこよ。ところでこちらの彼氏、初めてよね。……あらあ、いい男じゃない。ね、もったいぶらないで、紹介しなさいよ」

「そうだろ。いい男だろ。でもね。京子にはあげられないんだ。この男は。悪いけど、諦めてくれ」

「ま、もうフィアンセでもいるの？」

「まあな」

「おい、ちょっと待て。俺にはフィアンセなんかいないぞ」

話の成り行きが変な方向に向かったので浩一があわてて口をはさんだ。

「まあ、啓作ちゃん。うそばっかりついてると友達なくすわよ。ね、私京子って言うの。お名前聞かせてもらえない？」

「龍造寺」

「下の名前は？」

「浩一」

「俳優みたいな名前なのね」

「おいおい、京子ちゃん。ダメだってば。こいつは俺のモノなの。京子ちゃんにはあげられないの」

啓作は身を乗り出して浩一に急接近する京子をブロックした。

「おい、何言い出すんだ！？」

「まあ、啓作ちゃんたら、そういう趣味だったの？　知らなかった」

二人の注目を浴びながら、啓作がウィンクをしながら返事をした。

「そうじゃないって。こいつの結婚相手は俺がもう決めてるんだっていう話をこれから俺がするところだったの。だから、京子ちゃんは邪魔なの。お分かり？」

「おい、何で俺の相手がお前に決められなきゃならないんだ？」

「キャー、やれやれって感じね。何にせよ、私がお邪魔だったのは間違いないみたいね。いいわ。ここで寂しく身を引くのもプロの女のつとめだものね。しばらくお話してなさい。男同士で仲むつまじく……。ねね、後で教えてよ。その中身」

京子は店の奥の薄暗く見えるボックスシートの方へ戻っていった。立ち去る京子の、時折天井からの強いハロゲン光を反射させている大きく開いた白い背中を見送ってから、啓作が元の小さくつぶやく声とまじめな顔で話を続けた。

「お前、ほんとに女に、いや女どころか人間に興味ないだろ」

浩一は言われている中身の割には冷静にその啓作の言葉を聞いていた。図星だった。そして、さきほどの京子との会話で見せた啓作のような女に対して変幻自在にふるまう対応は自分にはとてもできないことだと思っていた。

返事がない浩一の反応を確かめてから、啓作はさらに言葉を続けた。

「だから俺の女、知恵をお前にやろうと思ってな」

啓作の口元に笑みが浮かんだ。浩一はむかつきを覚えた。

「やめろ。そんなこと言って俺を怒らせていったいどうするつもりだ。お前の目的はなんだ」

浩一が思わず一際大きな声でそう答えると、啓作は顔を真顔に戻し、声にもう一段のミュートをかけて囁くように言った。

「別にお前を怒らせるつもりはない。知恵は俺にとっても大切な女だ。ただ、いろいろ事情があって、知恵とこれ以上つきあうわけにはいかなくなったのさ。それでお前ならきっと彼女を幸せにできるだろうと考えた」

「じゃあ……、さっきの話は……」

浩一も同じようにミュートの声になった。

「ああ、大まじめさ。いや、これは俺からの頼みなんだ。是非知恵をもらってやってくれ」

「知恵さんを捨てるのか？」

「そんなところだ」
「何故？」
「芳子を取る」
「芳子って……？　まさか、新しい女を作ったのか？」
「ああ」
「呆れた奴だな。それでいらなくなった方を俺に押しつけるのか」
浩一は普通の調子の声に戻し冷ややかに言った。
「まあ待て。お前の考えていることはだいたい分かるが少しだけ誤解してる」
「どこが違う？」
「俺はいわゆる二股をかけるつもりはなかったんだ。そして今もない。知恵も芳子も両方好きだ。それからついでに言えば、知恵も芳子のことを好きだし、俺と知恵、芳子と知恵、俺と芳子の間のどこを取ってもわだかまりはなかったと断言できる」
「……わからんな、お前の言ってる意味が」
「事実として言えば、俺たち三人が同じふとんで一緒に寝たのは珍しくなかったということさ。芳子のことはお前も知らないことだったんだな。そう言えば。それを忘れていたよ。もともと芳子は知恵の親友、いや恋人みたいなものだったのさ」
「知恵さんの恋人……。じゃ、三角関係じゃないと」
「ああ。三角形になるのは間違いないが、そこには全く葛藤はなかった。まるで一つの家族みたいにな。おそらく日本がイスラム教国みたいに妻を四人まで認めてくれる国だったら、このまま間違いなくハッピーエンドだったんだ。二人とも俺の妻にすればそれでよかったんだから」
「じゃ、回教国行けよ。三人で」
「悪いが酒もトンカツも大好物なんだ。三人とも」
啓作は真顔だった。
「でも別に仲がいいならずっと三人で生活してたらいいじゃないか。妻なんて、特に意味はないんだろう。お前にとっては」

「言ってくれるな。俺についてのお前の観察は当たりだが、女の考えはそうもいかないみたいだ。実は芳子が妊娠した。で、女二人の関係がおかしくなった。『妻』って言葉は俺に言わせれば女を狂わせる猛毒を持ってる」

「……妊娠。……そうか。そういうことか……。だが、何で俺に？」

「さっきも言ったろう。俺は知恵を嫌いになったわけでもないし、それどころか今でも愛してると言えるぐらいなんだ。愛情なんてプライオリティがあるようなもんじゃないだろう。もともと。妻というものに女がこだわるのは、結局、保険なんだろうな。女のヒエラルキーの頂点にある、一つのターゲットのような。結局はそれも自分と自分のこどもの将来を安定したものにするための。とにかく、俺のところに置いておくわけにはいかなくなったとしたら、ただ放り出すって訳にもいかないだろ。そういう俺の気持ち、分かるだろ。いくらお前でも」

「……ああ、だが、お前は知恵さんにまた命令して俺のところへ行けとやるつもりなのか？　お前が主人から下りるという状況じゃ、それはおかしいだろう」

「まあ、そうかも知れん。だが、たぶん知恵は反対しないと思う」

「何故？」

「相手がお前だからだ。俺には分かる。知恵が一番好きなのは俺じゃない。お前だってな」

「……」

「それにこういう言い方もたぶん間違いじゃない。お前以外に知恵をちゃんと愛せるやつはいないし、お前にとっても、知恵はお前のすべてを受け入れられる貴重な女だ」

「今まで自分の女にしておきながら、よくもそんな調子のいいことが言えるもんだ……」

「まあ、そう言うな。一緒に生活したから分かったんだ。そういうことも。だがな、お前が俺みたいな女の愛し方をするようになれば、今俺が言ったことはすべて現実になるという確信が俺にはある」

「お前みたいな女の愛し方？」

「ああ、言っちゃ悪いが、お前には女と付き合う上で致命的な欠点がいくつかある。だが、それはどれも解決可能なものだ……。そしてその上で言えば、お前には女を愛する上で他の男にはない、いい素質も持ってる」

「素質？」

「素質って言うと変かな。精神というか生き方というかそういう根本的なものだ。お前は情に流されないだろう。理性で自分の裏表をお前ほど完全に管理してるやつはちょっといない」

「……お前が何言ってるのか俺にはよく分からんが、それが女を愛する上でどうして重要なんだ。愛情っていうぐらいだから情が重要なんじゃないのか」

「と、思ってるやつは多いだろうな。まあ、それでうまくいくことが無い訳じゃないから、それでもいいが。だがな、俺に言わせれば、女が情に生きるのもいい。だが、男が情だけの愛し方しかしなかったら、結局は一夜限りの付き合いの延長にしかならないんだよ」

「一夜限りの付き合いの延長？　刹那的なものということか？」

「つまらないきっかけで生まれた感情がつまらないきっかけで生まれた別の感情に置き換えられる……。激しく愛し合った二人が、些細なことから激しく憎しみ合う。こんなことはいくらでも世の中に転がっている。自分たちの場合に限って、絶対そういうことが起こらないと考えられるか？　情なんて一時的なものだ。もともとは」

「じゃ、お前の愛し方って何だ？」

「決意だ。自分で自分に命令するんだ。自分の意思としてこの女を愛するという」

「決意か……。なるほど、牧場の時のお前の行動がわかるな」

「そう、男がこういう強い意志を持てば女は変わるし、男を本当に愛せるようになる。だが、こういうことが出来る男はそんなにはいないとも思っている。お前はそういう貴重な男なんだよ。そして知恵にはそういう男が絶対必要なんだ。もし俺が知恵の主人でなく

なったとしても」

「……」

「お前しかいないと思った。ありのままの知恵を受け入れて愛せる奴は。それがお前に声をかけた理由だ」

「お、俺には……。お、俺にはお前の代わりなんかできない。知恵さんもそんなものは望まないだろう……」

「そんなことは心配するな、と言いたいところだが、そうもいかないな。いや、知恵が幸せになれるかどうかはほとんどお前次第だ。お前が知恵を愛したら愛した分だけ知恵はお前にそれを返してくれる……。知恵はそんな女だ」

「だが、知恵さんはお前への未練があるだろう。それはそんなに簡単に消えるもんじゃないだろう。しかも自分の親友がこどもを作って何もかも奪っていく事態なんだろ。俺が入り込める余地なんかあるもんか」

「痛いところをつくな。お前の言うとおりだ。俺の責任の部分だ。ちゃんと知恵が納得するように手は打つ」

「そんなこと……」

できるのか、と言いかけて浩一は口をつぐんだ。過去の経験で啓作はこういうことを言い出したら本当にそれをやってのけることを知っていた。たぶん、やり遂げるだろう。その代わり、少しは言っておくべきだと思って、あえて非難する方の言葉を選んだ。

「……何にせよ、お前は馬鹿だ」

「ああ、俺は馬鹿だった。調子に乗って二人の女と同時に関係をつくったばっかりにな。だから頼む。協力してくれ。知恵を助けてやってくれ」

啓作を非難して、啓作が素直にそれを受け入れて謝ったことは過去には一度もなかった。浩一は真面目に啓作の話を考える気になった。

「少し考えさせてくれ。それに知恵さんの気持ちも確かめたい」

「知恵の気持ちについては心配するな。それは俺に任せろ。でも、

どうしても断らないでくれ。これだけは」

「……俺は不安なんだ。誰であれ、他人と一緒にいるということが……」

「そうか、お前まだその段階から抜けていなかったのか。困ったな。いくらなんでももうそれは卒業してるだろうと思ってたのに。だが、そうだとするとなおさら、知恵はお前向きだな。いや知恵以外の女じゃだめだな。ま、今のお前にはそう言っても分からないだろうけど……。わかった、まずお前をまず一人前の男にする。俺が必ずそうしてやる。その上で知恵を頼む」

「一人前の男？　俺はそうじゃないと言いたいのか？」

「見方によってはな。そんな悪い意味で使ったんじゃない。お前の場合は俺に言わせれば純粋すぎるんだ。だが、その純粋さはお前自身も、それからお前の家族も傷つけかねない、危険な純粋さなんだ。だからお前にはある種の修行が必要だな。そうでなければ知恵をお前に任せられない。ただ、知恵はいい。とくにお前には絶対いい。知恵はそういう、愛しがいのある女だ」

「愛しがい……。無償だから愛なんじゃないのか」

「お前はそれだから女とつきあえないんだよ。それは理想論。現実じゃない。絶対にないとは言わないが、相当珍しいだろうな。愛ってのは、一方的に奪ってるように見えていても実は奪われてる部分も同時にある。お互い様ってね。そうなってない場合は、どっちかが何かを勘違いしてるだけなのさ」

「理想論か……」

「俺に言わせれば、この年にしてよくぞ今までその純粋さを保てたなっていうぐらいお前は貴重品だ。お前、以前付き合ってた彼女。えーと、名前は……」

「亜紀のことか」

「そうだ。確か亜紀さんだったな。あの子にフラれたって、いつか、お前言ってたよな」

「ああ、その通りだ」

「お前たちどれぐらいつきあってた？」
「三ヶ月」
「それでどこまで進んだ？　セックスは？」
「いやしてない」
「やっぱり。それじゃフラれて当然だ」
「そうか……。でもそれが理由じゃないだろう。彼女他に好きな男が出来たのさ」
「って、彼女が言ったんだろ。馬鹿な奴だ。そんなもん別れるための口実だって。辛くなったんだよ。お前と会うのが」
「なぜ？」
「へ、おめでたいやつだ。あのなぁ、なんて言えばいいかな。お前、つきあってる間、彼女にプロポーズしたとか、セックスしようって口説こうとしたことあるか？」
「いや、ない」
「だろうな。じゃ、どうやって会ってる間中、時間つぶしてた？」
「話をして、一緒に食事をして、一緒に飲みに行って……」
「話って、どうせお前のことだから建築デザインかなんかの話だろ」
「ああ、その通りだ。時には彼女のデザインの仕事の話にも乗ったけど」
「つまりだ、彼女はお前の恋人にはなれないし、結婚相手にもなれないと思ったんだ。言ってみれば、お前は彼女を女として扱わなかったのさ。相手が高校生とか中学生ならそれでもいいがな。これはな、女にとっては大問題なんだ。お前がしたことは『女の生殺し』ってやつだ。亜紀は、お前から逃げたのさ。しかも今もって本人は全くその自覚がないんだからタチが悪い」
啓作はワイシャツの胸ポケットからたばことライターを出し、箱を振って飛び出した一本を口にくわえると火をつけようと手でそれを覆った。
「はい、どうぞ。これぐらい邪魔にならないでしょ」

様子を見ていたらしい、えんじの布がいくつもヒダを作っているドレスを着た小柄で若い子がすかさず近寄ってきて、横からライターの火を近づけた。

「おっ、ミッちゃん、すまないね」

啓作はそれまでのまじめな顔から一転して満面にいかにもうれしそうな笑顔を作ってそのホステスに愛想を返した。

「まあ、啓作さんたら、ほんとレスポンスがいいわねぇ。ママが夢中になるわけね」

「え、今の話本当？　俺、口説いてみようかな」

今度は身を乗り出し、真面目そうな顔で小声でホステスに告げる。

「そうねぇ。全然ダメってこともないんじゃない。どうなってもあたし知らないけど。でも、ママ怒らしたら、ただじゃ済まないことだけは覚悟しておきなさいよ。何にしてもね」

「おっと、ご諫言痛み入ります。心してこの啓作、ことに当たらしていただきます。だけど、その前に君の気持ちも知りたいな」

大げさに頭を下げると次の瞬間、破顔一笑、ホステスと声を上げて笑い合った。

「まあ、抜け目ないわね。それは後で。まだ話終わってないんでしょ。終わったら、カラオケつきあって。そしたら私の気持ちも教えてあげる」

「ああ、いいよ。すまんね。気を遣わせちゃって」

「あら、これでもあたしもプロなのよ。これが商売なの」

「残念だな。こっちは職業意識なしにつきあって欲しいのに。それからカラオケだけじゃなくて、店引けた後も」

「あ～ら。ほんとお上手ね。もう敵わないわ。啓作ちゃんには」

さすがのホステスも呆れたという表情で奥に戻っていった。

黙ってやりとりを見ていた浩一がボソっと言った。

「お前の代わりはやっぱり無理だ」

啓作は再びシリアス顔になった。

「今のは、俺の商売用の領域だ。お前にそういうレベルは初めか

ら必要ないし、期待もしてないから心配するな」

「商売用？　クルマ売るのにそういうことが必要になるのか？」

啓作は新車ディーラーのセールスマンをしていた。事業家の父親の命令で武者修行中なのである。

「必要とは言わないが、あると便利。役に立つ。だから俺はどこに行っても女をナンパすることを常に心がけてる。限られた時間で女を口説けるかどうか、ゲームみたいなもんさ。うちの先輩社員の中に俺が尊敬してる人がいるんだが、この人は、高層ビルのエレベーターの中で、一階で乗り合わせた女を四十階に着くまでの間に口説き落としたっていう武勇伝を持ってる……。営業としては僅かでもチャンスがあればアプローチするのが当然だってわけだ。だからお前が俺を見て驚くのは分かるが、それを気にする必要はない。だいたい俺の家は、俺の上に女が三人もいる女系家族だから、女の扱いがうまくないと生きていくのも大変だったんだ。お前みたいに一人っ子の家とはもともとの環境が違いすぎるからな。だが、お前の問題はそういうことじゃない。何というか、人間そのもののことが分かってないって感じだ……。お前、女を抱いたことはあるんだろう」

「ああ、一応」

「そうか。だが、そういう経験の有り無しが問題じゃないんだな。どっちかと言えば、女を愛するということの意味を知らないというか、まるで女のようにしか愛を知らないという、感じかな」

「男と女は何か違うのか？　意味が違ってくるのか？」

「ああ。俺はお前に知恵をモノにするところを見せただろ。で、あの結果、知恵は俺が必要な女になった。俺もあいつを心から愛するようになった。あれをどう思ってる？」

「分からない。何が何だか。狐につままれたみたいだった」

「だろうな。そこが問題なんだ。あれは俺が特別でも知恵が特別でもないんだ。人間ってのは、強いとこ、弱いとこ、いろいろあるけどそういうものをずっと隠してはいけないものらしい。それを特

定の他人にさらすことで得られる安心感みたいなものがあるんだ。そしてそれを求める欲求もね。男の場合は欲求だけじゃだめで、もっと強い意志だな。欲求とか感情だけじゃない。その意志が愛情なんだよ。もっともお前に限らずそれを分かっていない男は多いし、女みたいに感情だけで判断するやつも多い。中には何も考えていないのもいる。ま、それでもちゃんと地球は回るんだけどな。ただ、知恵の場合、何しろ俺の後釜になるわけだから、そんな扱いをされたら知恵も絶対に納得しないし、お前も不幸になる。特に知恵は男の意志に敏感に反応する女だから、このことは絶対に俺としてはおざなりにできない」

啓作はたばこを灰皿に押しつけながら続けた。暗い店内をハロゲンのスポットで照らされた部分だけ、鋭角的にたばこの煙でその空間が明るく光る。それはまるで啓作の胸から飛び出した、何かの精霊のように浩一の方に近づいていった。

「で、知恵さんとのことはとりあえず置いておくとして、いった い俺は何をすればお前は納得できるんだ？」

「そうだな。俺じゃお前にうまく教えられないな。俺はこういうことを説明するのは、苦手なんだ。だから人に助けてもらおうと考えている。一種の教育を頼もうと思ってるんだ。ここまで知らないとなると……。知恵をいい加減に押しつけることは俺としても本意じゃないからな。俺の師匠に助けてもらう」

「師匠？」

「うん、俺にそういうことを教えてくれた人だ。おそらく協力してくれるだろう。改めて紹介する。そうだな。二日ほど泊まりがけで付き合ってもらう時間が欲しい。だから、そのつもりで来週末空けてもらえないか。いや、これはお前の問題でもあるんだ。絶対空けておいてくれ。俺の話は今日はここまでだ……。さ、カラオケでもやって、盛り上がろうか。やっぱサザンかな、最初は」

こうして啓作は話を打ち切った。が、その後、啓作はどんどん盛り上がっていくのに対し、浩一は重い気持ちを最後まで拭うことが

できなかった。

第二章　みどりの牧場

突然の誘い

浩一と啓作がバーで話をしていた時より半年ちょっとほど遡った、昭和五十三年三月の土曜の朝、浩一と啓作の二人は、一人の女と一緒にいた。

「今度俺の恋人になった早川知恵だ。こいつは俺の幼なじみの龍造寺浩一だ」

と、啓作が運転席から降りながら、二人を互いに紹介した。それを聞いた早川知恵という女は、おかしそうにしながら、混ぜっ返した。

「まあ、いきなり恋人にされちゃうの？　今日が初めてのデートなのに……。それに龍造寺さんて、俳優みたいね。男らしくって。私、彼に乗り換えようかしら」

「ちぇ、知恵もメンクイだな。ま、しょうがない。こればっかりは知恵の言うとおりだ。昔から、女にラブレターをもらうのはいつもこいつだった。だけどな、こいつ彼女にいつもフラれてばっかりでね」

「まあ、こんないい男なのに……。どうして？」

「おい、いい加減にしろよ……。まあ知恵さん、とにかくよろしく」

浩一はそうは言ったものの、あざやかな花柄プリントのワンピースに身を包んだその早川知恵の顔、身体に強い執着を感じないわけにはいかず、従って、幼なじみとはいえ、そういう彼女の存在を見せびらかすだけではなく、自分の女性経験の内容の悪さを面と向かって指摘する啓作に強い憤りを感じていた。

「でも、何だって俺を呼び出したんだ？　デートなら俺なんか巻き込まないで行くべきだろう」

「今日お前に来てもらったのはお節介とお願いと両方があるんだ」

「お節介とお願い？」

「そんな野暮な話を聞いてくれるなよ。どっちみちすぐ分かることだし。それに知恵はお前のことをもっと聞きたいって顔してる」

その言葉に反応するように知恵が言葉を繋いだ。

「龍造寺さんて、今お付き合いしてる方いらっしゃらないんですか？」

「ええ……。残念ながら」

「こいつはダメなの。女性が。一番の苦手分野だろうな。間違いなく」

啓作が追い打ちをかける。

「なんで？」

「たぶん女が怖いんだよ。そういう意味では賢いことは間違いない。女ほど危険なモノはないから……」

「まあ……。それって、お寂しくありません？」

「きっとそうなんでしょうね。あなたから見ると……。だけど僕には分かりません」

啓作はそう言った浩一の姿を見て、口元に笑みを浮かべた。

それに気がついた浩一が言葉を続けた。

「なんだ、俺を笑いものにするつもりならもうこれで十分だろ。俺は帰らしてもらう」

背中を向けた浩一に啓作が叫んだ。

「そう怒るな。こっちもお前のことを心配してるんだから。お前に後悔はさせないから、早くクルマに乗ってくれ。頼むから」

その言葉を、浩一は、そして知恵も、いぶかしく思いながら聞いた。が、そういう風に言われると浩一もこどものようにこれ以上意地を張るわけにもいかず、言われるままにクルマの後席に乗り込まざるを得なかった。助手席に知恵を乗せクルマを走らせる啓作に浩一が尋ねた。

「で、どこに行くつもりなんだ。まさか遊園地でもないだろう」

すると啓作の返答は、浩一も、そして知恵も全く予想していないものだった。

「いくらなんでも遊園地はないだろう。ま、ちょっとしたハイキングみたいなもんさ。ところでな。俺はこの知恵を気に入った。本人が俺のことをどう思ってるかはともかく、俺はこいつを俺のモノにすると決めたんだ。お前には今日その立会人になってもらう」

「立会人？　何をすればいいんだ？」

「ね、ちょっと待って。私があなたのモノになるって、それどういう意味よ」

浩一と知恵はほぼ同時に啓作に向かって声を上げた。

「やれやれ二人同時じゃやりにくいな。まず知恵には、文字通りの意味だ。いやか。俺のモノじゃ」

「そんなふうに言われて、はい、そうです、なんて言えるわけないでしょ」

「俺はそんな上っ面の会話をするつもりはない。俺と関わりを一切持ちたくないなら、今が最後のチャンスかもしれないぞ」

「そんな……」

知恵は、今朝から突然自分を恋人扱いし、それで平然としているこの伊集院啓作という人間に当惑していた。彼とは昨夜バーで知り合ったばかりである。お互いの会社の同僚と飲みに来ていて、たまたま隣り合わせになって意気投合した仲にすぎないのだ。ところが、今日、誘いに乗って来てみれば、まるで十年来のつきあいがあるかのような恋人扱いをしてくる。それも昨夜の態度はまるで女性を有頂天にさせるような浮いた言葉ばかりを言っていたのが、今日はまるで手のひらを返したかのように自分の言いたいことばかり言っている。あつかましいとは思いつつも、あまりにストレートな啓作の態度に、いまさら女子高校生のような強い反発を表わすわけにもいかないし……、と苦笑しっぱなしの状態だったのだ。そこにもってきて、二人だけと思っていたデートに男友達を連れてくる。この友達の登場は、少なくともいきなり身体を奪われるようなことはまずないだろうという安心感をもたらしたばかりだったのである。ところが本人の言葉は、これからそれを実行すると宣言しているように

も聞こえる。知恵には啓作という人間がどういう人間なのか全くわからなくなっていた。しかし、一方で啓作という人間へのつきない興味を増幅されていたこともまた事実なのである。結局、強い拒否を示す決心をすることもできず、ただ沈黙を守ることしかできなかった。

返事を返さない知恵を横目で見ると、リアシートの浩一に向かって啓作は言葉を続けた。

「浩一。俺がお前に期待してる仕事は、言ってみれば証人だな。だから見てるだけだ。目の前で起こることを。それ以外何もない。いや目の前で何が起こっても決して手を出さないでほしい。余計なことは何もしてくれるな。だが、これはお前にとってもおそらく自分を成長させる大きなチャンスなんだ。そのつもりで真剣にやってくれ。いや、お前にこの言葉はそれこそ余計だな。お前のカタさときたら、それこそダイヤモンド級だからな」

その言葉を聞くと浩一はふてくされたように黙ったまま窓の外へ視線を移した。啓作はとにかく昔からこうなのだ。おそらく実業家である父親譲りなのだろう。とにかく口八丁手八丁、ウソもつくし人もだます。それでいて憎みきれないのは、その行動が大胆不敵でありながら、結局はみんなに感謝される結果を用意することが多かったからなのである。たいていのことは啓作の言うとおりにやれば何故かうまくいくのである。そんな訳で高校時代、一部の女子から「ルパン四世」という尊称を贈られていた。従って当然女には昔からもてた。啓作には学校での成績でこそ、自分が上回っていたものの、それ以外のほとんどすべてのことでコンプレックスを自覚しないわけにはいかなかった。が、長い付き合いが続くうち、いつのまにかそれにも慣れ、自制と我慢を浩一は身につけていた。だが、それでも時折、浩一は不思議に思うのだった。いつの頃からか、啓作はことあるごとに自分を呼び出すようになり、また自分につきまとうようになったのである。高校を卒業しそれぞれが離ればなれになって別の大学に進学すると中断はした。だが、宇都宮にUターンし

てからは、しっかり元の関係が復活した。それほど仲がいいという自覚は無かったが、気がついたらもっとも古くからの、一番一緒にいることの多い友人になっていた。何が気に入ったのかはわからない、いや一つだけ確実な理由―浩一目当てで近づく女を横取りするーを除いてだが。とにかく自分はいつも何かにつけて啓作から当てにされていた。それを考えると少しだけ気分がよかった。しかし、付き合いが長くなっても啓作の行動が読めるようになることはなかった。啓作は常に人の意表をつく男なのである。とにかく啓作のやりたいようにやらせるしかなかった。

いつのまにか街中を出たクルマは畑の中を走っていた。緑が浩一の心を少しだけ和ませた。

「ね、それでどこへ連れて行ってくれるの」

重くなった空気を和らげるように知恵が言った。

「君が一生忘れられなくなるような素敵な山荘さ。周りが牧場って言うと変だな。牧場の敷地のど真ん中に建てられた、君を文字通り虜にするための山荘」

「牧場って、何がいるの？」

「ウシ」

「面白そう」

そんな二人の会話を後ろの席でやりきれない思いで聞き流す浩一であった。

クルマはやがて県道からはずれ、山間の細い林道のような舗装されていない道路へと入った。その道は沢づたいに山の上へと続いていた。やがて尾根にさしかかると、それまで上から覆っていた樹木がなくなり、急に視界の開けた草原になった。

「まあ、なんて気持ちのいい場所」

啓作はクルマを止めるとドアを開けて降りた。浩一が啓作を見ると道の行く手には柵があり、ゲートで道がふさがれていた。どうやらここから牧場の敷地に入るらしい。ゲートを引き上げ、垂直に立たせると、啓作はクルマに戻り、ドアを開けたまま、五メートルほ

どクルマを前に出し、また降りてゲートを閉めた。

「ちゃんと閉めておかないとウシが逃げるんだ」

開いたドアからは牧草のかおりとわずかながら動物の糞のにおいのような臭いにおいがクルマの中に流れ込んできた。

「な、大自然の臭いだろ。間違いなく」

そんなことを口に出すと再び啓作はクルマを走らせた。だが、そのスピードはもう自転車並みの遅さである。道が悪いのだ。

「牧場の中の道は耕耘機用みたいなものだからな。それに……、あ、やっぱり」

カーブを曲がるとそこには真っ黒なウシが道の真ん中で二、三匹ほど寝そべっていた。

クラクションを鳴らすと、のんびりと一匹ずついかにも面倒くさそうに場所を動いていく。ようやくそこを通り過ぎると、少し先の丘の上に建物があった。

「さあ、やっと着いた」

そんなに大きな建物ではないが、周りを一周するようにこれも柵で囲われていた。ゲートを上げてクルマを入れるとすぐにそれを閉めた。

「これも閉め忘れると、家の中までウシに占領されるんだ」

ウシの国の中の家だった。

建物は、コテージと言うより、立派な作りの納屋とでも呼ぶべきものだった。もともと人間が住むためのものとして作られたというより道具を置くための倉庫だったのだろう。それは普通の家よりもずっと大きく、窓の配置からすると二階部分はちゃんとした家のようになっているようだ。昨日までの雨はすっかり上がっていたが、うすぐもりで太陽は見えない。おかげで四月にしては過ごしやすい陽気だった。

「さてと。早速昼飯だ。ここでバーベキューするからみんな手伝ってくれ」

啓作がトランクを開けると中にはバーベキュー道具が一通り入っ

ていた。

「この牧場は親父さんの会社のものなのか？」

「ああ、そうらしい。と言っても、牧場としてはもうすぐ閉鎖だそうだ。何でも元のオーナーがアメリカとかオーストラリア型の牧場を夢見て、完全放牧スタイルの牧場として作ったらしいが、ビジネスとしてはうまくいかなかったらしい」

「どうして？」

「ウシの肉がまずい。な、これだけウシを自由にしてたら、活発に動き回るだろ。えさは百パーセント牧草。混ぜモノ無し。法定のモノ以外クスリも無し。だから肉の中の筋肉が多くなって肉質が固いって、誰も見向きもしないんだ。アメリカ人やオーストラリア人はそういう肉でも慣れてるが、日本人には食えたもんじゃない。日本人は狭い牛小屋に閉じこめられて運動出来ない、ビールと抗生物質漬けで肥満にされた霜降り牛肉好きだからな。この世の中なんてそんなことばかりさ。いいと思ったことが受け入れられなくて、こんなものがと思うようなものが実は一番当たり前なんだとか。そんなわけで今日の食材は牛肉がメインだが、本来ならこの牧場産のものを使うべきところだが、食えたもんじゃないので来る途中のスーパーで買ったありきたりの牛肉だ」

「どっちにしてもウシを見ながらバーベキューするのはちょっとな……」

「あら、そうですか。言われれば確かにそうかも知れませんけど、別に目の前で解体された肉でもないし、そんなに気になりません。空気がおいしくって、静かだし、のんびりして気持ちいいです。こんなところでバーベキューなら最高じゃないですか。それでも私、どうせなら松坂が良かったけど。霜降りってとってもおいしいし…。あら、見てウシがあんなに……」

ウシが建物を取り囲んでいる柵の外側に集まっていた。それは、まるで動物園の中の檻に入れられた人間を見ているかのように見えた。

「松坂がいいなんて言うからだよ。ありゃ、俺たちの健康も考えろって、抗議している目だ……」

「まさか。……でも何で急に集まったんだろ」

「俺もよく知らないが、ウシってのは群れで移動する動物らしい。だからたまたまそういう群れがここに来たってだけじゃないか。ほっとけばすぐいなくなるさ。さて、早いとこ食事の支度しよう。腹ぺこだ」

浩一は移動していくウシの動きに時折目をやりながら、トランクの荷物を出していた。ここの牧場は開けた平原ではなく、この場所は尾根の中腹のような場所で両側に沢のある谷がある。ウシたちは、その急勾配の斜面を時折歩くような感じで移動しながら草を食べていた。浩一がその光景に見とれているといつのまにか周囲のウシは一頭もいなくなってしまった。見た目よりも動きは早いようだ。自分のすぐ近くで物音がするのでそちらを見ると啓作がトランクの荷物をいくつか両手に抱えて納屋に運んでいった。

啓作が納屋に隠れると、それを待っていたかのように知恵が浩一に話しかけてきた。

「龍造寺さんて、いつから伊集院君とお友達なの？　もしかして親戚か何かなの？」

「え、どうして？」

「だってどっちもお寺の名前みたいだし……。なんかそういう家系のつながりがあるのかなって」

「たぶん無いと思う。そんな話聞いたこと無いから。あいつはもともと近所の遊び友達だったんだ。幼稚園の頃からの。家も近くて、しょっちゅうあいつがうちに遊びに来てた」

「じゃあ、彼のこと何でも分かるでしょ。そんなに付き合いが長いなら」

「いや、あいつは特別さ。昔から。何を考えてるかさっぱりわからない。いや俺には君も同じだ。何でこんなところに、ノコノコついてきたのか理解に苦しむ。夕べ、あいつと知り合ったばかりなん

だろ」

「そうね。あなたの言う通りね。私にも分らないの。何で彼についてきちゃったのか。彼が何かする気だって分ってからは、なおさらね」

「驚いたな。見かけよりずっと度胸がいいんだな。君はもしかしたら本気であいつに惚れてるのか？」

「さあ……。そんなことわからないわ。やっぱり変かしらね、私」

「お、結構隅に置けないな……。意外と仲睦まじそうで……」

いつのまにか納屋から出てきた啓作が声を出した。

「馬鹿、何言ってるんだ。彼女は心配だから俺にお前のことを聞こうとしてたんじゃないか。お前が変なこと口走るから」

「変なことなんか言った覚えはない」

「俺の女にするとか何とかって」

「それは変でも何でもないだろ。それに彼女はもうそれを待ってる……。今更心配なんかしてない。お前に話しかけたのはそれを口実にしてお前と話をしたかったからだ」

「そんな……。ちょっとあなた何を言うのよ。怒るわよ」

「ほうら、図星をつかれて怒り出した。ほら顔も赤くなってる。これだから知恵はかわいい。俺の前で何もウソがつけないんだ。夕べ会ったときから。だから俺にはすぐわかった。俺を見た途端に俺が気に入ったってことがな。それからついでに言えば浩一も似たようなもんだ。知恵に一目惚れしてる。しかしこうして二人を並べて見るとお前たち、似たもの同士かも知れないな。二人ともよく似てる。俺に嘘をつけないところが」

知恵はこの啓作の言葉に驚き、浩一を見た。が、浩一は何の変化も表さず、ポツリとつぶやくように言った。

「啓作、もういい加減にしろよ。俺は疲れた」

「悪い、悪い。そうすねるな。さ、飯にしようぜ」

結局、二人は元の啓作のペースに乗せられただけだった。

農機具置き場

奇妙な三人のデートは、結局浩一と知恵を打ち解けさせただけのように見えた。何にしても啓作は「浮いた」存在なのである。だが、自分が両者を誘った張本人であるにも関わらず、啓作はそのことを一向に気にする風でもない。バーベキューを終えると、一人で納屋に閉じこもってしまった。浩一は、啓作のそのぐらいの行動には慣れていたし、また、何にしても啓作は啓作の思い通りの結果を作る男だと知っていたので、特別そのことを気にも留めなかったが、知恵はそうは言っていられなかった。

納屋に行って啓作の側にいるのがいいか、それとも浩一の側にいるのがいいか悩み、一度は納屋に行ったものの、結局啓作は知恵に何の関心も示さず、言葉もかけなかったようだ。なかばむくれたような表情で外にいる浩一の側に来て話しかけてきた。

「ねえ、浩一さんは、どんなお仕事してるの？」

「建築。設計なんだ。見習いみたいなもんだけど」

「まあ、全然違うのね。啓作さんとは」

「ああ、高校までは同級生だったけど、大学は別だった」

「へえ、珍しいんじゃない、そういうのって。じゃ、学生時代はどこに居たの？」

「啓作は東京。俺は名古屋だ」

「じゃ、また彼と遊びだしたのは宇都宮に戻ってからってこと？」

「ああ。うちに戻ったら、途端にあいつが訪ねてきた」

「よっぽど、彼、あなたのこと気に入ってるのね」

「俺を？　ご冗談でしょ」

「わかるわ。彼、心底安心してる感じがするもの。あなたが居ると」

「それは君の間違いだろ」

「彼、もしかしたら私をあなたに会わせたくて、私をデートに誘ったのかしら？」

「……」

「冗談よ。気にしないで」

突然、前の谷からウシの一団が目の前に現れた。柵のところで話していた二人は寄ってくるウシに驚き、思わず柵から離れた。

「何でこんなに寄ってくるのよ」

「人間が珍しいのかも」

ウシ達はしばらく柵のところでたむろすると柵を回り込むように小屋をめぐりやがて反対側の斜面を下りていった。

「ねえ、浩一さん。一緒に谷に下りてくれない？　私、下がどうなってるか見てみたいの」

「悪いけど、俺には興味がない。行くなら啓作を誘ってくれ」

「まあ冷たいのね」

「悪いけど、人が苦手なんだ。正直なところ。君と一緒にいるのも少し辛いくらいでね……。だから、少し放っておいて欲しいんだけど」

「まあ！　啓作さんも変わり者だけど、あなたも相当な変わり者なのね。失礼しちゃうわね。いいわ、どうぞ孤独を楽しんでください」

そう言うと知恵は、浩一の横を離れた。

浩一はとにかくホッとした。先ほどの言葉は本音である。知恵が近くにいるのは息苦しかった。しかも、啓作が言った通り、どうやら知恵に特別な感情を自分は持ってしまったようだ。そのことが一層知恵と一緒にいることを苦痛にした。

知恵は浩一の側を離れると一度はゲートのところに行き、谷の下へ行く素振りを見せた。だが、浩一が自分の方を見ておらず、また啓作も姿を見せないので、結局ゲートから離れ、再び納屋の方へ向かって歩いていった。

納屋に向かって歩き出した知恵に気がついたとき、啓作を誘うつもりなのだろうと浩一は思った。浩一の心には落胆の気持ちも僅かながら混じっていた。

知恵が納屋に入りドアが閉まると、中から少しばかり大きな物音

がした。それは何か大きな者が倒れるような音だった。

何かあったかと一瞬気に留めたものの、人の声は聞こえないし、その後、納屋自体にも何の変化もないので、浩一は再び、牧場と牧場に点在するウシ達の動きに視線を戻した。よくも一日中あれだけ草ばかり食べ続けられるものだ……。ウシの生き甲斐は食べること、か、と浩一は心の中で呟いた。そんなだから、人間のエサにされちまうんだ……。が、人間が食肉としてウシを利用していなかったら、これほどの数には決して増えなかったろうと思うと、ウシにとって何が良かったのか悪かったのか分からなくなった。そんな浩一の視線とは関係なく、谷の向こうの斜面では、黒い点になったウシが思い思いの場所で相変わらず草を食べながらゆっくりと上の方へ移動していった。

―　食べることだけが幸せなら、あれでいいのか……

―　他のことはすべて余計なことなのか……

―　彼らからは俺はどんなふうに見えているんだろう……

自分たちがどういう運命にあるかも知らずにのんきに草を食べているウシたちに比べ、不自由は何もないはずの自分が、何で仲間と一緒にいることがこうも苦痛なのだろうかと浩一は自問自答していた。

「おーい、こおいちー」

ふいに後ろから、その最大の悩みの元凶である啓作の大声が響いた。振り返ると納屋の前でこちらに向かって叫んでいる。

「納屋に来てくれ」

そう言うと自分はさっさと再び納屋に入ってしまった。

また何か始めたようだ。何かを一緒にやるつもりなら、せめて予定ぐらい事前に教えてくれていればいいものをといつも思い、実際にそれを啓作に話したこともある。だが、結局はいつもこうなのである。一度、啓作がその理由を説明したことがある。

「お前たちの理解するスピードに合わせてたら、うまくいく物事なんて限られるからさ」

要するに頭の悪いお前たちにペースは合わせられないと言ったのである。が、その時も、結局は誰も文句の出ない完璧な結果が出ていた。以後、啓作に関し、そういうことを誰も言わなくなった。

従って、啓作は昔通りの啓作であり、大学を出て社会人になってもあまりそれは変わらないようだった。いや、むしろそれが通せるからという理由もあってクルマのセールスに武者修行に出たという説明もあった。とにかく筋金入りの「ゴーイングマイウェイ」なのである。

そういう事情を知り尽くしている浩一にとっては、それは日常の一シーンに過ぎず、従って何の反発も感じずに、言われた通り納屋に向かうだけだった。

上からつり下げている構造になっているスライド式のドアを少し開いて納屋に入る。やはり一階は農機具類置き場のようだ。二階に上がる階段に行こうとすると、背中から声がかかった。

「こっちだ」

農機具置き場の一番奥に啓作が立っていた。

近づくとそこは道具を保管しておくための収納庫だった。粗末な平木を打ち付けただけの囲いとドアがある。啓作はそのドアを開け、その薄暗い内部に入るように浩一を促した。

「アッ」

その空間に踏み込んだ浩一は、そこにあるものが目にはいると、小さく叫び、とたんに回れ右をして外へ出ようとする。

「おい、浩一。何してるんだ。中に入ってくれと頼んだつもりなんだが」

啓作が強い力で浩一の腕を掴んで低い声で言った。

「だって、お前……。正気か。俺は犯罪者にはなりたくない」

「俺だって犯罪者なんかにはなりたくないさ」

「あれは、どう見たって犯罪だろう……」

「ま、お前の目にそう見えても不思議はないがな。安心しろ、これで俺やお前が警察の厄介になるようなことは絶対にない。俺が保

証する。ただ、お前はここに居て、俺がやることを見て、証人になってくれればいいのさ。ほら、分かったら早く中に入ってくれ」

「……」

啓作の話の中身は、にわかに信じがたいものだったが、啓作の落ち着きのある話しぶりは、信用できた。少なくとも犯罪に走るような異常な興奮状態ではなく、いつもの啓作そのものだった。そのことが浩一を落ち着かせた。

中へ入った。

そこは四畳半より少しばかり広いぐらい空間で後ろが煉瓦壁、床がコンクリートが打ちっぱなし、あとの壁は平木を打ち付けただけの壁である。

その空間の真ん中には、知恵がいた。それも、浩一が全く予想していなかった姿でそこにいたのである。

「おい、啓作。いったいどういうつもりなんだ。知恵さんをこんなふうにして」

その浩一の声に先に反応したのは啓作ではなく知恵だった。

上の方からジャラジャラと鉄の音がした。知恵の両腕が結わわれた縄が梁のところにとりつけられたホイストからつるされたチェーンに結ばれているのである。今の浩一の声で、知恵はワンピースの上から縄で縛られた体を激しく動かしたのだ。明らかにそれはその扱いに対する抗議の行動だった。

「ふふふ。浩一がここに来たことがだいぶ効いてるみたいだな。え、知恵。浩一に正義の味方になって欲しいのか？　浩一が俺をぶっとばして、助けて欲しいってか？　そうじゃないよな。だってお前はこうされたかったんだもんな。なあそうだよな。はやく浩一の前で服を脱がされたいんだろ。え、知恵」

その声が知恵に届くと知恵は急におとなしくなった。浩一には啓作が何を言っているのかさっぱり意味がわからず、結局呆然とその成り行きを見守るだけだった。知恵は猿ぐつわを噛まされ、声を奪われていた。目にも目隠しの黒い布が当てられていた。

「どうやら、知恵にもようやく自分の正体がどういうものか分かってきたようだな。知恵、俺はな、お前がどういう女か昨日の夜会ったときにすぐに分かった。ついでに言えば俺は長いこと探していたんだ。お前のような女を。だから、俺は決めた。絶対、お前を俺の女にするってな。じゃ、もうそろそろおしゃべりはやめようか。お前も期待してるんだろ。まずは浩一にお前の状況を説明してやろうかな。あいつはな、この世にお前みたいな女がいることすら知らないんだから……」

浩一は知恵の横で含んで聞かせるように話した。何を考えているか分からないが、知恵はじっとその声を聞いていたようだ。

「おい、浩一。お前マゾって言葉知ってるか？」

浩一は首を横に振った。

「へ、やっぱりか。それじゃ、ＳＭは？」

「ああ、それなら聞いたことはある。苛めたり苛められたりってやつだろ」

「そのＳＭのＭのことだ。マゾというのは。つまり、苛められて興奮する。被虐嗜好者ってことだ」

「まさか、知恵さん、そのマゾだって？」

「ああ、俺の目に狂いはない。こんなに見事なマゾっけを持ってる女はそんなにいないな」

「どうして分かる？」

「まあ匂いというのか雰囲気ってのかな。お前にはわからんだろうがな、女っていうのは、言葉以外にいろんなメッセージを全身から出してるもんなのさ。お前はそういうメッセージを見ようとしないから女とまともに付き合えないんだよ。まあ見てろ。お前の目の前で知恵の本性を見せてやるから……。いいか、今知恵はな、ただでさえ縛られてムード満点なんだ。そこにお前という新たな観客が加わったことで、もう頭の中はいやらしい妄想で一杯なんだ。な、そうだろ、知恵」

その声が届くと知恵は思い切り首を左右に振った。

「おやおや、まだ自分に素直じゃないようだな。だがな知恵、お前がいくら違うと言っても、お前の体は正直なんだぞ。それじゃあ、早速その証拠を確かめようか。やっぱりお前の気持ちとしては早く脱がして欲しいんだろうな」

再び知恵は激しく首を振る。

「そうか、いやか。ま、こっちもお楽しみは後にしたいし。そんなに急いでないんだ。じゃ、どうしようかな。とりあえずもう少し縄で遊んでやろう……」

啓作はそう言うと横のバケツに入れてあった縄を一本取り出した。

「何しろ、ギャラリーがギャラリーだからな。いきなり刺激の強いシーンを見せるわけにもいかないし。知恵は不満かもしれないが、モノには順序ってもんがある……」

そんなことを呟きながら知恵の股間のところで中腰になり、手に持った縄をワンピースの上から巻きつけ始めた。知恵は身を振って抵抗するが、無論そんなものは何の役にも立たなかった。やがてその縄は腰に一周まかれた後、垂直に股間に向かっておろされ、股をくぐり、背中側で腰の縄に通された後、再び、股間を通って前で留められた。当然ワンピースのスカートはもはや役目を果たさず、ぴったりと股間に食い込むことになった。

知恵は大人しくなった。先ほどまで啓作が何か言うたびに身体を振っていたのが、なくなった。ただじっとしている。

「ほうらな。おいしいだろ。縄の味は。股間が気持ちいいんだろう。え、知恵」

知恵を啓作はさらにたきつけるが、もう知恵はじっとしたままだ。

「知恵、そんなに簡単に観念されたら面白くないんだ。マゾならマゾらしく、もう少し俺たちを楽しませてくれないとな。それじゃ次だ」

啓作はバケツからさらに縄を取り出した。今度は先ほどの股縄の前の部分にそれを通し、固い結び目を作ると知恵の前で天井からぶら下がっていたフックにそれを縛り付けた。それから壁際の手動ホ

イストのチェーンを回し、そのフックを上に引き上げていく。

当然、股縄に結ばれた縄も前方上方へ引かれていく。が、知恵の背中に回された腕は別の縄で固定されそれも別のホイストの結わわれているので、当然身体は前にはいけない。

やがて知恵は身体を反らせて、股間を突き出すような形になった。しかも、股間を通る縄は、深く股間に食い込んでいた。

「ウウウウウゥ」

声にならない声が知恵の口から漏れる。口の中に何か詰め物をされているようだ。サイレンサーのついた拳銃のように知恵の声は小さく抑えられていた。

「どうだ、知恵。縄の味は。もうこれだけでもいきそうなんだろ。いってもいいんだぞ。え、そんなに我慢しなくてもな」

啓作は手動ホイストの操作チェーンのところから再び知恵に近づき、股間を引っ張り上げている縄に手をかけると激しくそれを揺らした。知恵は身体全体が翻弄された。

「さてと、そろそろ、生の声を聞いてもいい頃かな」

縄をつかんだまま、啓作は知恵に近づき、いきなり猿ぐつわをはぎとった。知恵は口の中から白いガーゼのようなものを押し出し、足元へそれを吐き落とした。

「もう、死んじゃう。やめて。お願いだから……」

啓作は、その口をすぐに自分の口で塞いだ。いきなりのキスは再び知恵から抗う力を奪ってしまったようだ。全身から力が抜け、縄が、知恵の身体と心に一層食い込んだようだ。

キスを続けながら、手に持った縄を啓作は一定のテンポで引き上げる動作をする。そのテンポはだんだんと速くなり、やがて機関銃のような速さになった。

「あああああ〜、もうやめてえぇ〜、死んじゃう、もう死んじゃう……」

キスを振りほどき、頭を真後ろに反らせ、ソプラノの声で知恵が叫んだ。次の瞬間、知恵はがっくりとうなだれた。気絶したらしい。

啓作は手を止めた。縄を放し、浩一を手招きした。

目の前で起こったことに圧倒され、言葉を失っていた浩一は、啓作のその動作でようやく我に返った。恐る恐る知恵に近づいた。

「おい、まさか死んだんじゃないだろうな？」

「馬鹿か、お前は。死ぬって言いながら、死ぬ女なんかいるもんか。気絶したんだよ。気持ち良すぎて。しかし、お前は本当に女のことを何も知らないんだな。こっちが説明するのも恥ずかしくなる」

「そ、そうか。知恵さんが死んでないならいいけど……」

「疑り深いやつだ。ほら、ここを見てみろ。ちゃんと息をしてるだろ」

浩一が指した、知恵のおっぱいのふくらみの頂上付近は確かに呼吸による小さな上下動があった。

「それから喜んでるという証拠はこれだ」

啓作は、股縄でパンティとワンピースが身体に食い込んでいる部分を指差した。

パンティもワンピースもびっしょりと濡れていた。

「小便なのか？」

「いや、たぶん違うだろう。小便という場合もあるけど、それだったら、こんな量では済まない。たぶん、愛液だな。女の場合は分泌液の種類が多いから、どのぶんかって聞かれたら俺にも分からないけど」

「そ、そうなのか」

「そんなことはどうでもいい。おい、浩一。知恵の縄を解くのを手伝ってくれ。お前は、そっちの手動ホイストを下げてくれ」

「ああ、わかった」

状況が飲み込めたわけではなかったが、とにかく知恵が啓作の見込んだ通りのマゾであるらしいことは何となく納得できた。それと啓作は知恵に対しケガや命を奪うような行動を取る意思がないことも理解できた。ただ、啓作が知恵を最終的にどうしたいのかは分からなかった。が、例によって、啓作の目論見通りに事が運ばれてい

るのだろうということが、浩一を少し安心させていた。

啓作は知恵の股縄をはずし、目隠しをはずし、一度背中で高手小手に縛り上げた縄もはずした。それから背中のワンピースのファスナーをはずし、腕を抜いてしまった。ブラジャーも同じように背中のフックをはずし、腕を抜いた。そうしておいて改めて高手小手に縛り、その縄を胸に回し、ワンピースとブラも一緒に再び縄で固定した。つまり、ワンピースもブラも前側から引っ張られるだけで取れるようにしたのである。留めた縄を再びホイストから垂れ下がるフックに結わえ、知恵の身体を再び引き上げた。床に寝そべっていたところから再び身体が持ち上げられたところで、知恵の意識が戻った。

「ああ、まだ、こんな。もういい加減にしてください」

「いや、まだ止めるわけにはいかないんだ。こういうことは中途半端が一番悪いんでね。お互いにとって」

「いったい、啓作さんは私をどうしたいんですか？」

べそをかいたような声で知恵が怒鳴った。

「そうだな。一言で言えば、俺のペットか奴隷といったところかな。それにお前もそれを望んでるし」

「そんな……、私はそんなこと望んでません。誰がそんなことを。でたらめを言うのもたいがいにしてください」

「分かってないやつだな。お前の身体がそう言ってるんだよ。ほら、こんなふうに」

啓作は立ち上がった知恵のワンピースの一番下になった部分、そこは先ほどまで股間に食い込んでいた場所だ、をつかむと、知恵の顔の前にそれを突き出した。

知恵はポカンとした表情でそれをしばらく見ていたが、やがてその意味を悟って下を向いた。

「なあ、お前はともかく、お前の身体は正直だろう。もう少し身体を見習ったらどうだ。まあそう言っても、お前がお前の身体のことを分かってないことは最初から分かっていた。今日はだから、お

前にそのことを教えてやろうと思ってね。徹底的に。きっと自分のことがもっと好きになるぞ。さっきは、とりあえず、縄の味を知ってもらったから、今度はそうだな。恥ずかしさの味を知ってもらおうか、その為にギャラリーも呼んだことだし。あいつもそろそろ強い刺激に触れてもらわないとな」

「そんな、やめて下さい」

知恵の言葉には構わず、啓作はワンピースとブラジャーが縄で抑えられている胸のところに手をかけ、縄の下を通すように二つを引き抜いてしまった。気絶している間にそういう細工をされていることなど知らない知恵は、いきなり自分のおっぱいが露出したことに慌て、首をうなだれ、耳たぶから全身を赤く染めた。

「な、なんで、こんな、ひどい、もう、やめて、見ないで」

「これだけでこんなにいい色になるなんて、知恵は可愛いやつだな」

そう言いながら、啓作はいまや縄で搾り出された形になったおっぱいに手をかけて揉みしだいた。

「ああ、やめて、もう、やめて下さい……」

が、知恵の声には、明らかに喜びの声に聞こえるような、鼻にかかる甘え声が入っていた。

浩一は再び、目の前の光景に唖然となった。言葉での拒否が拒否でないことを見せ付けられた。

当然、啓作は、行動をエスカレートさせた。口を乳首に這わせ、舌先でそれを転がしながら、手でまだ縄に掛かり止っていた残りのワンピースを足元に落とし、ついで、腰のところでパンティストッキングに手をかけて徐々に下げていく。

「いや、いやあ、脱がさないで、もうこれ以上脱がさないで」

「何を言ってるんだ。皆に見られたい癖に」

「ウソ、ウソよ。見られたくなんてありません」

「そうかな、ここは違うといってるんじゃないかな」

パンストの腰のゴムをちょうど大腿部まで下ろしていた右手をそ

こからはずし、パンティの真ん中へ右手を走らせた。さきほどの濡れが乾いているわけもなく、グショグショに濡れているはずの場所である。

「ほうら、さっきの分とは別にどんどん熱い液体を出してるじゃないか。何だ、これは？　知恵、説明してみろ」

啓作のその声に、知恵はもう何も答えず、ただ下を向いてしまった。

「これで知恵が見られて濡らす女だということが証明されたわけだ。よし、次だ。今度は、苛められて喜ぶ姿を見せてもらおうかな」

「もう、やめて下さい……。お願いですから……」

先ほどまでと違って知恵の声はかなり小さく呟くようにしゃべるようになっていた。もしかしたら、啓作のいうとおり、啓作がいちいち説明をしている中身の行為を期待しているのかもしれないと、浩一も思うようになった。

啓作は、知恵のパンストは足から抜き取ったが、パンティには手を掛けなかった。知恵はパンティだけの姿で身をさらしていた。その状態で一度啓作は部屋を出て行った。何か道具を持ってくるらしい。浩一は改めて知恵の姿を見つめた。それは禁断の甘い香りの漂う淫靡な風景だった。全裸よりもずっとエロチックだと思った。浩一の燃えるような視線に気がついたのか、知恵が顔を叛けた。

「もう、ご覧にならないで……。お願いですから……」

知恵が蚊の鳴くような声で哀願した。その姿は、今まで見た知恵の中で一番かわいいと思うものであった。

啓作が戻ってきた。黒い棒を小脇にかかえている。

「さあて、僕の大切な子猫ちゃん。これからが本当の調教だから。頑張って、この俺好みの可愛いペットになってくれよ」

その棒を啓作が振る様を見た知恵は目を大きく見開き、顔面に恐怖の表情を浮かべた。

「いやあ、絶対にいやよ、もうやめて」

先ほどまでと違って再び絶叫した。それがムチだと分かり、その

痛みを恐れたのである。

「止めるわけにはいかないな。何しろこれこそ知恵が一番望んでいるはずの味なんだから。まあ早く楽になりたかったら、さっさと気絶してしまうんだな。じゃ、いくぞ」

納屋全体を知恵の悲鳴が響き渡った。啓作のムチに容赦は一切なく、知恵の晒されている裸体のあらゆる場所にムチの痕がつけられていった。見たところ、乗馬用のムチのようだった。啓作の振る力はそれほどでもないように見えるが、知恵の反応はすごいものだった。軽く当てられているようでもかなりの痛みを生んでいるようだった。

「そうそう、ここもやっぱりちゃんと痕をつけないといけないな。やっぱり」

こんなことを話すと啓作は唐突にムチ打ちを中止し、知恵のパンティに手を掛け、引き下げようとする。

「やめて、やめて下さい。そんなところ打たないで。お願いだから。もう死んじゃう」

意図を察した知恵は必死に啓作に哀願する。よほどムチの痛みが怖いようだ。が、啓作の返事は予想通り冷たいものだった。

「お前の可愛い悲鳴が聞きたいからムチで打つんだよ。さあ、いくぞ」

パンティが足元に落ちるとまずお尻に痛撃が走り、次に前の秘丘にムチが走った。

再び納屋全体に知恵の悲鳴が溢れた。

何度か悲鳴が響いた後、知恵はぐったりと縄にしな垂れかかるように身体を崩した。どうやら気絶したらしい。両膝をぴったりと合わせ、膝から下だけが外側に開く、典型的な女のX脚の形になっていた。

ウォーキングアラウンド

啓作はムチを小脇に抱えると、手を股間の茂みに突っ込んだ。

「ふふふふ。思った通りだ。もう大洪水だ。こいつは間違いなく真性マゾだな。おい、浩一、ちょっとこっちに来て見てみろ。これが知恵という女の正体だ」

全身汗びっしょりで全身が固まっていた浩一は、啓作の呼び声でやっと自分の身体の自由を回復した。目の前の光景が現実のものとは思えていなかった。ぎくしゃくとした動きでどうにか自分の身体を啓作のところへ運んだ。知恵の股間に指を突っ込んだまま啓作が話を続ける。

「知恵はな。今みたいにムチで打たれると身体を濡らす女なんだ。こういうのが正真正銘のマゾってわけだ。ほら、この通り」

股間から引き抜かれた啓作の指はねっとりとした透明な液体で覆われていた。

「もう、知恵さんのことはいい。俺はこの後何をしたらいいんだ。俺への女の扱い方の授業ならもうこれで十分だから止めてやってくれ。頼むから。もう俺は見ちゃおれん」

「おまえなぁ。今の言葉は俺への遠慮で言ったのか、それとも、知恵への同情で言ったのか？」

「……」

「どっちにしてもまったく見当違いの話だな。第一に俺は知恵を愛する意思があるからこれをやっている。お前にためにやっているつもりは全くない。第二に知恵は自分のことが分かっていない。だから俺はそれを彼女に知らせるためにこれをやってる。何故なら彼女が俺に愛されるようになるためにはそれが絶対に必要なことだからだ」

「いや、俺は……。そうだ、お、俺が耐えられないんだ。お前たちのどちらのためでもない。俺のために俺をここからはずしてくれ」

「そういうことなら分かる。だが、それも断る。お前をここに呼んだ目的はまだ果たされていないからな。お前がこういうことを苦

痛に思うということはよく分かったが、もう少し我慢して俺に付き合ってくれ。なあに、そんなに時間は掛からないだろうと思うよ。たぶん」

「いったい、知恵さんがどうなったら終わるんだ？」

「まあ、見てれば分かるさ」

そう言うと、啓作は、ダラッとしている知恵を抱いて脇で支え、その顔を両手で捕まえると最初と同じようにキスをした。知恵の口はこじ開けられ、啓作は深くその舌を滑り込ませたようだ。

まもなく、知恵が喘ぎ始めた。

知恵の意識が戻ったようだ。

すると、啓作は再びムチを持って立ち上がった。そして、再び知恵に絶叫をあげさせた。

「……もう助けて……、い、痛いよう……、もう死んじゃう……」

身体をよじり何とかムチの打撃から身をかわそうとするがもちろんそんなことはできない。やがて知恵の全身に赤い筋がつき始めた。

再び、知恵は気絶した。

すると啓作は先ほどと同じように甘いキスをする。

知恵の意識が戻る。

啓作は知恵に何事か呟き、またムチを振るい始める。

知恵が気絶する。

このサイクルを啓作は延々と繰り返した。

知恵の抗いは段々と小さくなり、人形のように無表情となり、呆けた顔を見せるようになった。

ムチが身体に当たってもあまり悲鳴を上げない。感覚が麻痺しているのかもしれなかった。

気絶することもなくなると啓作はようやくムチ打ちをやめた。

縄の入ったバケツを持って再び知恵の身体に近づき、今度は全身をびっしりと縄で埋めるような縛り方をしている。

知恵は、なすがままにされていた。

「よし、これでいいだろう。知恵、これから一緒に散歩に出るか

らな」

そう言いながらホイストのフックに結ばれた縄をはずした。だが、その代わりに知恵の身体は、沢山のひし形が身体の表面を覆うような形で縄が打たれていた。そしてさらに今啓作はさらに新たな縄を加えていた。菱縄が股間に向かう手前の菱に交点に別な縄を結びつけたのである。しかもさらに、啓作は鈴のついた洗濯バサミを二つポケットから取り出すとそれを知恵の両乳首に取り付けたのである。

チリリン……チリリン……と物悲しい鈴の音が納屋に響く。

啓作は股間のところから伸びた縄を取り知恵を引いた。知恵は股間を引っ張られる形で裸足のままおぼつかない足取りで歩き始めた。

ドアを開け、通路に出るとそのまま出口に向かった。

啓作がゲートを開け、広い牧場へと進み出た。

時折鈴の音を響かせながら、二人の奇妙な散歩は牧場の泥の上で続いていた。時折ウシが柵の周りまで来てはその様子に目を向ける。もちろん二人の様子に関心があるわけはないが、それでもそのウシの視線は知恵の心中をただならぬものにしているはずである。段々納屋から離れ、柵の外まで出て行こうとする啓作たちを、浩一は納屋の出入り口のところでただ見守った。

啓作は途中から、知恵を先に歩かせ、自分は後ろから知恵の尻をムチで叩き出した。知恵をウマかウシのように扱っているようだ。

二人の姿は谷の下のほうへ消え、浩一はただため息をついた。啓作の言葉は理解が出来なかった。

―愛するつもりがあるからこうしてるんだ

―これを受け入れられるようにならないと知恵は俺を愛せない

何でそんなことが断定できるのだ。だが、知恵はどうしてもっと強く抵抗しなかったのだろう。少なくともムチを使われる前なら逃げるチャンスはいくらでもあったように見えた。

浩一の目には、知恵の抵抗は極めておざなりなものに思えた。いくら女性でももう少し本気で抗えば、いくらでも啓作を止める手立てはあったはずである。啓作の拘束は極めていい加減だったし、隙

もたくさんあったように思えたのである。が、現実の知恵は、たしかに声では抵抗していたが、身体はまるで暗示にかかったように従順に見えたのである。もし知恵が本気で抵抗していたら、たぶん浩一は啓作がどう言っても止めていただろう。しかし、あれでは止めようがなかった。

鈴の音が、二人が消えた方向とは反対の方から聞こえた。どうやら、知恵に納屋を囲う柵の周りを一周させたらしい。

再び知恵の姿が柵の向こう側に見えたとき、その知恵の惨めな姿が、浩一にはひどく哀れに思えた。おそらく途中で転んだのだろう。顔の一部、胸、腹、ふとももも、腕に真っ黒な土がべっとりとついているのである。しかもここは放牧をしている牧場である。土にはいたるところにウシの糞が放置してある場所なのだ。それらの土には少なからず牛糞も混じっていることは明らかだった。おそらくその匂いは相当のはずである。

文字通りボロボロの状態の知恵を連れ帰った啓作に浩一は言った。

「もう、いいんじゃないのか。これぐらいで」

「それは知恵しだいだな」

が、浩一は、知恵の顔を見たとき、彼女の意外な表情に驚かされることになった。知恵は全く平常の普通の表情だったのである。先ほどまでのように感情の高ぶった表情ではなく、普通に二人の会話を聞いているのだ。

「しかし、ここまで臭い女は考えものだな」

この啓作の言葉は普通であるならば、知恵のプライドを根底から壊すものだったはずである。だが、目の前でこんな言葉を聞かされても知恵は一向に表情を変えない。浩一には知恵の精神のどこかが壊れてしまったのではないかと思えた。

が、浩一のそんな心配をよそに、啓作は再び奥の部屋へと知恵の縄尻を引いていった。

知恵は啓作にそんなふうに扱われても特に嫌がるわけでもなく、おとなしくついていくだけだ。何もしゃべらず、また表情に固いも

のがあるわけでもなく、普通の表情を見せていることが奇異に見えた。

チリリーン

時折知恵の乳首の鈴の音が響く。

「知恵、すっかり縄が気に入ったんだろ。牧場の散歩も気持ち良かったんだろう」

啓作が部屋に入るところで知恵にそう声をかけた。

その話し掛けの中身に驚いた浩一は、二人の背中を目で追った。

「はい、啓作さん。気持ちよかったです」

果たして知恵の答えは浩一の意表を完全につくものだった。が、啓作は平然とその返事を受け止めた。

「そうか、知恵もようやくお前自身のことがわかったんだな」

「はい……」

知恵の姿は小部屋の中に入り、浩一の場所からは見えなくなっていたが、その返事はしっかりと浩一の耳に届いていた。

―なんでこんなふうになるんだよ……。いったい、女って何なんだよ……

啓作と知恵の行動は浩一の頭を混乱させた。

小部屋の内側から水音が聞こえてきた。どうやら啓作が知恵を洗い始めたらしい。

時折、啓作の声と知恵の声が聞こえてくる。何も知らなければ二人で遊んでいるような嬌声である。

「おーい、浩一。居るんだろ、そこに。悪いけどクルマのトランクに入ってるバスタオルをもってきてくれないか」

「ああ、わかった」

何であんなことであの二人は打ち解け合えるのか、浩一にはまるで意味が分からなかった。

バスタオルを持って小部屋に戻ると、意外なことに知恵はあの縄で縛られた姿のまま、そこに立っていた。全身に水をかけられ、髪の毛からぐしょ濡れの状態である。おそらくムチ打ちで身体全体が

火照っていたからなのであろう。野外散歩も放水でも寒さをあまり感じないようである。啓作は浩一からバスタオルを受け取ると、知恵の頭にそれをかぶせ、水分をふき取っていった。

「じゃ、そろそろ夕食の準備でもするか」

知恵のふき取りが終わると浩一に向かって啓作は言った。

「あ、ああ。だが、知恵さんを、その前に解かないのか？」

「知恵。どうする？」

「は、はい。あの、もう少しこのままで……」

「だとさ。夕食は俺たちで作るしかないな」

浩一はただ唖然とするばかりだった。

二階に上がり、キッチンで男二人が料理をしている間、知恵は椅子の一つに縛りつけられていた。ただし、普通に座っているのではない。座面に背中をぴたりとつけ、両足を背もたれに回す形で固定されていた。つまり、知恵の秘部は上向きにされ、しかも何も隠すものが無い状態にされていた。

が、そんなふうにされても知恵は何も言わない。抗うこともなかった。自然にその姿勢を取らされていた。

ただ、啓作と浩一の視線が自分の股間に集まっている時だけ、少しだけ身体をもじもじと動かすだけだった。

晩御飯のカレーライス用の野菜の皮むきをしながら、浩一が啓作に言った。

「おい、どういうつもりなんだ。料理なんて女の仕事じゃないのか。お前に従順な女ならなんで料理をさせない？」

「はっ、まだそういうことをさせる段階じゃないのさ。女として認めてやるにはまだまだ覚えてもらわないと困ることがあるんだよ。いいから、黙ってこれを剥いてくれ」

啓作はたまねぎを一袋浩一に差し出した。

「わからん。お前の考えは」

「まあ、いずれちゃんと教えてやるから、心配するな。ファファ

ファファ」

啓作は奇妙な声で笑い声を上げた。この笑い声が当然届いているはずの知恵に浩一は視線を移した。が、何を考えているのか、知恵の様子に変わったところは何も無かった。

その浩一の様子に啓作が気がついた。

「おい、浩一。知恵のことが気になるのか？　知恵を抱きたいのか？　抱かしてやろうか？」

「ば、馬鹿なことを言うな。俺は人の女に手を出すほど落ちぶれちゃいない」

「浩一らしい答えだな。全くヤレヤレだ。知恵を調教するより、お前を何とかするのがよほど難しそうだな、これは。まあ、いい。知恵を抱きたくなったら、いつでも言ってくれ。相談に乗るから。ファファファファッファ」

またしても奇妙な声で啓作が笑った。

―　いったい、啓作は自分の女をどういうものだと思ってるんだ？

謎が一つ追加された。

男二人の手で作られたカレーライスが完成した。浩一が皿を三枚出してライスを盛り付け、啓作がその上からカレーをかけた。

するとおもむろに啓作は知恵のところに行った。そして知恵の足を固定している縄だけを解き放った。背もたれによる足の固定を失った知恵の身体はゆっくりと床に頭からずり落ちていった。

「知恵、夕食だ。お前はここで食べるんだ。分かったな」

啓作はそう言うと、テーブルの上にあったカレーライスの皿を一つ取り、床の上で横倒し状態になっている知恵の顔先にそれを置いた。犬のように床で食えということらしい。知恵は両腕を背中に縛られた自分の身体の体勢をゆっくりと直し、背中を丸めて啓作の差し出したカレー皿に舌を伸ばした。

「いいか、皿がピカピカになるまで舐めまわして食べるんだぞ」

そう言うなり、啓作は平手で知恵の尻を一つパシッと叩いた。

知恵は何事も無かったかのように黙々と動物の食事を続けていた。

「さて、俺たちも食おう」

こうして浩一にとって不思議な夕食は過ぎていった。

山の中なので夜は特にやることもない。知恵の皿にビールを注いで舐めさせ、男たちも、しばらく飲んでいると、突然啓作が、

「もう、疲れた。俺は寝る」

と言い出し、知恵と浩一をほったらかしてそのまま寝室のベッドに行ってしまった。

浩一は慌てて啓作の後を追った。

「おい、啓作。どういうつもりなんだ。知恵さんをこのままにしておいて寝るのか。えっ？」

「ああ、知恵は床の上で寝かせておけ。何ならお前が抱いてもいいぞ」

ベッドの上から返事が来た。

「お前ってやつは……。いったい何を考えているんだ……」

「じゃ、お休み」

浩一はリビングに戻り、床でうずくまっている知恵に啓作の言葉を伝えた。知恵は答えた。

「はい、分かりました。知恵はここで休ませていただきます」

返事はそれだけだった。

「お、おい、知恵さん……」

と、声を出したものの、これ以上知恵に何を言っても無理だと考え、浩一は取り敢えず、ベッドから毛布を一枚持ってきて、知恵の上にかけた。

「ありがとうございます」

知恵はそれだけを答えた。

知恵と二人きりになるこの空間にいることは、浩一にとっても、もはや苦痛でしかなかった。空いている寝室に一人飛び込み、ベッドに潜り込んだ。だが、興奮のあまり全く寝られるような状況ではなかった。犬のようにふるまう女の肢体。反抗の色を表さない、透

明感のある女の相貌。すべてがわけの分からぬ興奮を浩一に強いていた。そんな状態で眠りに入れるわけはない。啓作のこと、知恵のこと、その姿が次々と脳裏に現れる。そんなやり場のない状況が続くと、どこからか話声が聞こえるような気がしてきた。知恵と啓作が何かを話しているようだ。それぐらい無かったら、むしろおかしい。そう考えて再び浩一は毛布を頭にかぶった。しょせん、浩一の割り込む問題ではない。

が、浩一の平穏はあっさりと破られた。

寝室のドアは、完全に閉めてはいなかった。浩一はあわててここに飛び込んだからである。その少しだけ開いたドアが少しだけ音をたてて開き、何者かが体を滑り込ませてきた。浩一はそれを気配で感じていた。次の瞬間、その人物は、浩一の寝るベッドに倒れ込んできた。

「だ、誰だ？」

「私です」

知恵だった。全裸で縛られたままの姿の知恵が飛び込んできた。

「いったい、どうしたんだ？　リビングで寝るんじゃなかったのか？」

「済みません……。私と一緒に寝てください。抱いてくれても構いませんから」

「そんな。相手が違うだろ。それなら啓作に言うべきだろう」

「浩一さんは、私のこと嫌いですか？　そうですよね。昼間あんな変なことして喜んでる女ですもの。好きなはずありませんよね」

そう言うと、知恵はそのまま泣き始めた。

どうしたらいいのか分からなくなった浩一は、とにかく立ち上がり、啓作を呼びにいった。

「おい、啓作。啓作、起きろよ」

「なんだよ。うるさいなぁ」

「お前、知恵さんの様子が変だぞ。ちゃんと面倒見ろよ」

「知恵のことなら心配いらない。放っておけ」

「放っておけっだって。あの状態で放っておけるものか。彼女、俺のベッドで裸で倒れ込んできたんだぞ。お前それでも平気でいられるのか？」

「何度も言ったろう。知恵を抱きたかったら、抱いてもいいんだぞ。だいたい、知恵がそれを望んだから、お前のベッドに行ったんじゃないか。なんでそれをお前はわざわざ俺に言いに来るんだ？おかしいじゃないか」

「おかしいって、知恵さんは、お前の女だってお前が言ってたじゃないか！」

「違うね。俺が言ったのは、これから知恵を俺の女にするって言ったんだ」

「どこが違う」

「知恵はまだ俺の女になってない」

「あれでもなのか」

「ああ、少なくとも知恵はまだ承諾してない」

「承諾？」

「ああ、俺の奴隷になるって誓ったわけじゃないから。……さっき、俺のところに抱いてくれって来たんだけど、抱いてもいいが、それだったら、その前にまず俺の奴隷になりますって、ちゃんと誓えと言ったんだ。そしたら、黙って出て行ったんだ。まだそのつもりはないということだろう。お前に抱いて欲しかったんだろ。あるいは男なら誰でも良かったのかも」

「……。それで、お前は俺が知恵を抱いても本当にそれでいいと思ってるのか？」

「ああ。言っちゃ悪いが、お前では知恵は決して満足しない。あいつを満足させられるのは俺だけだ。だから一向に構わない」

「……そういうことか。はぁ、やれやれ。そんなふうに言われたら抱く気も失せる」

「試してみないのか」

「馬鹿言え。惨めすぎる。知恵さんも、俺も」

「そうか。それは悪かったな。だけど俺はお前に感謝してる。ここまでうまく事が運べたのはお前が協力してくれたからだ。じきに知恵も納得するよ。俺と一緒になることに」

「だが、なんでお前は知恵さんを拒んだんだ。抱いた方が早くはないか？」

「抱いちゃいけないときもあるんだよ。俺は知恵を欲しいんだ。知恵の身体だけが欲しいわけじゃない。そこを勘違いするな」

「今抱くとそういう意味になるのか？　何故？」

「今夜知恵が男を求めてさまよっているのは、純粋に肉欲に負けてるからさ。マゾの感覚に目覚めた身体が男を欲しくてしょうがないというだけなのさ。そんな時に抱いたって、いったいこっちは何を得られる？　身体だけさ。下手をすれば、自分の価値を落とすだけだ。単なる慰み相手の男ってね。俺はそんなものになる気はない」

「そういうもんなのか？」

「ああ、そういうもんだ。わかったら、お前も寝ろ。今夜は知恵に関り合わない方がいい。寝る場所がないんだったら、その隣のベッドを使え」

浩一は、啓作の部屋のもう一つのベッドの上に横になった。

隣で啓作が寝ているせいか、こういう状況下ではかえって一人よりも安心感があった。おそらく一人で泣いているはずの知恵のことを思うと気が引けたが、知恵に関しては啓作以上に分かっている人間はいないのだということがわかり、それに関するわだかまりもかなり薄らいだ。浩一はようやくまどろみから眠りに入ることが出来た。

宣誓

翌朝、早朝からあちらこちらで激しく鳴くウシの鳴き声で目が覚めた。そして部屋を見回して、また驚いた。床の上に知恵がいたのである。それも寝ているのではない。啓作のベッドに向かって正座をしていたのである。相変わらず高手小手に縛られた縄はそのままである。

「知恵さん……」

浩一が思わず口を開いた。

「おはようございます。浩一さん。夕べは大変失礼いたしました」

「いや、そんなことはいいんだけど。……あの、そこで何を」

「私、決めました。やっと決心できました」

「決めたって、何を」

「私、啓作さんに飼ってもらうことに……。私を彼の奴隷にしてもらうことに……。それを彼にお願いしようと思って、ここで起きられるのを待ってるんです」

「そ、そんな……。知恵さん、本当にそれでいいのかい？」

「え、ええ。結局そうしてもらうことが、一番自分の気持ちに素直なことだと分かったんです」

本当に啓作が言った通りになった……。また、あいつの望む通りの結末になった……。

浩一はわけが分からなかった。

とにかく、浩一は部屋を出ることにした。これから先の展開で自分がここにいる必要はないと考えた。

ベッドから下り、床に座っている知恵の脇を通ってドアから部屋の外に出ようとした。

「つれない奴だ。そんなに慌てて出て行くことはないだろ。知恵もせっかくその気持ちなんだから、もう少しこの部屋にいてくれないか」

毛布をずらし、顔を覗かせた啓作が言った。

動きを止めたものの、浩一のいたたまれない気持ちは変わらず、

無言のまま、啓作を見た。

「そんな目で俺を見るなよ。別にお前を馬鹿にしてるわけじゃなくて、お前に一番頼みたかったことを頼める状況になったから、ここに居てくれと言ったまでだ」

啓作は上半身を起こした。それから、ゆっくりと床に座る知恵の方を向いた。

「で、知恵は俺に話があるんだろう？」

「え、あ、あ、はい」

「俺の奴隷になる決心がついたのか？」

「あ、はい。そうです」

「俺は中途半端な奴隷ならいらない。俺の奴隷になったら俺に絶対服従だぞ。それでもいいか？」

「はい、わかってます」

「そんなに俺に苛められたいのか？」

「はい。私は、いえ、知恵はマゾですから……。苛めていただくのが嬉しいんです」

浩一は啓作と知恵の会話を聞き、その中身に聞き入らないわけにはいかなくなった。全身の血液が逆流し、身体を動かすことができなくなっていった。頭の中心が強い刺激で麻痺をしていた。

が、啓作は浩一とは対照的にいつものペースでいつものように好き勝手を言っていた。

「知恵、俺はもしお前を俺の奴隷にしたら……、そうだな、お前をメスブタのように扱うつもりだ。それでもいいか？」

「はい。それで知恵は満足です」

「今お前が言ったこと、ちゃんと俺に誓ってみろ。もし、それが完全だと俺が認めたら、ほうびにここで俺の小便を飲ませてやる」

知恵は啓作の言葉が終わると、正座を崩し、縄で縛られている裸身のバランスを器用に取りながら、膝を立てて立ち上がった。乳首につけられた鈴が軽い音を鳴らした。それから啓作が腰掛けているすぐ下のところで再び腰を落とし、一度正座で座ると今度は頭を床

にこすり付けた。両手は背中で合わせた形で縛られているので、その手は背中の一番高いところに持ち上げられた。

「伊集院啓作さまに申し上げます。

私、早川知恵は、今日、この場をもちまして、伊集院啓作さまをごしゅじんさまとする奴隷としてお仕え致したく存じます。

ごしゅじんさまの下すいかなる命令にも従い、

ごしゅじんさまのお与えくださるいかなる責めもお受けし、

また、ごしゅじんさまの下すいかなる罰をもお受けし、

ごしゅじんさまにご満足頂ける様ご奉仕させていただきます。

たいへんふつつかものとは存じますが、なにとぞ、末永くお引き回しいただきますようここにお願い申し上げます」

「聞いたか、浩一？」

「あ、ああ」

「知恵の宣誓はどうだった」

「あ、ああ完璧だと思う」

「そうか。じゃ、お前が証人だ。俺は今、この瞬間、知恵の宣誓を受け入れて知恵を俺の奴隷にすると宣言する。これでいいな」

「ありがとうございます。ごしゅじんさま」

「よし、知恵、顔を上げろ。じゃ、早速約束のご褒美をやらないといけないな……」

啓作はそう言うとベッドから立ち上がり自分の着ているジャージのズボンと下着のトランクスを一緒に脱いでペニスを出した。

再びその格好でベッドに腰掛け、

「知恵、こっちに来てこれを咥えろ」

と命じた。

知恵は言われた通りに動き、口にそれを咥えた。次の瞬間、知恵の表情が曇り、一方啓作は身体を揺らした。排尿を始めたらしい。

が、慣れない飲尿に知恵は途中でむせてしまい、ゲホゲホと咳き込みながら口を離してしまった。排尿はまだ終わっていなかったので、啓作の尿は、知恵の顔面の他、縛られた肢体、床などあたり一

面を汚すことになった。

「便器の役割もまともにはたせないんじゃ、奴隷失格だな」

「粗相をしてしまい、申し訳ありませんでした。どうか存分に罰をお与えくださいまし」

「そうだな。初めが肝心だな。よし、早速ムチ打ちといこう。さっさとその大きな尻を差し出せ」

昨日のムチ打ちの後は知恵の裸身のいたるところに赤い線として残っていた。その痛々しい体の向きを変えると、知恵は自分の尻を啓作に向けて突き出すようにして床に伏せた。

「啓作、もう、俺の役目は終わったんだよな。ここを出ていいか？」

浩一は恐る恐る啓作に聞いた。

「ああ、どうもありがとう。どうした、知恵の身体はもう見飽きたのか？　これから本番シーンでも見せてやろうかと思ってたんだが」

「いや、もう遠慮させてもらう。俺はキッチンで朝食の準備でもしてるから好きにやってくれ」

「そうか。じゃ、まあ好きにしてくれ。ああ、クルマから持ってきたクーラーボックスの中にベーコンとかチーズとか、卵や牛乳なんかが入ってるから、勝手に食べてていいぞ」

浩一はやっと部屋から出ることが出来た。ドアを閉めた直後、再び中からムチの鋭い響きと、知恵の悲鳴が聞こえた。

嫉妬と食事と

今、浩一の心の中は大きく乱れていた。それはほかでもない、啓作に対する嫉妬であった。縄で括られた知恵の肢体は、まぶたを閉じても決して消えない強烈な魅力で浩一に迫っていた。その姿に惚れていた。だが、そう思った次の瞬間、知恵のあの宣誓の声が脳裏に響いた。誰がどう見ても知恵は啓作のものになったのである。知恵とセックスをしたわけでもなく、強姦をしたわけでもなく、それどころか本人から求められたセックスすらも拒絶して、なしえた結果であった。自分と啓作の間には、決して超えることのできない、埋めることの出来ない、人間としての格の差がある……。そう自覚せざるを得なかった。それが分かったとき、浩一は啓作という人間に嫉妬したのである。浩一本人にその自覚は無かったのだが、その嫉妬が浩一の心に嵐を呼んだのであった。

が、救いもあった。ここがまわりに人のいない、ウシに囲まれた場所だったことである。ウシが散歩をする緑の草原の朝の空気は、少なくともそういう心の嵐を抑えるのはこれ以上ないぐらい、よい環境を提供してくれていた。

キッチンを通り過ぎ、階下に下りてそのまま外に出た。幸い納屋の中の音はここまでは聞こえない。

のんびりと歩くウシは浩一に全く関心を払わない。

時折どこかでウシが鳴く声が聞こえるだけだ。

浩一の心はようやく穏やかになっていった。そして冷静に物事を考えられる自分を取り戻した。

「とにかく二人にとって幸せな結果だったんだ。それでいいじゃないか」

自分に言い聞かせるように呟いた。

心の片隅で異論が湧き上がる感覚がほんの少し上がったが、牧場の空気がそれを抑えた。

「俺にも、いつかあんなにきれいで可愛い奴隷ができたらいいのかなぁ」

自分でも意外な言葉がポンと口から飛び出した。

言った後、浩一は慌てた。俺は何を口走ったんだ……。

啓作に対する妬みの心は容易に消せるものではなかったのである。その関心を何とか抑えるべく、浩一は意識の切り替えを図った。

マゾとは何か、女とは何かというテーマを選んだ。

啓作がそれに対して何か絶対的な理解をしていることは良く分かった。自分にはそれが全く無い。なるほど、啓作の言うとおり、俺は女のことを何一つ分かっちゃいないのだ。確かに、啓作が言っていた通り、今回の体験は何かしら考えることのきっかけを与えてはくれた。だが、それだけである。答えはどこにも無かった。なぜ啓作の行動が正解なのか、それすら分からない。啓作自身はそれでも十分浩一に何かを教えたつもりになっているのだろうということは、言葉の端々に現れている。だが、現実は、浩一に何かが以前より分かるようになったものがあるかを考えれば、そういうものは全く無く、むしろ以前よりももっと分からなくなったものが増えただけなのである。女性が怖いと思っているという啓作の指摘は、決して的外れでは無かったと思う。今の浩一の心情は、それをいよいよ確かなものにしたというだけであった。女性というのは自分には永遠に理解できない存在なのかもしれない……。

そんな不安が生まれていた。

山の上の方に朝日が当たって緑が輝き始めても、浩一は納屋に戻る気にはなれなかった。心の嵐が再び吹き荒れるのはかなわない、と思ったのである。結局、居場所の無い浩一は、納屋を囲む柵の上に腰掛け、無心に草を食むウシを眺める方を選んだ。納屋の中で何が行われているのかには全く関心を払わないようにした。

幸い、段々と明るくなっていくに従い、牧場には意外と目を引くものが沢山あることが分かってきた。

地形、植物、土や岩、ウシの行動、雲のうごき、昆虫、そういったもので浩一は自分の世界を取り戻すことができた。地質学者となり、植物学者となり、動物博士になり、気象予報士になり、ファー

ブルになった。

他に人がいなければ、浩一はいつでもこうやって自分の世界を楽しむことのできる、「孤独に強い」人間だったのである。

従って、他人は常に自分の平穏を乱す存在であった。

人間というものが煩わしかった。

もっとも理屈に合わないものだと思っていた。

そんなふうに時間を過ごし、どれくらいの時間が経ったかも、全く分からなくなった頃、ふいに自分を呼ぶ啓作の声が届いた。

「こういち～。そんなところにいたのか。全くお前ってやつは、本当にミステリアスな奴だ」

― どっちがミステリアスだか……

と浩一は内心思ったものの、それは聞き流した。

「どうかしたのか？」

「お前、朝飯も昼飯も食べないで、そんなところでずっとそうしてたのか？ もうとっくに昼も過ぎてるんだ。知恵も心配してたぞ。俺たちがお前の気を悪くして、どこかへ逃げたんじゃないかって。全く手間のかかるやつだ。ファッファッファッファ」

「ああ、そうだな。心配かけて悪かった」

「とにかく、中へ入れよ。知恵に食事を用意させるから」

浩一は立ち上がり、納屋へと向かった。

浩一が、数メートル歩き出したところで、啓作は納屋の中へ戻っていった。その入る姿を目にしたとき、浩一はあの「二人」の存在が、どうにも疎ましく感じられた。もやもやしたものが頭を覆っていく。啓作へのコンプレックスかも知れない、知恵への満たされぬ想いかもしれない、あるいは一種の自己嫌悪かもしれない。自然、歩みはだんだんと重くなり、納屋の入り口に戻った頃には、すっかり中に入る気力が無くなっていた。引き戸に手を掛けて、自分のもやもやを吹っ切るつもりで、何も考えるまいとすべてのことを頭から追い出して、それを引いた。大きな音を立てながら引き戸が動い

た。納屋の中へ踏み込むと忘れたはずの知恵の姿が思い浮かんだ。

―　まだ裸で縛られたままなのだろうか？　だが、啓作は知恵に飯を作らせると言っていた。とすれば、両手が自由にされてるのか。少なくとも縄ははずしたのだろう。だが、裸では料理に神経も集中できないだろう……

が、階段上のテラスのところから自分を見下ろしている啓作の視線に気がついたとき、自分の予想は絶対はずれているという確信を持った。啓作の目に、浩一が上に上がってくるのを、さも楽しみしているかのような色が浮かぶのを見たからである。

―　まだ何かやってるんだ……

浩一は今まで啓作という人間が変わっている人間だという認識はあったが、これほど人を虐待する性癖の持ち主だとは思っていなかった。いったい、いつから、どんなきっかけでこんな人間に変わってしまったのだろうと初めて疑問に思った。

ようやく重い身体を二階へ引きずり上げると啓作が嬉しそうに浩一を迎えた。

「さあ、食べてやってくれ。知恵の手料理を」

そう言って、啓作は浩一の肩に腕を回し、キッチンの方へと浩一を誘導した。

啓作に押される形でキッチンに入った。

確かにテーブルの上には、一食分の食事が用意されていた。その料理は肉を使ってはいたが、ステーキというよりも和食のようにアレンジしたミニステーキがメインで、その他に小さな皿に入れられた品物が数点ついていた。女性の手料理らしくどれもきれいに盛り付けられていた。

が、浩一にはそういうものを評価する感性は全くといっていいほど無かった。料理を見た浩一のほとんど唯一と言ってよい感想は、

―　ステーキじゃないのか

というものだった。

浩一は料理を自分が好きなものという意味でしか知らなかった。

美食家でもなかった。また家でも、とにかく黙って全部食べてくれるのならと、たいていは浩一のリクエスト通りに、ファミリーレストランのメニューのような食事がいつも用意されていた。また、浩一は飲酒もほとんどしない。従って飲み屋のメニューにも疎かった。結局、知恵がかなりの手間ひまかけて作った料理は、ほとんど浩一には評価されなかったのである。

憮然として食事に向かった浩一の様子を見て、啓作が声を出した。

「すまんな。知恵には俺の味を覚えさせる意味で、俺好みの料理を作らせたんだ。考えてみたら、お前向きじゃなかったな。なんなら、ステーキかスパゲティでも用意させようか？」

「いや、これでいい。大丈夫だ。ところで知恵さんはどうした？」

「ああ、知恵か。もう来る頃だ。今、着替えをさせていたんだ。今までは調理用の格好をさせていたんで。これから来るのは、まあ奴隷の礼装みたいなものかな。ファッファッファッファッ」

その奇妙な笑い声を聞くとまた浩一はあの居たたまれない感覚を思い出してしまった。一刻も早く食事を終え、この食堂から外に出たかった。

黙ったまま箸を取ると、浩一は黙々と食べ始めた。それは食事をするというよりも、鳥が餌をついばんでいるように、次から次へと口へものを放り込むという食事だった。

その様子を見ていた啓作が小さく独り言を呟いた。

「……これじゃあ、女と付き合えるわけがないなぁ……。これは難物だな……」

浩一の食事はあれよあれよと進み、箸を掴み食べ始めて、箸を置いた時でも、時計の長針はやっと四分を経過したところだった。

食べ終わりと何もしゃべらず、浩一はすぐ立ち上がった。

「もう終わりなのか？」

「ああ、もう沢山だ」

おいしいとも、うまかったとも、まずかったとも言わず、ただ満腹したという意味の言葉しか出さない浩一の態度に、啓作は内心呆

れていたのだが、浩一の置かれた、少々変わった立場を考えれば、それぐらいのことはあってもおかしくないと考え、そのことについては何も言わなかった。ただ、この場に知恵がいなかったことは、いろいろな意味で、きっと両方にとって良かったのだろうと考えた。

「ちょっと、そこで待ってろよ。新しい知恵に挨拶させるから」

啓作はそれだけ言うと、キッチンを出て行った。

待ち時間は極めて短かった。おそらく廊下で出くわしたのだろう。すぐにドアが開いた。

「ほら、知恵だぞ」

浩一はやむなく、知恵を見た。

知恵はもう縛られてはいなかった。

全裸でもなかった。

が、服を着ているという説明も適切とは思えない姿だった。

白い布を身体に巻きつけていた。その白い布はおそらく元々はシーツだったのだろう。それを三分の一か四分の一ぐらいの大きさに切ったものである。端の一方を首に巻きつけそれが前に垂らされ、そのまま右の脇から背中へ回り、再び右胸の脇のところで首からの布と結ばれているだけなのだ。白布自体は自分の重さで垂れ下がっているとは言うものの、身体を覆うにはあまりにも小さすぎた。

胸にしてもそれを隠すには十分でなく、左の乳首は完全に露出している。いや、止めている所はわずか一箇所である。当然、身体からその布は簡単に浮き上がる。知恵が少し動くだけでも裸身はすぐに至る所から顔を出すのである。

そして白布の丈は、太ももが少し隠れるぐらいのところで終わっていた。お尻はほとんど露出していると言ってよかった。

身体を隠すものを服と言うなら、これはもはや服というよりも裸身に取り付けられただの布と言った方が良かった。それはある意味、全裸などよりも本人の羞恥心を煽るものであるはずである。

が、とにかく朝の姿よりは目のやり場に困らないで済むことは浩一にとって幸いであった。

が、全く別なことが浩一の頭を再び混乱させていた。

知恵の表情である。少なくとも朝までの知恵では無かった。

別人に見えた。

啓作が追い討ちをかけた。

「どうだ。知恵はいい顔を見せるようになったろう。いいか、よく見ておけよ。これがな、奴隷になることの喜びを知った女の顔ってやつだ」

知恵の目は確かに喜びの色があふれ、表情にはどこにも暗さは感じられず、わずかに緩んだ口元には微笑みさえあった。だが、どことなく、緊張感を失ったように見える全体が、その顔を娼婦か狂女のそれの匂いをかもしだしていた。

浩一はしばらく知恵の様子を見てから、落ち着いて啓作に言った。

「もういい、分かった。もうそろそろ帰してくれよ。明日は仕事なんだから」

「やれやれ、お前にかかっちゃ、俺の全身全霊を打ち込んだ作品も一文の価値も無いということになるのか……。知恵、せっかく準備してもらったが、相手が悪かった。まあ浩一はこういう男だと思って諦めてくれ」

「かしこまりました。ごしゅじんさま」

「それと、浩一の言うとおり、そろそろ帰らないといけないな。知恵は、その格好で帰りたいか？　それとも最初の格好で帰るのとどっちがいい？」

「あのう、その、できれば、このまま……」

「そうだろうな。そう言うと思った。だがな、お前がその格好でクルマに乗ったら、間違いなくこの男は怒り出す。すまんが、最初のワンピース姿になってくれ。また、別な機会にちゃんと可愛がってやるから」

「はい、かしこまりました。ごしゅじんさま」

二人の会話を聞かされた浩一の心中は、再び猛烈な嵐に見舞われ

ていた。

第1回戦12月21日スタート!
Hカップ級
巨乳対決マッチ
全日本巨乳選手権でチンコを燃え上がらせた現役の女巨乳チャンプ達…。
今ここでHカップ級レベルに挑む! 対戦者:・朝丘まりん・望月なな・大城楓
合同企画ドットコム
WWW.GODOKIKAKU.COM

第三章　ラ・マンチャの男

花の応援団

話はさらに前、昭和五十年十月まで遡る。当時、伊集院啓作は大学生であり東京で下宿生活をしていた。もともと派手好きであった啓作は、当時何かと世間の耳目を集めていた大学の応援団に所属していた。といっても、啓作の大学の運動部には強豪と呼ばれる部はなく、応援団が応援団らしく応援を行うことは滅多に無かった。どちらかと言えば、大学内愚連隊、あるいは盛り場を中心に遊びまわる集団であった。応援団というだけで一般学生が怖がるのが面白く、一年、二年のうちはもちろん下働きに甘んじていたが、持ち前の機転と調子の良さ、けんかの度胸と腕っ節の強さ、酒の飲みっぷり、さらに宴会芸の達人という応援団員としてのスキルと才能において破格に恵まれていた啓作は、三年になる頃は筆頭幹部になっていた。一、二年生をバイトさせたバイト料をピンハネしては遊びまわり、女遊びの達人にもすでになりつつあった。無論、同じ盛り場を仕切るプロのやくざにも挨拶はかかさず、彼らからも存在を認められていた。

ある日、ポマードで固めたリーゼントヘアにハイネックの長ランにボンタン、革靴という典型的な応援団員スタイルで歌舞伎町を二人の後輩を取り巻きとして従え、啓作は肩で風を切りながら歩いていた。行き交う人々はその姿を目にいれるだけで左右に別れ啓作達に道を開けた。今の啓作に怖いものは何も無かった。世の中の全てが自分の思い通りになるはずだと本気で信じていた。が、実のところこの日の啓作の心中は激しく落ち込んでいた。こうやって歌舞伎町を歩いているのも、何とかインネンをつけて殴り合いの喧嘩をするための相手、ヤクザでもチンピラでもよかった、を探していたのである。それぐらい気分が悪かった。

だが、ただでさえ、眉毛を剃り落とし、リーゼントの前髪の下には剃り込みを入れている啓作が、鋭い目つきと険しい表情で下っ端

二人と揃いの長ランで歩いているのである。人混みは十メートルも先で左右に分かれ、行き交う人々は皆視線を合わせないようにしていた。また、当てにしていたヤクザやチンピラ達は、そういう嗅覚に優れている。警察沙汰覚悟の男にわざわざ関わり合おうとする馬鹿はどこにもいなかった。

坂田という後輩の一人が啓作に声をかけた。

「伊集院先輩、自分が最近見つけた店でちょっと面白い店があるんですが、いかがでしょうか？」

もう三十分も路地をうろついているのである。坂田がこういうのも頷けた。啓作の心中も喧嘩相手がなかなか現れないことに焦れ、自然と怒りも収まってきていた。

「いい女でもいるのか？　坂田」

「はい。自分が先日そこの店に行った時は、その店のママがちょっと面白い女でありまして……」

「よし、坂田、そこに連れて行け。案内しろ」

「押忍（おす）、失礼します」

そう言うと坂田と呼ばれた後輩は啓作の前に進み、啓作を先導していった。

ドンキホーテの価値

坂田の案内した店は、ただでさえ目立たない路地を入ったところにある、薄汚れた雑居ビルの中に沢山入っている小さなバーの中でも、一際目立たない地味な看板を掲げたバーだった。

少しだけ周囲に装飾の金縁がついたドアの真ん中にそれほど大きくないプレートにその店の名前が表示されていた。

【ドルシネア&アルドンザ】

「ドンキホーテか……、俺は。それならお前たちはサンチョ・パンサだな。おい、坂田。まさかボッタクリバーじゃないだろうな?」

「この間、自分が飲みに入った時には、安いぐらいでした」

「そうか。だが、ここのビルのバーは怪しそうな店ばかりだな。よくこんな店に入る気になったな。誰かの紹介だったのか?」

「押忍先輩、以前自分が行きつけだった店の子が今度新しい店に移ったからと誘われたのであります」

「なるほどな。そうでもなかったらこんな店にわざわざ来る奴は滅多にいないだろうな。よし、坂田。お前から入れ」

「押忍、失礼します」

坂田と呼ばれた後輩はドアを押して中に入った。

カラーン、カラーンとドアに取り付けられたカウベルの音が鳴り、同時に中から複数の女の声で、

「いらっしゃいませ」

という声が響いた。啓作ともう一人の後輩、名前を久米といった、が、その後に続いた。

細長いカウンターに椅子があるだけの狭い店内で、奥の方と手前に二人の女がカウンターの中にいた。

客席側の一番奥に、サラリーマンらしき背広姿の年配がいるだけで他にはまだ誰もいないようだった。と言っても、時間はまだ夜の八時前だ。どこの店でもこんなものだろう。

「あら、誰かと思えば坂田ちゃんじゃない。ありがとう、うれしいわ。今日はお友達も連れてきてくれたのね」

奥の方にいた、年上の女が坂田に声をかけた。
するとそれに呼応するようにもう一人の若い女が、さらに続けた。
「よかった。また来てくれて。変な店だってもう来ないんじゃないかと心配しちゃった。どうもありがとう。で、早速だけど紹介してよ。お友達を」
どうやら坂田のもともとの知り合いはこの若い女らしい。
「あ、友達って言うんじゃなくて、こちらの方は、大学の応援団で一緒の伊集院先輩。で、こっちは、同期の久米」
「ほほほ、道理で迫力が段違いのわけね。すごい雰囲気だもんね。わたし、こういう硬派っぽい人いいわぁ」
するとその時、奥で飲んでいた年配が慌てたようにカバンを小脇に抱えて立ち上がってドアに向かい、三人の後ろを通った。
「あら、石井さん、もうお帰り？　ずいぶん早いのね。今日は」
「いや、ちょっと急用を思い出してね。これから出かけなきゃいけないんだ。それじゃまた、寄らしてもらうから……」
そんなことを結構な早口でまくしたてあわててドアの向こうへと消えた。
姿が見えなくなると女たち二人が笑い出した。
「どうした？」
啓作が若い女に聞いた。
「さっきまでね、今のお客さん、どっかの大学の応援団員のこと滅茶苦茶くさしてて……、よっぽどひどい目にあったんでしょうけど……、そんなところにあなたたちが入って来たもんだから……。あ～、おかしかった」
女は笑いをこらえながら、さらに続けた。
「あら、ごめんなさいね、私ったらまだ自己紹介もしてなかったわ。わたしは嵯弥香（さやか）っていいます。よろしくね」
女が名刺を差し出し、坂田以外の二人に渡した。
そこにもう一人の女もこちらに来た。
「いらっしゃい、若くて逞しそうな人たちが三人も来るなんて今

日はラッキーね。私は、佳織って言うの。どうぞよろしくね」

こちらも同じように名刺を二人に渡す。

「俺たちは営業の邪魔になるんじゃないか？」

啓作がボソッと言った。

「全然。さっきのお客のことなら心配しなくていいわ。私の身体目当てで通ってるだけの平凡な男だし。でもあなたたち、身体が大きいから、こんな出入り口近くじゃ、ちょっといろいろあるかもね。一番奥の方に移動してもらえたらありがたいかも……」

「おい、奥に移動だ」

「押忍」

啓作は二人に命じた。

「どうもありがとう。悪いわね、気を遣わしちゃって」

「いや、こんなことなら慣れてる。それに人に迷惑をかけるのも確信犯の時がある……。ところで、佳織さん、ホワイトホース、ボトルで一本、それから何か適当につまみくれ。三人に」

「はい、かしこまりました」

しばらくの間は他に客もいないので女二人は三人に付きっ切りで相手になっていた。が、啓作はその輪にあまり入ろうとしなかった。後輩二人が盛り上がるのをただ見ている保護者のような態度に終始していた。嵯弥香がその啓作の態度に気がついた。

「応援団の幹部の人って、そんなにいつも抑えていないといけないものなの？」

佳織と久米の話に聞き入っているかのように見える啓作を見ながら、小さな声で啓作に聞こえないように坂田に聞いた。

坂田も小さな声で、啓作を見ないようにしながら、呟くように答えた。

「伊集院先輩は、きょうは特別なんだ……。本当は一人になりたいのかもしれないけど、無理してるんだ。あれでも……」

「あら、相当の訳ありみたいね」

「実はね、東京メッツのね……」

その時、いきなり坂田の目と目の間におしぼりが飛んできた。

びっくりして嵯弥香が顔を反対側に向けると啓作の睨み付ける顔があった。

「坂田、お前自分を何様だと思ってるんだ……」

「押忍、出すぎたマネをして申し訳ありません」

坂田は椅子から立ち上がり、「気をつけ」の姿勢になって答えた。

その険悪な空気の最中に、ドアのカウベルが鳴り、四、五人のサラリーマン風体の男たちが入ってきた。

とっさに久米が機転を利かせた。

「それじゃ、また、自分は坂田連れて先に帰らして頂きます。伊集院先輩はどうぞごゆっくり。それでは失礼します」

坂田もそれにすぐに合わせた。

「押忍、失礼します」

二人の学生服姿の男にサラリーマン達は通路を譲った。

女たちは、ウィンクの礼を二人に投げかけた。

一人取り残された格好になった啓作は怒りの向け先を見つけられずに、佳織が作ったばかりのオンザロックを口に運んだ。

「あいつら……、勝手に仕切りやがって……」

「何があったか知らないけど、そんなにムキになること無いじゃないの。せっかく、男前で格好いいんだから。そんな子供っぽいところ見せたら台無しよ」

その嵯弥香の言葉を佳織が遮った。

「もう、止めなさい。嵯弥香ちゃん。その人は今は一人にして欲しいの。さ、しばらくあっちのお客さんのお相手して……」

啓作は一人、カウンターに残された。反対側の隅では、今入ってきたばかりのサラリーマン達が女と何やら冗談を言い合って笑いあっている。

「大人気なかったか……。クソッ」

だが、どう言われても啓作は自分を抑えることが難しい状況だっ

た。結局、オンザロックをあおることが唯一のはけ口になった。手酌で空け、また自分で作り、再びそれを空ける。

異様に早いペースでロックを空けている啓作に佳織が気がついた。向こうの客を嵯弥香に任せると、啓作のところに戻って来た。

「あなた、ちょっと無茶な飲み方してない？　いくら酒に強くても身体に悪いわよ」

「俺はドンキホーテなんかじゃない」

「まあ、意外とお勉強してるのね。よく知ってるじゃない。でもね、ドンキホーテなんか、って何よ。それ気に入らないわ」

佳織はバーのママが客に向かって使う言葉とは思えないような鋭い口調で言った。その意外な反応に啓作は少々怯んだ。

「なぜ。あいつはきちがいで風車に向かって突っ込んだんだぞ。俺の酒の飲み方は無茶に見えるかもしれないが、それぐらいの分別はわきまえてるつもりだ」

「認識不足よ。ドンキホーテは確かにきちがいでそんなこともしたけど、ドルシネアをあれだけ本気で愛せるすごい度胸の持ち主でもあったのよ。あんたの酒の理由はどうせ女にふられたかなんかでしょうけど、あれほど馬鹿になって女を愛したことあるの？　あるんだったら言ってみなさい」

「女を愛するのに馬鹿にならなきゃいけないのか？　まあ少しは馬鹿にならなきゃいけないとは思うが……、あそこまで馬鹿にならなきゃいけないものなのか」

「ひたむきな馬鹿だから、娼婦のアルドンザは最後には自分はドルシネア姫だって認めたのよ。アルドンザ自身、自分から何度も自分はドルシネア姫なんかじゃなくて、ただの娼婦だってことを、泣きながら、最後には半狂乱になりながら、説明しようとしたのにね……。あなた分かる、そのアルドンザの気持ち。理不尽であろうが、きちがいであろうが、とにかく強い意志で本気で迫られたら、女の理性なんて脆いものなのよ。それなのにふられたってことは、あんたのその彼女に対する熱意とか愛とかのレベルはたかが知れてたっ

てことなの。分かったら、さっさとそんな女のことは忘れて、どうやったら女に裏切られないぐらい強く女を愛せるようになるか考えることね。ほら、少しこれで頭を冷やして考えなさいよ」

佳織はウーロン茶のボトルから氷を入れただけのグラスにそれを注いで啓作に差し出した。

「俺の想いは弱かったから通じないと……」

「ま、ボーヤ達のレベルならそれが普通だし。そうやって皆成長していくんだから。頑張りなさい。それじゃまた後で。帰っちゃだめよ。まだ教えたいことは沢山あるから」

そう言うと再び佳織は向こうの客に戻っていった。

なるほど坂田の言った通り、かなり型破りのママのようだ。だが、不思議なものであんなふうに言われてしまうと、自分の中の憤りが急速に引いていった。

啓作には織江（おりえ）という彼女がいた。少なくともおとといまでは彼女だった。が、昨日その本人から告げられた。もう会わないことにすると。そしてその傷心も癒えないうちに、その織江を昨日見たのである。彼女は、たまたま赤信号で目の前に止まった赤いポルシェ９１１の助手席に乗っていたのだ。そのクルマの運転席に座る男の顔を啓作は良く知っていた。それはプロ野球東京メッツの目下人気上昇中の四番打者、景浦義之だった。啓作が張り合える相手ではなかった。

信号が変わり一人歩道に残された啓作にはどうしようもない憤りだけが残った。

そしてそれからほぼ二十七時間の時が流れ、啓作はようやく自分を納得させられる考え方に出会えた。

ウーロン茶を口に含むとすっきりした飲み味が口の中全体に広がった。ようやく味を楽しめる感覚が戻っていた。

―そうかお前はドルシネアだと言い続けたら、女はドルシネアになることもあるのか……

確かにそういう見方をすれば、ドンキホーテなんかなどとはとて

も言えない。娼婦アルドンザに自分はドルシネア姫だと本気で言わせた男は、やはりヒーローであり、偉大な男だと思う。佳織の言うとおりだ。啓作は確かに自分が認識不足であったことを認めた。

ドルシネアの秘密

一人飲み続ける啓作の前に嵯弥香が現れた。

「あなたお腹空いてない？　何か食べるもの出前頼んであげましょうか？」

「いや、俺はそろそろ……」

「だめよ。ママが、絶対帰すなって。だからラーメンとか定食弁当どう？　意外とおいしい店があるのよ」

「ああ、わかった。じゃ、その弁当を頼む」

すると嵯弥香は安心したように再び向こうに戻り、電話をかけはじめた。出前の注文をしているようだ。

啓作は今の嵯弥香の言葉の意味を考えていた。

―　ママが絶対帰すなって言った？　何故だ。俺にまだ何か説教でも垂れようっていうのか。ドルシネアとドンキホーテの話は良かったが、だからといって、さっきみたいな調子でずっとやりこめられるのもかなりしんどそうだ。しかし女が帰るなと言ってるのを帰るというわけにもいかないな。それだけで十分礼儀知らずと言われるぐらいのことになりそうだ。この店の場合……。それに坂田達への示しもつかなくなる……

結局、ママの意図の読めない啓作には、黙ってそこに居座るしか選択は無かった。

入れ替わり立ち替わりに現れては消えてゆく客たちも少なくなり、あと一組しかいなくなった頃には啓作は弁当も食べ終わり、満腹に満足しながら再び一人でノンビリとホワイトホースをあおっていた。ただ最初のようにハイペースでロックをあおるのではなく、水割りをチビチビと舐めるように飲んでいた。何があるかはわからないが、理性を失うわけにはいかないだろうと思ったのである。それにさきほどのドンキホーテの話は酒に溺れたいという欲望をきれいに消し去ってくれていた。

十一時を回る頃、啓作は佳織と嵯弥香の奇妙な行動に気がついた。時折店に入ろうとする客が来る。そのほとんどはここの常連のよ

うで彼女たちの顔見知りのようなのだが、この時間になると急にそういう客が増えたのである。しかも彼らは店に入れない。ドアを開け、顔を覗かせたところで、彼女たちが何かを一言言うと、それだけで帰ってしまうのである。店の中にはいくらでも空席はあるのに。しかもその時に客の取る行動はいつも同じで、皆、カウンターの一番奥の席に座る啓作を見るのだ。そのまなざしには少なくともある種の羨望のようなものが混じっているように啓作には思われた。

―何があるんだ？　この店には？

啓作にもこの店がただのバーではないということが段々分かってきた。ただ、店内を改めて見回しても何も変わったものはない。暗く濃い赤で統一された内装が派手だが、別にバーでは珍しいことでもなんでもない。壁の構造を見てもどこかに隠しスペースがあるようには見えなかった。

カウンターに残っていた別の男の相手を佳織がしているときに、そばに来た嵯弥香に啓作は聞いた。

「なあ、俺を帰すなって、これから何かするのかい？」

「うふふ、気になる？　少なくてもそんな怖いことじゃないと思うけど。特にあなたなら。だけど、まさかねぇ、ママがあなたに目を付けるとは思わなかったわよ」

「目をつけられたのか？　俺は？」

「そう。今のあなたはまな板の上のコイって感じかな」

「それって、坂田たちも知っていることなのか？」

「まさか。彼らなんか全然相手にしてもらってないわよ。あなたとは格の差があるって感じかしら」

「それは褒め言葉って考えていいのかい？」

「もちろんそうよ……。さあ、そろそろ店を出る準備しなくちゃね。ホラ、あちらもお帰りだし」

「店じまいか？」

「そう、店閉めてから行くのよ。三人で」

「三人って君も入るのか？」

「そおよぉ。あたしがいるから面白くなるの。じゃあね。ちょっとだけ寂しくさせちゃうけど、ごめんなさい。大人しく着替えてくるまで待ってるのよ」

佳織と嵯弥香は、奥の狭いスペースに入っていった。そこに着替え部屋のようなものがあるのだろう。

十分ほどの時間が過ぎ、まず嵯弥香が戻ってきた。先ほどの水色のヴェールのような生地のロングドレスから一転して、サイケデリックな絵が入った真っ赤なTシャツと上下ともエナメルのようにピカピカ光る黒のジャケットとスカートで、細い足首の先にも同じように光る赤と黒の靴をはいていた。

「どう？　見違えたでしょう？　こういう女はお嫌い？　うふふふ」

「いや、別に。悪くない」

「そう、良かった」

「ママは、まだなの？」

「ママの服はね、私ほど簡単じゃないのよ。まあそう焦らないでもう少し待ってあげて……」

嵯弥香の言う通り、嵯弥香を待った時間よりもさらに二倍近い時間が経って、ようやく佳織が現れた。戻ってくるなり佳織が最初に発した言葉はこれだった。

「我慢強さはちゃんと身につけてるようね」

そういう佳織の姿は、ほとんど形容しがたいほど、全身黒づくめであった。しかも一番の外側は黒革の外套で覆われているので全面の開いたほんの僅かな部分しか中の服は見えない。

当然そこも黒である。サテンのような黒い生地だけがそこに顔を覗かせていた。

「さあ、行きましょ。嵯弥香、そっちの電気とガス落としてね」

「はい」

「さあ、どうぞ、お先に」

うながされて啓作は先にドアの外に出た。

次に嵯弥香が出て、最後に佳織が出てきた。

ドアを施錠し階下に下りて外の道に出ると佳織と嵯弥香はすかさず真っ黒なサングラスをかけた。そして佳織が先頭になり、その後を嵯弥香と啓作が並んで歩いた。かなり夜が更けているので通行人はかなり少なくなっていた。黒づくめでサングラス姿の女二人でも相当異様な空気はあったのだろうが、長ラン、リーゼントの啓作が一緒ではその迫力は相当であったろう。行き交う通行人は皆、目を逸らしていた。

路地を曲がり、北に進んだ。少しばかり広い、幅六メートルぐらいの道を渡った。この先のブロックはラブホテル街である。どうやら佳織はラブホテルに入るつもりのようだ。後ろから佳織の歩く姿を観察していて、啓作は佳織の挙動がかなりおかしいことに気がついた。腰の動きが安定しない。問題は腰から下に伸びた足が、うまく腰から上の体重を支え切れていないようなブレがあるのである。それはまるで綱渡りをしているようなおぼつかない足取りであった。

これではそんなに長いことは歩けないだろう……。

派手なホテルと派手なホテルに挟まれたところにある小さく地味なホテルが、佳織の目的地だった。道路からスッと開け放れた玄関に入った。

カウンターの中にいた少し年配の男が言った。

「おはようございます。佳織様。いつものお部屋でよろしいですか？」

「ええ」

「ではごゆっくり」

会話はそれだけだった。差し出された鍵を受け取り奥のエレベーターへ向かった。

その部屋は、ラブホテルの部屋にしてはかなり広い部屋だが、ラブホテルの部屋らしくは無かった。内装の色、調度品、椅子やソファー、どちらかといえば、普通のビジネスホテルのようである。ただ、唯一それらしいことがあるとすれば、ベッドが大きいというこ

とだけであった。もちろんそのベッドには電動であることを思わせるようなスイッチボードはないし、天井に鏡があるというようなこともない。

部屋のドアを閉めると、佳織は啓作の方に向き直った。

「ようこそ、わたしの世界に。あなた、もう分かってると思うけど、この部屋にいるときは私の言うことは何でも聞かなきゃいけないの。もしそれを守る自信がないんだったら、今すぐ、そのドアを開けて帰りなさい。どうする？」

啓作は一瞬迷った。

「ＳＭか……」

「そうね、そう考えてもらった方がいいわね。あなたにプレイ経験があるのかどうかは知らないけど……」

この時点で啓作にはＳＭプレイをやった経験などもちろんない。ただ、ロマンポルノの映画で見たことがあるだけである。家庭用ＶＴＲはまだ登場していない。ポルノは映画館で見る時代だった。だが、そこではいつも男が責め、女は責められていた。が、ここではどうやら逆になっているらしい。男に責められる男ということを考えれば、まあ、女に責められるぐらいなんということもあるまい。だいたいこんなことで怯んだら、応援団員としてのメンツにかかわる、と啓作は考えた。

「喜んでご招待を受ける」

「さすが、いい度胸してるわね。それじゃ、どうしようかな。まずはと、そんな学生服着ていられたら、気分も何もあったもんじゃないわ。その高そうな服脱いで、どこかにしまって」

啓作は長ランを脱いだ。真っ赤な裏地に金糸で刺繍された龍が踊った。

「まあ、すごい学生服。これいったい、いくらしたの？」

佳織が尋ねた。

「三十万ぐらいかな」

「呆れた。ツッパリするって、そんなにお金がかかることなの？」

「別にツッパリするためだけに買ったんじゃない」

「じゃ、何のため？　まさか運動部の応援の為なんて言わないでしょうね。別にそんなものなくても応援ぐらいできるでしょ。そういうのをね、世間では、男の男気を見せるって格好つけて言う場合もあるけど、普通に言えば、ツッパリするってことでしょう」

啓作は苦笑した。まあ、言われてみればそうかもしれない。ただ、あえて言えば「伝統に従った」「正統の後継者の自認」という意識のシンボルのつもりだったのだが、何にしても組織内部の人間にしか通用しない論理だ。結局のところ、応援団は男の組織であり、それ自体、佳織のような女から見れば男のマスターベーションを満たすものと見られてもしょうがない面はあるとは思った。もちろん女でもそれをいいと言ってくれる女もいるのだが。

「あら、笑ってるの。わたし、そんなに面白いこと言ったからしら。まあ、いいわ。私にはどうせ関係ない世界だしね。じゃ、その高級品をクロークに丁寧にしまったら、残りの服も脱いで」

啓作は言うとおりにした。だいたい応援団に入った新入生の時の体験を考えれば人前で脱ぐことぐらい何でもないことだったのである。駅のホームや、路上、あるいはキャバレーで、上の命じるままに醜態をさらすことなどいくらでもあった。女二人がいても密室であることにはかわりないこの場所で服を脱ぐことなど造作もなかった。

それに宴会で宴会芸をやるときなどは、先輩がいなくてもノリが昂じて自分から全裸になることなど日常茶飯事なのである。

佳織の言うとおりに全裸になった。

「若くていい身体だけど、傷だらけね。あなた毎日どこかで喧嘩してるみたいな……」

佳織が啓作の身体を見て呟いた。佳織の言うとおりだった。

喧嘩で負けるようなことは滅多になかったが、勝っても無傷で済むことはまずない。いつも手負いの状態である。啓作の腕、足、背中、腹、胸至る所に擦り傷、切り傷、痣があった。

「まあな、これも商売みたいなもんだから……」

「歴戦の勇士ってわけね。全く古いわね。しかも、ちょっと汗くさいというか、男くさいのよね。あんまり私たち好みじゃないわ、あなたは。悪いけど。まあしょうがないか。まずはと、……ねぇ、嵯弥香、あなた、この子をバスで洗ってちょうだい、それから例のものをこの子につけてあげて」

「はい、かしこまりました、佳織さま。じゃあ、こっちに来てちょうだい」

嵯弥香は啓作をバスルームへと案内した。

ここもあまりラブホテルらしくはない。ただ、普通のホテルのものと比べればかなり大きい。しかもバスタブのあるウェスタンスタイルのものではなく、どちらかというと旅館にある家族風呂という感じである。お湯は常時満たされるタイプのもので、ちゃんと湯船の外に広い洗い場がある。壁にエアマットレスが一つ立て掛けてあった。この洗い場をプレイルームにすることもできるようだ。

すでに全裸の啓作は、導かれるままにバスタブというよりも湯船と言ったほうがいいフロに入った。ひのきで作られているそれは、ひのきの香りがかぐわしかった。湯船に入るとガラス越しに嵯弥香が服を脱いでいる姿がぼんやりと見えた。一緒に入るつもりのようである。パンティを足から抜き取ると、すぐに中に入ってきた。

「どう、気持ちいいでしょう」

「ああ、ちょっと酔ってたから、効き過ぎるぐらいだ」

「それじゃ、もう上がりなさい。長湯すると身体が持たないわ。それにこれから身体を洗わなきゃいけないし」

「ああ、そうする」

啓作が湯船から出ると、入れ替わりに嵯弥香が入った。

「あれ……。洗ってくれるんじゃなかったの？」

「ちょっとだけ暖まらして」

啓作は湯船に浸かった嵯弥香をしばらく見ていた。おっぱいはかなり大きい。見かけは小柄な女性だが、コンパクトグラマーとでも

言えそうな身体つきだった。
「君はMなのか？」
「そうねぇ。きっとMの方が合ってるのかなぁ。でもS役も好きかも」
「それってどっちでもやるってこと？　じゃあ、君がママを調教したりすることもあるの？」
「それはないの。何て言えばいいかしら、パートナーと役柄はいつも決まってるって感じ。ママに対してはいつもMっていうより、私はママの奴隷かな。首に首輪を付けられたらもう絶対服従って感じ」
「ふーん、SMってそういうもんなのか。もっと犯罪ギリギリのものかと思ってた」
「犯罪ギリギリって？」
「誘拐して、調教して、自分のものにするみたいな……」
「まあ、そういうことが全然ないとは思わないけど、でも普通の生活が送れないんじゃ、誰もやらないわよ。よほどの馬鹿でない限り。さてと、そろそろお仕事しないと、女王さまに怒られちゃうわ」
嵯弥香はそう言うと湯船から出た。
「じゃあ、そこに座ってくれる？」
啓作はフロ用の腰掛けに座った。嵯弥香はその前に座り込むと石けんを泡立てたスポンジで啓作の身体を丹念に洗い始めた。
「はい、腕上げて、今度は左。じゃ、股を開いて、そうそう」
嵯弥香は目の前の男の裸身に、全く動揺の色を見せず、たんたんと洗い続けた。
「お前は、男と一緒に生活したことがあるみたいだな」
「ええ、そう。一度結婚したことがあるの。もう別れちゃったけどね。だから、裸で一緒にお風呂にはいるぐらい何ともないわ」
「なるほどね。道理で男の裸なんか見飽きたって顔してるわけだ」
「でも、あなた、好い身体してるわ。ママが目をつけるだけのことはあるわね」

「どういうところが？」

「だって、あなたの身体って、こうやって刺激を受けるとすぐ反応するの。見てて面白いぐらい」

そう言うと嵯弥香は浩一の胸を爪を立てて引っ掻いた。

するとすぐにそこに赤い線が浮かび上がった。

「こんなことが面白いのか？」

「まあね。大したことじゃないかもしれないけど、結構大事なことかも……」

そう言うと前から後ろに回った。背中を洗い始めた。

「でもね、私の直感で言えば、あなたはＭの素質はあまり無さそう。ちっとも恥ずかしがらないし、恐怖を全然表に出さないし。何で佳織さまがあなたを誘ったのか不思議だわ」

嵯弥香はそう言いながら、背中を丹念に洗っていった。次の瞬間、啓作の頭にいきなりシャワーをかけられた。

「おい……」

「だめよ、ツッパリリーゼントなんか。女王さまの前ではそれらしくするものなの」

結局、シャンプーをかけられ、苦心の末ポマードで固めたリーゼントは跡形もなく破壊されてしまった。

嵯弥香は頭をゴシゴシと洗い、啓作の髪型をただのザンバラ頭に変えた。応援団の権威は地に落ちた感じである。

「まあ、髪型が変わるだけでこんなに違うものなの～？　可愛いじゃない。何でこんな可愛いのにわざわざあんなふうに変えてたの？　もったいないじゃない」

啓作の姿を見て嵯弥香が言った。

「あのなぁ、かわいいじゃ、応援団は務まらないの。そういうところなんだってば」

「わからないわ、何で応援団なんか入りたいって思ったのか。人の応援なんかを専門にやるぐらいなら、自分が主役になれることを選んだらいいのに」

「それは確かにそうだな。実際に新入生勧誘の時でも、運動部志望がはっきりしている奴には絶対に無理強いはしないし。運動部があっての俺たちだからな」

「なんか、そんなこと聞いたら、案外あなたたちって、誰かにご奉仕したがってる存在みたいね」

「そうか、そうかもな」

嵯弥香は、苦笑する啓作にシャワーでお湯をかけ、シャンプーと石けんを落とした。

「さあこれでいいわ。上がってちょうだい」

啓作は立ち上がり、脱衣所に移動した。その身体にすかさず嵯弥香がバスタオルをかけて水分を拭き取っていく。

「ごめんなさい、頭はこれを使って自分でやって。私チビだから手が届かないの」

「ああ、ありがとう」

啓作が自分の頭を拭き取っていると嵯弥香は自分の首に黒いチョーカーをつけた。ヴェルヴェットのような華奢なアクセサリーだが、真ん中に文字があった。

「Slave（奴隷）か。徹底してるもんだな」

応援団では一回生を奴隷と呼んだり、それらしい扱いをしたりすることは多々ある。が、もちろんこんな表示のついたものを用意したことはない。

「そうよ。こういうものがとっても大事なのよ。こういうプレイでは。はい、これがあなたの」

嵯弥香の差し出した手には同じものが乗っていた。

「そうか、俺もか」

「当然よ。それから、同じ奴隷でも、私が先輩だから、あなたは私の言うことも聞かなきゃいけないのよ。分かるでしょ？　応援団なら」

「はい、よく知ってます。先輩」

奇妙な世界に飛び込んだものだと思ったが、同時にただ女を抱く

のとは違う、妙な緊張感が湧き上がり、それが少しずつ啓作を興奮させていった。嵯弥香は啓作の返事を聞いてニッコリ微笑むと中腰になり、啓作のペニスをつかんだ。

「あれ？　何かするんですか、先輩？」

「あなたにはもう一つ付けてもらうものがあるのよ。まあおもちゃみたいなものだけど、他の男だったらこれだけでも相当恥ずかしがるものだけど、たぶんあなたは何とも思わないでしょうね。だから本当は必要ないんだけどルールみたいなものだから」

「必要ないんですか？　先輩」

「だって恥ずかしがるから面白いんですもん。そう感じない人にしたってね」

嵯弥香はそう言いながら、ペニスの上と睾丸の下の部分をくくるように黒い革ベルトを巻き付け、そのベルトのついている小さなバックルのような金具でしっかりと固定した。別にそれだけである。見た目にもそれほど目立ったことはない。

「これが恥ずかしいんですか？　先輩」

「まだよ。次はこれ」

嵯弥香は今度は鎖を取り出した。そして固定フックのついた方をペニスに付けられた先ほどの革ベルトの金属リングに取り付けた。その瞬間、嵯弥香はチェーンを思い切り強く引いた。

ペニス全体が前に引っ張られ、啓作は前に足を出した。

「なるほど、犬の引き綱と同じというわけですか。確かに恥ずかしいかもしれません」

「あなたでも少しは恥ずかしいのね。でも普通はもうこれだけで全身真っ赤になる男性が多いのよ。そんなふうに人ごとみたいに言ってられる人は滅多にいないわ。あら、まだ首輪つけてないじゃない。だめよ、ちゃんと付けないと目一杯お仕置きされるわ……」

嵯弥香は啓作の手に握られた首輪を受け取ると啓作の首にそれを巻き付けた。

「さあ、準備オーケーね。行くわよ」

嵯弥香にチェーンを持たれ、妙な快感を味わいながら啓作は引かれていった。無論、彼が本気になって抵抗すれば、こんな拘束などなんの意味もないことは分かっている。が、彼の頭の中には今好奇心が渦巻いていた。これから自分がどんな扱いを受けるのか、それが知りたかった。さらに言えば、拘束されても、何をされても、少なくとも自分が殺されたり、半身不随にされたり、廃人にされる危険はまずないと啓作の防衛本能は判断していた。その安心感が彼を落ち着かせていた。啓作はもともとそういう人間関係の機微やそれがもたらす危険に敏感な男である。さらに今の応援団という立場のおかげで、身の安全には人一倍の警戒心を持っていた。が、その警戒心も、この状況を問題なしと判定していたのである。従って、余計なことを考えずに済み、ただ女を追っかけている時の興奮とは全く違う興奮に身を任せることにしたのである。それは、どちらかと言えば喧嘩の前の昂ぶりに近い。まさか女相手にそういう感覚が出てくることがあるなどとは思いもよらなかった。少なくとも今まで啓作は女に手を上げたことは一度もなかった。

脱衣所の壁には大きな鏡があり、そこに映し出された全裸の女に手綱を持たれてペニスを引っ張られて引かれていく全裸の自分を見た。少しだけ屈辱感はあったが、それよりもそれが滑稽なものという感覚の方が強く啓作に働いた。

「フッフッフッ」

「まあ、笑うなんて……。いったいどういう神経しているの、あなたは。この鏡見たら、普通はもっとシュンとするものなのに。…どうも調子狂っちゃうわね。まあ、いいわ。佳織さまにしっかり調教してもらいなさい」

バスルームを出た二人は、そのままソファーに腰掛けてくつろぐ佳織の前に来た。

嵯弥香がそこで膝をついて座り、同時にその手に握られたチェーンはまた強く引かれた。啓作にも同じようにしろという意味らしい。

啓作も嵯弥香にならって、膝をついた。

「お待たせいたしました。佳織さま。準備が整いました」

「ごくろうさま。まあ、意外と素直だったみたいね。もっと嵯弥香を手こずらせるかと思ったら、こんなに早く出てくるなんて予想外だわ。これじゃ罰は与えられないわねぇ……。どうしようかしら」

佳織はさも困ったかの様子である。コートを脱いだ佳織は、黒革ジャケットに黒革のベストのようなものをつけ、さらに黒革のショートパンツからメッシュの黒タイツに覆われた足を出していた。その足先には、見たこともないぐらいの高さのある黒いハイヒールがあった。そのヒールの先端は細くとがっている。ここに来るまでの間、足もとをあまり見ていなかったが、足どりが不安定だったのはこのハイヒールのせいだったのかと、啓作は納得した。が、次の瞬間、佳織は全く思いがけない言葉を出した。

「素直だったあなたにご褒美あげようかしら。そうね、あなた、今から嵯弥香をここで犯しなさい。私の目の前で。さあ、早く。早くするのよ。童貞でもないんでしょう、躊躇ってないで、さあ、早くするのよ」

嵯弥香のやや後ろに座っていた啓作には嵯弥香の表情は見られなかったが、おそらく嵯弥香も相当驚いたのだろう。肩が大きく揺れた。

「え、ここで彼女を？」

「お前は耳がないのかい？　さっさとおし」

佳織は女王さまとしての態度むき出しで命じた。

啓作は膝ずりをして嵯弥香に後ろから近づき、両手を嵯弥香の腰に当てた。

動き始めた啓作を見て佳織はさらに言葉を続けた。

「いいかい、やるからにはちゃんと嵯弥香を満足させるんだよ。手を抜いたら罰だからね。分かった？」

「……」

「おや、応援団なら目上の者に対する言葉使いぐらい習ってるんじゃないの？　ちゃんと返事をなさい」

「かしこまりました、佳織さま」

「そうそう、それでいいよ。やっぱり応援団にいるだけのことはあるわね。ほら、ちゃんと嵯弥香のおっぱいでも揉んで気分出しておやりなさい」

啓作はそう言われて、腰に回した右手を乳房へと移動させた。左手は逆に嵯弥香の股間へと走らせた。嵯弥香は首を捻り、啓作の肩に自分の頭を載せた。その口が半開きになっているのを見つけた啓作は自分の口をそこにあてがい、キスを始めた。

二人の様子を見ていた佳織はソファーから立ち上がると、サイドボードのところへ行き、下半分の観音開きの扉を開けた。

そこには、革ベルトや、チェーンなどなどの小道具が並べてあった。その中から、一本の乗馬用の鞭を手に取ると一回軽く振って空気を切る音を確かめた。それからさらに太いろうそくを二本取り出し、それを持って、それから再び二人が交わろうとしている場所のすぐ横のソファーに足を組んで座った。

啓作は嵯弥香を追いつめていった。嵯弥香は時折呻くような声を上げ始めた。啓作の指で嬲られているヴァギナはすでに洪水状態であった。嵯弥香の首が啓作の肩から離れ、今度は前側に嵯弥香の上半身は倒れ、嵯弥香は四つん這いの姿勢になった。受け入れ準備オーケーということだと啓作は判断した。

その真後ろに入り、ゆっくりと嵯弥香を後ろから貫いた。女遊びに慣れている啓作は、女を悦ばせるテクニックについては、ある程度の自信を持っていた。実際体力もあり、また性欲自体もピークにある年代である。時には優しい動きで、時には機関銃のように腰を動かし、嵯弥香を翻弄していった。確かに嵯弥香はそれに煽られるように声を上げるのだが、途中から啓作はいつもと勝手が違うことに気がついた。今まで啓作が抱いてきた女たちは、このあたりで果ててしまうのである。が、嵯弥香は声を上げるものの一向に頂上を極めるようには見えない。先ほどの佳織の命令が脳裏に蘇り、啓作は慌てた。腰の動きを一層激しくし、手で乳房を揉みまくり、背中

にキスの嵐を浴びせた。確かに効果はあった。嵯弥香は首を反らし、感じている素振りを見せた。が、そこまでだった。快感の頂点に先に達したのは啓作の方だった。頭が真っ白になり先に射精をした。

「おおおおっ」

と叫び声を上げて、嵯弥香の背中の上に倒れ込んだ。次の瞬間、猛烈な痛みが尻と背中に走った。

「うわあっ」

佳織が猛烈なスピードで尻と背中を鞭で滅多打ちにしていた。

「この馬鹿、誰が嵯弥香に慰めてもらえと言った？　私が命じたのは嵯弥香を満足させることなんだよ！　それが何さ、お前一人が勝手にいって、この役立たずが」

「申し訳ありません。お許し下さい。佳織さま」

思わず啓作はそう口走った。が、鞭の嵐はまだ収まらない。訳も分からずに鞭で打たれていたら、もしかしたら反抗心が湧き上がったかもしれない。だが、今負い目を感じている啓作にそういう反抗心は持てなかった。嵯弥香は隣で平然として自分を見ている。佳織の言うとおりの状況なのだ。慰められたのは自分なのである。それは啓作にとって屈辱以外の何ものでもなかった。自分が情けなかった。

鞭の激痛は辛いものだったが、同時にその痛さは自分の屈辱心を抑えるのにちょうどいい刺激でもあった。まるで禅の修行僧のような心境で啓作は鞭を受け止め続けた。

「まったく張り合いのない子だね。お前は。鞭で打たれてもウンともスンとも言わないのかい。歯も食いしばらないなんて、とんだサド泣かせだね。まあ身体がいい色になってることぐらいか。こうなるとこっちも初心者だからって手が抜けなくなったね。じゃ、今度はろうそくいこうか」

ハイヒールを啓作の横腹に押しつけて、啓作を横倒しにした後、佳織はライターで一本のろうそくに火を付け、啓作の横腹にろうを落とし始めた。熱い感覚に一瞬、身を震わせたが、啓作はこれにも

黙ったまま耐えてしまった。啓作はいずれにしても根性には恵まれていたのである。ここで佳織は再び鞭を打ち込んだ。横腹のろうは、鞭の打撃で吹き飛ばされるように落ちていった。そしてきれいにろうが無くなると、再びろうそくを使った。

打撃と熱さを交互に加えられる責めは確かに効いていた。いつしか先ほどの屈辱心を忘れさせるほど、その辛さは高まっていった。が、それでも啓作は耐えた。だが、啓作にも予想外の異変が啓作の身に起こっていた。

「佳織さま、彼、立ってます」

嵯弥香がそれを佳織に告げた。

「まあ、全然反応の無い子だと思ったら、いやらしさだけは人一倍なのね。全くふざけた子だわ。ちょっとあんた起きなさい」

膝をついたまま立った啓作の目の前に佳織は火のついていないもう一本のローソクをつきだした。

「ほら、口をあけなさい、アーンと大きく」

啓作は言われるままに口を開けた。すると佳織はそのローソクの下の部分を啓作の口に押し込み咥えさせた。それから、嬉しそうにそれを眺めたあと、ライターでその先端に火をつけた。その次の瞬間、ペニスに熱い衝撃が来た。口に咥えたろうそくのろうが、ペニスに滴り落ちるのである。悲鳴を上げることは無理である。口を動かせばろうそくはそのまま下に落ちてしまう。

思わず手を動かしかけたが、それはしっかりと嵯弥香に抑えられた。どうやら彼女たちにとっては、いつもの慣れたプレイということのようだ。

「ほほほほほ、いい眺めね。ほら、こんなにおちんちんがきれいにろうづけになって。悲鳴が無くてもこうすればちゃんと見られるし。ちゃんとおちんちんはどんどん硬くなっていくみたいだし。面白いわー」

佳織の言うとおりだった。熱さで痛めつけられているはずのペニスはどんどん興奮状態を深め、ペニスは硬くなるばかりだったので

ある。啓作の脳裏に、もしかしたら自分はマゾなのだろうかという意識が生まれた。やがて、ペニスは上側全面が完全にろうで覆われてしまった。先に落ちて固まったろうが防御の楯になるので、この上にろうが落ちても熱くもなんともなかった。

それに気がついた佳織は、啓作の口に咥えさせたろうそくを抜き取り、火を吹き消した。一瞬、その燃えさしのろうそくを啓作の目の前に見せると次の瞬間、その焼け残りの芯を啓作の乳首に向けて押しつけた。

「うおおおぅ……」

ついに啓作も悲鳴を上げた。後ろに反り返って床に仰向けになった。目には涙を溢れさせた。

その前に足を開いて佳織が仁王立ちになった。そしてハイヒールのつま先でペニスを踏みつけた。

「やっと人間らしい反応を見せてくれたじゃない。このツッパリ君も。さあ、私の靴を舐めるのよ、早く！」

そう言うやいなや、啓作の胸に再び鞭が振り下ろされた。

身体を起こし、再び床に土下座をするスタイルを取った。

床に顔をつけたまま、啓作は仁王立ちになった佳織の姿を見た。鞭を振るうためか、いつの間にか、ジャケットは脱ぎ捨てられ、黒革に沢山の紐と沢山の金具のついたコルセット姿になっていた。いや、コルセットという言い方は正しくない。下もホットパンツを脱いでいる状態なのだが、このコルセットらしきものは、パンティのように完全に腰を隠している。そして乳房も覆っていた。一種のボディスーツなのである。そのエロチックなところから黒網タイツの足がすっと伸び、その先端に例の黒いスーパーハイのピンヒールがあった。そのつま先は啓作を誘うように時折上下に揺らされていた。

鞭打ちの痛みは、早くしろという言葉であった。

啓作はそのまま、佳織の足もとに近づき、おずおずと舌を出して、そのピンヒールのつま先部分にそれを這わせた。

「まあ、すっかり素直ないい子になっちゃって。予想外の収穫だ

わ。……さてと」

佳織は啓作への鞭をやめ、ピンヒールを啓作に舐めさせながら、横でたたずむ嵯弥香に目を移した。

「これも嵯弥香のおかげね。だけど中途半端な欲求不満状態でちょっと可哀想ねぇ。何かして可愛がってあげないと……。折角嵯弥香のおかげでこの子がここまで素直になったんなら、この子を使わない手はないわね。いいわ、今度はこの子と私であなたを責めてあげるわ。それでどう?」

喜色満面の表情で嵯弥香はそれに答えた。

「ありがとうございます。佳織さま」

佳織は、ピンヒールを啓作の口先からさっさとはずし、床に落ちていた啓作のチェーンを持った。そして強くそれを引いて、再び嵯弥香の方へ啓作を引いた。

「いい、さっきみたいにもう一度嵯弥香を抱きなさい。ただ焦っちゃダメよ。ゆっくり、大事に可愛がるようにね」

「かしこまりました、佳織さま」

啓作は再び嵯弥香の身体に自分の身体を絡ませた。足から股間へと舌を這わせて徐々に先ほどのように後背位の姿勢を取った。驚いたことに、嵯弥香の秘園はすでにぐしょぐしょに濡れていた。啓作が責められる姿を見て興奮していたらしい。佳織の命令の言葉は、啓作の中でそれを聞くだけである種の興奮を呼ぶものになっていた。従って、二人の準備が整うのにそう時間は掛からなかった。

啓作は再び嵯弥香を貫いた。次の瞬間、佳織が鞭を振った。目標は嵯弥香の背中である。だが、佳織にとって、それはそれほど正確である必要は無かったのかも知れない。鞭は時折啓作も捕らえ、両方に当たることも珍しくなかった。

啓作は異様な興奮に襲われていた。

嵯弥香の身体を鞭が捉えた瞬間、自分のペニスが強く嵯弥香に圧迫された。

自分の身体に鞭が当たると、ペニスは嵯弥香の胎内で大きく反り

返った。その動きが嵯弥香を強く追いつめ、彼女が絶叫に近い大声を上げた。

「おほほほほ、嵯弥香ったら、こんなに悦んじゃって。ちょっとお預けが長かったしね。まあいいわ。今日はこの子を落としてくれたご褒美だから、徹底的にいかしてあげましょう」

佳織はさらにろうそくに火をつけて、嵯弥香の背中に左手でそれを落とし、少しそれが溜まると、今度は右手の鞭でそれをたたき落とした。

啓作を締め付ける力は信じられないぐらい強くなった。その異常な状態に啓作のペニスも異常な反応で応えた。反り返りのリズムが上がり、腰を大して動かしていないのに、ビクンビクンと、嵯弥香の胎内で鞭のように嵯弥香を叩いていた。

「ヒヒヒィーッ」

嵯弥香がせっぱ詰まったような声を上げた。

「あらあら、嵯弥香のゴールが近いみたいね。そろそろいいわよ。あなた、さっきみたいに腰を早く動かしなさい。ソラッ」

ピシッ

文字通り鞭を当てられ、啓作はラストスパートに入った。

佳織も速いペースで鞭打ちとろう落としを続けた。

「アアアアーッ。イクゥう」

最期の声を上げて嵯弥香は落ちた。無論、その瞬間、啓作も二度目の射精をして果てた。

啓作は精根使い果たしていた。崩れ落ちるように、嵯弥香の横に仰向けになった。

「あなたもよく頑張ったわね。ご褒美あげるわ。ほら、口開けて」

佳織は、股間のところのファスナーを開き、そのまま啓作の顔の上を跨いだ。そしてそこから小便を啓作の口めがけて落とした。

啓作に抗う気持ちはなかった。何でこんなものをと思いながらも、それを飲むことに何の躊躇いも感じない自分が不思議だった。

「ほほほほほ。初心者でわたしをここまで楽しませてくれたのはあなたが初めてね。優等生じゃない。もう少し悲鳴が聞ければもっと嬉しいかも。さてと、今日はもうお終いね。二人ともお風呂に行って着替えてらっしゃい」

言われて、啓作はむくっと起きあがった。だが、隣の嵯弥香は全く反応がない。啓作は驚いて眠っているような嵯弥香を抱いて揺すってみた。だが、全く反応がない。

「佳織さま、嵯弥香の様子が変です」

「まあ、この子ったら、また落ちたんだわ」

佳織は慌ててベッドから枕をつかみ取り、嵯弥香の首の下にそれをあてがい、首の気道を確保した上で、マウストツーマウスで人工呼吸をした。ようやくゲホゲホと咳き込みながら、嵯弥香が息を吹き返した。だが、視線はうつろであり、身体もふらふらと揺れている。しゃべることもままならないようだ。

「あ、あ、あのうぅ、わ、わたし、……また、お、おちちゃったんですかぁ」

「そうみたいね。すごく良かったんでしょうって、訊いても無駄ね。何を覚えてる？」

嵯弥香は首を横に振った。何も思い出せないらしい。

「まったく、可愛いんだから。こんなふうに気持ちよくて落ちちゃう姿見せられるとマゾが羨ましくなるわ」

佳織は立ち上がると、言葉を続けた。

「嵯弥香は回復するのにまだかなり時間が掛かるわ。あなたどうする？　先に帰りたければシャワー浴びて着替えて帰ってもいいわよ。私が嵯弥香の面倒みるから」

「いえ、一緒にいさせて下さい」

「そう。じゃ、そうなさい。それじゃ、嵯弥香をベッドに寝かせてちょうだいな」

「はい、かしこまりました」

啓作は床に座り込んでいる嵯弥香を抱きかかえるとベッドまで運

んだ。嵯弥香はまるであやつり人形のように表情のない顔と力がすべて抜けた身体になっていた。

「ありがとう。助かるわ」

佳織はそう言うと先ほどまで同じようにソファーに腰掛け、足を組んだ。それからタバコを咥え火をつけた。

「あなたも吸う？」

「はい、頂きます」

啓作は佳織の足下で正座をしてタバコを受け取った。目の前にライターが差し出された。

「本当はね、私がタバコを口に咥えた時にあなたに火をつけてもらいたかったんだけど……、まあいいわ。もうプレイも終わったようなものだし」

「どうも申し訳ありません。佳織さま」

「そんなことよりも、どうだった？　このプレイ。面白かった？　辛かった？　正直に言ってごらんなさい」

「はあ、辛かったです。こんなに痛いものだとは思ってもいませんでしたけど……」

「けど？　けどなあに？」

「何て言えばいいか、知らないことが沢山あるものだと驚かされました」

「たとえばどんなこと？」

「鞭とろうそくであんなにも人間が変えられるものかとか」

「うんうん、それから」

「自分のテクニックがいかに未熟だったとか」

「お、いいじゃない、それから」

「愛情っていうのは行為の中身とあんまり関係ないのかなとか」

「ふーん、そんなことまであんたは考えてたんだ。大したもんだ。あんた、やっぱりマゾ向きじゃないわね」

「何故ですか？」

「そうねぇ、私が思うには、マゾの子ってのはね、自分の快感に

すごく貪欲なのよ。サドももちろんそういうところはあるんだけど、それよりも相手がやっぱり耐える姿が無いと満足できないの。だからついつい相手のことばかり観察して自分の欲望は後でじわって味わう感じなのよ。だから自分の快感への欲望がよりストレートな方がマゾの役回りをするのが自然だって言えばいいかしら。だってサドは相手の姿を見ないと満足できないけど、マゾは自分の感覚だけで満足できるんだから。たぶんそのせいね。男にサドが多くて、女にはマゾが多いのは。

けれど、人が銃で撃たれるところを見て喜ぶ人間はサドじゃないのよ。それはただの殺人マニア。そこには何も耐えるところはないでしょう。サドはね、相手が頑張ってくれるから嬉しいの。もちろん、パートナーに死んでなんか欲しくないし。自分のすべてを相手が全部受け止めてくれるっていうことがね、サドの喜びじゃないかしら。マゾはね、そういうサドの気持ちが全部わかるのよ。で、それがとてつもない快感を生むのだと思う。さっきのプレイで、何故嵯弥香が落ちるところまでいっちゃったかわかる？」

「鞭打ちとろうそくですか？」

「違うわ。もしそうなら、あなたも落ちてたはずでしょう」

「はあ」

「鞭を振るって、ろうそくを落としたのが、私だからよ。誰でもいいってことじゃないの。嵯弥香から見たら、あなたは私の道具だったのよ。あなたは三人のプレイだと思ってたんでしょうけど、実はあれは私と嵯弥香の二人のプレイだったの。だから、あなたの代わりにバイブを使っても同じことになったのよ」

「自分は道具ですか」

「そういう場合もあるってこと。マゾから見たらね。誰が主人で、誰の言葉と行為が自分の悦びにつながるかはとっても重要なことだと思わない？」

「確かに」

「あの子は私を愛してるの。私も嵯弥香を愛してるの。で、お互

いに満足をしたいからこういうプレイをしてるのよ。あなた、今まで付き合ってきた彼女を満足させるように自分で何か努力したことあった？　どうせ自分の女にするまではいろいろ努力したかも知れないけど、その後は何にもしてなかったんじゃないの？」

「仰るとおりです。佳織さま」

「ほら、みなさい。大した努力もしないで、女に振られたからって妙に殺気を撒き散らして、みっともないったらありゃあしない。今度彼女を作るときは、そんな中途半端な扱いするんじゃなくて、私たちみたいに徹底的にやりなさい。そうじゃないと女性に失礼よ。それにドンキホーテみたいにあなたがなれれば、誰も他の男に走ったりしないわ」

「いつもＳＭで？」

「馬鹿ね。そういうことも含めて相手をよく知るの。知るように努力するの。一人一人みんな違うの。男も女も。どういうことが一番いいのかをあなたがその都度考えなきゃいけないのよ。どこかの馬鹿な週刊誌とかが書いてるみたいに、こうすれば女は必ず落ちるなんて、そんな単純な話がこの世の中にあるもんですか。もっとちゃんと勉強なさいな」

「はい、畏まりました。佳織さま」

「もう、いろいろあって、今日は疲れちゃったわ。そうだ、こんなにたくさん鞭振りまわしたのはすごい久しぶりなの。筋肉痛になったら大変だわ。お風呂に入らなくちゃ」

そう言うとたばこを消して、佳織は立ち上がった。啓作の前を通り過ぎるとき、足もとにあったチェーンを拾い上げた。

「お前も一緒においで」

そう言って、啓作を引いた。啓作は四つん這いの姿勢のまま、佳織の後について、バスルームに入った。

ドルシネア姫とドンキホーテ

脱衣所の狭いスペースで佳織はまずハイヒールを脱いだ。啓作はその足もとにいた。佳織の脱衣はそれほど簡単ではなかった。黒革のボディスーツはかなりの難物なのである。何しろ見える部分だけでも紐と金具で覆われている。

「もうちょっとこれ使いやすければいいんだけどね。格好は好きなんだけど。着るのも脱ぐのも大変で……。よいしょっと」

金具を一カ所起すと、その中に紐が収納されていた。これをデザインしたデザイナーは紐を完全にデザインの一部に取り込んでいた。余分な紐はすべて隠されるようになっていたのである。ただ、紐は結ぶというアクションは不必要なものになっていた。ストッパーのようなものを滑らせるだけで締まるのである。だから数が少なければたいして難しい作業にはならない。ただ、数が多すぎた。上から下まで数えてみると二十近くのファスナーで留められていた。

ようやく、すべてのファスナーが緩められると、ボディスーツは身体から浮き上がった。そして両脇にある前側と後ろ側のそれぞれの端を留めていたボタンをはずすとストンと足下にすべてが落ちた。残った裸体は、パンストの黒網タイツだけだった。ただ、このパンストは、普通とは違って股間のところが前から後ろまで大きく空間が開いている。つまりボディスーツを着たままトイレに行ってもボディスーツ側の股間のファスナーを開ければ、排泄が可能な状態になっているのである。

啓作は半ば感心しながら、その佳織の肉体をきれいに演出していた小道具達を観察した。それとともに、網タイツ姿の佳織の姿に欲情していた。嵯弥香も胸が大きい方だったが、佳織の胸は張り出しがさらに大きかった。

見とれる啓作に佳織が気がついた。その視線に軽く微笑むと、パンストを脱ぎ、それを啓作の頭にかぶせた。啓作の勃起はいよいよ大きくなった。

「まあ、こいつったら、さっきあれだけやっといてもう回復して

るじゃない。若いと違うわね。私の身体なんか滅多に男に見せたことないんだから、幸せ者だと思いなさいよ」

そんなことを言いながら、フロに入っていった。

呼ばれないので、啓作はそのまま待っていた。

佳織がお湯に浸かり暫くすると、中からようやくお呼びが掛かった。

「ねえ、そこの立て掛けてあるマットをそこに敷いて頂戴な」

「かしこまりました、佳織さま」

啓作は、頭に被されていたストッキングをはずし、佳織が脱いだものと一緒に置いてから、浴室の中に入った。そして壁に立てかけてあったエアマットレスを倒し、そこに寝られるように敷いた。それを見届けた佳織はフロから上がり、そのマットレスの上に腹這いになった。

「マッサージして頂戴」

「かしこまりました、佳織さま」

啓作は一回生だった頃を思い出した。幹部の三回生に呼び出されてはマッサージをやらされていた。やり方が下手だとぶん殴られた。そのお陰でセミプロ級の腕になっていた。

佳織にもそれはすぐに分かったらしい。

「あら、お前、ものすごくうまくない？　まるでプロにやってもらってるのと一緒じゃない」

「はい、応援団で鍛えられましたから……」

「なるほどねぇ、そういうこともうまくならないとやっていけない世界なのか。いろいろあるもんねぇ……。そう、そこ気持ちいいわ。……効くわね。ああ、身体が溶けそう。あんた本当にうまいわ。今度はもう少し、足の方、そうそう、ふくらはぎの方もね……」

応援団では服を着たままの男相手のマッサージで、色気も何もなかったが、佳織は、絶妙のプロポーションでしかも身体は華奢で、全裸で、無防備にそれを晒しているのだ。その肌のぬくもりが啓作に影響を与えない訳にはいかなかった。マッサージはいつの間にか、

単なるマッサージではなく、性感マッサージに変わっていった。

「ふふふふ、あなた、私を抱きたいの？　そうなんでしょ。はっきり言ってごらんよ」

その微妙な変化を佳織は見逃さなかった。

「はい、抱いてみたいです、佳織さま」

「ふーん、どうしようかねぇ。私が身体を許すなんてことはよほどのご褒美じゃなきゃいけないんだけど……」

そう言うと、佳織は腹這いから仰向けに姿勢を変えた。

「まずは、私の足をお舐め。舐め方がうまかったら、次にふくらはぎを舐めさせてやる」

啓作は、まず佳織の右足を舐めた。アイスクリームを少しずつ舐め取るように舐めていった。足の裏と足の指の間を特に丹念に舐めていった。

その様子を見ていた佳織は、自由な左足を啓作のペニスの上に押しつけ、足の指でその固くなっているペニスを弄んだ。

「ふふふ……思ったより上手じゃないか、やるもんだねぇ。じゃ、今度は反対側をやっておくれな」

左足に移った。が、右足でやった分の半分にも満たないうちに次の指示がきた。

「ふくらはぎに移りなさい」

「かしこまりました、佳織さま」

啓作はふくらはぎを舐め回した。今度は少し舌を皮膚から遠ざけ、舌先で佳織の体毛の感触を確かめるように舐めていった。足首から膝の裏へと舌が何度も往復した。最初は足の外側からだんだんと内側の部分へと移動し、次に左足から右足に移った。

右足でも同じようにしていくと、何度目かに膝の真後ろへと舌を這わせたとき、佳織の足が啓作の首に巻き付けられ、そのまま猛烈な力で、佳織の方へ引き寄せられた。佳織はそこで上半身を起した。

「もう足はいい。おっぱいを吸っておくれな」

啓作はそう告げられた。頭を下げて、佳織の胸に顔を埋めた。

次の瞬間、佳織は上半身を激しく左右に回した。
「おほほほほほ、どう気持ちいいでしょ？」
佳織の左右のおっぱいに、啓作は両頬を激しくひっぱたかれた。
しばらくそうして啓作の顔をおっぱいで嬲り続けてから、ようやくその動きを止め、今度は自分で左のおっぱいを持上げた。
「ほら、ここを舐めるのよ」
「かしこまりました、佳織さま」
佳織の腕が啓作の首に巻かれ、しっかり固定されたような形で乳首とその周辺を舐めさせられた。
「今度は、そのままおへそまでお舐め」
啓作の頭を離すと、佳織は再び上半身を寝かし、啓作は佳織の腹の上に舌を這わせた。
するとまた両手で啓作の頭を押さえ、今度はそれを自分の股間まで移動させた。要するに啓作は、人間バイブレーターとでもいうような扱いをされていた。
「まあ、これだけやってくれれば、いいでしょ。それじゃあ、またおっぱいを舐めておくれな」
啓作は佳織に乗りかかるようなスタイルで再び舌をおっぱいに這わせ、その周囲から乳首へと近づき、しまいに乳首を吸い上げた。
「ウ、アアン」
佳織はかなり大きな声を上げた。
佳織の腕が啓作の首にまとわりついた。
「いいわ、私の中に入って……」
「かしこまりました、佳織さま」
「もう、奴隷言葉でなくていいわ。佳織って呼んで」
「あ、はい。それじゃ、佳織さん」
さきほどの嵯弥香を二回目に貫いた時の感触を思い出しながら、啓作は相手の反応を確かめながらことを進められるように、とにかくすべての動きをゆっくりとしたものにした。以前の啓作ならば、すぐに自分の欲望をすべてぶつけていたのだが、今日の体験が啓作

を変えていた。女の扱いというものをこれほど意識しながらセックスをしたことは一度も無かったのだ。いや、意識はしていたが、自分の都合をそれよりも優先していた。今日はその優先順位を変えたのである。

初めて突入する佳織にペニスを馴染ませるように、少しずつ少しずつ、だが間断なく、ペニスを亀頭からゆっくりと没入させていった。

亀頭がようやく入ったところで、佳織がしがみついてきた。

「お願い、キスして。私とっても大きな声で叫ぶの」

いつのまにか佳織は女王さまから、ただのかわいい女に変わっていた。セックスというのは女王さまのままでは受け入れるのが難しいものらしい。自分の身体の下で小さな身体を震わせ、キスをせがむ佳織の様は、啓作の中の何かのスイッチを入れた。頭の中の冷静な部分がだんだんと溶けていった。

深いキスを交わし、佳織の強いばねを押さえつけながら、いつしか激しい動きで佳織を突きまくっていた。今まで抑えられていた男の戦闘本能のようなもの、それが啓作の全身からほとばしり出ていた。啓作は途中から佳織を引き起こし、自分の上に佳織を引き上げると、そのまま立ち上がり、佳織を翻弄し続けた。

「ア、すごい、アッ、すごいわ、こんなことって……、アアッ、いいぃ。いいのよ。とっても」

実のところ、両腕で佳織を支え、その腕の力だけで佳織の身体を上下させるこのやり方は、啓作の体力を根こそぎ奪うものだったが、佳織の身体がそれを望んでいると感じたのである。それで歯を食いしばりながら、必死の力を出し続けた。不思議なもので全身がそういう状況にあると、何故かペニスも激しく動く。先ほどの時も、鞭打ちに身体が対処するために全身の筋肉が緊張したから、ペニスが激しく動いたのであった。今度は鞭打ちの代わりを啓作は自分自身の動きで作り出したのである。

「いやあ、もう下ろして、落ちる、落ちる、ダメ、壊れる……ア

アアアアア」

遂に佳織は腕をだらりとさせた。啓作もその瞬間、一緒に果てた。

急速に全身から力が抜け、佳織の身体と折り重なるようにエアマットレスの上に倒れた。

少しだけずれたところにあった佳織の頭が動き、言った。

「お願い、もう一度キスして……」

全身を襲ったけだるさと戦いながら、啓作は身を起し、再びキスをした。荒い呼吸が少しずつ収まり、ようやく普通の声で話ができるようになった頃、佳織が話しかけてきた。

「あなた随分とすごい技が使えるのね。こんなに感じたの、初めてよ」

「今日、佳織さんに教わったようなものです」

「そう、そんなこともあるの。あなたみたいなのは初めてね。マゾに調教したつもりなのに、逆に女を責める技術を進化させた男なんて……。私たち、もしかしたら、とんでもない男にとんでもないことを教えちゃったのかしら」

「そうですか。自分はそんなにとんでもない存在ですか」

「お願いだから、女性を悲しませるような仕事につかないでね。あなたのその才能がそんなことに使われたら、あなたの名前は犯罪史に載るわね。たぶん」

そう言うと、佳織はもう一度首を伸ばして啓作の唇にキスをした。

それから手を啓作の首に回し、そこに巻かれてある Slave の文字の入ったチョーカーをはずした。

それから今度は啓作の股間へと手を這わせ、ペニスと睾丸に巻かれていた革ベルトもはずした。

「解放ですか？」

「そう、あなたを私の奴隷にはできないわ。どっちにしても」

「どうして？」

「だって、私があなたに夢中になるかも知れないじゃない。女は惚れたら負けなのよ。女王さまを続けられなくなるわ。そうなった

ら嵯弥香にも申し訳ないし、店の他のお客さんにも申し訳が立たないの。私にとって女王さまっていうのは、言ってみれば私の意地が掛かってるのよ」

「そうですか、意地では仕方ありません」

「また、お店に来てちょうだいな。もうこういうプレイをあなたとするつもりはないけど。だけど、あなたのところのマッサージの上手な後輩でも連れてきてくれたら私は満足できるから。あなたはマゾの女性を捜しなさい。きっといいサドのごしゅじんさまになれるわ」

「はい、そうさせてもらいます。そうだ、勉強させてもらったお返しをさせて頂かないと……」

啓作は立ち上がると、佳織に手を差し出した。

「ドルシネア姫、お身体を洗わして頂きましょう」

「まあ、ありがとう。嬉しいわ、ドンキホーテ」

佳織は手を啓作の手に載せ、マットレスから立ち上がった。

女のおそろしさ

二人がバスルームから出ると、ベッドの上で横になっていた嵯弥香が二人を見た。正気に戻っていたようだ。

「あれぇ、佳織さま、どうしたんですか？」

嵯弥香が驚くのは無理もなかった。佳織が全裸で男に従うように後ろから歩いて出てきたからだ。

「ダメだったの。大失敗ね」

佳織が答えた。

「失敗？」

「そう、この子は私の奴隷にはできないわ。下手をしたら私が奴隷にされちゃう」

佳織は笑いながら答えた。

「やっぱり……」

「やっぱりって、何がやっぱりなの？」

「なんとなく分かったんです。最初に彼は無理だなって」

「そう……。あなたもそんなふうに見てたの。……、何かちょっと悔しいわね。そう聞かされると。そんなふうに見えてたってことは、この子をこのまま帰したら、女を舐める男になりかねないわねぇ。私責任感じちゃうわ、なんとなく……」

佳織は何か思い悩むようなポーズをとった。三十秒ほど空白の時間が過ぎたあと、再び顔を上げた。

「あなた、ここに寝なさい。もうＳＭプレイはしないけどね、今度は私たちがサービスしてあげるわ」

佳織はそう言うと嵯弥香の寝ている横を指さした。

嵯弥香が佳織の仕草を見て、パッと表情を変えた。明らかに喜んでいる顔だ。

「それじゃあ、お言葉に甘えて……。これでいいかな」

何が起こるか例によって見当はついていないが、とにかくこの女達には教わるものがあると考えていた啓作は、言われるがままに裸身を嵯弥香に並べた。

「それじゃ、わたしも横にならしてもらうわ。申し訳ないけどもう少し詰めてね。……はい、どうもありがとう」

佳織も同じようにベッドに横になった。啓作を両側から女二人が挟む格好になった。

次の瞬間、二人の女達は啓作を舐め始めた。いや、舐めるのは行動の一部だ。口で舐め、手でさすり、足でもさすり、乳首でも、ふとももでも、下腹でも腕でも、啓作と接触している全ての点で微細な動きでのマッサージが二人がかりで開始されたのだ。

最初、それはただくすぐったいという感覚しかなかった。だが、時折深い接触があるポイントでは当然相手のぬくもりを強く感じる。そのぬくもりが異様な刺激となって啓作に伝わった。啓作もだんだんと興奮が深まっていった。左足に何か耐えられない刺激が生まれ思わず、身体を横にした。正面は嵯弥香を向き、背中が佳織に向いた。二人は即座に啓作との距離を詰めて、いよいよサンドイッチらしくなった。そして股間に対し前も後ろも開放してしまったことを女達は見逃してはいなかった。嵯弥香の手による攻撃はペニス、口では啓作の乳首、そして腕とひじでへその周囲、足では、啓作の足を絡めて動きを封じ、佳織の攻撃をより容易にするスタイルを啓作に取らせていた。

佳織はいつのまにか頭と足の方向を逆にしていた。全身を啓作の背中に密着させ、その口は啓作の肛門を集中攻撃していた。おっぱいは啓作の背中に甘い感触を伝えていた。足は、首にまとわりつき啓作の顔を足の甲が撫で回していた。手は睾丸と肛門の間のそけい部に置かれ、指が行ったり来たりしていた。

啓作の興奮は異様に高まっていった。ペニス自体への嵯弥香の攻撃は、普通のフェラなどよりずっとおとなしく、遊びもいいところなのだが、その奇妙な動かし方ーずっとピストンをするのではなく、時折素早くワンタッチして逃げる動きーが、啓作に妙な未練を与え続けていた。つまり啓作としては、他の部分の刺激など止めにして、さっさとペニスに集中して欲しいのだが、ペニスへの刺激は刹那的

で、一瞬のものなのだ。一方、興奮はとろ火にかけられたシチューのようにコトコトと一向に収まらないという状態だった。中途半端な興奮状態が延々と続いていた。

が、異変が起きた。それは肛門からの信号が伝えていた。まるで下半身全体の神経が麻痺したのでは思うような感覚が啓作の脳に届いた。いきなり、何かが肛門に入ってきた。指とは違うようだ。少し固い道具のような感触がある。次の瞬間、肛門の奥深くから、前側の方向に妙な刺激が届いた。それと同時に、それまであまり熱心ではなかった嵯弥香のペニスの攻撃が急に本格化した。

顔を佳織の足で押さえられている啓作はもう状況を完全に把握できなくなっていた。強烈な刺激が啓作の全身を電気のように何度も貫いていった。ペニスに熱く生ぬるい感触があった。がもうそれ以上は何が起こっているのか分からなかった。

射精があった。それは分かった。だが、刺激は一向に収まらない。奇妙なことに普通なら射精後、全身を襲うけだるさ感が来ないのである。身体は脳の制御下にはなく、勝手に動いているようだった。その結果として、再び身体の各部から快感ばかりが届いた。ペニスの生ぬるい感覚は一向に消えず、肛門と胎内からの刺激も前と変わらなかった。

啓作の思考能力が止まり始めた。何も考えられなくなり、白い空白が見えるだけになって来た。

目を覚ますとベッドに寝ていた。隣には嵯弥香と佳織が寝ていた。ただ、並びはかなり変わっていた。一番奥に寝かされているのが啓作。嵯弥香と佳織は抱き合うように寝ていた。

いくら思い出そうとしても、バスルームのところまでの記憶しか思い出せない。その後のことを考えると白い闇が覆った。

―いったい何があったんだ……

身体を起こした。身体の異常をチェックした。だが、何も見つけられなかった。だが、啓作は自分がフラフラしていると感じた。力

が入らないのである。そしてそれだけでなく、腰の後ろ側に強くはないが痛みがあった。それはまるで身体の中心から湧いてくるような痛みだった。啓作が今まで経験したことのない痛みだった。

―　俺はどうなったんだ？

喉がカラカラに渇いていた。おそらくこの部屋の空調のせいもあるのだろうが、水を飲もうと思った。だが、ベッドから下りるには二人を避けなければならない。啓作は痛む腰をかばいながら、静かにベッドの足もとへと身体を移動させた。

窓から少しばかり明るい光が届いている。夜明けかその直前の時間のようだ。

やっとベッドエンドにたどり着き、床に足を下ろし、立とうとした。が、啓作はその途端倒れてしまった。腰に力が入らないのである。

―　こんなことが……。俺はいったいどうなったんだ……

やっとのことで、ベッドの縁に捕まり、ベッドに腰掛けた。その振動で佳織が目を覚ました。

「あら、もう起きてたの？　よく起きられたわね」

「ああ何とかね。でもダメだ。全然立てないんだ」

「よかった。少しは効いたのね」

「いったい君たちは夕べ何をしたんだ？　僕はバスルームから出た後何をしたんだ？」

「ふふふふ。全然覚えてないのね。まあ当然だけど……。夕べ嵯弥香が落ちたのを見たのは覚えているでしょう？」

「ああ、覚えてる」

「あなたも落としてあげたのよ」

「俺が落ちたのか？」

「そう。女一人で男を落とすとなるとＳＭじゃないとなかなか難しいんだけど、嵯弥香と二人がかりならね。何とかなるの」

「そうか……。俺の身体はいったいどうなってるんだ？」

「そうね、あなた自分のペニス触ってみれば？　少しは何かわか

るかも」

啓作は自分のペニスを見た。特に変わった様子はない。が、自分の手を伸ばして、それに触れた途端にのけぞるような感覚が来た。ペニスに触われなかった。

「何だこれは？」

「あなたはね、夕べもう数え切れないぐらい射精したのよ。もっとも白いのは最初だけで後は透明な液しか出てこないんだけどね」

「どうりで干からびてるわけだ……。おまけに腰も痛いし……」

「まあ、それが普通ね。どう？　女の恐ろしさが少しは分かって？」

「恐ろしい？　違うね。ここまで尽くしてくれてありがとうって言いたいね」

「懲りない人ね。あなたは。でも覚えておきなさいよ。どっちにしてもあなただってメロメロにできる女が世の中には必ずいるんだから。私たちじゃ力不足だったみたいだけど」

「そんなことないさ。もう十分メロメロにされてる」

「本当にメロメロの状態ってのは、そんなことが言えないものなのよ。本当にお馬鹿さん」

「そっか、そういうもんなのか。だが、何にせよ、君たちは強烈だった。やっぱりこうしてるのもシンドイみたいだ……」

そう言うと、啓作は仰向けにベッドに倒れ込んだ。

「そりゃそうでしょ。私たちはこの業界にもう三年もいるんだから。いくらあなたが猛者でもしょせんは素人さん。プロの相手じゃないわ」

「なるほどね。ところで知ってるなら教えて欲しいけど、俺はいったいいつ自分の身体の自由を回復できる？」

「そうね、やっぱり半日ぐらいはかかるみたいね。そうそう、あなた太陽が真っ黄色に見えてるんじゃない？　そういう人には目玉焼きが効くみたいよ」

「ああ、太陽どころか部屋全体が真っ黄色だ……。目玉焼き、注

文してくれないか」

「ふふふ。残念でした。ここはね。そういうサービスは無いのよ。だけどその代わりにこれあげるわ」

佳織はベッドから立ち上がり、部屋の隅に置いた自分のハンドバッグから何かを取り出した。啓作の目の前に出された彼女の掌の上には、カプセルが一つ乗っていた。

「何？」

「一種のビタミン剤。目玉焼きの代わりぐらいにはなるわ」

「そうか、ありがたく頂戴する」

「さてと、もう夜も明けちゃったし。いよいよお別れね。えーと、昨夜から今朝までの全てで、そうね五万円でどう？」

「ちょっと高いんじゃない？」

「あらあ、サービスの内容の高さからすると安いぐらいよ。そう思わない？」

「ああ、確かにそう思う。済まないが、そこのクロークの中の学ランの中のポケットに財布が入ってるから、納得のいくぶんだけ取ってくれ」

「さすが、男ね。まったく女を惚れさすのがうまいんだから。本当に憎い人。でも、あなた、女を甘く見ちゃダメよ。金に容赦がないのも女なのよ」

「ああ、知ってるよ。それぐらい」

佳織はクロークから啓作の学ランを取り出し、財布を捜した。内ポケットから札入れを取り出し中を確認した。

「まあ、お金持ちね。二十万ぐらい入ってるじゃない？　全く学生なのにどういうことかしら？」

「下級生のバイト代をピンハネすればすぐそれぐらいにはなる…」

「まあ、悪い人。あなたホントに悪党だったのね」

「ふふふ。そうかもしれない。だけど俺からしたら、過去そうやってピンハネされた部分を取り戻してるだけだ」

「なるほどね。泥棒にも三分の理ってわけ。でもそんな話聞いちゃうと全部取るなんてとても出来ないわね」

「君のレートの倍でどうだい？　俺のお礼だ」

「お礼？」

「ああ、いろいろ教わったから……」

「そう、そういうことなら遠慮無く頂くわ。じゃ、十万円頂きます」

「一つ聞いていいか？」

「別に？　構わないわよ」

「君には好きな男がいないのか？　いや、いなかったのか？」

「どうしてそんなこと聞くの？」

「何となく感じたんだ。君の憧れみたいなものを。もしかしてそういう男にまだ会ったことないのかなって……」

「よく分かったわね。その通りよ。私は、私の男に対する期待を満たしてくれる男を捜してるのよ。だけど無理みたい。自分の意図通りに動いてくれる男なんて期待したら間違いだって、最近わかったわ。みんなそれぞれ違う願いを持ってるんだって、それが分かったの。ようやくね……」

「もしかして自分に後悔してる？」

「それはないわ。あなたとこういう話ができたことも私には喜びだし。人生の出会いはそれ自体がすばらしい目的でもあるのよ」

「出会いが目的か……。なるほど。分かるような気がする」

人と出会うこと自体に価値があり、目的にもなる。

佳織達との出会いは、啓作にいろいろなことを残してくれていた。

確かにその出会いは目的とも呼ばれうるものだったのかもしれない。

―　今度坂田に何かお礼をしてやらなきゃな……

啓作は体力の回復を待ちながら、そんなことを考えていた。

第四章　一夫多妻

黒猫

「ねえ、芳子ってば、どうしたの？　何見てるの？」

「え、ええ別に何でも無いんだけど、ね、千鶴、あの変な灯りの店なあに？」

交差点から伸びる狭い路地の右側に一軒だけ灯りを点している、薄汚さそうな店があった。

「え、何かしら。飲み屋だったら赤なのにねぇ。何であんな濃い紫の照明なのかしら？　ね、健ちゃんなら知ってるんじゃない、あれは飲み屋さんなの？」

スーツ姿の男、高坂健は、その会話の矛先を突然向けられて明らかに当惑した表情を浮かべ、

「え、あ、あの店、俺は知らないな。やっぱり、この辺りに詳しいのは、山岡だろう。おい、山岡、山岡。お呼びだよ、お呼び！」

とあからさまに逃げた。

「はい、なんすか？」

スーツ姿がサラリーマンのそれというよりも、大学生のリクルートスタイルという感じのする若い男、山岡隆太郎がその呼びかけに応じて三人のところに近寄ってきた。

「山岡、こちらのご婦人たちがあの店は何の店かだってさ」

「え、あの店っすか～。それ俺が説明するんすか～。ちょっとそれ、きびしすぎませんか～」

山岡は、明らかに狼狽しながら、逃げようとする。

「君しかいないだろう。こういう場合。さあ、早いところこのお嬢さん達を納得させてくれ」

「え、何か問題あること言いました？　私たち？」

「いや、別にそれほどのことじゃないんだけどね。なあ、や・ま・お・か！」

「もう分かりましたよ～、言えばいいんでしょ～、言えば。あの

店は、その、なんというか、変態というか、そういう人たちの集まる店なんですよ。ほら、縄とムチとろうそくっていう世界。そういうの聞いたことありませんか」

「まあ、ヤダー。芳子ったら変なこと聞かせないでよ」

川野千鶴は耳まで真っ赤になりながら芳子に向かって大声で言った。

「ごめん、変なこと聞いちゃって……。あんまり変な店に見えたからつい……」

「でも、あの店のことなら、健さんだって、絶対知ってたはずです。何でわざわざ僕を呼ぶんすか～？」

「え、俺は全然知らなかった」

「また、ご冗談を、だって健さんが、僕に教えてくれたんすよ～。新入社員歓迎会の時、あの店は、あんな店構えでも全国から客を集めてるすごい店なんだぞって～……」

「お、え、そうだったかな、いや覚えてないな……。山岡の記憶違いじゃないか、はははは」

知らばっくれることに徹する態度だ。が、皆の追求は厳しかった。

「まあ、健ちゃん、もしかして常連客だったりして。こわいこわい。裏で女を泣かしてたりして……」

「おい、川野君。それは誤解だよ。誤解。こら、山岡、お前が変なこと言うからだぞ」

芳子は、周りで盛り上がっている馬鹿騒ぎに入れなかった。それは芳子にはそれ以上に気に掛かることがあったからである。芳子はつい先ほど目に入れた光景のことを考えていた。

―　あれは確かに知恵だった。なんでそんな店に。しかも男と一緒に入るなんて。あの男は誰？　何者なの？

伊藤芳子は、早川知恵とは中学からの同級生だった。栃木から一緒に上京し、東京の短大へ進んだ。卒業後の就職先はさすがに一緒とはならず、知恵は故郷に戻りＵターン就職し、芳子は東京で就職した。だが、離れてはいても頻繁に連絡を取り合うお互いに親友と

認めた仲だった。が、異変があった。理由は分からないが、先週ぐらいから、知恵は自分を避けていると感じたのである。自宅に電話をかけると会社の近くにアパートを借りたという話をいきなり母親から聞かされた。従来ならそういう相談は真っ先に自分にあったはずだ。しかも教えてもらった電話番号にかけても一向に通じない。会社にメッセージを頼んでも電話は掛かってこない。明らかに何かあったのである。

芳子が知恵のことをこんなにも気に掛けていることには理由がある。それは、芳子が知恵を愛しているという関係だったからだ。別に男に興味が無かったということではない。ただ、中学ぐらいから知恵の家に入り浸りになり、気がついたらどうにもならないところまで関係が進んでいたということなのだ。そんな状態だったから、東京で一人暮らしを続けていて、周囲から様々なアプローチがあっても、それに関心を持つことはなく、変な言い方だが、ある種の操を守ってきたのである。だから、もし知恵が男と付き合っているとしたら、それは自分に対する大きな背任行為であると芳子は考えていたのだ。まさか、新宿二丁目の淋しい飲み屋街の一角でいきなり宇都宮にいるはずの知恵を見かけることがあろうとは夢にも思わなかったが、先ほどの山岡の話からすると、あの怪しい店は、その世界では有名な店であり、栃木からわざわざ来ていたとしても、ちっともおかしくない店のようだ。芳子の心の中で疑いは確信に変わっていった。だが、山岡の説明がもし本当なら、知恵はムチやろうそくや縄で責められている変態ということになる。

―そんな馬鹿な……。あの知恵が、そんなことに自分からのめり込むことなんかあるわけ無い！　すると、先ほどの人物は自分の見間違いか。いや、そんなはずはない。知恵を見間違えるはずなど絶対にない。では、残る可能性は……、無理矢理あの男に……、写真でも撮られて脅迫されたら、知恵なら……。そうだ、きっとそうに違いない。どうしよう、知恵を助けなきゃ……

「おい、もういい加減に馬鹿騒ぎは止めだ。おい、山岡、この辺

でいいからどっかないか。入るところ」

「え、ここらへんで？　あんまりいいとこないっすよ～」

「あのう、あそこはお酒飲めないんですか？」

「え、伊藤君、あそこってどこ？」

「ほら、さっきのあの店です」

芳子は知恵が救えるならこの際みんなを引き連れてあそこに入るのが得策だと判断したのだ。これなら知恵の確認も確実にできるし、こちらにも男がいる方が何かと心強い。だいたいここで逃したら、もう二度と助けるチャンスはないかもしれないのである。

「え、あの店ってまさか？」

「ちょっとやめてよ。芳子、本気なの」

「だって、こんな時じゃなきゃ中見る機会ってなかなかないじゃない。そう思わない？　どんな店だか私興味あるわ～」

「芳子って、大胆な人だったのね。まあいっか。なかなか見れないお化け屋敷みたいなもんだと思えば……」

「へえ、君たち、こんなに進歩的な女性だとは思わなかった。今の若い連中が羨ましいな。ま、とにかく、君たちがそう言うなら反対する理由は俺にはないな。で、山岡、お前どうする？」

「まあ、高いってことはないでしょうしね。でも大体バーみたいなものなのかなぁ。ただモノを売ってる店じゃないのかなぁ」

「看板の雰囲気からしたら、まあ飲み屋に見えるがな。とにかくお前先に行って、男女四人で飲めるのか聞いてこい」

「はい、ちょっと恥ずかしいけど」

「待って、私も一緒に行くわ」

芳子が声を上げた。

「だって、私が言い出しっぺだし。でも一人じゃ行けないけど、山岡君が一緒ならいいわ」

「おいおい、山岡、これすごいアプローチじゃないか？　お前達いつのまにそんな関係になってたんだ？」

「健ちゃん、勝手に誤解しないでね」

芳子は山岡の手を引くようにして店に向かった。

「高坂君、芳子って実はすごい子だったのね……」

残された千鶴がポツリと言った。

「ああ……、俺も同感……。すごい気合いが入ってる……」

芳子は、山岡のあとについて問題の店「黒猫」に入った。怪しいムードの店を予想していた二人にとっては意外なことに、店内は蛍光灯で煌々と照らされた明るい空間だった。目の前にはカウンターがあり、一組の男女が一番奥にいた。芳子は何とか女の顔を確認しようとするが手前側に座る男の身体が大きく、すっぽりと隠れてしまい、手しか見えない。

カウンターの中の、こぶとりでやや年のいった、愛想だけはよさそうなおじさんに向かって山岡が訊いた。

「あのう、ここスタンドバーですよね？　四人なんですけど、いいですか？」

おじさんはそれを聞くと嬉しそうな顔をして言った。

「ああ、もちろんさ。うちは少々風変わりな店だが、別にそれが気にならなければどうぞ」

「じゃ、俺、高坂さん達を呼んできますから、伊藤先輩は先に座ってて下さい」

「え、あ、はい」

芳子は、山岡が出て行くと店の中を物色するふりをして、奥の二人に近づいた。そして男の背中の真後ろへとゆっくりと近づき、女の横顔を確かめた。間違いなく知恵だった。

総毛を逆立てた猫のように知恵を見た。知恵は悲しい顔はしていなかった。が、嬉しい顔でもなかった。どこか酔っているような、うつろでつかみどころのない表情だった。しかし、芳子が考えていたように無理矢理連れてこられたようには見えない。芳子は自分の中で自分の感情が急激に高まるのを感じた。一方、知恵の方は芳子とは全く対照的に自分のまわりのことへの全ての注意力を失っているように見えた。

自分のすぐ後ろで知恵を凝視している芳子に、その男が気がついた。

「おい、知恵。どうやら、お前にお客さんみたいだぞ」

男がぼそっと言うと、知恵は静かにその顔を後ろに向けた。そして段々とその視線の焦点を合わせたかのように、目を見開き、口を開いた驚きの顔へとゆっくりと変わっていった。

「よ、よしこ、ど、どうして、ここに……」

「知恵こそ、何よ、何でこんなところで男と一緒にいるのよ。あなた私が東京で一人でいることがどれだけ淋しいことなのか分かってるの？　どういうことなのか説明してもらうからね。きっちりと……。分かってるの？　あなたが何をしたのか……」

芳子はもう昂ぶった感情を抑えきれなかった。言いたいことがとどめもなく口から出ていた。それだけでなく、目には涙、声も上ずり、誰が見てもボロボロの状態であった。

高坂たちを連れて店に戻った山岡は店の中に入るなり、いきなり、この修羅場を見ることになった。

「あ……」

全員が声を出せなくなった。

わめき続ける芳子は止まらない。知恵は全身でただ当惑を表わしていた。店主のおじさんも困り顔であった。誰もどうしようもなかった。

すると、知恵の連れの男が芳子の前に立ちはだかった。

「お嬢さん、知恵との間に何があったかは知らないが、もしここに彼女がいることがあなたを傷つけたのなら、それは僕にも責任がある。僕はあなたの話をじっくり聞きたいけど、ここはそういう場所とは言い難い。この場はとりあえず抑えてもらえないかな。他のお客さんも、店のマスターも困ってるみたいだし。……それからこの僕も……。後で場所を変えてゆっくり話を聞くから」

紳士的な物腰と、よく通る渋い低音の声で道理を穏やかに諭すこの男は、芳子の昂ぶった感情を一瞬にして抑え込んでしまった。や

ややせ形、背が高く、センスのいいストライプのスーツを着こなしたこの男は魅力的だった。しかもその視線は、なにか神秘的な力で芳子を吸い込む感じすら漂っていた。少なくとも、当初疑ったような女を脅迫するような人物には思えず、となると、知恵が本気で惚れた男と考える方が妥当ということになり、結局芳子は冷静さをもっと失うことになった。従って芳子は急転直下、落ち込んだのである。もう何も話すことはできず、ただ、はらはらと泣き始めた。

山岡が男に近づいてきた。

「あのう、この人は我々の連れなんですけど、何か？」

「いや、僕もよく分からないけど、どうやら彼女の友達のようだ。事情を聞いてみたいんで、今日はこの人を僕たちに預けてもらえませんか。知恵、それがいいだろう？」

「あ、はい。伊藤芳子さんは私の中学からの同級生なんです。いろいろ誤解があるようなんで、是非彼女とお話させて下さい」

「そうすか。分かりました。いやもうこっちも何が起こったか分からなくてビックリで……。伊藤先輩、じゃ、我々はこれで失礼してよろしいですか？」

泣き続ける芳子は、ひっくひっくとやりながら、

「ご・めんなさいね、私のために、みんなに迷惑かけちゃ……って」

と、しとろもどろの調子で告げた。

「まあ責任は我々側にもあるかも知れないから、そちらの皆さんはここでゆっくりしていって下さい。マスター、こちらさんに、シーバースをボトルで一本差し上げて。こちらからの迷惑代としてね。それからそれも含めて精算して、とりあえず我々は退散するから。本格的な修羅場になる前に」

と知恵の連れの男が言った。

「いいんですか？　どうもすんません」

と山岡、

「はい、かしこまりました」

と、マスターが同時にこたえた。

三人が店を出た後、残ってシーバースを飲む、山岡、川野、高坂は、当初は芳子の奇妙な行動を話題にしていたが、それにも飽きて店内を見て、自分たちが今どういう空間にいるのかがわかると、言葉を見つけるのが難しい状態になった。

この店がなぜ明るいかと言えば、それは壁がすべてショーケースになっており、その中には女性のボディトルソがずらりと並んでいるのである。しかもこのトルソには、縄がかけられていたり、拘束具がつけられたりと、要するにそういう世界なのだった。さらに各種の鞭や、足枷や手枷、口枷、縄、ろうそく、怪しげな男根を模した器具、下着のようで下着でないものなど至る所にインテリアとして置かれている。いや、値札もついているので販売もするようだ。もちろんカウンターの上にもブロンズで作られたオブジェが三つほど置かれていた。そのどれもが、格好は違うものの裸の女性を縄できりきりと縛り上げているものだった。

無言を破るようにようやく高坂が呟いた。

「しかし、何だな……。俺たちって、結局、ダシだったんだな……」

「でもこういうことでもないと、ここに入る度胸無かったっす。だから俺、結構うれしかったりして。それにシーバースがタダになるってあんまりないでしょ」

「まあ、山岡君、こういうの好きなの？」

「最初はちょっと苦手かなと思ってたんだけど、こういうの見てたら結構きれいだなって思えてきて……」

山岡はカウンターの上のブロンズ像を指でさした。

その時、マスターがやってきた。

「ようやく落ち着きました？　いやあこっちも一時ははらはらしました。ところで、皆さんはどういうご趣味？　こちらの女性はそちらのM奴隷さんかな？　なかなかムチが好きそうな身体してるじゃない。ねえ、この間入った乗馬ムチ、すごくいい音出すんだけど、

ちょっと彼女に試し打ちしてみない？」

と高坂に向けて言った。

高坂健と川野千鶴は二人とも真っ赤になって下を向いてしまった。

山岡はそれを見て必死に笑いをこらえていた。

知恵の希望

黒猫を出た知恵、芳子、そして一緒の男、つまり啓作の三人は、タクシーを拾い、赤坂のホテルに向かった。

「ホテルなの……？　あなたたちはやっぱりそういう関係なの？」

タクシーの中で芳子が訊いた。

「そういうことだ」

啓作が応えた。

「だが、知恵にはいかなる責任もない。あるとすれば全部俺にある」

「どうして、知恵は私を裏切ったのよ」

知恵は黙っていた。

「ホテルに着いたら説明してやる」

夜更けなので新宿から赤坂まではタクシーならほんの数分である。その会話があってものの三分もしないうちに三人はホテルに入っていった。カウンターで鍵を受け取ると啓作は芳子を自分たちの部屋に案内した。

ソファーに座った啓作が芳子に向かって切り出した。

「さてと、それじゃあ説明しようか。おっと先に自己紹介をしておこう。俺は伊集院啓作だ。君は？」

「伊藤芳子です」

「まずはと、何か飲むかい？　しらふで聞くよりも気持ちが楽だろう？」

「じゃ、水割りを頂かせてもらうわ」

「知恵、僕にはロックを、彼女には水割りを作ってくれ」

「かしこまりました、ごしゅじんさま」

「な、なんですって？」

「と、こういうわけさ」

「あなた、無理矢理知恵を……」

「無理矢理か、まあそう言われれば無理矢理なんだけど……」

「あんたねぇ、知恵みたいな子が自分から奴隷にしてくれなんて言うわけ無いじゃない。何をしたの？　脅迫したんでしょう？　いやらしい写真か何かで……」

「君も随分妄想が好きみたいだな。知恵といい勝負だ。残念ながらそれははずれだ。僕はそんな脅迫なんかしてない。ついでに言えば、知恵は自分で僕の奴隷になると宣誓したんだ。ちゃんと証人もいる」

「もし、あなたが言うことが本当なら、知恵はやっぱり私を裏切ったことになるじゃない。どうしてそれは知恵の責任じゃないってあなた言えるのよ」

「それはねぇ、隠されていた知恵を発掘したのが僕だということなんだ」

「隠されていた知恵？　何よそれ」

「知恵は僕と会ったおかげで本当の自分がどういう自分なのか知ったのさ。それ以前の知恵というのは、言ってみれば演技された知恵だったとでも言えばいいのかな。だから僕に言わせれば、そういう時代に君たちの間に何かがあったとしても、今の知恵にそれは通じない話になってると思う。だけどこのことは知恵本人に責任があるとは言い難い。そういう知恵を発掘してしまったのは僕だから、僕に責任があるだろうって言ったのさ」

「本当の知恵？　知恵、今の話本当なの？　もう以前のあなたじゃないの？」

芳子は、ウィスキーを運んできた知恵に訊いた。

「ごしゅじんさまの仰るとおりです」

「な、何で、な、何でそんなことを、言うのよー、知恵―っ」

芳子は再び取り乱し、泣きじゃくった。

「知恵、聞かせてくれ。この人とお前は以前どういう関係だったんだ？」

「恋人でした」

「恋人かぁ。なるほどな。同性愛は深いからなぁ。しかし、まさ

かこういう恋人がいるとは思わなかった。だけどお前たち全然逢ってなかったんだろう？」

「遠距離恋愛じゃ、変ですか？」

「遠距離恋愛？　まさか同性愛でそういうことまであるのか。これはまいったな。知恵、お前彼女を今でも好きなのか？　正直に言ってみろ」

「はい、好きです。ごしゅじんさま」

「俺と比べてどっちが好きだ？」

「申し訳ありません。比べることは出来ません。どちらも大事な人です。私にとっては。ごしゅじんさま」

「それじゃあ、知恵、お前は今彼女との関係がどうなるのが一番いいと思う？」

「……ごしゅじんさまとも、彼女とも、離れたくありません。一緒にいてくれるのが一番知恵には幸せです」

「二人ともか……。それは無理だろうな……、いくら何でも。お前の気持ちはともかく、彼女はどういう結果が望みか一応聞いてくれないか。今夜は、俺は別の部屋をとる。お前たち二人でよく話し合ってくれ。それを聞いた上で、これからどうするのがお前たちに一番いいのか考えたい」

「ごしゅじんさま。もしごしゅじんさまが、別の部屋に行かれたら、芳子は何も理解しようとしないでしょう。私が騙されてるとか、そういうふうに考えて私を説得すると思います。だから、私たちだけで私たちの問題を話すことはたぶんできないと思います」

「そうか……。そうだろうな。ここまでお前のことを思ってるなら……。簡単に諦められるわけはないか……。彼女にもお前にも辛いだろうが、やっぱり素直にふられてもらうのが一番だな。どうせ同性愛じゃ、結婚ってこともないだろうし、いずれは切れる関係なんだから……」

その啓作の言葉は泣きじゃくる芳子の耳にも届いた。

突然芳子が声を張り上げた。

「そ、そんなこと、ありません。私は一生、知恵と一緒に暮らすつもりでした……。ち、知恵は、絶対にあなたになんか渡したくありません！」

「困ったな。相手が男なら決闘してやってもいいんだけど。まさか、女相手に決闘なんかできないし。知恵は知恵でどちらも大事だって言うし。いったいどうすればいいんだ……」

さすがの啓作もあまりにも奇妙な状態の出現に心底困ってしまった。部屋の中の三人とも何もしゃべらず、お互いの様子をうかがう時間が流れた。芳子はようやく少し落ち着いたようで、目を真っ赤にしながらも、自分が話をしているのがどういう相手なのかをちゃんと捉えられるようになった。

とびきりいい男というタイプではないが、服装や身のこなし、頭の回転の速さ、そういう点で普通とは違うという漠然とした印象を持った。しかし、彼は同時に知恵を奴隷にしたサドでもあるのだ。それを思い出すと心のどこからか嫌悪感が湧き上がった。

三人の中でもっとも平静を保っていたのは知恵であった。気持ちとしてはいろいろな葛藤があってもちっともおかしくないはずなのだが、知恵は自分でも驚くほど、芳子の様子、啓作の様子を見ることが出来た。それはたぶん、自分が奴隷であり、自分の意志はこの状態の解決に何の役にも立たないと知っているせいだった。結局は自分をめぐって芳子と啓作が争っているだけだ。自分が奴隷として啓作に従うと誓っている以上、芳子に勝ち目は全くないのである。それを考えると芳子がただただ可哀想だった。しかし、それまでである。それ以上何も出来ることはない。その諦めが知恵を平静にさせていた。

三人の間の緊張感は一向に緩む気配はなく、誰も何も話さないまま、無言の時間が流れていった。何を言っても相手は同意しない。そういう確信が誰の胸にもあったのである。

啓作はそういう緊張の中で、喧嘩をしているときに相手の動きを読むような一種の対局感に身を預けはじめていた。考えるのではな

く、自分の身体に事態の打開策を探らせたのである。それは喧嘩の最中に相手に対する攻撃が見つからなくなった時に啓作がいつもしていた行動であった。こういう頭で考える動きとは違う動きが出来ることが、喧嘩の時の啓作の強みでもあった。

ふいに啓作はソファーから立ち上がると、芳子の座るソファーの前に立った。

芳子は背の高い啓作が自分の目の前に立ちはだかったことに怯えた。逆上したサディストが自分に襲いかかるという恐怖が彼女を襲った。

「いやあ、やめて！」

と、思わず叫んだものの、啓作は何もしない。

先に意味もなく叫んだ芳子がバツの悪い思いをすることになった。だが、次の瞬間、啓作は、ズボンのベルトに手をかけると、それを緩め、自分のズボンをトランクスごと下へと下ろしてしまった。ほんの一瞬の間に、芳子は自分の目の前に男のペニスを突きつけられることになった。勃起はしていないが、こんなものを見せられるとは全く予想もしていなかった芳子は、目をつむり、手で顔を覆い、下を向くしかなかった。

「何するんですか。いきなり。やめて下さい。私は変態じゃありません」

「芳子さん、あんたが今怯えたものが、あんたから知恵を奪ったもんなんだよ。それをまともに見ることもできないんじゃ、知恵を取り戻すことは絶対出来ないな。さあ分かったら、さっさと帰りな。もうあんたが愛した知恵はいなくなったんだ」

啓作はそう告げると、下ろしたズボンを引き上げて再びベルトを締めた。そして先ほどまで座っていたソファーに座り直した。

芳子は、心の中で自分全体を支えていた何かが音を立ててボッキリと折られたことを感じていた。何がどういう理屈でそうなったかは分からなかったが、啓作の一撃は強烈だった。

―　負けた……

もう、取り乱すこともなく、ふらふらと芳子は立ち上がった。

「さようなら、知恵……。幸せになってね……」

知恵の前を通るとき、それだけ言った。

芳子が部屋を出て行くと啓作が言った。

「知恵、悪いが彼女のことは諦めろ」

「かしこまりました、ごしゅじんさま」

知恵はそれ以上何も言わなかった。

リベンジ

「伊集院さん、電話ですよ」

営業所で朝のミーティング、要するにノルマの達成状況の確認作業をやっているときに、客からの電話が入ることは珍しい。ディーラーでお客様からの電話となれば、それは優先順位第一位のものであり、誰もそのことで文句を言うものはいない。

啓作は、自分のチェックになる前にそういう電話が来たことの幸運を喜んだ。別に成績が悪いとか、何か会社に隠しだてをしていることがあるというわけではない。ただ、自分の行動を他人にとやかく言われるのが嫌いなのである。社内販売台数ランクが常に三位以内にでもいれば、もう誰もチェックなどとは言わないが、啓作にまだそこまでの実力はなかった。むしろ会社側は啓作に期待しているところも大きく、それ故に、他の人間以上に啓作に対するチェックを細かにしていて、それが逆に啓作のチェック嫌いを一層助長していた。

が、お客から電話で呼び出しともなれば、そんなチェックなど、ただの雑用同然の価値のモノだ。啓作は上司に一礼し、受付の電話のところへ行った。心なしか上司の顔には悔しさが滲み出ていた。

「はい、お待たせしました。伊集院ですが」

……

「はい、ええ、トラックですか？　どのぐらいの大きさで？　はあ一．五トン、それなら扱っております。え、見積もりですか。ですが細かな仕様を伺わないと車種が特定できませんので値段というか条件を提示できませんが……。はい、それで、下取り車はございますか？　……ええ、ポンコツでもあるのと無いのではかなり違ってきますんで……。はい……、はい、是非伺わせて頂きます。場所はどちらになります？　……ああ、そこでしたらよく知ってます。ええ、それでは今からすぐに伺いますんで。たぶん今頃なら十五分ぐらいで伺えると思います。……はい、それではまた、どうもありがとうございました」

「何か、おいしそうな話してたな？」

同僚の赤城孝人（たかと）が、電話を切り、机に戻って出かける準備をしている啓作に声をかけた。

「ああ、紹介。以前売ったところからの。今日は運がいいぜ」

「だけど一・五トンのトラックって言えば、丸菱がめちゃめちゃに安値受注してるクラスだろ。足下すくわれるんじゃないか。競合で」

「ああ、その可能性は大いにあるな。丸菱はうちと違って、あれしか売るものないしな。だけどお客さんの間ではあんまり評判が良くないだろ。まあ、値段でごり押しされたら、勝ち目はないけど、その辺りはよく知ってるお客さんも多いから、値段だけで勝負がつくわけでもないさ。もし値段だけの客だったら、こっちも願い下げだし。売るだけ損だ。面倒見ても何の見返りもなさそうだし」

「お前らしいな。そこまで言い切るのは。普通は土下座しても注文書取るって方が多いけどな。やっぱり、お前はちょっと変わってるな。お前の客は取りにくいわけだ」

「こだわって客を選んでるかな。フォッフォッフォッフォッフォッ。それじゃ行ってくるぜ。皆様ごきげんよう」

同僚達の羨望混じりの視線を浴びながら、啓作はクルマで営業所を出た。客先のところへ向かう間、啓作は頭の中で商品のセールスポイントを復習し、説明の段取りを考えていた。

乗用車ならすぐに実車を持っていって、試乗させるのが常道なのだが、トラックの場合はそうはいかない。だいたい試乗して決める客などまずいない。大切なのは仕様そのものなのである。従い、寸法や性能関係の数字が重要だった。たださまざまな数字があるクルマの世界である。顧客が何の仕様を問題にするのかを予測するのは至難の業であった。だからいくら準備してもこれで大丈夫ということはトラックの場合はまずない。どこかで必ず仕様の調査確認作業が発生する。従って、今啓作が持って出たのは簡単なカタログだけである。おおざっぱな要望を聞いた後、車種を絞り込まないととて

も詳細資料など全部は持ち出せないからだ。いや、そんなものをいきなり見せれば、顧客が当惑するばかりなのである。その言わば通訳に相当する作業をするのがセールスマンなのである。

トラックの場合、顧客は自分の都合が全てというタイプであることが多い。従って、乗用車の時とは全く違う緊張感があった。

電話で指定された場所を啓作はよく知っていた。毎日のように通る場所である。だが、その客先の名前には全く聞き覚えはなかった。

―伊藤鉄工……。あったかな、そんなの？　気がつかなかった……

その場所は自分の担当テリトリー外の地域である。自分のテリトリーであれば、ローラー作戦の軒なみ訪問を何度もかけているので、よほどのことがない限りそうした事業所を見落とすことはない。だが、テリトリー外の紹介による客の場合は、そういう事前の情報が無いことなど珍しくなかったので啓作はそれ以上、そのことを気にも止めなかった。とにかく行けば分かるはずである。

バイパスに面したその場所は、大きなラーメン屋とハンバーガーショップが目立つばかりでそんな鉄工所らしきものは見えない。クルマを下りて、歩道を歩くと、少し先に行ったところから、このバイパスに沿って平行して走る小さな路地があるのが見えた。どうやら目的の場所はこのラーメン屋の背中合わせの場所のようである。再びクルマに乗り、その狭い路地に乗り入れた。ごちゃごちゃした町工場らしき建物がずっと軒を連ねている。ただ、そのうちの半分はシャッターを下ろしたままだ。オイルショックの余波で、こういうところにしわ寄せが来たのである。

その路地の一番奥に「伊藤鉄工」という看板のかかった門を見つけた。道理で知らないわけだと納得した。ここに用がない限り絶対に入ってこないような奥にあったからである。

が、門の中にクルマで乗り入れても、人の気配がない。大きな倉庫か工場のような建て屋が正面にあり、事務所棟のようなプレハブが右手にあるが、どちらも閉まっているのだ。トラックどころか、

クルマも一台もない。

―― ここことは違う伊藤鉄工があるのかなぁ……

手持ちの住宅地図を念のため見てみる。しかし、伊藤鉄工はこの場所だけのようだ。

―― 敷地の奥に何かあるのかな……

啓作はクルマを工場建屋に沿って塀沿いに奥に向かって走らせた。奥まで入るとその路地は建屋に沿って左に曲がっていた。それを曲がると正面に普通の住宅が一軒建っていた。おそらくここの経営者の家のようだ。だが、それにしても、まだ様子が変であった。その家の玄関の引き違い戸にはチェーンのようなもので開けられないようにされていたのが見えたからである。まるで差し押さえにあった物件のようだ。

その住宅の前でクルマを下り、啓作は辺りを見て回った。

やはり家の中へは入れそうにはない。それどころか人が住んでいる気配がない。

そもそも、あの電話は悪質ないたずらだったのだろうか？　そんな疑いを持ちながら、工場の半分開いたゲートから中をのぞき込んだとき、啓作は凄まじい殺気を感じ、反射的に後ろに一歩飛び退いた。間一髪、目の前にヘルメットにサングラス、口にはタオル巻きのジャンパー姿の男が、鉄パイプを持って、啓作の居た空間を空振りするのを目にすることになった。

「この野郎、ちょろちょろ逃げやがって……」

男が呻いた。

啓作の中で喧嘩モードのスイッチが入った。わけもなく、喧嘩を突然仕掛けられることには応援団時代に鍛えられ、慣れていた。冷静に男の持った鉄パイプの長さを目尺で測り、間合いを保ちながら、男が鉄パイプを無駄に振り回し、隙を見せるのを待った。

男の体力、体格からすると鉄パイプは重すぎるようで、鉄パイプに振り回されている男の動きは隙だらけに見えた。

工場から外に出て、右左へと交互に進路を変えながら後退すると

男は鉄パイプを振り回すのにバテたのか、パイプの返しがかなりゆっくりになってきた。そろそろ潮時と見た啓作は、次に自分に向かって鉄パイプが振り回された瞬間、自分ぎりぎりのところでパイプを見切り、少しだけ下がってそれをかわした。その直後、今度は思い切り前に踏み込み相手の懐に入った。ヘルメット男は振り下ろした鉄パイプを地面に叩きつけた状態であり、鉄パイプの運動エネルギーはゼロである。しかも今までの攻撃で鉄パイプの返しの速度はかなり遅くなっていた。啓作にはヘルメット男は全身隙だらけに見えた。ヘルメット男のアゴに向かって、狙いすました正面蹴りを革靴のつま先でたたき込んだ。鈍い音がした。アゴの骨か、あるいは歯が砕けたかしたようだ。一撃必殺の蹴りである。

ビクリともしないで男は倒れた。

男の胸ぐらを掴み、サングラスとタオルを取った。全く見たことのない労務者風の壮年の男だった。

「てめえ、何のつもりでこんなマネを……」

「お、おれは、か、かねで、や、やとわれた、だ、だけだ……」

血まみれになった口で男が呻きながらしゃべった。しゃべれるところをみると、アゴの骨は無事だったらしい。

「誰にだ」

その時、工場の方から何か固いものが床に落ちる金属音がした。

雇った奴はそこにいると悟った啓作は、ヘルメット男を放り出し、ダッシュで工場へ向かった。その啓作の足音に気がついたのか、工場の中から遠ざかる足音が響いた。どうやら反対側の出口から逃げるつもりらしい。相手の走るスピードはかなり遅く、啓作はみるみるうちに距離をつめ、その小柄なジャージ姿の人影の後ろ襟を掴んで思い切り引き倒した。

「キャア」

女の悲鳴に啓作は驚いてその顔を覗き込んだ。

芳子の顔があった。

「お前か……。まさかこんなことまでするとは……。そこまでお

前、俺が憎いのか……」

芳子は泣きながらわめいた。

「当たり前でしょう。私にいったい何が残ったっていうのよ。何にも無いんだから。本当に何も残ってないんだから。もうこうなったらやけくそよ……」

啓作は、芳子を起こした。

「何もないってどういうことだ。ちゃんと分かるように説明しろ。俺にはお前が何を言ってるのかさっぱり分からん。それは全部俺のせいなのか？」

芳子は黙ってしまった。しゃくりあげを繰り返すだけだった。

くしゃくしゃの顔の芳子の腕を掴んで啓作はクルマへと引き返した。先ほどのヘルメット男の姿はもうなく、鉄パイプだけがそこに残されていた。

助手席に芳子を押し込んだ。

運転席に乗り込んだ啓作は、エンジンを掛けず、ボソッと話をした。

「営業所への電話もお前が掛けさせたのか？」

「そうよ。残念だったわね。クルマが売れると喜んで来たんでしょうけど、いい気味だわ」

意外に落ち着いた声で芳子が応えた。

「そんなに俺が憎いのか？」

「ええそうよ」

「何故？　知恵を奪ったからか？」

「……」

「じゃ、さっきの何も残ってないってどういう意味だ？」

「……」

「何があったのか話してみろ。お前は少なくとも傷害罪を犯してるんだからな。刑務所に行きたいならそうしてやってもいいんだぞ」

「いいわよ、刑務所でもどこにでも入るわ。もう私にはどうでもいいの。どうせ私には帰る場所もないんだから」

「だから、いったい何があったのか話してみろ……。あ、そうか、もしかしてここはお前の家だったのか」

「そうよ。ここが私の家よ。家だったのよ。……東京から電話を掛けたらある日突然繋がらなくなって、驚いて帰ってきてみれば、会社は倒産。父も兄弟も夜逃げして行方不明。家も工場も何もかも差し押さえられてたのよ」

「気の毒な話だとは思うが、そんなの俺とも知恵とも全然関係ないじゃないか」

「そうよ。だけど私にはこんな時頼れるのは知恵しかいなかったの。それなのにそれなのに……。しかも、そんな状態で宇都宮に久しぶりに戻ったら、すぐあんたを見つけたのよ。バスであんたの営業所の前を通った時に。ショールームのところでクルマを説明しているあんたを見たのよ。無性に腹が立って、憎らしくて」

芳子はまったく感情の無い操り人形が語るかのように、たんたんと語った。

支離滅裂な説明だが、啓作は、芳子の行動の意味がようやく分かった。悪い偶然の重なった逆恨みとしか言いようがなかった。ここまで追いつめられれば、異常な行動を取るのも頷ける。そしてその理由はただ一つだ。

芳子は淋しいのである。

唯一の自分の理解者知恵を失い、そして知恵以外の誰もそれを埋められる人間を見つけられなかったのだ。東京では。

東京というのは、そんなところだ。自己をうまく主張出来る人間だけが、認められ信頼される。自己表現の下手な者、自分が何者であるか上手に説明できない者は排除される世界なのである。排除された者同士が偶然で出会うこともゼロではないのだろうが、実際にはまずあり得ない。芳子の知恵への傾倒が深かった分だけ、芳子は他の人間に自分をアピールできなくなってしまっていたのだ。いろいろな意味で芳子は非常に女性らしい女性なのである。啓作の芳子に対する観察がそこまで及んだとき、啓作の脳裏に一つの記憶が蘇

った。似ている。啓作が初めて知恵を見たときに、啓作が持った知恵に対する観察結果と、芳子の観察結果は酷似していた。

社交が苦手でウソがつけない
内面には深い憧憬と妄想
度を超した他人への感情移入
孤独に対する恐怖にも近い不安

芳子と知恵はもともと似たもの同士だったのだ。

―　ということは、もしかすると強い服従願望も共通するのか。

確かにそう考えれば、芳子が必要以上に俺に拘る理由も分かる。俺に制圧されたいのだ。だから芳子の深層心理は、芳子を俺に過剰に反発させるのだ……。それならば……

啓作は一つのアイデアを思い浮かべた。知恵と同じように芳子も調教して自分の奴隷とする。そして知恵と一緒に三人で暮らす。

―　しかし、そんなことがうまくいくのか……。

助手席に座る芳子をもう一度見た。

何故かは分からないが、普通に見えた。先ほどまでの取り乱した様子は無くなっていた。感情が消えた芳子の表情はまるで少女そのものだった。中学生か小学生のように見えた。まるで隣に啓作が居ることで安心しているかのようである。芳子も知恵同様、世の中を泳ぎわたるための生き方という技術の面で評価すれば、非常に不器用な人間なのである。調教すれば芳子は間違いなく知恵のように啓作無しでは生きられない人間にできる。そういう確信が啓作に生まれた。だが、まだ、課題は残っている。啓作自身、おのれの意志として、芳子を愛するという持続する強い意志を持てるかどうかである。しかも同時に、知恵に対するそういう意志をも持ちながらである。結婚という社会制度には頼れない。一夫一婦制しか認めていない日本の制度では、それを頼ることは許されない。すべては啓作の意志が永劫に保たれるかどうかに掛かっているのだ。自分は知恵と

芳子の二人を必ず愛し、幸せに出来るという信念を持てるのか、これこそが最大の課題であり障害であった。

もう一度改めて芳子を見た。自分を暴漢に襲わせた女。無垢であるが故に危険きわまりない女。そんな女を自分はずっと傍に置いておけるのか。信用できるのか。愛せるのか。必死に自分に問いかけてみた。

感情を失っていたかのように見えた芳子が顔を動かし、自分を見つめている啓作の顔を見た。目に生気はない。何かに憑かれたかのような、そこにあるのは無意識しか見えないような目だった。

―そうだ、知恵もこんな目を見せていた。知恵は鏡だった。自分をすべて映す鏡だった。芳子も同じなのだ。自分が敵意を持てば敵意を返す。おそらく愛を持てば愛を返すのだ……。試してみろ、啓作。それしかないぞ。自分が彼女を愛せるかどうかを……

啓作は意を決した。危険な賭だと防衛本能は告げていた。もし芳子がまだ自分に強い敵意を持っているなら、自分をしとめる絶好のチャンスになるはずだからである。が、それでも啓作は賭をすることにした。

両手を伸ばし、芳子の顔を押さえ、自分の方へ引いた。そして芳子の口に自分の口を押しつけ、その口の中に舌を差し入れた。歯茎に舌を這わせ、マッサージをした。最初芳子は、啓作にされるがままの状態だった。が、芳子の顔を押さえていた啓作の手に熱いものがかかった。芳子は目から涙を溢れさせていた。口の奥から嗚咽も聞こえた。次の瞬間、芳子の両手が啓作の背中に回され、身体全部を預けるように啓作に抱きついてきた。

啓作は芳子の心が自分の見込んだ通りのものであると確信した。

「……憎らしいのに……、……憎らしいのに……何で……、何であんたなんかに……」

口を離した途端に、芳子が嗚咽するように言葉をはき出した。

「俺じゃ嫌か、芳子」

「えっ、あ、あんた何言ってんのよ」

「俺はお前を愛することに決めた。それじゃまずいのか？」
「ま、まずいって、あんたには知恵がいるじゃないの」
「お前も俺の奴隷にする。知恵と同時にな。何か問題があるか」
「あ……」
惚けた表情のまま芳子は啓作の体を離し、啓作を凝視した。
「あたしを、……知恵と一緒の奴隷にする？」
「そうだ」
「あはははは、はははは。あんたねぇ、自分で何を言ってるか分かってるの？　そんなこと出来るわけ無いじゃないの」
「何故できない」
「何故って……」
「じゃ、質問を変えよう。お前は何が望みだ。俺じゃないのか？」
俺の見るところ、お前は知恵と俺と同時に愛してるようだ。お前にそれができるなら、俺だってお前と知恵ぐらい同時に愛せる。知恵だって赤坂でお前に会ったときから、俺とお前と三人で一緒に暮らしたいと言ってたんだからな。だから、俺は俺の意志としてお前を愛してみようと思った。お前を俺の奴隷にしようと思った。それがどこかおかしいか？」
「三人で一緒に暮らす？」
「ああ」
「そんなことって、そんな淫らなことって……」
「淫らか。不倫よりも倫理的なような気はするがな。まあいい。どうしてもそうしろとは言わない。お前が望むなら俺はそうする用意がある。俺にはお前は知恵とそっくりな女に見える。つまり俺に支配されたがってるマゾ女だ。でなければこんな手の込んだ闇討ちまがいのことまでして、俺に関わりを持とうなんていう物好きはしないさ。お前は俺に構ってもらいたいのさ。こんなふうにな」
芳子の右手首を啓作は右手で掴んで右に引き、自分の体の上に芳子の上体を乗せたところで、芳子のジャージの上着にベルトのところから左手を差し込み、芳子の乳房へと手を這わせた。

「……はああっ……」

芳子はいきなりのことで声を失った。

「ほらな、お前の体は抵抗しない。むしろ喜んでいる。違うか？」

そう言いながら、啓作の左手は今度はジャージのパンツの方へ下がり、半分それを下げながら、そのままパンティの中まで入っていった。いきなり股間の中心に啓作の指の感触を芳子は感じることになった。

「ううううう」

「ほらやっぱり。何でお前、体を濡らしてるんだ。いや、俺を見て体が濡れたから、俺に対する怒りが湧いたんだろう。お前の気持ちを読み取るぐらいのことならわけない」

芳子は混乱していた。反論したい気持ちはあった。だが何をどう言えばいいのか全くわからなかった。

そんな芳子の無反応をいいことに啓作はどんどん自分で話を進めた。

「お前はいくら何をどう言っても俺の奴隷になりたかったんだよ。知恵のようにな。だが、赤坂では自分にそういうアプローチが俺からは向けられなかった。そのことで俺に対する憎しみが生まれたという訳だ。……悪かったな。あの時は俺もまさかお前がそういう女だとは気がつかなかったから。だが、今日のことではっきり分かった。お前がどういう女か。それならお前にはお前に一番向いた生活を用意してやる。そしてそれが用意できるのは俺しかいないということを徹底的に分からせてやる」

芳子の股間のまさぐりを中止すると、芳子の体を軽く投げ返すように助手席に戻し、啓作はクルマのエンジンをスタートさせた。

再会

知恵は、その後啓作と同棲を始めていた。当初、親元から勤め先に通っていたが、啓作に命じられるままに啓作が手配したアパートに移り住んでいたのである。ただ手配したのは啓作だが借家人の名義は知恵の名前になっていた。啓作が父親の会社経由で手配したその物件は、もちろん一人暮らし用のものではなく、小さい子どもがいても育てられるほどの広さと設備を備えていた。広さの面では申し分無かったが、むしろ知恵は実家の自分の部屋にあった荷物ぐらいしか持っていなかったので、急遽買い揃えた冷蔵庫、洗濯機、ダブルのベッド、テレビ、ダイニングテーブルセット以外、家具らしい家具のない殺風景な部屋になっていた。が、何にしても、そこでの暮らしは知恵にとって新鮮だった。親には勤務先近くにワンルームのアパートを借りたとだけ言っていた。従って、誰も見に来たりはしなかった。

いつものように知恵がその自分のアパートに戻ると、玄関に見慣れない女物の白いスリッポンがあった。自分のものではもちろんない。が、合い鍵を持つ人物は大家以外には啓作しかいない。だが、啓作の靴はどこにもなかった。

知恵は不審を感じつつ、物音を立てないように静かに靴を脱ぎ部屋に上がった。

いつも履くスリッパを履かずに、靴下のまま足音を立てないように動いた。念のため玄関のすぐ脇にあるトイレ、バスの中から音が聞こえないことを耳をドアに当てて確かめてから、奥のダイニングキッチンへと進んだ。廊下からダイニングへ入るドアのノブを静かに回し、ほんの少しだけ隙間を開けた。そこから内部を見まわす。もう七時になる頃だが、真夏である。まだ外はかなり明るい。カーテンを閉めてはいたが、ダイニングの内部を見渡すには十分な明るさがカーテンの間から入る光によってもたらされていた。

ダイニングに変わった様子はなかった。それを確認した後、ダイニングへ入ろうとした。その時である。

リリリリン　リリリリリン
と入ろうとしたドアのすぐ横で電話が鳴り始めた。
リリリリン　リリリリリン
もし、奥の寝室に誰かがいるなら出てくるかもしれない。
そう考えてドアから手を離し、廊下のドア陰に身を隠した。
リリリリン　リリリリリン
しかし、奥の寝室からは誰かが動くような気配は全くなかった。
たぶん十回目ぐらいの呼び出し音が鳴った後、知恵はダイニングに入り受話器を取った。
「はい、早川です」
「知恵か、俺だ」
「ごしゅじんさま」
「芳子を見たか？」
「え、よしこって？　知恵はたった今戻ったところで、玄関に誰かの靴があるのは見ましたけど……」
「そうか、じゃ、ちょうど良かったな。いいか知恵、これから俺が言うことをよく聞け」
「はい」
「詳しい経緯はそのうちゆっくり聞かせてやるが、結論だけ言う。伊藤芳子を今日から俺の奴隷にすることにした。もっともまだ本人はお前のように宣誓したわけではないがな。だが、芳子は俺の見るところお前と同じ資質を持ってる。しかもどういうわけか、お前が好きなのと同じくらい俺にも惚れてる。だから、お前と芳子は今日から一緒にそこで暮らせ。そして、お前が芳子を俺の奴隷としてふさわしい女に調教するんだ。それで、お前がもう大丈夫だと判断できたら俺に連絡しろ。俺がそこに行って、芳子の宣誓を受けてやるから……。分かったか？」
「あ、はい。それでは芳子は今？」
「ああ、奥の寝室に居る。まあ見れば芳子が今どういう状況か、お前にはすぐわかるだろう。他に何か質問はあるか？」

「あの、それではごしゅじんさまには、当分、こちらには来ていただけないのですか？」

「ああ、何しろかなり変則的な関係をこれから作ることになるんだ。三人ともそれだけの準備がいる。俺と芳子の間にも、芳子とお前の間にも。だから、お前が芳子を調教している間は俺はそこには顔を出さないことにする。それから、芳子は、こっちでは今のところ家も身よりもいない状態だ。詳しい話は芳子から聞け。それで芳子は今度から親父の会社の事務員をやらせることにしてるから、一応そのつもりでいてくれ」

「かしこまりました」

「それじゃあ、頼んだぞ……。あ、知恵」

「何でしょう、ごしゅじんさま？」

「良かったな、お前の望みがかなって」

「え、あ、はい」

「芳子をちゃんと可愛がるんだぞ。これからは彼女は俺の奴隷でもあるんだから……」

「はい、あの、ありがとうございます。ごしゅじんさま」

「ああ、礼なら俺じゃあない、芳子に言うべきだな。それじゃあな」

その一言を残してすぐに啓作の電話は切れた。

短い会話だったが、その中身はいろいろな意味で普通ではなかった。知恵はともかく受話器を置き、ダイニングを横切って寝室に向かった。寝室のドアを開けるとベッドの上の毛布が大きく盛り上がっているのが見えた。

「芳子なの？」

知恵が声をかけた。だが、返事は無かった。

しかし、知恵が部屋の電気とエアコンのスイッチを入れると盛り上がった毛布がもぞもぞと動いた。声はないが、そこに誰かがいるのである。

知恵は毛布の端を掴むとそれを引いた。

毛布が滑った後、知恵は信じがたい姿の芳子を見ることになった。

知恵は声を失い、その場所にへたり込んでしまった。

「芳子……」

しばらく床の上に座り込んだまま、ベッドの上の芳子を呆然と見ていた。すでにマゾに調教されている知恵でさえも、その姿には戦慄を感じたのである。だが、視覚の上では大きなショックをもたらしたその姿も、やや時間が経ち、冷静にそれを眺められるようになって見直すと少なくとも物理的にはそう過酷なものでないと判断できた。それでようやく落ち着きを取り戻すと知恵は立ち上がった。芳子の枕に押しつけられた頭に手を伸ばした。

「芳子、あなたもごしゅじんさまの奴隷になるんですってね。よかったわ。また一緒に暮らせるのね。あなたと」

知恵はそう言いながら芳子の頭を撫でた。芳子からの返事はない。その口にはさるぐつわが嵌められていた。目は知恵を見ている。が、そこに反抗の色はすでに無かった。知恵にはその目を見ただけで芳子がどういう状態なのかすぐに分かった。あの牧場での調教を思い出した。啓作に自分の身体が何によって喜びを感じるのか徹底的に教えられた後の自分である。縛られ、痛みを与えられ、辱められるごとに、異様な興奮に踊らされるマゾの自分である。芳子の目はそのマゾの目であった。だから、芳子に施されている縛めをはずさなかったのである。芳子は、今全身でそれを味わっていると判断したのだ。あの時の自分が縛られていることに満足していたのと同じように。

知恵の言葉を聞いても、芳子は静かに目を開けて知恵を見ただけだった。知恵の手が自分の頭を撫でるのを気持ちがいいと感じているかのように時折目を細めた。

芳子はうさぎ跳びをやる姿勢のまま縛られ、そのまま前のめりのうつぶせに寝かされていたのである。しかも、大きく突き出された尻たぼには、黒のマジックペンで、大きく『めす奴隷　芳子』と大書されていた。両ひざの裏側に一本の棒が左右に渡され、その棒に

結わかれることで足は開脚に固定されていた。従って、毛布を引いたとき、最初に知恵の目に飛び込んだのはマジックで書かれた文字とそのすぐ下にある、芳子の秘部だった。これが知恵をへたりこませたのである。芳子の両腕は背中で固定されていた。そこから伸びた縄が、両膝を抱きかかえるような形で膝頭が身体から離れないように固定してあった。このため、このうさぎ跳び姿勢は壊れないのである。

知恵は芳子の頭のすぐ横のところに腰掛け、芳子の頭を撫でながら、話を続けた。

「芳子も、もう自分の身体の正体に気がついたみたいね。よかった。芳子が私と同じマゾで。そうでなかったらまた一緒になんかなれなかったもんね。でもまさか二人で同じごしゅじんさまに仕えることになるなんて思わなかった……。ねえ、あなたもごしゅじんさまのこと好きなんだって。さっき、彼から電話で聞いたわ。いったい何があったの？　まあ、いいわ。そういうことなら願ってもないことだし……。でさあ、私、芳子のことをちゃんとした奴隷にしなさいって、ごしゅじんさまに命令されたの。ちゃんと自分が奴隷になりますって宣誓できるように。でも私マゾだから、他の人を調教したことなんて全然無いのよ。芳子何して欲しいって訊いてもダメよね。私だってそんなこと分からなかったしね。

困ったわ……。これからいったい何をどうしたらいいのか全然わからないわ……。

でも何にしても、私今帰ったばっかりなの。汚れた身体じゃ何もできないわね。芳子、悪いけどもう少しそのまま待ってて。私シャワー浴びてくるから……」

そう言い終わると知恵はベッドから立ち上がり、寝室を出てバスルームへ向かった。

知恵は昂ぶっていた。最後に芳子と二人だけで過ごしてから、いつの間にか半年以上の時間が過ぎていた。上京して、芳子のアパートに行った。二人でまだ新しく新鮮さが残っていた東京ディズニー

ランドにも行った。もちろん一緒に寝て体も重ねた。だが、それは普通の重ね方だった。まさか自分も、そして芳子も、いたぶられ、苛められ、痛みを加えられ、辱めを受けることで快感を得られる女などだとは夢にも思っていなかった。

二人は啓作に知り合ったことで、二人とも知らなかった自分たちのことを知ることになった。それをこれから確認するのだと考えると、それだけで頭が痺れた。が、サド役にまわったことのない知恵には一向に何をすればいいのか、それが思いつかない。とにかく、啓作が自分に対して行ったことをすればいいのだと考えた。だが、縛られたことはあっても、縛り方は知らないのである。同様に、何をしようとしても、何かしら知らないこと、分からないことが出てくるのだ。自分ですらこうなのだから、芳子に訊いてもなおさら無駄である。

そんなことを考えながらシャワーを浴び、結局は何の計画もまとまらないまま、頭からバスタオルをかけただけの姿で再び寝室に戻った。

芳子は何も変わっていない。先ほどと全く同じ姿勢のままだ。知恵でなくても、誰であっても自由に嬲ることのできるスタイルで固定されている。啓作がこの姿勢を作ったのは間違いないにしても、彼はそれ以上のことをしたのだろうか？　そんな疑問が知恵の脳裏に浮かんだ。

芳子の開かれた股間へ顔を近づけ、芳子を観察した。濡れてはいなかった。濡れた形跡も無いようである。縛りあげて固定したところで、毛布をかけてさっさと立ち去った……、そんな状況が目に浮かんだ。自分が縛られた時のことを思い出した。あの納屋で初めて啓作に縛られたとき、いやだ、やめてと口では言っていたのに、身体はそれが心地よいと伝えていたことを思い出した。ただ、それは性欲とは無縁なもので、それで性器を濡らすようなものではなかった。少なくともあの時点では。性器が濡れるようになったのはその後に受けた様々な調教のせいである。

―　芳子は緊縛の味を知っただけなのね。調教は受けていないんだ……。そうしたら、女の悦びとそれを結びつけること、つまり責めるのが私の役割なのね……

知恵には自分の役割が分かった気がした。

一度芳子の尻のところから離れ、知恵はベッドサイドに置いてある鏡台の前の椅子に腰掛け考えた。啓作の意図、芳子の状況、そういうものと自分ができることを並べて考え、これから芳子をどうしたらいいのかを決めようとしたのである。知恵は、今、栃木県の地域振興事業を担う行政からの依頼によるタウンガイドを作る雑誌社で編集の仕事をしていた。その仕事の癖で、事実を並べてから全体を決め、そして行動を決めるというやり方に慣れていた。啓作の所有物であり自分の大切なパートナーをどうしたら一番喜ばせながら、調教できるのか考えた。知恵から見れば芳子は自分よりずっと強い女性だと思っていた。知恵がいつも悩み結論をなかなか出せない人間だったのに対し、芳子は決めるのも行動するのも早かった。だからかつての二人の関係では、男性的な役回りは芳子にあったのである。自分はいつも芳子についていく存在だった。少なくともそのことは自分にとって、居心地が良く楽ではあった。が、芳子が実は自分と同様の性質を持っていたとするならば、あの芳子の姿は、自分自身に相当の無理をかけながら芳子が造った芳子だったということになる。そういえば、ベッドの中での芳子は普段とは全く逆に、まるで母親に甘える乳飲み子のように自分に甘えていた……。そうするとそうでない芳子というのは、自分が芳子に強いていた、辛い役割を自分が芳子に押しつけていたということなのかもしれない……。そんなことまでしていた理由は、芳子の中に自分への思いがあったからだ。

赤坂のホテルで啓作の前で泣きながら食い下がっていた芳子の姿が思い出された。

―　あんなに辛い思いをしてまで……。本当は甘えたかったんだ……。甘えられる相手は自分しかいなかったんだ……

そこまで芳子の気持ちをトレースし、これからの芳子に対する自分のやるべきことを考えた。

―　そうか、慰めて欲しいんじゃないんだ。慰めたら、彼女はまた演技の自分を取り繕うとするだろう。自分が崩れたら芳子はいつも自分を作ってきたのだ。すべて私のために……。優しい言葉や態度は芳子を落ち着かせるには役に立つ。だけど、その後、芳子はまた前と同じ自分を私に見せようとするだろう。それでは彼の意図通りにはならない。しかもそうなったら、せっかく訪れた芳子と一緒に暮らすチャンスを失いかねない……

知恵は、啓作が何故こんな拘束した形のままで芳子を置いていったのかを考えた。啓作が自分を初めて調教した時のことを思い出していた。その時、ほんの一瞬だが、知恵の脳裏に龍造寺浩一の姿が浮かんだ。がそれはすぐにどこかに押し流されていった。

―　自分の気づいていない自分の発見……。それがわかることで得られる安心……。芳子の心の底に眠っていることを外に出せるようにするにはどうしたらいいんだろう……。そうか、こどもに躾をするように接すればいいんだ。いっぱいいっぱい叱って、いっぱいいっぱい罰を与えて、思い切り泣かせてあげたら、無心なこどもに戻れるんだ……

知恵は決心した。今は芳子のために自分は女王さまになることを。そうすることが、芳子の気持ちを楽にすることだと思った。が、不安もある。それを自分がうまくできるかのか自信がないのである。なにしろ長い芳子とのつきあいの中で、自分が芳子をリードする立場になったことなど一度もないのである。だが、救いもある。啓作から様々な責めを、自分がすでに受けていたことだ。啓作が自分を責めている時のことを思い浮かべれば何とかなりそうな気はした。

やることが決まると次に段取りと準備を考えた。

啓作はこの知恵のアパートにそう多くはないが幾つかの小道具は持ち込んでいた。まさか自分を責めるためのものを自分が芳子に使うことになるとは思わなかったが、全く知らない道具よりも安心感

はあった。何しろそれらの道具は、自分の身で体験済みなのである。

―　道具はいい。あとは？

知恵は自分の服を考えた。啓作は最後の最後に身体を重ねる時まで、裸にはならない。主人というものは服を着ている姿が自然なのである。一方、奴隷である自分はいつも主人の前では裸あるいは許しを得て、許された服だけを着ていた。

―　そうか、真っ裸じゃダメなのね。でも何を着たらいいかしら……

セクシーで格好いい系の服でもあればいいのだが、あいにくそういう服を持っていない。が、おそらく芳子が自分を見る時に、服が与える影響は大きいだろうから、とにかく視覚に訴える格好を模索した。

芳子は自分に何もしないで、寝室の中を行ったり来たりしながら、ロッカーを開け、服を引っ張り出している知恵を不審に思いながら視界に時折いれていた。何か意図を持っているということは分かったが、それが何かは分からなかった。知恵は暫くすると再び寝室を出て行った。芳子は再び一人にされた。

―　何で知恵は私に構ってくれないんだろう……

そんな不満が芳子の頭に浮かび上がった。

寝室の電気が点けられたことでカーテンの外の明るさがどれくらいあるのかは分からなくなり、時計を視界に捉えられない芳子はどれぐらいの時間が流れているのかさっぱり分からなかった。身体に打たれている縄は確実に妖しい刺激を芳子に覚え込ませ、それに身を委ねることがすでに苦痛でなくなっているとはいえ、長時間同じ姿勢でいることは、それでもかなり辛かった。何でもいいから何か別のことをして欲しいと思っていた。

カツカツカツというフローリングの床の上を靴で歩いているような足音が隣のリビングから聞こえてきた。そしてドアが開けられ知恵が戻った気配がした。芳子からはドアは見えないので音だけが頼りだ。

今度はまっすぐ自分の顔のところに知恵は来た。

「すっかりお待たせしてゴメンなさい、芳子。私ね、今日からあなたを調教する女王さまになることにしたの。それでね、今頑張ってどうしたら女王さまらしく見れるか考えたのがこの格好なの。ごめんなさいね。あり合わせのものだから、何か変でしょうけど。これでも一生懸命考えたんだからガマンしてね。そのうちちゃんとした服をごしゅじんさまに選んでもらうから、笑わないでね」

その声で芳子は改めて知恵を見た。確かに奇妙な格好である。少なくとも部屋の中にいる格好としては。

黒いブーツと黒革のハーフコート。そしてコートの中は、オレンジが基調で花柄のあしらわれたワンピース型の水着。ちぐはぐではあるが、その非日常性と先ほどの女王さまという言葉のイメージはよく合っていた。また、知恵の顔は、今まで芳子が見たことがなかったほど、まるで水商売の女のように厚く塗りたくった化粧をしていた。

そんな姿の知恵の右手には、乗馬鞭が握られている。芳子は身体の奥底から今までの知恵との逢瀬では感じたことのない妖しい気持ちが湧き上がるのを抑えることができなかった。

「さあ、芳子。そろそろレッスンを始めるわよ。まずは言葉使いからね。あら、そう言えば猿ぐつわじゃ、レッスンなんかできないわ。はずさなきゃ。ちょっと待って」

乗馬鞭をベッドの上に置き、芳子の頭に両手をかけて厳しく縛られているさるぐつわを緩めた。口から固く結ばれた結び目を取り除くと、さらにその奥からべとべとになった白い布の固まりを芳子が吐き出した。それは芳子のパンティだった。

「まあ、あなたのパンティはこんなところにしまわれてたの。でもこれじゃあ、もう使えないわね。捨ててしまいましょう。ね、どう今の気分は？」

「知恵、お願いだから、この縄を解いて。もう恥ずかしくてたまらないの」

「まあ、芳子ったらまだ何も始めてないのにいきなり泣き言なの。ダメよ。そんなんじゃ。それにその言葉遣いもダメ。いい、私のことは知恵なんて呼び捨てにしたらダメよ。知恵さまか女王さまって呼びなさい。それともちろん敬語を使うのよ、私にもごしゅじんさまにも」

「……」

芳子は黙ってしまった。

知恵は再びベッドの上の乗馬鞭を手に取ると、上向きに向けられている芳子の尻にそれを振り下ろした。

「アアアアゥ」

「それが奴隷の態度なの？　私が女王さまじゃ、不満があるわけ？　私が女王さまって認められないわけ？」

そう言いながら、知恵はさらに鞭を三回芳子の尻に向けて振り下ろした。

芳子は知恵の突然の豹変に当惑していた。彼女がサドになることなと考えられなかったのである。が、怒りの言葉を吐き、自分をムチ打つ人間は間違いなく知恵なのだ。

「……ごめんなさい。そんなつもりじゃありません。どうかお許し下さい」

芳子は痛さのあまり、思わずその言葉を口に出した。

「じゃ、ちゃんと言ってごらんなさい。知恵さまって」

知恵は股を大きく開き、腰に両手を当てて見下ろすような態度で言った。芳子には知恵のその威圧する姿は、彼女の知るどの知恵とも違っていると感じた。こうなると躊躇は無かった。

「かしこまりました、知恵さま」

「まあ、やっと素直になってくれたじゃない。そうよ、それでいいのよ。だけど、ちょっと遅すぎたわね。これからムチとろうそくの味をたっぷりと教えてあげるから覚悟しなさい……」

芳子は知恵の言葉に戦慄した。先ほどのムチの痛みはそれほどの痛みであった。とてもしゃれや冗談の範疇の痛みではない。それを

まだ続けると平然と言っているのだ。しかもさらにろうそくで何かするらしい。

「知恵さま、知恵さま。何でもしますから、もう鞭はやめてください。お願いします」

半ば、怒鳴るように縛られた身体を震わせて芳子は叫んだ。

その哀れな芳子の声によって、知恵の中で芳子の姿と自分の姿が重ね合わされた。自分が哀願の言葉を言うとき、それが言葉通りの意味でないことは誰よりも知っているのである。哀れな芳子の姿を見ることで自分の中のマゾとしての昂ぶりがどんどん煽られる。さきほどまでは芳子に対する仕打ちに躊躇いを感じる自分が心のどこかに居たのだが、その存在は今の言葉で消え去ってしまったようだ。何も悩まなくてもすぐその返答が自分の口からさらっと出た。一人芝居のＳＭプレイのような感覚で知恵は女王さま役のセリフをすんなりと言葉にすることができた。

「まあ、奴隷が何贅沢なこと言ってるんでしょう。だめねぇ、躾がなってないって、これじゃあ私が怒られちゃうわ。あのねぇ、奴隷は鞭打ちを喜ばなきゃいけないものなのよ。そんなわがままを言う奴隷にはもっと罰を与えなきゃね」

だが、それですぐに鞭を打ち始めるのではなく、知恵は再び芳子の顔のところに近づいた。

「それにしても口は災いの元ね。やっぱりあなたを自由にしゃべらせたらいけなかったみたい。やっぱりごしゅじんさまのやることは間違いないものね」

そんなことを言いながら、芳子の口に再びべとべとに丸まっていたパンティを突っ込み、さきほどと同じように猿ぐつわをきつく巻いてしまった。鞭への怯えが芳子からすべての抵抗を奪い、芳子は黙って知恵のするがままにされていた。

「さあ、いくわよ。最初は鞭でお尻を真っ赤にするの。それができたら、ろうそくのろうをたっぷりその上にかけて上げるわ。で、それが終わったら、また鞭でそのろうそくを全部落とすの。これ私

が大好きなプレイなのよ。きっとあなたも気に入るわ」

少なくとも被虐の喜びを知り、自分の反応を見て興奮を深めている啓作をよく知っている知恵には、啓作ならこう言うだろうという台詞の推定は容易であった。しかも芳子がマゾであることはすでに今の表情を見れば一目瞭然なのである。もはやなんの躊躇いも知恵にはなかった。芳子の尻は、知恵によって徹底的に弄ばれた。猿ぐつわのおかげで大きな悲鳴こそ聞けなかったが、そこから漏れるうめき声だけでも知恵には十分だった。自分が責められている気分になれた。夢中になって鞭を振るい続けると芳子の尻は真っ赤になり、黒いマジックで書かれた文字は赤地に浮かび上がった。それをしばらくの間、うっとりしながら見て楽しむと、今度はろうそくを手に取り、ライターで火をつけた。その着火音に気がついた芳子はまた身体を震わせている。未知の責めに怯えているのである。芳子の身体に巻き付いている縄は、ベッドの四隅でしっかり固定されている。芳子が何をどうしようとも位置も姿勢も変えられないのだ。芳子は自由にできる首だけを動かし、抵抗の姿勢だけを示した。が、それは知恵には早くしてというサインのようにしか見えなかった。

「まあ、そんなに喜んじゃって。待っててね。赤いおまんじゅうに白い砂糖シロップのトッピングっていう感じのおいしそうなお尻にしてあげるから。……ほうら、こうするとケーキみたい……」

白いろうが赤い尻を覆い始めた。芳子が感じているのは激痛だった。熱いという感覚よりも鞭打ちでの痛みが何倍にも強化された感じの痛みがじわじわと広げられていく。鼻呼吸だけでは苦しくなるほど呼吸が乱れきっていた。

黒で書かれた『めす奴隷　芳子』の文字がすべて読めなくなるほどろうで覆われると、知恵の手にあるろうそくは、知恵が指で支えている僅かな部分だけの小さな固まりになっていた。

それを吹き消すと、逆さまにして芳子の尻の上に立てた。燃えさしと溶けたろうが、残ったろうそくと芳子の尻を接着した。芳子は背中をのけぞらした。

「ウフフフ。だいぶ気に入ったみたいね。だけどもうろうそくは終わりよ。次はまた鞭なんだけど、その前によく頑張ったから少しご褒美上げるわね……」

知恵はベッドの上に乗り、芳子の尻に向き合った。両手で尻を押さえて芳子の尻に顔を近づけ、ろうがかからなかった下側の部分にキスの雨を降らせ始めた。

痛みと熱さで疼きまくる尻に、突然与えられたキスの雨は、芳子にとって文字通りの干天の慈雨であった。すさまじい快感が芳子を襲った。首を大きく持ち上げ、背中を反らせる芳子の姿を見た知恵は、さらに手で尻を撫で回し、キスの雨を股間の中心に近づけていった。芳子の身体の震えは大きくなり、前の方からはくぐもった芳子の声も時折聞こえるようになった。

「ここはあんまりさわったことなかったわね～。そういえば」

そんな知恵の言葉を芳子が聞いたとき、予想外のところに知恵の指を感じた。アナルである。これも芳子には未知の感覚であった。嫌悪感が高まる一方で、知恵の指がアナルの中で盛んに動く度に、未知の感覚の波がさざ波のように芳子を揺さぶりだした。

「まあ、芳子ったら、隅に置けないわ。ちゃんと感じてるじゃない。ここが濡れてきてるわよ」

芳子はその知恵の言葉で、自分が守ってきた心の防壁のようなものを一瞬にして破壊されたのを感じた。抱いて欲しいという想いが急激に高まり、自分の身体がどんどん濡れ始めるのを止めることはできなくなった。

が、芳子のその変化は知恵には分からない。芳子の期待をまた裏切るかのように、知恵は未練を残さずすっと立ち上がりベッドを下りた。そして鞭を手に取ると、甘い接触を期待していた芳子の尻に向かって再び鞭を振り下ろした。

第一撃は尻の上に立てた燃え残りのろうそくを見事に吹き飛ばした。が、それは芳子への予告のようなものであり、第二撃以降、芳子の尻を覆ったろうをきれいに打ちはがしていった。

芳子の意識は混乱し始めていた。強烈な痛みを拒否する自分とそれを受け入れている自分の葛藤が始まっていた。尻に加えられていた愛撫はある意味鞭をより効果的なものにしたのである。痛みとともに甘い感覚も同時に感じ取っていた。こんなことが……と、頭の半分が否定しようとするが、残りの半分は、解放された何かが踊っていた。悲しさではない何かが、芳子に涙を流させ始めていた。

が、芳子の顔を見ていない知恵にその変化はわからない。しかし、知恵は芳子の身に起こった別の変化には気がついた。鞭打ちを止めた。

「あら、芳子ったら、何よこれ。シーツをビショビショにして…。でもおしっこってわけじゃなさそうね。これも愛液なのかしら。でもすごいわね。こんなに沢山出るなんで。初めて見たわ。よほど鞭打ちが気持ちよかったのね。なんか羨ましくなっちゃう」

知恵は鞭をベッドの上に置くと、緑色のブリキ板で作られた工具箱をロッカーから出して持ってきた。本来はそれは工具箱であったが、それは啓作の道具箱であった。あの「黒猫」のような店に行っては、買い揃えたものが入れられていた。

知恵は中から、男根の形をした赤いゴムでできたバイブレーターを取り出した。それにコンドームを被せ、それを持って再び芳子の尻と対峙する位置になるようにベッドの隅に腰掛けた。

「こんなに濡らしたってことは、こんなのが欲しいんでしょうね。昔だったら、中にモノなんか入れなくても、外側を手で撫でるだけで満足できてたんだけど、もうお互いそういう年頃じゃないわよね。ほうら、こんな刺激知ったら、もう止められないわよね」

知恵はスイッチを入れた。シャキンシャキンと独特な音に芳子はまた身体を震わせている。

知恵はそれを芳子の尻に近づけ、円を描くように表面を這わせ始めた。鞭とろうそくで散々になっている尻にその振動は大きく響いた。芳子の頭の中で異様な興奮が広がっていった。背中で縛られている手のひらを閉じたり開いたりし始めた。

が、自分がそれを使われたことのある知恵は、その気持ちがどういうものかを知り尽くしている。芳子の期待をあざ笑うかのように、バイブレーターは円周を辿るように動かされるばかりで、一向に円の中心に向かわない。焦らされることによるいたぶりが極限まで来ると、今度は芳子の足の指が反り返り始めた。芳子の身体が芳子の心に反乱を起こし始めていた。もう芳子の頭の中では自分の身体の状況を掴むことが難しくなっていた。

足の指を反らせて硬直するような動きを何度か見せるようになって、知恵はようやくそのしつこい焦らしを中断した。

「芳子ったら、はしたないわね。こんなに濡らしてもう早くって身体が言ってるわ。でもね、こういうことは絶対に急いじゃいけないものなのよ……」

知恵はバイブのスイッチをオフにすると、それを横に置き、道具箱から金属製のクリップを二つ取り出した。それは事務用の紙を抑えるもので、十枚ぐらいの紙なら束ねられる大きさがあった。洗濯ばさみのようにものをはさむことが出来たが、そのはさむ力は洗濯ばさみの比では無かった。

知恵はそれを芳子の左右のラビアに一つずつ付けた。

突然襲った激痛に芳子はうめき声をもらした。今の芳子には知恵がどういう人間か全く分からなくなっていた。次から次へと自分を追い込むことに、そして痛みを加え辱めを加えることに夢中になっている知恵が恐ろしいと思った。だが、一方で未知の刺激におののきながらもそれを喜んでいる自分の身体も、知恵同様に恐ろしいと思っていた。今、肉は激しい痛みにおののきつつ、喜んでいた。まるでそれを待っていたかのように肉が踊っていた。心の奥底に満足している心があった。次の瞬間、痛みの中心部に違う刺激が来た。何かが、何か太いものが自分の身体に侵入してきたのだ。それはまるでほとんど動きを感じられないぐらいの、じわじわとした動きで自分の中に入ってきた。

「結構きついのねぇ。芳子は。でも痛みは無いでしょう？　これ

だけ濡れてるんだもんね。ほうら、今半分入ったわよ。もうあと半分あるから頑張って呑み込んでね」

という知恵の言葉が響いてきた。痛みばかりの感覚の中に違う感覚が混じりだした。身体の内部からの圧迫が、内側からの快感を引き出し始めていた。もう限界と感じるところまで来たが、その異物の動きは止まらず、なおも侵入を続けている。芳子には恐怖心も沸き起こった。

―そんな大きなもの入るはずない……

が、その不安をあざ笑うように、自分の中への侵入はまだ続いていた。

―もうやめて……

と絶望感が訪れた時に、ようやく知恵の声が聞こえた。

「ふう、慎重にやったら、結構時間がかかるものね。ようやく全部呑み込んでくれたわ。どう？　お腹いっぱいの感想は。でもこれからなのよ。あなたが本当に狂っちゃうのは。まずは、これが抜けないように完全に固定しなくちゃね」

次の瞬間、あの激痛がひどくなった。二つのクリップが引っ張られる感触があった。そして身体に突き刺さったものがさらに奥に進もうとする力が加わった。

知恵はラビアの二つのクリップの間に太い輪ゴムをかけ、それで芳子に突き刺さったバイブを固定してしまったのである。押し出そうとすればクリップは芳子に激痛をもたらすし、そのままでは、バイブを内側に押し込もうとする力になる。

「まあ、自分でやっておいてこんなこと言うのもなんだけど、やっぱりこれって相当すごいわね。やだわ。私もいつもごしゅじんさまにこんなふうに見られてたかと思うと恥ずかしくなっちゃう。なんか私が責められてるみたい……。でも早く芳子を一人前の奴隷にしないと、私ごしゅじんさまに責めてもらえないのよね。だから、早く奴隷になってね。お願いだから。それじゃあ、本格的にバイブの味をまず覚えてもらってと……。よいしょ」

シャキンシャキンという音が再び鳴り、深く突き刺さったバイブが激しく芳子の体内で踊り始めた。芳子の筋肉は全身で硬直した。

知恵はそれを確かめると再び鞭を持って立ち上がり、尻に向けてそれを振り下ろした。

知恵の繰り出す責めは、啓作の模倣ではあったが、決定的なところで違っていた。自分がサドでない知恵はサドとしてマゾを見ることで得られる満足は薄いのである。自分のマゾとしての願望を芳子に重ね合わせているだけであり、自分自身ではマゾとしての満足を得られないままに、興奮への期待で続けられる責めは、本来ならば自分の体力的な限界によって終りがくるはずのものが、全く歯止めのないまま暴走していたのである。それはいつまでも終わらないものだった。

結局芳子がその縛めを全て解かれるのは、この日から三日先のことになるのであった。

犬

知恵のアパートに芳子が連れてこられて一週間が経った。芳子は知恵によって、そのマゾの素質を完全に開花させられていた。

知恵はもともとサドではない。だが、マゾの気持ちを察することはできた。それだけに知恵の考えた芳子への調教メニューは確かにサディスト的ではあったが、どこか本当のサディストの考えたものとはズレがあった。マゾの苦しむ姿を見ても本物のサドの喜びはもてないのである。自分が満足を感じられないところでのＳＭプレイ。結果的に、それは知恵をサド以上のサドにすることになった。知恵はあらゆる意味において純粋だった。自分が楽しむためではなく、相手を満足させることだけを考えて行動した。それは普通なら自分の楽しみの範疇からはずれるがために、躊躇させるようなプレイであっても、知恵の場合にはそもそも躊躇う理由がどこにもないことを意味したからである。知恵の発想は恐ろしく単純だった。マゾである自分がされたら嬉しいと思えることを芳子にすることだけだった。それは、何も知らない幼児の持つ残虐性と同じものであった。

芳子は食事も水もトイレも懇願して土下座をして哀願してやっと許してもらえたのである。しかも当然のように食事では食器などを使うことも許されず、調理されたものをあてがわれることも少なかった。ドッグフードをそのまま出されたこともある。知恵の食事の食べ残しを与えられたこともある。トイレも同様だった。人間のようにトイレで排便が許されることはなかった。犬用のトイレがそのために用意されていた。徹底して犬として扱われた。芳子は言葉を話すことを禁止された。犬の鳴き声だけで通すように言われた。最初の調教で、知恵の恐ろしさを思い切り覚え込まされた芳子はそのすべてにおとなしく従った。アパートに居候状態でいる芳子は、まさに知恵の愛玩犬そのものだった。外に出るのは散歩に連れ出される時だけ。その時だけ、コートを羽織り、サンダルを履くことを許された。コートが隠す中身は、その日の知恵のリクエストで変わった。全裸という時もあった。縛られた時もあった。白いエプロンだ

けというときもあった。赤いタオルをふんどしのように腰に巻かれただけという時もあった。そんな姿で近所の公園まで行って帰ってくるのである。

散歩は、行きも帰りも公園に居るときも、すべてが芳子にとって責めであった。人影が遠くに見えると、知恵は突然芳子のコートをひっぱったりする。あるいは後ろから押したりする。夜であろうと昼であろうと植え込みで小便をしろと突然命じたりする。少しでも躊躇したりすれば、すぐに例のクリップが身体のいたるところに付けられた。

が、芳子にとって、いつしかそういうすべてのことが恐怖ではなくなっていた。知恵に責められることを待っている自分がいた。時折、知恵に褒められると天にも昇る気持ちになる自分がいた。何であれ、知恵の言葉を聞くことは喜びであった。知恵が勤め先から戻るのをいまかいまかと待ちわびる自分がいた。知恵のために何かしてあげたいといつも身構えている自分がいた。完全に知恵の飼い犬に化した芳子がいた。いくら過酷に責められてもほんの少し知恵が慈しむ態度を見せると無性に嬉しくなってしまう芳子がいた。

そんなある日の午後、知恵の戻った音がアパートの下の階段から聞こえた。芳子にはその足音で知恵と分かるのである。が、異変に気がついた。知恵以外の足音が混じっていた。この状態のアパートを訪れる可能性のある人物は、知恵以外には一人しかいなかった。

「さあ、どうぞ、ごしゅじんさま」

ドアが開き、ドアの前で土下座をしている芳子の頭の上で知恵の声が聞こえた。

「わんわん」

「これは？」

啓作の声がした。

「芳子は知恵の愛玩犬なんです」

「そうか、よく躾けたものだ」

「芳子、良かったわね。ごしゅじんさまに褒めていただいたわ。あなたも嬉しいでしょう？」

「わん」

芳子は犬がやるようにちんちんの姿勢を取った。その全裸の姿を見て啓作は内心驚いていた。マゾの知恵が芳子をここまで見事にメス犬に調教するとは考えてもいなかったのである。

が、その驚きは心の中にしまい込み、何も見なかったかのように芳子の前を通り過ぎ、啓作はリビングに入っていった。

知恵はよくやったと褒めるようにそのちんちんの姿勢を取る芳子を一度抱きかかえた。

「よしよし、いい子ね。今日はお前をちゃんとごしゅじんさまに認めていただく日なんだから、頑張るのよ」

「わん」

二人もそのままリビングに向かった。ただ、リビングに入ると、犬のように控えている芳子の隣に知恵も同じような姿でしゃがみこんだ。

「あのう、ごしゅじんさま」

「何だ？」

「知恵も服を脱いでよろしいでしょうか？」

「だめだ。お前はまだ芳子の俺への引き渡しが終わっていない。それまでは芳子の主人としてふるまえ」

「ごしゅじんさま、ですが知恵の力で芳子に宣誓をさせるのは無理です」

「何故だ？」

「芳子と私はもともと恋人同士です。ですから、私が女王さまとして芳子と接しても芳子の中で私の存在は大きく成長しますけど、ごしゅじんさまへの思いは育てられません。もし芳子に自由に言葉をしゃべらせてしまったら、今度はおそらく私がおかしくなってしまいます。それでこのように芳子には言葉をしゃべらせず、ペットとして調教してまいりました。もうマゾとして芳子は十分に調教で

きたのですから、どうか私の女王さま役はもうご勘弁下さい。芳子にこのように見つめられるだけで私は辛いのです」

芳子はその知恵の言葉を驚きとともに聞いていた。自分に言葉をしゃべらせず、本物の犬のように扱うということにそのような理由があるなどとは考えたこともなかったからである。確かに芳子の心の中は知恵一色である。啓作への思慕の情は全然無いとは言わないが、非常に小さなものだった。もし知恵が命令すれば、それに従って宣誓することはできるかもしれない。だが、それは知恵への服従以外の意味はない。

啓作は二人の様子をじっと見た。

確かにマゾに調教するということでは、知恵は調教師としてうってつけだったが、やはり啓作に服従させるということになれば、本人がやらなければ意味がない。知恵の言い分はもっともだと芳子は思った。だが、啓作の返事は違った。

「それはただの理屈だ。お前はまだ自分たちのことがわかってない」

「えっ、どういうことでしょうか？」

「お前は、俺が命じた意味をちゃんと理解していない。お前は俺たち三人がこれからずっと家族として暮らしていくということをどう考えてるんだ」

「家族……ですか」

「お前と俺の間、芳子と俺の間、その二つの関係だけがすべてという訳じゃないんだぞ。お前と芳子の間に強い絆が無ければならないとどうして考えない？　いや、俺に言わせたら三人の生活がうまくいくかどうかを考えたら、お前と芳子の間にどれだけ強い絆があるかに掛かってる。今まではお前たち二人は愛し合ってたという関係だけで十分だった。だが、これからは違う。何しろ結婚という制度を頼れないんだからな。いろいろな変化が起こってもお互いの信頼が絶対に揺るがないような強い絆が必要なんだ。それなのに、お前は芳子の前で嘘の自分しか見せていなかった。これで、どうやっ

てこの先やっていくつもりだったんだ？　確かに俺は芳子を調教しろと言った。だが、それはお前に女王さまをやれと命じた意味ではない」

知恵は、そしても芳子も、啓作の決意に驚いていた。そこまでの意識は二人には全く無かったのである。恋人や愛人、妾そういう弱い関係に終わらせるつもりはないと啓作は本当に考えていたのである。本気で二人とも妻にするつもりなのである。それと同時に啓作という男が、知恵にとっても芳子にとっても未知の人の愛し方―好意や共感に頼らずに自分の意志で自分を縛り相手を愛する―をしていることを初めて知った。

「……それでは、どうしたらいいのでしょう？」

「それを俺に聞くのか？」

「……」

返事を返さない知恵に啓作はさらに続けた。

「知恵、お前さっき何て言った？　芳子の中でお前が成長するって言っただろう。それが怖いのならどうしてこの先三人で暮らせる？　何故芳子の思いをそのまま受け入れない？　何故躊躇う？　誰に遠慮してる？　俺は芳子を調教しろとは言った。だが愛してはいけないなんて一言も言った覚えはない。結局お前がしたのは、お前自身がお前にウソをついて、自分をごまかして勝手に女王さまになって、それで困っただけじゃないか。今更それを俺に何とかしてくれって、よく言えるな」

「申し訳ありません」

「そうじゃないだろう。お前は芳子に向かって何か言うべきなんだろう？」

知恵は、一度立ち上がるとフラフラと崩れるようにソファーに座った。啓作も芳子もその様子をただじっと見つめていた。

家族

啓作の言わんとしたことは分った。自分が浅はかにもやりすぎてしまった部分というものは分った。だが、事態をどう収拾すればいいのか。ため息とともに深呼吸をして、知恵は何とか自分を落ち着かせた。啓作は言ったのである。自分で始めたことは自分で収拾をつけろと。そうなのだ。とにかく芳子の中で大きく育った自分への想い、それを自分はもう受け止めるしかないのである。誰に遠慮することもなく、躊躇うこともなく……。芳子は自分にとっての家族なのだから。

伏せた顔をようやく上げ、知恵は芳子に命じた。

「芳子、こちらにいらっしゃい」

「わんわん」

知恵の足下にうずくまる芳子を見た啓作は、納得したようにダイニングセットの椅子に腰掛け、様子を伺うことにした。

「いい？　芳子。良く聞いてちょうだい。新しい命令を今から出すから。ペットの犬としてのあなたはこれでおしまい。今からあなたは私とごしゅじんさまのこどもになるの……。いい？　分った？」

芳子はその言葉にキョトンとした表情で応えた。

「御返事は？　ちゃんと人間の言葉でお答えなさい」

「わ…、あ、はい」

「それから私のことは……、ママ……って呼ばれたくはないわねぇ、いくら何でも。お母さんも勘弁して欲しいし。女王さまはもうこりごりだし。どうしようかしら、知恵さまもちょっとイメージじゃないわね。……そうだわ、知恵ねえさま、うん、これがいいわ。芳子、これからは私のことは知恵ねえさまってお呼び」

「はい、知恵ねえさま」

「そう、それでいいわ。私の言うことも、ごしゅじんさまの言うことにもちゃんと服従するのよ。いいわね。ちゃんとできたら、これからは私だけじゃなくて、ごしゅじんさまにも責めていただけるわ。うれしいでしょ？」

「はい、芳子はうれしいです、知恵ねえさま」

「じゃ、これから芳子はごしゅじんさまにちゃんとこどもとしてご挨拶なさい。いいわね。失礼のないように、これからちゃんとお仕えしますから、可愛がってくださいってちゃんとお願いするのよ。もしちゃんと出来なかったら、私の恥になるんだから。その時はどうなるか、分かってるでしょうけど」

「はい、おっしゃる通りに致します、知恵ねえさま」

知恵は立ち上がり、啓作の座る椅子の前に立った。

「ごしゅじんさま、これから芳子にご挨拶をさせたいと思います。お許し頂けますか？」

「よし、やらせてみろ」

「ごしゅじんさまのお許しが出たわ。さあ、芳子、こっちに来てご挨拶なさい」

芳子は犬だったときと同じように、床を裸で四つん這いになって移動し啓作の座る足下にうずくまり、それから改めて正座に座り直した。それから自分の前にきれいに両手をつくと、一度頭を深々と下げて、啓作を見上げながら言葉を出した。

「ごしゅじんさまに、ごあいさつさせて頂きます。

わたくし、知恵ねえさまにはいつも可愛がって頂いております伊藤芳子と申します。

私はごしゅじんさまが言われた通り、苛められて、辱められることが大好きなマゾの子でした。

私はここに置いて頂いて、ごしゅじんさまと知恵ねえさまにご奉仕させて頂きたいと願っております。ご命令には何でも従いますので、どうか私をお二人の家族、いえ、奴隷としてで結構ですから、一緒に加えてくださいませ。お願いします」

啓作はそれを聞くと椅子から立ち上がり、ベルトに手をかけるとズボンを脱ぎ始めた。

下半身が裸になった状態で芳子に向かって命じた。

「挨拶してみろ」

が、芳子はきょとんとしていた。啓作の言っている意味が分らないのである。

横で見ていた知恵が芳子の横にしゃがみ込んで、その意味を告げた。

「芳子、奴隷はね、ごしゅじんさまが挨拶って言ったら、ペニスにご奉仕して差し上げるものなのよ。私が教えてあげるから、さあごしゅじんさまのところにお行きなさい」

「はい、よろしくおねがいします。知恵ねえさま」

芳子は膝立ちで歩き啓作の前に近づいた。目の前に啓作のペニスがあった。無論芳子は処女ではなかったが、啓作のペニスを見るのは、あの赤坂のホテルの時以来である。啓作は今回も知恵の時と同様、安易に芳子を抱いたりはせずに縛って固定したまま、出て行ったからだ。当然、そのことは芳子には大きな不満を残した。あの状況で、あそこまで嬲られていて、身体を求められないことなどあるはずがない。縛られ辱められている時はそう信じていた。それは恐れでもあったが、期待でもあった。が、事実は啓作は何もしないまま、芳子をその恥ずかしい形に固定したまま、アパートを去ったのである。

その自分が期待していたものが目の前にあった。

かつて知恵を自分から奪い去ったものがあった。

かつて自分がまともに見ることができなかったものがそこにあった。

そして新たな屈辱心が芳子に湧いた。

自分が裸身をさらし、淫猥な行為に及ぼうとしているにも関わらず、啓作のペニスは何事も無かったかのように下を向いているのである。それは芳子がまるっきり無視されているに等しいものと感じられた。芳子の乏しい男性に関する知識でもそれぐらいのことは分っていた。怒りの炎が芳子の心の中に静かにともされた。

隣でその芳子の様子を見ていた知恵には、芳子の心の動きが驚くほどよく分った。僅かな表情の変化がその心の中のどんなことを意

味しているのか、これまでの芳子への調教で知り尽くしてしまっていた。知恵は机の上に置いていた乗馬鞭に手を伸ばし、それを構えた。知恵の発散するこの殺気のような緊張感はすぐに芳子に伝わった。怒りの炎は鎮められた。芳子は冷静に自分の立場に立ち返った。

啓作はそのことに気づいていたのか、気づかなかったのか、何の変化も示さなかった。両腕を組み、ただ芳子の行為を待っているだけだった。

―― これに服従することが私の幸せなのよ……

こう芳子は自分に言い聞かせた。知恵は手に持った鞭を脇に挟み直し、再びしゃがんで芳子に話しかけた。

「最初は右手でペニスを包むように、それから、下からタマタマを持上げるように左手で包みなさい……」

芳子は知恵の指示通りに手を動かした。どちらもタコのようにグニャグニャだった。こんなものが何で知恵を狂わせたのだろう、何で女を狂わせるのだろうと素朴な想いが頭を駆け抜けた。が、それはすぐに消えた。両手から伝わってくる啓作の熱さが、自分の頭を痺れさせていた。

「そしたら、右手をゆっくりと前後に動かしてピストンを始めて。左手はゆっくりと少し握っては離してを繰り返して。袋の中でタマタマが動き回るのが分かるぐらいの感じで……。いいわ、そうよ。それを続けて。……ほら、ご覧なさい。ペニスが大きくなってきたの分かる？　芳子のマッサージが良かった証拠よ」

その知恵の声は少し裏返っていた。芳子は知恵の顔を見た。啓作のペニスに釘付けの知恵は、表情全体が喜びで興奮しているのがすぐに分かった。興奮しためすの顔だと思った。

―― すごい……

知恵の変化は芳子にペニスというものの力を思い知らせた。が、次の知恵の言葉は、芳子の予想を遙かに超えたものだった。

「そろそろいいわ。ペニスを口に咥えなさい」

この時代、まだフェラチオという言葉も、そういう技術があると

いうこともまだ一般的なものではなかったのである。無論世間一般で全く行われていなかったわけではないが、すくなくとも結婚前の女性に、そういう知識が簡単に伝わる時代ではなかった。インターネットも携帯電話も無い時代なのだ。従って、この知恵の言葉は、芳子には当然の技術の伝授ではなく、一種の辱め、責めという意味合いで芳子に受け取られた。マゾの心が目覚めた。知恵の言葉だけで芳子は興奮した。

「まあ大きなお口を開けて。でもまだそんなに大きく開けなくていいの。最初はね、ソフトクリームを舐めるように上から下まで丹念に舌先で舐めるのよ。特に一番上のところは入念に……。もっとツバを出して、それじゃ気分が出ないでしょ。ほら左手も右手も休ませない。ちゃんと動かして。そう、それでいいの。ほうら、固くなって熱くなってきたでしょう？　気持ちいいでしょう、その感触が……」

芳子には知恵が自分を突き飛ばしても自分自身でそれをやりたいのを必死に抑えているのがよく分かった。知恵の心中を思った。自分の男を他の女に取られる。そんな想いが浮かんだ。だが、芳子自身ももうペニスに魅せられ始めていた。たとえ知恵への同情があったとしても、芳子の欲望がそれを上回りつつあった。相手が知恵であっても渡したくなくなっていた。

知恵の言った通り、熱さと固さを増したペニスは、実に気持ちがよかった。こんなものが身体の中に入ってきたら、身体が溶けるのも当たり前だと思った。知恵の命令が無かったとしても、しゃぶりつきたい衝動が自然と生まれていた。芳子は何も意識しないまま、自然にそれを口に含んだ。

「もっと深く飲み込むの。ほら奥まで。自分の喉の突き立てなさい、ほら」

興奮していたのは芳子だけではなかった。知恵の興奮は鞭を走らせることになった。尻に鞭が飛んできた。が、いまや芳子にとって鞭の痛みは快感になっていた。興奮がどんどん高められた。

芳子は自分の尻を鞭で痛打されながら、ペニスの醸し出す臭いと感触に我を忘れた。

鞭に促されるように咥え込む量は徐々に増え、首を上下させる動きが段々と大きくなり、ストロークが長くなった。

勢いでペニスの根本まで芳子の口が届く瞬間も現れた。もうペニスは咽頭にまで達しているはずである。普通なら異物拒否の生体反応が出て咳き込むはずだが、何故か芳子にはそれが無かった。実は息は途中で止まっていたのである。ただ夢中で海に飛び込んだような芳子だった。息苦しさに耐えられなくなり、ペニスから口を離し、はあーっと、深く息を吸い込むとまた先ほどと同じように深いストロークで首を動かす。

知恵ももう理性とは関係のない存在だった。ただ芳子と啓作の姿に興奮し、鞭を振っていた。

「ファファッファッファッファファッファ」

突然啓作が堰を切ったように例の独特な笑い声で笑い始めた。

三人は狂喜に酔いしれていた。

三者同衾

啓作と知恵が仕事に出かけると、まだ就職が決まっていない芳子はアパートで留守番という日が続いた。

ベッドが置いてあった寝室は、今は倉庫のようになった。

急遽啓作が布団を買ってきた。

リビングに二組の敷き布団をくっつけて敷き、そこに三人が寝た。

無論三人とも裸でお互いのぬくもりを求め合った。

三人も居れば、毎晩誰かが誰かにちょっかいを出す。

静かに寝られる日はまずなかった。

従って、芳子はこっそりとお昼寝をした。

しかし、啓作と知恵はそうはいかない。

芳子の目にも、知恵は消耗しているのが分かってきた。

それで芳子は、そういう行為が始まってしまうと、とにかく知恵の負担を減らすつもりで、普通以上に啓作にサービスをするのだが、そんな姿を見せることは結局は知恵をも燃え上がらすことになり、結果を見れば、それ以上の消耗を強いただけになった。

表面の変化は無かったが、やはり唯一の男である啓作の消耗はなんと言っても激しかった。朝、アパートを出ると太陽が真っ黄色に見えたことも何度もある。営業所に行く途中に知恵を下ろすとそのまま近くの薬局で栄養ドリンクを飲むのを日課にするようになった。

「伊集院、お前最近なんか疲れ気味なのか？」

営業所につき、展示している中古車を洗っていると赤城孝人が声をかけてきた。

「ああ、少しね」

「お前が疲れるなんて意外だな。何かあったのか？」

「いや、そういうことはない」

「それに何か、あれだな。まるで結婚したてみたいに感じる」

「え、そうか」

「ああ、急に落ち着いた感じがする。今までの独身の気楽さがすっかり消えてる感じがある。まさか結婚したんじゃないよな？」

「ああ、一応一人だ。が、結婚したのに近いな。実は同棲始めたんだ」

「そうか。道理で……。一応おめでとうと言っておこう。それなら」

「おめでとうか……」

「あれ、いずれ結婚するんだろう。その人と」

「いや、いろいろあってね。そうすんなりとはいけそうもないんだ」

「そうか。また難しそうなことやってるんだな」

「なあ、すまんけど。今のこと、しばらくは皆には黙っておいてくれないか」

「あ、ああ。そういうことならそうする。だけど内縁じゃ、扶養者手当とか健康保険とか厚生年金とかで、いろいろ損だからな。彼女にとっても得になる話なんだから、きれいにした方がいいぜ」

「ああ、分かってる。どうもありがとう」

実際のところ、啓作は一生サラリーマンをするつもりはない。いずれは父親の事業を継ぐつもりでいるから、サラリーマンの社会保障にそれほど執着は無かったが、それにしても結婚というものが持つ、社会的信用に関心を持たざるをえなかった。法律や社会的常識に歯向かうことの難しさを感じていた。こういうことに女達が関心を持たなければいいがと、そのことが不安の種になった。

その夜は、客先との商談が三件も入り、夕食は外で食べることにし、アパートに電話を入れた。芳子が出た。知恵はまだ帰っていないとのことだった。

いろいろ心配な点は多いものの、二人の妻というものは何かと都合のいい点も多かった。知恵は家事から解放されていたから、仕事の上では同僚の男達と互角の中身をこなしているらしい。そのおかげで、啓作並みに帰りが遅くなることも多いのである。

十一時を過ぎて啓作がようやくアパートに戻ると、知恵も帰ったばかりのところだった。ただ、知恵は夕食を食べていないというこ

とで芳子がそれをまさに出したところであった。そんなところに啓作が戻ったのである。

「お帰りなさいませ。ごしゅじんさま」

ドアを開けると二人の妻がほぼ同時に声を上げた。

「あ、ああただいま」

「お食事はお済みですよね。お風呂が沸いてますけど」

主婦業担当の芳子が聞いた。

「ああ、そうさせてもらう」

「ねえ、ごしゅじんさま。芳子も一緒に入っちゃいけませんか？お背中をお流ししますから……」

食卓に向かって食事を取りながらその言葉を聞いていた知恵の背中がビクッと揺れた。

「ああ、じゃあ頼む」

二人が風呂場に消えると、夕食を一人食べる知恵はどこか釈然としない想いに囚われた。が、それを外に出すことは許されないのだということも分かっていた。何事も無かったかのようにテレビをつけ、それを見ながら食事をした。風呂場から聞こえてくる物音に注意を払わないようにした。こういう時、僅かな時間だが浩一の顔が脳裏をよぎることがあった。だが、なぜ彼なのかは知恵にも分からなかった。それは些細なことであり、すぐに自分でもそれを忘れていた。

なんにせよ、芳子が主婦業をやってくれていることで知恵には数多くの恩恵がもたらされていた。一人で生活していた時よりも生活が楽になった。まるで親元に居た時と同じように家のことを心配しなくて済むのだから。そういうことから解き放たれてみると、いかにそういうものが自分の行動を制約していたのか気づかせてくれた。自分でもびっくりするぐらい仕事に集中するようになった。もともと仕事の上での才能に恵まれていた知恵は、他の男性社員―つまり、奥さんが居て家のことを何も心配しないで済んでいる男達―とほぼ互角の条件に立ったことで、会社の中で急速に頭角を現すことにな

ったのである。

「君、最近変わったね。こんなに君が仕事ができるとは正直思わなかった」

会社で上司に言われた言葉である。

知恵にとっては嬉しいという感情を持ちつつも、それを素直に喜べない自分もあった。本当にこれが良かったと言える確信がないのである。そして、芳子と啓作の距離が縮まる状況をつぶさに観察している今、その思いはいよいよ強くなっていった。嬉しそうな芳子の表情を見ても、自分はその感情を共有できなかった。

自分の生き方、マゾとしての幸せ、そういうものと今の生活は一致していたはずである。だが、芳子の存在が投げかけていることはそれ以上のものに感じられた。

とにかく食事を終わらせ、その食器を洗って片付けて、年寄りが解説をするだけのつまらない時事番組をやっていたテレビを消し、これから何をしようか考えた。

こういう時、芳子が羨ましくなった。芳子は自分の啓作に対する執着心が自然と言葉に表れるのである。ところが何故か、知恵にはそれができない。言おうとするもんもんとした想いなら確かに知恵にもあった。だが、それを言わせまいとする心も知恵の中にあったのである。それは芳子が来たことでわかっただけであり、芳子の存在とはどうやら無関係のものであるようだった。知恵がこの心の正体を知るのはかなり先のことでありこの時点ではようやくそういう心の存在に気がついただけであった。だから知恵が専業主婦の担当だったとしても、たぶん自分から啓作に背中を流しましょうとはおそらく言えていなかった。芳子のそういう態度を見る度に、自分の啓作への思いが芳子のそれよりも劣っているように感じ、そのことが知恵にある種の後ろめたさを味合わせるのである。

まだ二人はフロから出てこない。どうせ自分も入らなければならないのだ。何が中で起こっていてもそれを受け止める用意もある。結局は二人とも自分の家族なのである。知恵はそう考えて、二人が

入っているはずの風呂場に向かった。

「知恵です。ご一緒してもよろしいでしょうか？」

風呂場の外で知恵は中に向かって声をかけた。

啓作の声がすぐに返ってきた。

「ああ、いいよ。早く来い。ちょっと狭いけどな、三人は」

確かにこのアパートの風呂場は大人二人が限界の広さである。

それでも啓作がああ言うのであれば入るべきだと思った。

脱衣所で服を脱ぎ、フロへのアコーディオンドアを開けると目の前に現れた光景は、知恵の予想通りの状態だった。バスタブのへりに腰掛けた啓作が、芳子を膝の上に乗せてまさに繋がっていたのである。芳子は顔を天井に向けていた。正体が無くなっていることは明らかだった。

知恵の姿を見て、啓作は言った。

「お前も早く汗を流して俺の相手をするんだ。おい、芳子。お前はこれでひとまず終わりだ。先にフロから出て、ふとんを敷いてこい」

そう言うと啓作は芳子を下ろした。

「かしこまりました、ごしゅじんさま」

芳子は啓作から解放された。ふらふらと風呂場から出て行った。

目の前を芳子が通り過ぎると今度は知恵が啓作に促されるままに湯船に浸かった。啓作もそれに続き狭い湯船に入ってきた。

おそらく芳子もそうだったのだろう。啓作が入ったことでお湯はようやく二人の肩まで来た。

啓作の腕が知恵の身体に巻き付けられた。お湯の温かさと啓作の体温が知恵に伝わった。以前ならばそれはすべて自分のものだった。そんな想いがまた心の片隅に生まれた。が、啓作の手は以前と全く同じように知恵の身体を這い回った。それは知恵の身体を知り尽くしており、知恵の望みを敏感に感じ取る。ふろの熱気とは別に知恵の身体は熱くなり始めた。知恵は啓作の顔を見た。

が、その顔は急速に若さを失ったように見えた。

―　消耗してるんだ……

自分でもかなり体力の消耗を感じていた知恵にも、啓作の置かれた状況の厳しさがようやく理解できた。新婚当初なら一人の妻でも相当消耗するだろう。それが啓作の場合は、二人の新妻なのである。いくら啓作の体力が普通以上であっても毎晩毎晩これだけ女を抱いていれば何もない方がおかしかった。

「ごしゅじんさま、もうおあがりになった方がよろしいのでは。かなりお疲れのように見えます」

「あ、ああ。少し長湯でのぼせたかもしれない……。それじゃ先に上がらしてもらうよ。待ってるから早く上がれよ」

啓作にしては珍しく反論することなく素直に知恵の言うことに従った。やはり相当疲れを抱え込んでいるのだと知恵は思った。

啓作が湯船から上がり、そのまま脱衣所へと出て行った。知恵も湯船から出て、頭と身体を洗い始めた。

―　今日はすぐに寝よう……

頭を洗いながらそう思った。

フロから出て、身体を拭き頭を乾かすとそのままそこを出た。寝るときは基本的には全裸である。

リビングにあった机と椅子は片付けられ、二組の敷き布団がぴたりと合わされ、啓作が真ん中にそしてその右に芳子が横になっていた。シーリングペンダントの小さな常夜灯だけが付けられていた。

知恵は啓作の左側へ身体を滑り込ませた。すぐに啓作の右手が伸び、知恵の身体を抱き寄せた。身体を啓作に密着させる。ぬくもりが気持ちよかった。身体を横向きにして、右手を啓作の上に伸ばした。胸の上に置いた手を下側へと少しずつずらしていった。そして股間でペニスに触れた。が、そこにはいつもの相手がいた。芳子の手である。

こんなことはいつものことだ。芳子の手は、知恵の手を一度握ると、場所を譲るようにさらに下側に向かった。が、知恵の手は芳子の手を追い、その手を掴むと、再び元の位置に芳子の手を戻し、自

分の手を引っ込めた。
その様子に気がついた啓作が知恵に言った。
「どうした？」
「ちょっと疲れ気味なので……」
「どこか悪いのか？」
「いいえ、別にそういうことはないんですけど」
「そうか、分かった。芳子、電気をつけろ。それから例の箱を持ってこい」
「かしこまりました、ごしゅじんさま」
突然むっくりと起きた啓作はそう芳子に命じた。
「ごしゅじんさま、何を」
「知恵は飽きたんだろうな。三人でもノーマルのセックスばかりでは。それに芳子を責めてばかりだったし、責められたいんだろう。これから芳子と二人がかりで責めてやる」
「え、あ、はい。ありがとうございます」
知恵にしてみれば、全くそんな意識は無かった。が、ノーマルのセックスならしんどいと思っていたが、責めが入るという話になると気持ちが違うことは事実だった。
―　この人はいつも私の気づかない私を見ている……
芳子が隣の部屋から持ってきた道具箱にはかつて毎晩のように知恵を責めていた道具たちが入っている。最近、それらが使われるのは知恵が芳子を責める場合の方が圧倒的に多くなっていた。それが久しぶりに自分に使われるということが知恵の中で妖しい炎を灯した。
「知恵、背中をこっちに向けて座れ。腕は、交叉させて頭の上に置け」
言われた通りにすると、啓作は、道具箱から取り出した縄を知恵に巻き付け始めた。それは知恵にとっても全く初めての縛られ方だった。芳子も興奮した目でそれを見ている。
知恵の両手首は一つにまとめられ、上から後ろ側に折りたたまれ

た肘によって頭の後ろで固定された。その手首を固定していた縄は、さらに背中へと達し、前側にまわされたところで知恵のおっぱいを上下から締め付けるように巻き付けられた。それが完成すると啓作は例の書類を留めるための大型のターンクリップを取り出し、左右それぞれのおっぱいに乳首に一つ周囲に三つずつ留めていった。知恵は久しぶりの激痛に顔をしかめた。

「芳子、浣腸の準備をしてこい。洗面器にお湯だ」

「かしこまりました、ごしゅじんさま」

「か、浣腸までなさるんですか？」

「ああ、久しぶりだからな。それに忘れてたんだ。こっちの穴をいつか使い物にしようと思ってたのを。悪かったな。芳子のことをどうするかで手一杯だったから。ほら、お前はこうするんだ」

啓作に背中を押され、知恵はお尻を突き出すような姿勢になった。久しく忘れていた羞恥心が甦った。ただの三人のセックスでは全く感じなかったものだ。

芳子が準備をして戻って来た。

「芳子、ちょっと何かハンドクリームかローションとか、潤滑に使えるもの持ってないか？」

「はい、少々お待ち下さい」

芳子は三面鏡のところから小さな化粧瓶を持ってきた。

啓作はそれを受け取ると、蓋を取って指で中のクリームを大きくすくい取り、知恵の肛門のまわりに塗りつけ始めた。その様子を芳子は目を見開いて見ていた。

「どうだ、芳子。なかなか尻の穴やまんこを間近に見ることはないだろう。肛門は筋肉の塊だから、こうやって丹念にマッサージしないと筋繊維を傷つけるんだそうだ」

そう芳子に話ながら、啓作は指でのマッサージを続けた。

その言葉が耳に届く度に、知恵は羞恥心をどんどん煽られていった。

「ごしゅじんさま。どうしてそんなに身体のことに詳しいんで

す？　まるでお医者さんみたいに」

芳子はかねてから疑問に思っていることを口に出した。

「あ、ああ。お客さんに教えてもらった」

「クルマの？」

「ああ、医者のお客さんで似たような趣味の人がいてな。本人は外車だけど奥さん用のクルマの世話をしたんだ。それでそのクルマの点検整備で、クルマを預かってたら、運転席の背中側のシートポケットにえらいもんがあるのを発見してな」

「もしかして、こんなものを？」

芳子は浣腸器を指さした。

「いや、写真だ。奥さんの。ちょうど今の知恵みたいな格好した」

「まあ」

「もっとも奥さん、もう五十近いんだけど」

「そんなお年なのに」

「いや、そういう年だからやらなきゃならないのかも知れない。それにその家にはこどももいないんだ。寂しさもひとしおだろう」

「そういうものなんですか」

「女が容色で男を惹き付けられる時間はそう長くない。しかもこどももいないとなれば、そういうものでもないと夫の興味を自分に惹き付けられないとでも考えたのかも知れない」

「じゃ、奥さんが始めたんですか？」

「ああ、あとでご主人に聞いたらそういう話だった。ある日頼まれたんだって。自分を裸にして縛ってくれって。……それからだ。こういう趣味の話ができるようになって、いろいろな医学知識を教えてもらうようになったのは」

「こどもがいないのは奥様が原因で？」

「いや、それははっきりしないそうだ。いや、はっきりさせなかったらしい。どちらも傷つきたくなかったということだろうな。さあ、知恵の方はもういいみたいだな。すっかり肛門が柔らかくなった。芳子、知恵を見てみろ。すっかり喜んで前もぐっしょりだ」

啓作の執拗なマッサージは後ろを柔らかくするだけでなく、すっかり前も興奮状態になっていた。

「浣腸だけじゃ物足りなさそうだな。よし、芳子、お前はバイブで前の方を可愛がってやれ。俺は後ろに浣腸してやるから」

「ああ、そ、そんな……」

「知恵ねえさま。ゆきますよ……。ほおら」

芳子が先にバイブを持ち、ズブズブとヴァギナへと押し込んでいった。すでに潤滑が十分のヴァギナは、大した力をかけなくても、すんなりとそれを呑み込んでいった。

「スイッチを入れるのはちょっと待て。その前にこっちだ。ほら、久しぶりだから二百ccで抑えるからな。これなら十分我慢できるはずだ。楽しみたかったらできるだけ長く我慢しろよ。ほら」

尻に冷たい浣腸器の嘴管の感触を感じ、知恵は震えた。次の瞬間、それは肛門に突き刺さった。が、入念にマッサージされた肛門では何の痛みも感じなかった。知恵は恥毛を完全に芳子によって剃られていた。芳子も同じように知恵に剃られていた。だからいわゆる巻き込みによる痛みの心配も無かった。

ぬるま湯というよりは少し冷たい液体が胎内に流れ込んできた。前後の穴を同時に塞がれ、知恵は下半身が強引に膨らまされた感触に狂い始めていた。身体の中心で燃えさかる炎が一段と大きくなった。啓作の言った通り、便意はまだ感じない。異物感、膨満感のようなものが大きい。注入は終わっているはずだが、啓作はそれを抜かないまま、ピストンを少し引いては押し込み、液体を出し入れしているようだ。当然膨満感もそれに応じて変化する。それがまた妖しい感覚に繋がった。

啓作の目が、官能の嵐に弄ばれている知恵の状況を確認すると芳子に命じた。

「芳子、スイッチを入れて、ピストン運動をしてやれ」

強烈な振動が前の奥から知恵の膀胱全体に広がった。膀胱から出る輸尿管の突出部近辺は、女の性感帯の密集地点でもある。浣腸に

よって排便の反射が起こり、膀胱からの弁を弛緩させる命令が出かかったところで、一番敏感になった、もともと一番敏感な部分に強烈な物理的振動が加えられたのだ。知恵が狂うのに時間はかからなかった。

「あああああ、出る……出ちゃう……出ちゃう……出ちゃう」

が、実は知恵にももう何が切迫しているのかは掴めなくなっていた。下半身の筋肉の緊張を緩めたら、いったい何が起こるのかは本人にも分からなくなっていたのである。

「芳子、これも一緒に押さえるんだ」

啓作は浣腸器も芳子に任せ、自分は立ち上がった。乗馬鞭とろうそくを持って戻ってきた。

「知恵、久しぶりにフルコースだ。お前が一番好きなやつだからな」

啓作の言葉に少しだけ目を開けて何が始まるのかを知恵は悟った。もう自分を押さえられないと覚悟した。何が起こっても自分にはもうどうしようもないと諦めた。それは自分を酔わせる甘美な諦めでもあった。

背中と尻にろうそくのろうが垂らされ、ムチがうなっては、そのろうがはたき落とされ、バイブが前を貫き、浣腸器が後ろを犯し、おっぱいではクリップが絶え間なく激痛を生むという、強烈な刺激のハーモニーは、知恵の理性を吹っ飛ばした。

何を叫んでいるのか分からないまま、意識も消えた。いや、たぶんもう声にはなっていなかった。息をするのも精一杯の状況になった。

翌朝、知恵が目を覚ましたとき、知恵には夕べの記憶は何もなかった。覚えているのは縛られたところまでであった。後で芳子と啓作から、落ちたと知らされた。相当ひどい落ち方だったらしい。呼吸も止まり、啓作の人工呼吸で回復したのだと。当然啓作と芳子はその後片付けに相当の時間を割くことになった。その間、知恵は目は開いているものの少なくとも起きているようには見えなかったと

言われた。

知恵は、夕べのことは何も覚えてはいなかったが、妙なことにその日、知恵は身も心もすっきりした日を過ごすことが出来たのである。

三人の風景

予想外の困難に幾度か遭遇しながらも、三人の共同生活は、一ヶ月もするとそれぞれにとってなんとか馴染みのあるものに変わった。夜の営みは最初の頃のがむしゃらさというのはさすがに無くなった。また、二人の女性の生理が自動的に休日を用意した。どちらか一方でも生理に入ればお休みになるのである。また三人という形はＳＭプレイをやる場合には実に都合のいいことが判明した。何をやるにも助手役の存在は大きいのである。二つの責め手を同時に加えられるから、責めの多彩さは以前とは比べられないほど増えた。そしてこのことが啓作の体力の温存に繋がることになった。ＳＭプレイの時間が長くなればなるほど、当然普通のセックスの時間は短くなる。結果的に啓作は荒淫という状態から抜け出すことができたのである。啓作は常にＳ役で、二人の妻を同時に嬲ることもあれば、どちらか一人を責め、もう一人は啓作の助手として責めるという時もある。ただ、女の役回りのイメージみたいなものがなんとなくあったので、知恵が芳子を責めるということはかなりあったが、芳子が知恵を責める状況があったのはたったの一回だけだった。Ｍとして知恵に問題はなかったが、Ｓとしての芳子は全く様にならなかった。途中で白けてしまい、非常に気まずい思いを三人ともしてしまった。それ以来、この組み合わせのプレイになることは無かった。

夜以外の一般的なことについては、二人の女性はようやく啓作の二人の扱いに関する考え方が分かってきた。啓作は徹底的に平等に扱うつもりなのである。その徹底ぶりは大したもので、どちらにも得も損も無いように常に気を配っていた。従って、芳子の就職が決まり芳子も働き出すと、知恵と芳子で家事を厳密に分担させていった。知恵にしてみれば、家事から百パーセント解放されていたのがそうでなくなったのだから、それは残念でもあったのだが、それでも一人のことを考えれば楽なものであった。

ただし、芳子と知恵の間にはいかに仲がいいとは言っても、啓作を巡っては僅かながら対立感情もあることを知恵もそして芳子も認

めないわけにはいかなかった。ただし、それを啓作の前で口にすることは断じて許されなかった。一度知恵が軽い冗談として、二人の前でこう言ったことがある。

「二人っきりでお食事に出かけるなんて私たちには夢なのかしら」

外食に出かける時はいつも三人一緒に出かけている。そういう意味では特にサービスの中身で劣った状態にされている訳ではないのだが、唯一、一般常識的な満足感に欠けるということで思わず口に出してしまったのである。

啓作は果たして、芳子の目の前でいきなり知恵の頬を思い切りひっぱたいた。

「二度と俺の前でそんなことを口にするな」

「申し訳ありません。ごしゅじんさま。知恵が馬鹿でした」

言った瞬間に内心しまったと思っていた知恵はすぐにそう言って詫びた。

「そうか、わかっているならそれでいい……」

この事件以後、芳子もそういう言動に気をつけるようになった。

啓作の場合

啓作にも当惑があった。確かに芳子と知恵は似たもの同士であるという自分の観察に間違いはなかった。だが、どうやら体質差のようなものに起因しているものと思われる、啓作に対する執着度に差があることを感じ始めていた。

知恵はこの間のように激しくＳＭプレイで責めると落ちることがよくあった。痛みを快感と受け取れる体質なのか、かなりの痛みを伴う責めを加えても泣き言は言わず、すべてを受け入れそのまま気を失い果ててしまう。天性のマゾの体質と言ってもよかった。一方の芳子はマゾであることは間違いないものの、それはかなり精神、心に依存した属性のようであった。つまり啓作または知恵との主従関係を強く意識したものなのである。芳子にとっては、何をされているかよりも、誰にされているのかがより大きな関心事であり、それこそが自分の満足の根源なのだ。

他人に対する思い入れ、感情移入が他の人間よりも激しいのである。我を忘れるという言葉は彼女のためにある言葉だと言えた。だから、知恵を取られた時に啓作に対し逆恨み行動に出たのである。反面、彼女の場合はＳＭプレイそのもので、知恵のように失神してしまうようなことはまずなかった。最後まで正気を保ち、そして最後には必ず啓作を求めた。知恵とはセックスレスプレイになることが多かったが、芳子との間でセックスをしないでプレイを終わるということはほとんど無かった。芳子は肉欲というよりもメンタルな意味で啓作に抱かれないと満足が得られない女だったのである。

一方、知恵はそういう代償を求める態度を示さない女だった。そういう意識が自分の中で芽生えてしまうと、自分では平等と決めたはずなのだが、いろいろなところで二人を同じには見られなくなる自分がいた。いや、それはむしろ啓作の心の中で新たな葛藤が始まっていると言った方が適切だった。

とかく自分を求めてやまない芳子がかわいいと思う反面、その執着心が煩わしいと思うこともある。逆に知恵については、まるでこ

どものように疑うことも代償も求めず、啓作のすべての欲望をそのまま受け止めて落ちてしまう自己犠牲的献身の姿が啓作を感動させていた。が、それは同時に、知恵にとっての自分の価値というもの、自分の存在理由を常に自問自答しなければならない関係でもあった。つまり知恵にとって自分が主人である理由、あるいは自分が主人でなければならない理由は自分で探すしかなかったのである。知恵からはそのヒントすら与えられなかった。

しかも知恵についていえば、知恵の性格と性質が分かれば分かるほど、自分の中でどうしようもなく大きく成長する考え、いや疑いがあった。それは自分には知恵は向いていないという考え方である。

啓作は自分自身を強い男と規定していた。昔からそういう男になると決めていた。不屈の闘志で積極果敢に困難に挑戦し、それを克服する、自分が自分の主人になるのだと規定していた。つまり、自分は常に主たらんとする者であり、従の者を求めているのだという態度である。そういう意味では芳子は理想的なパートナーと言えた。が、知恵については、そう言えなかった。自分は主になれないのである。知恵はマゾの奴隷であっても、本当の意味でその主人となることは極めて難しい女だった。主人としていくら振る舞っても、結局は知恵に振り回されているのはいつも自分なのである。知恵は赤ん坊のように、まわりを振り回す王様なのだ。

表面上、知恵は自分への忠誠を誓っている。が、事実としては、満足は常に知恵にのみ残り、自分は知恵に満足を与えるものにしかなれないと考えざるを得なかった。確かに知恵からもらう満足もある。だが、知恵が受け取っているものの方が自分が受け取れるものよりも大きいとしか思えないのだ。主従関係がもたらす満足感が、知恵と芳子ではまるっきり違った。知恵にとって、主従関係そのものは単なるアクセサリーなのだ。もっと動物的で原始的なものが知恵を支配していた。知恵は純粋に自然の中にあるめすと言えた。精神面においての打算や見返りを全く求めない。自分の性質に素直な女なのである。そういう立場で見れば、啓作が二人の妻に対して行

っている気配りなどは、ほとんど無価値であるはずである。三人で激しいＳＭプレイをしているから知恵は辛うじて満足しているが、もし啓作と知恵だけの関係だったら、知恵はいずれ不満を抱えるようになっていただろうと思った。知恵を本当に満足させる愛し方は自分には出来ないのかも知れない。それはもっと全く違う愛し方なのだろう。少なくとも、ありきたりのことをありきたりで済ませるだけのものではないはずだった。知恵には啓作のすべてを注ぎ込んでもまだ足りないという力不足を感じないわけにはいかなかったのである。

　啓作は知恵に向き合った時に、自分の無力さを感じていた。確かに啓作は知恵という大陸を発見した。だが、啓作に分かったのはその海岸線の形のようなものだけだ。上陸地点を探すために海岸沿いを航行するが、一向にそんな場所は見つからない。いつまで経っても、上陸どころか接岸すらできない。その中を探検するには何もかも不足している……、そんな気持ちだった。それはいつしか、焦りに変わった。知恵と向き合う度に、飢えと渇きを感じてしまっていた。もちろん上っ面ではすべてうまくいっている。心の奥底の話である。知恵との距離が縮まらないことによる飢えと渇きである。

　そのことは、もっと別な言い方をすれば、知恵は啓作の住む世界とは異質の宇宙観の中に住んでいる人間であると言えた。だから知恵には違和感を持った。そしてその違和感こそが啓作にとっての知恵の魅力だったのである。

　そのことに気がついた時、さらにもう一つの事実に気がつくことになった。同じ違和感を持つ、そしてそれが自分にとって魅力に感じている人物がもう一人身近に存在していることである。

　―　知恵と浩一が同じ……

　初めて知恵を誘ったあの日、知恵が浩一と会った途端言っていた言葉が思い出された。

〈私乗り換えようかしら〉

　―　あれは知恵の本心が漏らした言葉だったのか。牧場で浩一は

知恵を恐れていたが、知恵は積極的に浩一に近づこうとしていた。無論本人は気がついていなかったのだろうが、同じ宇宙観の人間だと本能が知らせていたのかも知れない……

こんな思いが啓作の中で湧き上がった。

浩一もまた啓作にとっては何故か片時も忘れられない人物なのである。啓作にとって、そのことの現す意味は今まで分からないものであった。ホモの趣味はない。だが、何故か浩一という人間の存在は彼にはオアシスのように感じるのである。それは他の誰にも感じない状態であった。だから浩一は啓作にとって重要な友達なのだ。浩一本人は啓作にいい感情を持っていないことは百も承知であったが。

知恵と浩一の思わぬ共通項の発見。

浩一に自分が惹かれる理由が知恵に惹かれる理由と同じ。

啓作は分からなかった長年の課題の一つが解けたと思った。

芳子の場合

芳子はその日帰宅途中に近所のスーパーマーケットに寄り、家路を急いだ。今日の夕食当番は彼女なのである。

啓作が定めた原則は日替わり交代当番である。だが、実際には双方とも仕事を持つ身であり、気がねをしなければならない間でもないので、話合って適当に調整していた。啓作もトラブルが発生しなければ、強いて原則通りにやれとは言わなかった。ただ、芳子と知恵の直接の話し合いの現場に啓作がいるということは無い。

二人の関係は、結局のところ、芳子が後から転がり込んできたという経緯があるので、第一妻が知恵、第二妻が芳子という序列が二人の間では出来上がっていた。知恵による芳子の調教というプロセスがあったこともこれを自然にしていた。従って芳子は知恵のことは常に『知恵ねえさま』と呼び慣わしていた。こういう状況だったので、夕食のメニューをどうするかなどの些末なことは基本的に知恵が指示をしていた。下手に希望を言い合ったりすると料理などはトラブルになりやすいのである。味付けなども啓作が自分から何か言わない限りは、知恵のレシピが正ということになった。

無論当番制とは言いながらも、二人が揃って早く帰る時もあり、そんな時はお互いの料理の技術と知識の交換のために手伝い合った。これはこの風変わりな家族の内部の平和を守る上での、一種の安全保障措置であるとも言えた。どちらかの料理だけが突出してうまいということなどがあったら、極めて深刻な問題を引き起こしかねないのである。二人とも、そういう些細なことから妙な対立感が生まれやすいということをこの段階ではよく知っていた。また幸いなことに二人とも料理フリークでもなかった。

アパートに帰り着くとやはり自分が一番早い帰宅者であった。

今日の夕食のメニューは朝の段階で知恵と打ち合わせ済みだったので、知恵の帰りを待つまでもなく、芳子はすぐに調理に取りかかった。知恵が普通に帰ってくるのであれば、三十分後ぐらいには現われるはずである。それほど手間をかけたものを作るのではなく、

スーパーで買った総菜を使って品数を増やすので、本当に調理が必要なのはメインと考えていた、肉じゃかだけだった。

材料の下ごしらえが終わるとそれほどやることはない。

洗濯物を干したままにしてあったことを思い出した芳子は、ベランダに出てそれを取り込んだ。

かごに山となった三人分の衣類をしまうために畳み始める。

この作業もいろいろと気をつかう。啓作のものは一番神経を使わないで済んだ。が、女物の下着は、まずそれが誰のものかを確認する作業が必要であり、その作業を平穏な気持ちのうちに終わらせられることは滅多になかった。

見慣れないものを見つけると、それはいつ誰が誰に買ったものかを気にせずにはいられないし、またそれが身体につけられた姿を自分が見ていたかどうかもチェックするために一々記憶の糸をたぐってしまうのだ。ブラジャーなどは、そういう問題の他に、サイズのコンプレックスまで思い起こさせる代物だった。芳子はBカップだが、知恵はCカップなのだ。僅かな差と言えばそうなのだが、そういうことも一々気になるのである。そういうサイズの差が全くなければ、いっそのこと下着も含めて服に関しては、二人の共有財産ということにしてしまえば良かったのだが、事実としては、知恵の方が芳子よりも何もかも一回りは大きかったのである。

普通に着るワンピースや、ブラウス、スカートなども、それを着る頻度や理由などが気に掛かった。それは服自体が気に掛かるというよりも、身体のサイズの変化、要するに太っていくことへの心配だった。芳子は一緒に生活を始めてから、明らかに体重が増え、きつくなって着られなくなった服などがぽつぽつと出てきていたのである。ところが知恵は、いつまでも昔の服を着ていた。そのことが芳子の心配であり、懸念であり、わだかまりを作っていた。

そういった様々な自分の心のもやもやと闘う作業が衣類に触る作業にはまとわりついていたのである。

洗濯物をタンスに片付け終わったところに知恵が帰った。

「お帰りなさい、知恵ねえさま」
「ただいま、芳子。夕食の準備は終わったの？」
「下ごしらえはだいたい。肉じゃがですから、そんなにやることはありませんでした」
「一応、後で味を確かめさせてね」
「はい、かしこまりました」
「それから干し物取り込んでくれた？」
「あ、はい。たった今」
「そう。どうもありがとう」
女同士、関心を持つことは同じなのである。芳子は啓作が怖いと感じたことは無かったが、知恵に関しては何度も怖いと思ったことがあった。従って、啓作がいない状態で知恵と二人でいるというのは、それだけでＳＭプレイをやっている気持ちになってしまうのである。つまり、知恵は知恵ねえさまどころではなく、芳子にとっては女王さまそのものに見えていたのだ。

知恵の場合

知恵は芳子に対して特別な感情はほとんど無かった。知恵には、あくまでも第一妻としての立場で振る舞っているという意識があるだけであった。つまり、一番平穏で普通の感覚で生活をしていたのが知恵だったのである。知恵にとっては啓作の言葉をそのまま受け入れることで、すべて終わりだったのだ。芳子とのこともただ自分が与えられている役割をこなすという意味以外、葛藤らしい葛藤も無かった。単純にかつての自分の恋人が一緒に生活する家族になってくれて良かったとだけ思っていた。ただ、啓作が二人の妻を平等に扱うという拘りを見せているから、料理にしても、家事にしても芳子と話し合って余計な心配をかけないようにしようと思っているだけだった。

知恵という人間には、通常誰もが備えている欲望、独占欲が決定的に不足していたのである。知恵の心の中にある哲学感は、幼稚園児のそれと酷似していた。いや、幼稚園児は言葉は知っているが意味は分かっていない場合が多い。知恵は文字通りその意味を知った上で実践していた。

―誰とでもなかよくしましょう

知恵の心の中で一番大きな部分を占めていたものである。

この純粋さが啓作をして、知恵に声を掛けさせたものだった。

決して理性や知性で劣ってはいないのに、内面での自己抑制が極端に強く、他人の話に対する疑問や疑念はまず抑え無心に聞く態度を心がける。これが見事に完成していた。自分の心で作りあげた疑心などで心が乱されることはまずない。仮に信じたものが嘘であり、自分が騙されたという時でさえも、冷静さを保てる人間だった。自己防衛本能が欠落しているとも言えた。啓作が自分の言う話のほぼすべて―事実もでまかせも―をそのまま受け入れてしまうこの知恵の懐の深さにコロリとまいったのはある意味当然だった。桁違いに大きな包容力があるのである。ただ啓作は誤解もしていた。この懐の深さは知恵のマゾとしての性質の発露だと考えたのである。結果

を見れば、知恵は体質においてはマゾとしての素質に恵まれていたが、心の面では、芳子のようなマゾ性―主従関係への憧憬や他人への依存嗜好はあまりなかったのである。しかし、どっちにしてもこの知恵の性質のおかげで、牧場で調教を受けることになり、知恵はマゾという自覚を持つことになった。啓作の誤解は誤解でなくなってしまった。しかし、より正確に言うのであれば、全く違う生活感がそれとよく似た外観を見せていただけだった。このことが今の啓作を悩ましているものの正体だったのである。自我の欲望を意識し、それに決して流されない冷静な自分をそこに出現させる。それができることによって、何の葛藤もわだかまりも感ずることなく、他人の欲望をそのまま受け入れることが出来る。そういうことが自然にできたのが知恵だった。人の希望を聞き、それを受け入れること自体が知恵にとっての喜びだった。従って、痛みを心地よく感じられる資質のおかげで、極限まで責められて気を失い落ちてしまうことが何度あっても、知恵自身がおのれの肉欲に狂い、それに溺れ、自我を忘れるようなことには絶対にならなかった。プレイが終わり、正気に戻ればいつもと変わらない平常心の知恵が戻っていた。

啓作はその変化の少なさ、とりわけ自分に対する欲望を見せない知恵に自己の無力さを見たのだった。

このように三人で一緒に生活をしながらも、それぞれの心のうちの情景は三者三様であった。しかも純粋にそこに心の平穏を見いだせていたのは知恵だけであり、残る二人はそれぞれ心の中にわだかまりを蓄積していく状況が続いていたのである。

暗雲

その夜の営みは激しかった。啓作が商談と研修でほぼまる一週間、午前様と外泊が続き、久しぶりに三人揃ってふとんに並んだのである。男の性として疲れが深ければ深いほど性欲も高まる。啓作はまさにその状態だった。この日のプレイは、M役は芳子一人、それを二人がかりで責めるということになった。何故啓作がこのプレイにしたかと言うと、疲れの残る啓作にとって、知恵を下手に責めて落ちてしまわれては、後の始末がやっかいだという思いが強かったからである。芳子ならその心配は無かった。そのまますぐ休めるのだ。

フィニッシュがそこにあるとはいっても、まだ幕は上がったばかりであり、いつものようにがんじがらめに縛られた芳子は、今日はぶら下がり健康器のバーから吊されていた。手は背中で固定され、上からのロープは、首の後ろ、背中で重ね合わされた手首、股間に通された股縄の三カ所で固定されていた。

知恵の役割は、この吊された芳子の身体を適当に鞭で打つことである。S役の役回りが増えていた知恵には、啓作がわざわざ女王さま用の黒エナメルのボンデージスーツー身体の上で細いV字を描き最小限の面積で乳首周辺と股間を隠し、それ以外の大部分は黒いメッシュで覆うようになっているものーとピンヒールの黒エナメルブーツを用意したおかげで、いよいよそれらしい姿になっていた。この姿の知恵は、芳子の前に立つだけで何もしなくても芳子を視覚で責めることができた。そして実際今の知恵はただ芳子を見ているだけだ。それ以上何もする必要がなかった。啓作が芳子を徹底的にいたぶっていたからである。今、啓作の手には縫い針があった。それをろうそくの炎で加熱し、先端を芳子のおっぱい周辺や乳首にぎりぎりまで近づけているのだ。時折本当に接触もさせている。

動物の断末魔のような極限まで歯を食いしばった声を、芳子は断続的に出し続けていた。時折、薄目を開ければそこには見るからに妖魔そのものに見える知恵が微笑んで自分を見ているのである。芳子の全身には汗のつぶがびっしりと浮かび、顔には恐怖で引きつっ

た表情があった。このような責めを受けるのは芳子にとって初めてだったのである。啓作は片方の腕で芳子の身体をがっちりと抱え込んでいるので針から逃げることは全く出来なかった。

「どうだ、熱い針の味もおつなもんだろう。だけど、後は残らないし、責め側にはあんまり面白みがないな。表情と悲鳴だけはいいんだが……。なぁ、知恵」

「そうですね。知恵も手持ち無沙汰気味です」

「そうだな、芳子もそろそろいつもの奴が欲しい頃だろう。それじゃ針は終りにして軽く芳子を一回いかせよう」

啓作は針をステンレストレイに戻すと、今度は道具箱からバイブを取り出し、股縄を横にずらし、二本になった股縄の真ん中からヴァギナに向かってそれを挿入した。芳子が身体を揺らし、またうめき声を上げた。それから糸というよりもたこ糸といった方がいいような太い糸を手に取り、芳子の乳首にそれを固く結びつけては上のバーと結んでいった。芳子の両乳首は真上に引っ張られたまま固定された。身体がまわると芳子の乳首には激痛が走った。その出来を確かめると啓作は鞭を手に取った。

「よし、じゃ、知恵。鞭打ちだ。俺はこっちからバラ鞭でやるから、お前はそっちから乗馬鞭だ」

時折ゆっくりと回転する芳子を啓作と知恵は左右から鞭を当て続けた。

芳子はうめき声を上げながらそれに耐えていたが、やがてがっくりと首をうなだれた。

「ヴァギナにバイブを咥え込んでの鞭打ちだからな。相当気持ちが良かったはずだぜ。鞭が当たると反射で自分の肉がバイブを締め付けるんだから。しかも二人がかりでバラ鞭と乗馬鞭だからな。もう忘れられない味になったかもな……。よし、じゃ少し余韻を味わしてやろうか」

啓作は芳子のところにしゃがみ込むと初めてバイブのスイッチを入れた。ビィーンビィーンビィーンと機械音が出て、うなだれてい

た芳子の首が再び持ち上がり、か細い声を漏らし始めた。

「あああああ。こんな、こんなの、いやあ。と、止めてください。いやああ、こんなのでいかされるのはもういやよう」

「ほう、バイブがお気に召さないようだな。それじゃ知恵、例のバンドを付けて、お前が責めるか？」

「そ、そんな、意地悪しないで下さい……、ご主人様のを下さい」

「芳子、今のお前の言葉はないだろう。知恵が可哀想じゃないか。知恵も芳子を抱きたいだろうし。なあ知恵」

「はい、ごしゅじんさま。仰るとおりです」

「ほら、芳子、知恵もああ言ってるんだ。抱いて下さいって知恵にお願いしろ」

「……そ、そんな」

「芳子。お前いつからそんなに物わかりが悪くなった。ちょっとお仕置きが必要だな。知恵、浣腸器の用意だ」

「かしこまりました」

その声を聞いたとき、芳子がわめいた。

「浣腸なんてやめてください。私が悪かったです。知恵ねえさまに抱いて頂きますから……」

浣腸は芳子がもっとも恐れているプレイになっていた。何故そこまで浣腸を恐れるのか知恵には理由が分からなかった。が、知恵が浣腸をされ責められたまま落ちてしまったのを見たことが相当なショックになっているらしいということは啓作には想像できた。自分のそうなった状態を恐れているのかもしれなかった。知恵は自分がどんなことになったのか何も覚えていないから全くそんなことは分からない。が、芳子はプレイ中に正気を失ったことが無いから、かえって自分のみじめな姿を想像し、それを恐れるのである。知恵が浣腸された翌日には芳子も浣腸をされたのだが、その時も芳子は泣いて抵抗した。その後は浣腸器を見ることも辛そうにしていた。そのことを知っていたから、啓作は浣腸を芳子への罰として使っていたのである。

「ダメだ。お前の中にいろいろと変なものが溜まってるから素直でいられなくなるんだ。全部きれいに出してやるからそのつもりでいろよ。フッフッフッフ」

「……」

芳子は吊られた身体をよじって顔を伏せた。もう止められないと観念したようだ。顔を真っ赤にし、もう自分が汚物にまみれる姿を想像しそれを恥ずかしがっているようにも見えた。

啓作は芳子の縛めを変え始めた。吊られている状態を一度下ろし、両足を大きく広げた状態で後ろ向きに立たせたまま、足首をぶら下がり健康器の台座の部分に縛り付けてしまった。股縄ははずされたが、腰に巻き付けた部分は残し、背中のところで真上に強く引っ張られた。一方、首の後ろと手首にかけられて身体を吊していた縄ははずされ、乳首のたこ糸はバーからはほどかれた。が、乳首の結び目は解かれず、今度は真下に引っ張られて、糸の先端は足首が固定されているぶら下がり健康器の台座に同じように固定されてしまった。つまり芳子は壁に向かって深くおじきをしながら、足は大きく開き、しかもひざをまっすぐのまま固定されたのである。ということは芳子の尻は啓作に向かって突き出されることを意味する。股縄ははずされていたが、まだバイブはそのまま突き刺さっていた。こういう場合、自分の力で外に押し出したりすると、啓作の怒りを買うことを芳子はよく知っていたのである。それで必死に自分で落ちないようにそれを締め付けていた。啓作もそれを見ても抜こうとはしなかった。

洗面器を抱えた知恵が戻ってきた。

「お待たせいたしました。ごしゅじんさま」

「グリセリンは入れたのか？」

「弱めに。２０％程度にしましたが……」

「まあ、ちょうどいいかな。よし知恵、やれ……。いや、やっぱり俺がやる。知恵はろうそくでも背中に垂らしてやってくれ」

「はい、かしこまりました」

知恵は立ち上がりろうそくに手を掛けた。芳子の尻に向かうあうように啓作は座り、浣腸器を手に持つとシリンダー一杯に浣腸液を満たした。

嘴管の冷たいガラスの感触を肛門に感じたとき、芳子は絶望としてしか表現できないやるせなさと、久しぶりに味わった暗い脳髄を痺れさすような官能を感じていた。それは羞恥心だった。変なもので三人の生活は常に当事者以外の一人に見られることが当たり前だったので、羞恥心が湧かない、あるいは湧きにくくなっていたのである。が、浣腸は芳子にそれを味合わせた。生ぬるい温度の液体がかなりの勢いで体内に侵入してきた。

あっという間にシリンダーの中を空にすると啓作はすぐ次の吸い上げを行い、立て続けに注入を続け、八百ccの量を芳子に入れた。

内部から強い圧力を受けて、芳子の便意は急速に高まってきた。

背中には知恵が落とすろうそくのろうが赤い模様を描いていた。

ヴァギナにはバイブが突き刺さっていた。芳子の頭は混乱し始めていた。言葉は言葉にならず、動物の咆哮があるだけだった。

浣腸を終えると啓作は立ち上がり、台所に行って冷蔵庫から何かを取り出して何事かを始めていた。包丁の音が聞こえた。しばらくその状態が続くと今度はボールを抱えて、芳子のところに戻って来た。

「芳子、これから漏らさないように栓をしてやるからな」

「ごしゅじんさま、もうトイレに行かせてください……。栓なんかしないでください」

「まあ、そう言うな。これも慣れたら気持ちよくなるんだから、そらよ」

啓作はボールの中の黒っぽいゴルフボールほどの大きさの塊を一つ手に取ると、芳子の肛門にそれを強く押しつけた。塊は変形しながら、最後にはすっぽりと中に入っていった。だが、かなり抵抗が大きく、途中で形がかなり壊れた。

「ダメだな。これじゃ……。そうだ」

啓作は再び立ち上がり、再び冷蔵庫に行って何かを持ってきた。
それはマーガリンだった。ナイフで黒っぽい塊にマーガリンを塗りつけ、先ほどと同じように肛門に当てた。今度はあるところからスッと中に姿を消した。
「あ、あ、あああ、な、何を、入れたんですか？　お腹が張ります」
「こんにゃくだよ。これならいくつでも入るだろ」
啓作はそう言いながら、こんにゃく玉にマーガリンを塗っては次から次へと芳子の胎内へと送り込んでいく。
芳子はまた言葉を失った。もうしゃべる余裕は無かった。限界まで高まっていた便意が突き抜けるように全身を貫くが、排便はもうできなくなり、一層ひどい便意だけが芳子に残った。
知恵の落とすろうは、すでに芳子の尻の上面をすべて覆うほどになっていた。これでは先に落ちたろうが邪魔になってこれ以上のろう責めは意味がない。それに気がついた啓作は、知恵に命じた。
「知恵、鞭でろうを落とせ」
「はい、かしこまりました。ごしゅじんさま」
知恵が鞭を振り、その音がリズミカルに響いた。
芳子の中では様々な刺激が嵐となって芳子を揺さぶっていた。
しばらくすると芳子の心の中でそれらの刺激が一点に集まり始めた。そしてそれは一つの形、啓作の形になった。
―　ごしゅじんさま……
啓作は知恵がろうをきれいに鞭ではたき落とすのを確認すると、再び芳子の拘束を解き始めていった。今度は、すべての縛めをきれいにはずした。芳子はもう息も絶え絶えの状態で床に崩れた。その横に啓作がしゃがみこんだ。すると芳子は顔を持ち上げて啓作の顔を見ると次の瞬間、啓作に抱きついてきた。
「ご、ごしゅじんさまぁ、こんな芳子でも捨てないで下さい……。とっても恥ずかしいことをしそうな芳子ですけど、捨てないで……」

芳子からの唐突な呼びかけに啓作は驚いたというよりも怯んだ。

「あ、ああ、何を今更……。あ、当たり前だ」

「ごしゅじんさまのをしゃぶらせて……」

そう一言言うと、芳子は啓作のパンツに頭を突っ込んだ。

その勢いと行動の早さに、啓作も知恵も呆気にとられて見るだけだった。便意はもうとっくに限界を突破しているはずである。もう芳子には自分が制御できないようだった。その羞恥が半ば暴走のような行動を取らしているようだった。

パンツを半分下げて、啓作のペニスを咥え込んだ芳子は、バイブの突き刺さった尻を高く上げたまま、夢中になって首を上下させていた。そうすることで便意を忘れようとしているようだった。

そのせっぱ詰まった感覚は啓作にも伝わった。

「ち、知恵、よ、芳子に排便させるぞ。トイレに連れて行け……」

リビングを汚すと後始末がいかに大変なことになるかを知っている啓作はそう知恵に命じた。

「かしこまりました。さあ、芳子行くわよ」

「い、いや、は、離さないで……」

混乱した芳子は啓作と離れようとしない。

「知恵、ムチだ。ムチを使え。今の芳子に言葉は通じない」

啓作の言うとおり、ムチで芳子はようやく啓作を離し、それからバスルームへと連れて行かれた。固形浣腸のため、そのままでは排便に時間がかかるので、シャワーでぬるま湯を少し胎内に送り込み、それで一気に何もかも外へ出させるのである。洋式便器の上で和式便器の座り方をさせられた芳子は、シャワーノズルをはずされたホースの先端から出てくるお湯を肛門から送り込まれた。次にそれが肛門からはずされるとかなりの勢いでお湯が噴き出し、続いて黒っぽいこんにゃくが次々と出て、それが終わるとようやくグリセリンによってドロドロに溶かされた便が延々と出続けた。

芳子は放心しきった表情だった。

知恵が自分と芳子をまとめて洗い、全身の水分を拭き取ってリビ

ングの布団に戻った。そして啓作を中心に右と左に女は別れてよこになった。

知恵はすぐうとうとし始めた。疲れていたのだ。もう今夜は啓作も求めては来ないだろう、そんな思いも手伝った。

だが、ふと何かの気配で目が覚めた。

目の前で芳子の裸身が上下に揺れていた。

啓作の身体の上に馬乗りになった芳子が啓作を犯している風景だった。知恵から見ても芳子の表情は昂ぶりきって、欲情しきった顔に見えた。彼女の中で啓作は唯一無二の存在なのだと思った。

―　芳子……。そんなに彼のことを……

今までも何度も啓作と芳子がセックスしているのを眺めていた。だが、今まで見ていたセックスはすべて啓作が芳子を犯しているものだった。だが、今夜のは違った。相手を強く求め、その欲情に身を任せているのは、啓作ではなく芳子だった。知恵はあのように啓作を求めたことはない。いつも啓作に求められることに応えるだけだった。そういう受け身のセックスとは全く違うセックスが今目の前にあった。髪を振り乱し、芳子自身が激しく燃えさかる炎のように身体を揺らしていた。ロデオでの荒馬にまたがるカウボーイのように身体を揺らしていた。その激しい腰使いは啓作の全ての精を吸い尽くそうとしているかのように見えるものだった。

―　自分はあそこまであの人を求められない……

知恵はそのまま目をつむり二人の世界と自分の世界を切り離した。自分がここにいるのは本当に正しいことなのだろうかと自問自答していた。その瞬間、牧場での浩一の顔が知恵の脳裏をよぎった。

一方、休もうと思ったのも束の間、いきなり燃えさかる芳子に襲われた啓作もこの事態を平然と受け止める訳にはいかなかった。自分がここまで女に責められているという記憶は、学生時代のあの佳織たちとの経験以外には無かった。まさに芳子はあの時の嵯弥香の再来だった。その強烈な締め付けは今までの芳子とのセックスでは一度も体験したことのなかったレベルだ。あおりにあおられ、啓作

はついに精を芳子の胎内深くへ放った。これほど大量に射精をしたのは久しぶりだと自分で思うほどそれは長く続いた。芳子は全身を硬直させてそれを味わっているかのように見えた。次の瞬間、ゆっくりと溶けながら崩れるように啓作の胸の上に倒れ込んできた。

二人は何も言わなかった。ただお互いの荒い息をその耳元で聞きあっていた。

啓作は一瞬隣で寝ている知恵を気にした。が、起きている気配は無かった。今までも芳子とのセックスに夢中になっていたときに、気がついたら知恵が起きていて自分たちをじっと見ていたことが何度かあったからだ。だが、そういう時でも知恵は何も言わない。それはまるで子どもがセックス中の夫婦の寝室に突然現われた感じだった。妻でありながら、知恵はどこか浮いた存在だった。一方、啓作の胸に顔を埋めている芳子は、啓作の持っている「かわいい」という言葉のあらゆる定義に合致していた。が、それは後ろめたさを伴う感情でもあった。同じ思いを知恵に対しては持てなかったからである。芳子のことを愛しいと思う局面が増えるに従い、啓作の内面の葛藤は段々と大きく、そして深くなっていった。

崩壊

リリリリリーン
リリリリリーン
リリリリリーン

いつものように先に帰った芳子が夕食の準備をしている時にその電話は鳴った。

「はい、早川です」

このアパートはあくまでも知恵が借り主なので知恵の名字である早川と名乗っていた。

「あなたが知恵さんというのかね？」

「いえ、違います。知恵さんはまだ帰ってませんが」

「それは失礼。あ、わしは伊集院と申す者ですが、知恵さんはいつ頃戻られますかな？」

「いじゅういんさん？　すると啓作さんの？」

「おお、あなたも啓作をご存じか。わしは啓作の父親ですじゃ」

「あ、そうでしたか。知恵さんはたぶんあと一時間ぐらいで戻ると思いますけど……」

「そうですか。ところでつかぬことをうかがいますが、あなたはどちら様で？」

「え、あ、私は伊藤芳子と言いまして、早川さんの友達ですけど」

「伊藤芳子さん？　はて、どこかで聞いた名前のような……」

「あのう、私、伊集院さんのところで働かせてもらっている者なんです」

「ああ、啓作が連れてきた子か。それで、なるほど、早川さんのお友達でもあったと。なるほど、なるほど。で、今お一人でそこにいらしたんですか……」

「ええ」

芳子はそれだけをさりげなく言った。が、その消極的な態度は相手の不信感を増大させていたようにも感じていた。だが、今の芳子にはそれを望む気持ちがあった。今の生活を続けるのはもう限界だ

と思い始めていた。誰でもいいからこれを終りにして欲しいと望む気持ちが生まれていた。

「そうですか。それじゃ、また早川さんがご帰宅の時分にかけ直します」

相手は芳子の期待に反してそれだけを言うと電話を切ってしまった。

芳子は何となくがっかりした気分で受話器を置いた。

芳子が推測した通り、知恵はそのほぼ一時間後に帰宅した。また電話すると言っていたのだから伝える必要はないだろうと、電話のあったことは言わなかった。

二人で先に夕食を済ませた。啓作の指示で九時まで待って戻らなかったら先に食べろと言われていたのである。

食事の後片付けと入浴を済ませて、二人でテレビを見た。が、知恵はニュースが終わるとソファーに行った。芳子はドラマ好きでよく見ていたが、知恵はあまりドラマには関心がなく、それよりはソファーで本を読むことの方が多かった。

十一時になりテレビのドラマが終わった。夢中になって見ていた芳子はテレビを消してから、ソファーのところで本を読んでいる知恵のところに寄っていった。

「知恵ねえさま、そろそろ布団を敷きましょうか。ごしゅじんさまの帰りも遅そうだし」

「そうね」

知恵はソファーから立ち上がると、テーブルなどを隣のベッドのある部屋に運び出した。その空いたスペースを芳子が掃除機をかけ、さらに雑巾でフローリングを拭いた。

そこへ知恵が布団をベッドの部屋から運び出し、並べて敷いた。ちょうどその時である。外でクルマの音がした。

「あら、お帰りみたいよ」

シーツを広げていた知恵がそう言い、暫くすると玄関から啓作の声が響いた。

「ただいま」
「お帰りなさいませ、ごしゅじんさま。お食事にされますか？　お風呂にされますか？」
「ああ、夕食はお客さんのところでごちそうになった。風呂に入る」
啓作が風呂へ直行した後、女達は急ぎ、リビングの寝室化の準備を進めた。すると玄関の方から人の声が呼ぶ声がした。
ネグリジェ姿の芳子とパジャマ姿の知恵がお互いを見あってから、知恵が言った。
「私が出るわ」
玄関に顔を出すとドアの外で初老の男の声で
「こんばんは、ごめん下さい」
と呼びかけの声がした。
「はい、どちらさまでしょう」
「わたし、伊集院と申します」
伊集院という名前を聞いて知恵は緊張した。
「そ、それでは啓作さんの？」
「はい、父です」
「今、開けます」
あわてて、ドアを開けた。
すると確かに顔の輪郭が啓作そっくりの白髪頭の和服姿の年寄りがそこに立っていた。後ろには、秘書なのか部下なのか、四十代ぐらいのスーツ姿の男が一人立っていた。
伊集院は後ろに顔を向け、一言言った。
「お前はクルマで待っておれ」
「かしこまりました」
そう言うと後ろの男は消えた。
伊集院は三和土（たたき）のところに立ったまま、知恵をじっと見た。
「あなたが早川知恵さんかな？」
「はい、そうです」

「はじめまして、私が啓作の父、十三と申します。息子が大変お世話になっているそうで」

「は、いえ、そんな、お世話なんて……」

知恵は困ってしまった。状況から言えば、上がれと進めるのが道理である。だが、リビングへ通せばおそらくかなりのことになると考えないわけにはいかなかった。おそらく啓作は今の状況をこの父親には話していないだろうと思ったのである。

「あ、あのう、伊集院さん、どういうご用件かは存じませんが、今日はもう休むところですので、日を改めてという訳にはいかないのでしょうか？」

「早川さん。隠さんでええ。ここに啓作が入ったのを見た上で来たのでな。それにわしはあなたにとって困るようなことをするつもりでここに来たわけではない。とにかく啓作と話がしたい。すまんが呼んできてくださらんか」

が知恵が動く必要はなかった。玄関のすぐ脇がバスルームだったのである。会話を聞いていたらしい啓作はわざとバスルームの扉を開閉させる音を響かせて、出てくるそぶりを示した。

十三も状況を理解し、バスルームから啓作が出てくるのを待った。が、啓作の姿を見る前に十三は廊下の奥でこちらを見ているもう一人の人物、ネグリジェ姿の芳子を見つけてしまった。

「こ、これは、いったい……」

十三の言葉で振り返った知恵も驚いた。まさか芳子が顔を出すとは思わなかった。

「知恵さん、すまんがすぐ帰るという訳にはいかなくなったようじゃ。ちょっと上がらしてもらう」

老人は履物をぬいで上に上がった。もう知恵には止められなかった。

リビングに入り十三はその並べられた布団と芳子を見てどういう状況なのかすべて察したようだった。

「やれやれ、こまった奴じゃ……」

「あの、こちらへどうぞ」
知恵がベッドルームから椅子を一つ持ち出して隅に置いた。
「ああどうもありがとう。ところであなたが夕方電話に出た人、確か伊藤芳子さんかね」
「はい、そうです」
「で、ここで三人で生活してたわけか？」
「はい」
「……見ればそれほど遊んでいたようにも見えないし、まじめそうなお二人なのになんでこんなことを……」
「親父、何の用だ。彼女たちには何の責任もない。何か言いたいことがあるなら俺に言え」
後ろから、腰にタオルを巻いた啓作が入ってきた。
「馬鹿者！　お前自分が何をしているのか分かっているのか！　こんないいお嬢さんを二人も不幸にするというのが分かっておるのか！」
十三はびっくりするぐらいの大声でいきなり啓作を叱りつけた。
が、啓作はこううそぶいた。
「親父、ここのアパートは安普請なんだ。ご近所迷惑になるから大声は遠慮してもらえないかな。ここは家じゃないんだぞ。なんなら警察を呼ぶぞ」
「おっと、大声を出したのはわしが悪かった。だが、最近家に帰ってこなくなったと思って、まあ同棲ぐらいのことはしているだろうとは思ったが、まさかこんなことまでやるとは思っていなかったぞ」
「まあ、初めからこうしようと思ってこうなったわけじゃない。いろいろ事情があるんだ。それに俺は二人とも愛してることは間違いないし、ついでに言えば彼女達二人も愛し合う仲だ。それじゃ悪いか？」
最後の啓作の言葉はさすがに十三をも唖然とせざるをえないものだった。

「……それでお前、この後彼女達をどうするつもりなんだ」
「一生面倒みるつもりさ。当然だろ」
「……」
十三は啓作から目線を離した。目線は最初に知恵、次に芳子へと向かった。しばらく二人の観察が続いた後、こう言葉が出た。
「お二人は本当にそれでいいと思ってるのかね？」
この十三の質問は重かった。
知恵は黙って下を向いた。
芳子は言葉こそ出さなかったが何かを訴えかけるような目をして十三を見た。
二人の様子を看取った十三は、改めて啓作に言った。
「何があったかは知らん。そしてお前がこうすると決めたことが正しかったのか間違っているのかも知らん。だが、今言えることは、このお嬢さん達二人はすくなくとも今のこの生活は苦痛のようだぞ。わしがお前に言えるのはここまでだ。後はお前たちの問題だ。邪魔したな。わしは帰る」
十三はそれだけ言うと椅子から立ち上がり、玄関へと歩いていった。玄関から出るとき、三人に聞こえるようにこんなことを呟いていった。
「わしも孫を普通に可愛がりたいものじゃがのう」
十三が去った後、重い空気だけが残った。
啓作はショックを受けていた。女二人がどちらも十三に反論しなかったことだ。
そして思った。力不足だったと。いくら意志があってもそれだけではダメだったと認めないわけにはいかなかった。二人を同時に愛することがどれほど難しいことなのか痛感していた。結局は二人とも満足していなかったのである。
そんな暗澹とした気持ちの啓作に向かって、芳子が口を開いた。
「ごしゅじんさま、折り入ってお話したいことがあります」

「なんだ？」

「芳子を正式に戸籍上の妻にして下さい。知恵ねえさまが、愛人で関係が続くのは構いませんから。とにかく私を妻にして下さい。お願いします」

知恵はそれを来るべきものが来たという意識で聞いていた。こうなることは時間の問題だったのだ。

「芳子、何でそんなことを言い出す？　何故妻でなければならないんだ？」

「妻でないと私、安心できないんです。ずっとごしゅじんさまを信頼したいけどそれができないんです。……先週予定日だったのに生理がないんです……。生理不順になんてなったことなかったのに……。だ、だから、妻にして下さい。そうじゃないと私どうしていいかわからないんです……」

啓作は返す言葉を失った。芳子の性格、そして芳子をより深く愛し始めている自分、自分が誓った言葉が重いものに変わった。

―　もうダメだな……

そこに追い打ちがかかった。知恵が口を開いた。

「私はここにいるべき人間じゃありません」

―　万事休す

啓作は廊下にへたり込んだ。

宴の後始末

こども

啓作の目論見は見事に崩壊した。もうどうしようもないと諦めるしかなかった。が、残された課題があった。

芳子を妻として受け入れないと話にならない。それは分かっている。だが、形から言えば、知恵は、後からやってきた芳子に啓作ともどもすべての未来を奪われたようなものである。芳子をそのまま受け入れ、知恵を放り出した、では、あまりに知恵に申し訳なさすぎた。いや、たぶん知恵に言えば、知恵は気にしないと言うだろう。だが、啓作にとっては、自分のプライドがそれを許さなかった。自分が知恵に言ったことはすべて嘘でしたという事実だけを残すことを意味するからだ。それだけは何としても避けたかった。自分の知恵に対する愛が真実のものであったことを示すための何らかのけじめを是が非でもつけたかった。

だが、実際のところ何をどうしたらそういう結果になるのか全く見当もつかなかった。

そして、それとともに重要な事実の確認作業があった。芳子の身体である。芳子が精神的に不安定になった原因が本当にそうだったのかを知る必要があった。もっとも仮にそうでなかったとしても、もはや結論は動かなかった。すべての参加者の意志は確認されていた。そういう意味ではもはやセレモニーのようなものだったが、啓作は、例のけじめとしての活用の可能性も暗に考えていた。それで自分たちのことを何もかも説明できるという医者、つまり自分の顧客であり、医学的なアドバイスをもらっていた人間、中川勝則のところに芳子を連れて行くことにした。中川の専門は形成外科だが、単なる診察以上の相談の意味があったので予め電話を入れ、診療時間外の時間に診療所ではなく、同じ敷地の中に建つ自宅の方を訪ねることにした。

水曜日の午後、クルマに芳子を乗せて中川の自宅を訪ねると、夫

人がすぐに応接間へ案内してくれた。

「すみません。どうしても先生にご相談したかったもので……」

中川勝則は、五十過ぎのロマンスグレーという言い方がぴったりくる見事に銀色になった髪の毛の持ち主だった。芳子は話を聞いていなければ、医者という職業でこれだけいい知的センスを持った紳士がＳＭの趣味を持っている話などとても信じられないと思いながらしゃれた銀縁めがねをかけた中川の顔を見ていた。夫人も中川に似た雰囲気の女性で、いい雰囲気の似合いの夫婦であることは間違いなかった。

「実は、まずお願いしたいのは、この芳子が妊娠しているかどうか、その診断をお願いしたいのです。そしてその上で、その場合によっては、堕ろして頂けないかと……」

啓作はこう話を切り出した。

黙って聞いていた芳子も、最後の啓作の言葉に耳を疑った。

「ずいぶんと穏やかじゃない話をいきなりするじゃないか。こちらの女性は、君の奥さんじゃないのかね？」

「まだです。が、いずれ妻にするつもりです。近いうちに」

「それなら、別に堕ろす必要なんかないじゃないか。まあもし妊娠していればの話だが」

啓作は、知恵との同棲から始まり、芳子との出会い、三人での共同生活のすべてをかいつまんで中川に説明した。

そして最後にこう付け加えた。

「だから、もし私が彼女をそのまま妻にして、今回妊娠した子をそのまま産ませて育てたら、私の知恵に対する言動は何だったのかということになるんです。それでは知恵に申し訳が立たない。いや、私のプライドの問題です。私は私を許せなくなる」

「だが、問題が君の問題なら、何でこの芳子さんがこどもを堕ろさなきゃいけないんだ。こどもは君だけの所有物じゃない。もちろん君に養育権とかそういう権利はあるが、同時に芳子さんにも当然そういう権利がある。君の都合だけでどうにかなるもんじゃあない

よ」

「それでは、やはり私はこの芳子との結婚に同意するわけにはいかない……。養育費を支払うような形で解決するしかないということですか……」

「君も頑固な男だな。まあそれが君らしいと言えば君らしいが……。芳子さんはどう思ってるんですか？　どうせ彼のことだから、今の話も初めて聞いたんでしょう？」

「はい。正直びっくりしました。でも知恵さんに申し訳ないという気持ちは私にもあります。もし私が逆の立場だったら自殺を考えていたかも知れませんし……。こどもを堕ろすことで、みんなの気持ちが収まるのなら、それもしょうがないような気もします。少なくとも、私はこの人と一緒になりたい。こどもを産んだら一緒になれないなんて話を聞かされたら、もう産むことは出来ません……」

「何だ、結局、彼女、君と同意見ということか。ヤレヤレだな。参ったな。が、下手にこの世に生まれてきても親がこんなこと言ってるんじゃこどももかわいそうだという感じだな……」

中川はそこでいきなり横のソファーに座る夫人の方を向いた。

「お前、こども欲しくないか？」

「え？　どういう意味ですの？」

「まあ、本当にいるかどうかはこれから確かめるんだが、もし彼女のお腹に赤ちゃんがいるのなら、うちで育ててみないかっていう意味だよ」

中川の言葉に驚き、啓作も芳子も中川夫妻を見た。

「お前この間、しんみりと何か言ってただろう。俺はしっかり聞いたぞ」

「まあ、あなたったら、いやだわ。恥ずかしい」

「とにかくだ。はっきりしてるのは中絶なんてことは滅多にやるべきもんじゃないということと、このままこどもが生まれたら、こいつらみたいに半端な両親じゃ、誰も幸せになりそうにないってことなんだ。それなら、ここにこどもが欲しくて欲しくてしょうがな

い人間がいるわけだろ。何かおかしなことがあるか？」

「まあ、そう言われればそうでしょうけど……」

「じゃ、決まりだな。君、こどもを産んでくれ。そしてその子をうちに養子に出してくれ。どうだこれで？　君たちもその知恵さんにメンツが立つんじゃないかね？」

中川の提案に驚きはしたものの、啓作は冷静にその価値を計算していた。中川夫婦にこどもがいないということは、彼らの長年の悩みの種であったのだ。何よりも診療所の後継者がいないこと、そしてそれこそが、夫人をＳＭプレイに走らせた直接原因でもあった。

一方、こどもの立場から見れば、中川夫妻は多少年齢が高すぎるというところがあるかもしれないが、それ以外は申し分のない人物である。また医者という商売なら定年も無い。おそらくこどもが自立するまで十分な保護をあたえられるだろう。それにそれこそ何かあれば啓作たちが助力すればいいのである。

啓作と芳子から見ても、中絶と違ってこどもは生き長らえて成長していくのであるから、近くにいなくてもいつでも会いにいけるという安心感がある。本当の親子だと名乗れる機会が来るのか来ないのかは分からなかったが、こどもに申し訳ないと思わなくて済むということは大きかった。

「お言葉に甘えさせて頂いてよろしいでしょうか？」

啓作は改めて中川に言った。

「まあこどもっていうのは授かり物だからね。欲しくていくら頑張ってもどうにもならないということもあるんだ。君と知り合いになったのもそういう引き合わせみたいなものなんだろう。なあ、美智子」

「はい、大事に育てさせてもらいます。あら、まだいるかどうかも分からないのに私ったら、もうその気になってしまって。どうも済みません」

と言う夫人は、もう満面に嬉しさを表わしていた。

機器が揃っているということで芳子と中川が診療室へ行って、診

断をやっている間、夫人と啓作が応接間で話をしていた。

「でも考えてみればおかしな話。好き合ってて出来たこどもなのに自分たちで育てるわけにはいかないなんて……」

「それについてはひとえに自分が馬鹿だったと思っています」

「まあ、そういうことがあるのも人生なんでしょうけど。でもそのおかげでこどもを育てられるかもしれないんだから、悪いことは言えないわ。それにまさかあなたがこういう形で私たちと関係を持つようになるなんて夢にも思わなかったわ。あの写真を見られたって知った時には、正直脅迫されるんじゃないかって心配したんだから」

「クルマのセールスが脅迫してどうするんです？」

「だってありそうじゃない？　今度の車検の時にこれを買えとか？」

「ああ、そういう脅迫ですか。それなら写真があろうとなかろうとやりますね。どっちにしても」

啓作は笑いながら答えた。

「そうだったわね。でも本当に良かった。見られたのがあなたで。本当はドキドキだったんだから」

「奥さん、一度私たちと一緒にプレイしてみませんか。旦那さんとご一緒にいかがです？」

「まあ、やあね。こまるじゃない、そんなこと言わせないでよ」

そういう美智子は満更でもなさそうな表情を見せていた。

「しばらくは私が忙しいのですぐというのは難しいですけど。少し暇になったら必ずご主人をお誘いしますから、その時は是非」

「まあ。じゃあ、赤ちゃんを頂けるお礼に是非参上しますわ。あら……、戻ったみたいね。ねえ、あなたどうでしたの？」

ドアを開けて入って来た中川と芳子に夫人は声をかけた。

「ああ。間違いない。おめでとうと言うべきなのかな。それとも我々が言われるべきなのかな。まあいい。とにかく中川家の跡取りが出来たことは間違いなさそうだ」

啓作は何とかけじめのうちの半分はつけられたと思った。だが、課題はこれで終わりというわけではなかった。

――後始末というのは大変なものなんだな……

こどもが出来たことを喜びはしゃいでいる中川夫妻の様子を見ながら、啓作は次の課題の解決をどう図るかを算段していた。

知恵

啓作の思っているもう一つの課題とは、無論知恵のことである。普通に知り合い、恋仲になったという仲なら、破局で相手の心配など無用だ。ただバイバイと言えばいいだけである。が、どう考えても知恵にそういう扱いをするわけにはいかなかった。知恵がどういう人間かを見抜いてそれを無理矢理覚醒させたのである。そしてその時に誓いの言葉まで交わしているのだ。仮に知恵が何も言わなくても啓作の気が済まなかった。芳子とその妊娠のことは啓作なりにけじめをつけたつもりだが、知恵に対しこれで終わりとはまだ言えなかった。知恵に何をしてやれるのか、何をしたら彼女のためになるのかを改めて考えた。

―　知恵には絶対に主人が必要だ。そういう人間に俺がしてしまった……。俺がその役を出来なくなったからといって一人では放り出せない……。ならどうする？　俺がアレンジする？　それこそ彼女をもっと傷つけることになるのではないか？　もう俺が顔を出すことは一切差し控えるべきなのではないか？

啓作は悩んだ。が、いくら考えても何も結論は出せなかった。やむを得ず、知恵と話をすることにした。どうせ、アパートのこととか、今後のことを決めるために話をしなければならないのだ。が、こうなると知恵にどんな態度で話をすればいいのかも啓作には分からなくなっていた。自分に信頼を寄せる奴隷を裏切った主人というものの後味の悪さ、バツの悪さ、後悔、無念、格好悪さ、そういう忌まわしいものばかりが頭に浮かんだ。

中川邸を辞し、クルマで知恵のアパートに向かった。

車中、芳子に話しかけた。

「芳子、知恵のアパートにはもう住めないぞ……」

「分かってます。芳子は悪魔でしたね、知恵にとって。あのアパートに愛着はありますけど、そんなことしたら知恵に殺されても文句が言えなくなりますものね……」

「……」

三人の共同生活は最後は辛いものになったが決してそれだけではなかったのである。三人の人生に決して忘れてはならない様々なことを残してもいたのだ。そしてそれらはほとんどあのアパートを舞台に行われたのだ。芳子のアパートへの愛着は理解できた。しかし、知恵はどう思っているのだろうか、と啓作はその時疑問に思った。ここで初めて、知恵について自分の観察は間違っていたのではないかと啓作は気がついた。芳子の行動は突拍子がないことがあっても、それはいつも理解可能だった。自分が芳子にもったイメージ通りの行動ばかりだからだ。ところが知恵は、確かに調教で自分を受け入れる女になったが、それだけなのだ。自分は彼女を理解していたつもりだったが、芳子のように彼女の反応を納得できたことはほとんどない。いや、それどころか反応の兆しすら掴むことが難しかった。知恵は鏡のように自分の意志を返す。それは間違いなかったが、単なる鏡ではなかった。決してすべてをそのまま返していたわけではなかった。映し出されていなければならないはずのものが何もないというようなことはいくらでもあった。しかし、余計なこと、つまり知恵自身の感情が映し出されているということはほとんど記憶になかった。つまり、自分が知恵に向けて放出しているものでは知恵を満たしきれていないのである。知恵の本当の感情を引き出せるほど強い愛情や意志は、啓作が持てるレベルの愛情や意志とは桁違いのものであるはずなのだ。深い女だった。知恵をいくら蹂躙したつもりでいても、それは単なる自己満足だった。知恵の足下にいる小さな自分を確認しただけだった。

―　知恵はアパートを出ると言うかも知れないな……

啓作にはそんな予感がした。たぶん自分たちが考えているほど、知恵にとってこの三人の生活に大きな意味があるとは考えていないだろう。むしろ、自分よりも啓作や芳子の臭いが染みついてしまった部屋に自分が残る方が不自然だと思っているかも知れない……。

芳子の検診を受けさせるこの日は、三人とも仕事を休みにしていた。今後のことを話し合うためである。

十三が去り、破局が決定的になったあと、誰もアパートをすぐに飛び出したりしなかったが、一つだけ以前と変わったことがある。使われていなかったベッドで知恵が一人で寝始めた。リビングで寝るのは芳子と啓作だけになった。それ以外は、何も変わっていない。少なくとも表面的には。

夕方、アパートに戻ると知恵はいつものようにソファーで本を読んでいた。

「どうでした？」

これが知恵の最初の言葉だった。

「ああ妊娠していた……」

「そうですか……、おめでとうございます」

「あ、知恵。話をしたいことがある。こっちに来てくれないか」

啓作は、もう知恵に何も命令はしなくなっていた。知恵ももう啓作のことをごしゅじんさまとは呼ばない。

「わかりました」

芳子はもう啓作のおまけのようにその影に隠れる存在になっていた。自分からものを言うことは全くなくなった。自分には発言権はないと考えているようだった。

食卓に啓作、芳子が並んで座り、その反対側に知恵が座った。

「なんでしょうか」

「今更、こんなことを言ってもしょうがないんだが、それでも一応聞いて欲しい。知恵。僕は君のことを本当に愛していた。そして必ず幸せにするつもりだった。たとえ芳子が一緒に居ても。それだけは信じて欲しい」

「わかっています」

「だが、結局は自分の力はそれほどのものじゃなかった。知恵、君は、僕などではとても愛しきれない大きな存在だった。そのことに気がついてしまった。君を幸せにするなんていうことは僕の思い上がりだったと……。だが、芳子なら、僕でも何とかなりそうだ……、こんな気持ちを芳子には持った。だから、今回僕も僕の決断と

して芳子を選んだんだ。決して芳子が妊娠したからとか、君よりも芳子が好きだからとかいう意味じゃない。そのことを分かって欲しかった……」

「そうですか。それはどうも」

「いや、君には僕よりももっとふさわしいパートナーがいる。それが今の僕にははっきりと分かる……。それがどういう人間かも……」

「……」

「君に奴隷の宣誓までさせてそれを完全に受け止められなかった僕のことを笑って欲しい……。だが、できれば、一つだけ名誉回復のチャンスも与えて欲しい……」

「あなたの名誉回復？」

「そうだ。ついでに言えば、僕はもう既に一つのけじめをつけてきたところだ。それは芳子のお腹にいるこどものことだ。この子は我々の子にはしない……。養子に出すことに決めてきた」

「……あなたらしいご判断ですね」

「君に言ってもたぶんそれは意味がないことなのかもしれないが、僕にとっては重要なことだ。それと同じなんだ。このことは」

「いったい何をしたいのです？」

「君の真のごしゅじんさまを用意することを僕に任せて欲しい……」

「……」

「君がどういう人間か僕にはよく分かった。そして僕では君に釣り合わないということも分かった。だから任せて欲しいんだ。必ず君の意に沿う男を見つけてくるから……」

「わかりました。私には何も失うものはありません。結構です。あなたにお任せします」

「聞き入れてくれてありがとう。必ず君の喜ぶ結果を今度こそ作ってやる……。それから、もう一つ話がある。ここのアパートでもう三人暮らしをするわけにはいかないと思ってるんだが……」

「そのことでしたら、もう決めてます」
「決めてる？　何を？」
「私がここを出ます。お二人には思い出の深い場所だと思いますし、私にはそれほどの思い出になるようなものでもないと思ってますから……」
芳子は驚いたように目を見開いて知恵を見ていた。啓作との生活は知恵にとってそんなものだったのだろうか……。
が、当の啓作にはその返答は予想通りのものであった。
「そうか。君ならそう言うんじゃないかと思ったよ。やっぱり君のスケールは僕とは桁違いなんだな……。分かった。僕たちがこれからここに住まわしてもらう。借家人の名義を書き換えたいから、契約書とかを見せてくれないか。それから君の新居だけど、もし君が希望するなら僕が用意するけど。それとも自分で探すかい？」
「できればお願いします。いまさら、実家に戻るつもりもありませんし、ここと似たような条件ならどこでも好いですから……」
啓作の父、十三の会社は不動産の販売、賃貸も手がけていた。これぐらいどうにでもなった。
「分かった。じゃ、すぐに幾つか候補を持ってくるから……」
「どうもありがとう」
「いや、こっちこそ。知恵、変なことに引き込んでしまって申し訳ないことをした。本当に済まなかったと思っている。どうか許してくれ……」
「いいえ、啓作さん。啓作さんと知り合っていろいろ勉強になりました。私も私のことが少し分かるようになったし、たぶんいろいろ成長させてもらったと思います。こうなることはたぶん誰のせいでもなくて運命だったのだと思っています。芳子を幸せにしてやって下さいね。芳子のことを好きなのは今も変わってないんですから……」
「知恵ねえさま！　ごめんなさい！　わ、わたし……ど、どうしようもなかったんです……」

芳子が急に泣き出した。

「芳子、もういいのよ。すべて終わったこと。思い切りごしゅじんさまに甘えなさい。これからは誰に遠慮もいらないわ。ごしゅじんさまのすべてはあなたのもの。ごしゅじんさまはあなたのすべてを受け止めてくれるから……。それじゃ、お話はこれで終わりね。私、お部屋に下がらしてもらっていいかしら」

「あ、ああ。もちろん。だけど、引っ越しが済むまではできるだけ今まで通り一緒に食事をしてくれると嬉しいんだけど……」

「わかっています。啓作さん。……それじゃあ、芳子。今晩はごちそうになっていいかしら？　あなたが自分で選んだあなたの味で作られた料理を是非食べてみたいわ」

「あ、はい。どうぞ。それと、ど、どうもありがとう……」

芳子はまた泣きじゃくってしまった。

その二人を食卓に残し、知恵はベッドルームに一人入っていった。

第五章　豊穣多産

人と人間

「ぬし、相変わらず女を追いかけておるようじゃの」
「はあ、俗世で生き抜くためにクルマを売るのにやむなく」
「何をバカなことを。ぬしは相変わらずじゃの。このわしまでおなごのようにたぶらかそうとする。ぬしは単なる女好きというだけではないか。が、そちらの御仁はぬしとは違うようだの」
「和尚にはかないません。で、和尚にもそう見えますか、この男」
「ああ、何となくじゃが。で、今日はその御仁のことで来たのか？」
「そういうことです。よろしくお願いします」
伊集院啓作はいきなり深々と頭を床にこすりつけた。ここは宇都宮から北にかなり離れた名もない山のてっぺんにある山寺である。
啓作、浩一は、そこの本堂でこの寺の住職と寺の裏庭のよく見える和室で対峙していた。裏庭にはかなり大きな蓮池があった。
「なんじゃ、いきなり。それでは何のことかさっぱりわからん。ははあ。ぬし、また何か大それたことをやらかして、この御仁に尻ぬぐいでもさせる気なのじゃろ」
「さすが和尚。ご明察」
「ぬしは調子が良すぎる。ぬしをお調子者にした責任の一端はわしにもあると認めるがの。が、そうそういつも甘えさせるわけにもいかん。わしは知らんぞ」
「和尚、そう言わずに、救いを求める者を救うから仏門には立つ瀬があるのでしょうが。それに、これは私よりもこの男とある女の今後の一生を左右する問題なんで……」
「また、嫌なことを言いおる……」
「それにお願いといっても和尚にそんな無茶なお願いをしに来たわけではありません。ただ、この男に話をしてやって欲しいんです。以前、私にして下さったように……」
龍造寺浩一は呆気にとられてこの二人の会話を聞いていた。住職は、年の頃は四十ぐらいのがっしりとした男で、ゲジゲジのような

太い眉毛と大きな目が印象的だった。啓作が浩一とバーで飲んでから最初に訪れた土曜の昼下がりだった。寺の正面には石段があるのだが、啓作はそれを使わず、小さな林道の裏道を使って本堂境内のすぐ後ろまでクルマのまま上ってきた。その様子から参拝目的でないことはすぐ分った。

「ここにクルマを納めた。俺のお客さんだ」

啓作はこう説明した。なるほど上がりきったところには車庫があり、クルマが四台ほど並んでいた。

「で、ここで何をする？」

いぶかしく思った浩一が聞くと、啓作が軽く応じた。

「いわゆる説法をお前に聞いてもらう。他では絶対聞けない話が聞ける。それは俺が保証する。なにしろ俺の師匠みたいなもんだからな」

「師匠って、お前いつ仏門に入ったんだ？」

「ば～か、女の道の師匠だ。勘違いするな」

「え、だって坊さんなんだろ、その師匠って。アリなのか、そんなことって？」

合点のいかない浩一はさらに聞いた。

「だから、そういうことも含めてお前には勉強が必要なんだよ」

それっきり啓作は黙り、会話はとぎれた。

そして案内されるままに、何かイベントをやるために最近作られたような新しい建物の和室の広間でこの和尚と対面することになったという次第である。

「わかった。その代わり、嫁の下取りの査定、あと二十万上乗せせい。それで手を打ってやる」

「このクソ坊主！」

「わはははは、それとな、わしのクルマな、少々汚れとる。ぬし、これから営業所へ戻って洗ってきてくれ。それからオイルも交換して欲しいのう。サービスで。それからもちろんワックスも頼む

ぞ。最近水はじき悪いのでな。それから、夕方には檀家の集まりに行くんでクルマを使うからの。六時までには戻すんじゃぞ」

「か・し・こ・ま・り・ま・し・た！　お客様」

啓作は憮然とした表情のまま大声で返事をするとそのまま立ち上がり、さっさと外へ出て行ってしまった。

一人残された浩一は笑いをこらえながらその様子を見ていた。浩一には二人の関係が分った気がした。

「さてと、うるさいのは、おっぱらったぞと……」

和尚が言葉を続けた。

「ぬし、名前は？　いや、まずわしから名乗るべきじゃな。わしは、この寺の住職をしておる霊山清玄（よしおかせいげん）と申すものじゃ」

「私は龍造寺浩一といいます。あの……、今日は突然お邪魔して申し訳ありません」

「あん？　ああ……。ぬしはだいぶ啓作とは違うようじゃのう。そんなことは気にせんでよろしい。寺とは本来そういう場所じゃ。誰もが来たい時に来る。そこには強制も義務も占有も何もない。で、ここに来たのはわしの話を聞くためだと、あやつに言われたのか？」

「そんなところです」

すると清玄はしげしげと観察するように浩一を見た。その視線はまるでキリのように浩一を突き刺すものと浩一には感じられた。視線が痛い……。

「話とは聞く気持ちがあれば耳に届くもの。わしは時折勝手にしゃべる。おしゃべりが好きなのでな。ぬしはその流れからぬしが聞きたい言葉を拾うもよし、捨てるもよしじゃ。わしがこういったなどと後で何を言われてもわしは一切責任を持たん。よろしいかな？」

「あの、質問はいいのですか？」

「何にせよ、しゃべりたかったら、しゃべるがよろしい。別に禅の修行をするのではないから。ただ質問に対する答えはある場合もある。無い場合もある。無いからと言って誰が悪いということもない……」

浩一はいつのまにかこの清玄に全神経を集中していた。とにかく、あの曲者の啓作をあれほど見事にあしらった人間を見たのは初めてだったのである。清玄に対し、浩一は尊敬の念すら持っていた。

が、清玄の次の言葉は浩一を唖然とさせた。

「しかし、なんじゃな。啓作はよほどぬしが好きなんじゃな。もうこれは愛の領域かもしれん」

「えええ！！」

「ん？　なんぞ違うか？　そうじゃのう。ぬしには分るまいのう。いや、しかし、これほど見事な片思いも珍しい。わっはっはっは」

「私をからかってるんですか。私は彼とはそういう関係じゃありません。ただの友達です」

何でこんな変な言葉を口にださなきゃいけないんだと心底いらだちながら、そして少なからずためらいも感じながら抗議した。

「ぬし、人を好きになったことはあるまい。ま、羨ましいぐらいは思ったじゃろうがの。が、こどものうちならいざ知らず、羨ましいでは、人は成長できん。羨みは妬みじゃからの……」

浩一は何とか和尚の言葉を否定する言葉を探そうとしたが、見つからなかった。結局口を閉ざし続けた。

「啓作という男は、他人の心の機微に通じた男での。それは面白い奴だと思うが、可哀想な男でもある……」

最後の言葉は全く浩一の予想外の言葉だった。

「あやつには、人の心の機微に通じているが故に、他人の演技もよく見えるんじゃよ。偽りの心をのう。だから、大胆に振る舞うのもそういう自分を隠すための演技なんじゃ。だからあれの心は表と裏がきれいに別れておる。ああいうことになれば、たぶんあれはあれでそうとう悲しい思いを重ねてきたはずじゃ。ところがぬしときたら、これはもう表と裏の境目が全然ない。そのまんまなんじゃなあ。しかもちっとも自分を隠そうとしない。これを啓作が見逃すはずがない。ぬしに惚れたんじゃ……」

浩一には全く意外な話だった。

「じゃが、ぬしの質はそうそういいことばかりでない。ものや人間以外のものを相手にしているうちはそんなに困ることはないが、相手が人になったら相当厄介じゃろうのう。何しろ自分にウソをつくのが社交というものなんじゃから。そういう社交というウソでお互いに傷つけあうことを避ける知恵を身につけたのが人間なんじゃから。ぬしはその意味ではまだ人間ではないんじゃな。ただの人じゃ。人の間にいるのが人間、孤独な存在なのがただの人」

「……」

「啓作がぬしを心配したのは、ぬしがこのままいけばおそらく結婚できないと考えたからじゃろうのう。ぬしはおそらく妻を妻と扱えまい」

「どうしてですか？」

「人間のことを知らんからじゃ。家族というものを分かっておらんからじゃ。言ってみれば純粋すぎるんじゃなあ。水は何でも溶かす。溶かすことができるから水は貴重なんじゃよ。人も同じじゃ。そういう水みたいなところがあるから、許せるし、受け入れられるものなんじゃ。それが出来るのが人間。できないのが人。ぬしは水ではない。何も溶かせない」

浩一は言葉を聞き流そうとしたが聞き流せなかった。その言葉は胸の中に深く刻まれていった。自分の意に反して……。確かに人付き合いは苦手だ。その理由は一言で言えば恐れだった。自分も他人も誰も傷つけたくない……その意識は常にあった。家族でさえも最小限の接触にしたかった。自分の本心を簡単に言うべきではないと思っていた。それが自分にとっていいことだと思っていた。そんな心を見透かしたかのように清玄の言葉が続く。

「ぬしに必要なことは、思い切り己を他人にぶつけることじゃろうな。とにかく隠そうとせず、自分が傷つくことを恐れず、相手が傷つくことも恐れず……。うまくいけば、そこから次の道が見えるかも知れん。何故、人の間にあって人間になるのか、その意味が見えるようになるかもしれん」

追い打ちを掛けられた気分の浩一だったが、次の清玄の言葉は再び意表をつくものだった。

「しかし、難しいのう。ぬしの場合は。仏が悟りを得るために煩悩が必要だったようにのう。煩悩に自分をぶつけないと前には進めまい……。しかし、ぬし、何故にそこまで防御に徹した？　守ってくれるご両親はご健在なんじゃろう」

そう聞かれても浩一は何も答えられなかった。自分の家はどこにでもあるありきたりの家庭だという認識しかなかったからである。父はサラリーマンで無口であまりしゃべらないということが唯一普通ではないのかなと思うぐらいしか印象のない平凡な男だ。母もそれに近い。静かな家だった。ただ小さい頃は自分がうるさくするとそのことで怒られた。が、成長してからは自分も無口な家族の一員になった。兄弟もいないので本当に静かな家だったと思う。そのことで落ち着きはあった。友達や親の友人がたまに家に来ると騒がしくなり、いつも落ち着かなくなった。来客が嬉しくなかった。学校でも浩一は成績がよかったから、学校の成績で褒められることもなかったが小言を言われることもなかった。両親ともテレビ嫌いで結果として浩一もテレビへの関心は薄くあまり見なかった。ときどき話を聞いても、そもそも番組名も知らないので話題についていけず、またまた友人との溝を深くした。その結果、学校での友人にも、とりたてて仲のよい友達がいたということもない。部活でも特に積極的に親交が深い友人はいなかった。従って啓作という存在は、勝手によってくる、非常に例外的な存在であった。

「ぬしを見ていると、まるで研究所とか実験室とかで飼育されている動物を見てるようじゃな。純粋に野生と隔離されてるような・・・。といくらわしが言っても、ぬしにはわからんじゃろうのう。……さて困った。啓作がサジを投げた理由がわかった。煩悩が何かを知らん男に煩悩を教えるか……。いよいよもって難しいのう」

和尚は目を閉じて腕組みをした。

ややあってから、急に和尚は言葉と継いだ。

「ぬし、おなごは好きではないのか？」
「はあ、そうかも知れません」
「何故じゃ？」
「一緒にいても楽しいわけじゃないし、すぐ怒るし、うるさいし、機嫌悪くなるのも早いし……」
「これは筋金入りじゃな。困ったもんじゃ。……じゃが、ぬしはいずれ結婚するつもりか？」
「はあ、一応そう思ってます」
「なぜじゃ、おなごと一緒に暮らすのはぬしには辛いかも知れんぞ」
「こどもをつくるためです。でも、そう言われるなら、別にこどもなんかいなくてもいいかもしれませんね。じゃ、結婚もやめます……」
浩一は、本心、人が何故結婚するのかその意味が分からなかった。こどもを作るだけなら結婚なんか必要ないだろうとも思っていた。
「なるほどのう。そこまでの執着もないのか、生というものに。ぬしは、もしかしたら仏に仕えた方がいいのかも知れんのう……。が、それではおなごが一人可哀想なことになるんじゃったのう」
清玄はそんなことを呟くと両腕を組み瞑目した。裏庭の蓮池の向こうから時折ヒグラシの声が聞こえた。ようやく考えがまとまったのか、目を開き、聞かせるでもなく独り言でも呟くような調子で口を開いた。
「やれやれ、そうか、だから啓作はわしのところにぬしを連れてきたのか……。相変わらず策を弄する奴じゃ。仕方あるまい。今度ばかりは踊ってやるか。奴の考えた通りに。クルマのこともあるしのう」
和尚は立ち上がった。
「ぬしも参られよ」
その言葉で浩一も立ち上がった。

夜叉の夕食

清玄和尚は本堂から外へ出ると裏に回り、そこの立木の間に細くつながる獣道のような道に入っていった。

「時折、まむしがおる。一応気をつけられよ」

そんな言葉を言ったきり、後はただその道を歩いていった。

道はしばらく下りが続いた。両側はうっそうとした雑木林である。昼間でも薄暗く、夕方ともなれば、ライトが必要になりそうだった。もちろん、外灯などはどこにもない。道はまっすぐだったが、やがて平坦になり、さらに行くと再び上りの傾斜になった。どうやら隣の山の頂上に向かう尾根道のようだ。勾配がだんだんと急になり、それからまた緩やかになりしばらくすると目の前に右側に向いた小さなお堂があった。先ほどの寺よりはかなり小さく、しかも寺というより神社のような造りに見えた。建物全体が、二メートルぐらいの高さのある立派な柵で囲われ、また建物も普通の寺とは異なり、神社のように窓のない壁で覆われているのである。宗派がかなり違うようだ。清玄和尚は建物の正面に当たる右側には行かずに、左、すなわち建物の真裏側へと歩いていった。浩一も黙ってそれに続いた。柵の一画が木戸になっていた。それを押し開けるとそこには意外なことに下に向かって続く石段があった。つまりこの社は少なくとも二階建てであり、その一階部分へは真裏から入る構造になっているようだ。和尚に続いて浩一も石段を下りた。数段下りると、もうどこかの日本旅館のような玉石の敷かれた玄関があった。驚くほど宗教色がなく、普通の民家の玄関先のようだ。引き違いの戸を何も言わずに開け、和尚は中へと入った。かなり暗い中で和尚がどこかで電気のスイッチをいれた。小さな裸電球の寂しい照明が灯った。

「奇蘭（きらん）。おるか奇蘭。わしじゃ、清玄じゃ」

「はあい。ただいま」

玄関脇の部屋から女が現れた。やや濃い化粧、よく尼僧が着ている、透き通る黒がかかった白い着物を着ていた。だが、尼僧とは違い、この女は髪を下ろしてはいなかった。長い黒髪を垂らしていた。

が、美しかった。何でこんな美人がこんなところにいるのだろうと浩一は不思議に思った。

「清玄さま、今日は何もありませぬが……」

奇蘭がそこまで言った時、ようやく奇蘭も浩一の存在に気がついたようだ。

「まあ、お客様でございますの。どうしてこんな突然に……」

「まあそう言うな。わしとて突然押しかけられたのじゃから。この御仁はおぬしの客人じゃ。おぬしも見ればわかるじゃろ。どういう用向きか」

それを聞くと奇蘭と呼ばれた女は浩一に突き刺すような鋭い視線を一瞬浴びせた。が、次の瞬間、その視線は非常に優しいものに変わっていた。

「承りました」

「そうか。では後は任せた」

そう言うと清玄和尚は浩一に身体を向け、浩一にむかって続けた。

「ぬしは今晩ここに泊まれ。そしてこの奇蘭と共に過ごせ。あとは奇蘭がおぬしを導く。明日また会おう」

これだけ言うと清玄和尚は再び引き違い戸を開けて外に出て行った。

浩一は何か言おうと思ったが何も言う言葉が見つからなかった。この奇蘭という女性にも何を話していいのか分らなかった。が、先ほどの清玄との短い会話だけで奇蘭が今までの状況をすべて理解しているらしいということだけは分った。

引き違い戸が閉められ、奇蘭と浩一の二人だけの空間になると、先ほどとは全く違う親しみのこもった奇蘭の声が響いた。

「初めまして。私は夜叉（やしゃ）の奇蘭。どうぞよろしくね」

「え、あ、どうも。龍造寺浩一といいます。あの夜叉って何ですか？」

「夜叉ってね。まあ言ってみれば鬼のことかしら……。仏教の人が私を呼ぶときの言葉。いいのよ、そんなに難しいこと考えなくて

も。それに別にあなたをとって食おうなんてこと考えてないから。さあ、いつまでもそんなところにボケッと立ってないで、お上がんなさい」

先ほど見たときよりも、奇蘭はいつの間にかずっと若く見えた。今の奇蘭はまるで自分と同世代の女に見える。浩一はきつねか何かにばかされている気分になった。が、先ほどの和尚の言葉がいろいろな不安と疑念と好奇心を呼び起こしていた。人・人間、煩悩。そういうことに浩一は今まで関心を持ったことがなかった。家族については、居て当然、あって当たり前のものとしか思っていなかった。中身など考えたこともなかった。自分の関心は常に自分の興味のある「事象」であった。それは決して人ではなかった。人間関係でもなかった。物理学が対象として取り扱えるものだった。それ以外のモノに関心を持たなかった。自分は人間になっていない。ただの人であると言った清玄の言葉が強く胸に突き刺さっていた。さらに「妻を妻と扱えない」という言葉がそれに追い打ちをかけていた。とにかくここに来たことを無駄にしたくないという気持ちだけは持った。

通された部屋は和室だが、畳敷きであるということ以外あまり和室らしくはなかった。入り口には襖があるが、そこ以外には全く襖の入った面はなく、すべて壁なのである。床の間もない。殺風景な洋室のような和室であった。が、広さは八畳と洋室の広さもない。部屋の中央に座卓が置かれ、浩一は薦められるままに座布団の上に正座をした。

「いいんですよ。無理しなくて。おひざを崩して、あぐらになさってください」

奇蘭の言葉に浩一は素直に応じた。正座は苦手だった。

「何かお飲みになる？　といっても、日本酒ぐらいしかありませんけど。お酒がだめなら、お茶ぐらいしかありませんけど」

まるでどこかの料亭にいるような感じだ。だが、それにのめり込むには浩一の心にはさまざまな疑念がありすぎた。

ようやく意を決したように言葉を出した。ただでさえ無口な浩一

にとっては一大決心をして口を開いた。

「そんなことより、まず教えてもらえませんか。ここは何なんです。あなたが鬼ってどういうことなんです。僕はここで何するんです」

その必死さの滲む浩一の表情を奇蘭は面白そうに眺め、浩一が息を整えるのを待ってから、再び口を開いた。

「困った人ね。清玄さんがサジ投げるのも当然ね。ね、あなたどうしてそんなに他人に壁を作ろうとするの？　私がこわい？　あなた誰も信用してないでしょ？　あなたがここに連れてこられたわけは、他人の懐にいる味を覚えてもらうためよ。あなた自分の世界から出たことないし、出るのも嫌だって意地張ってるから。分かるかしら、その意味？」

浩一はただきょとんとした感じでそれを聞いていた。分らないのだ。奇蘭の言っている言葉の意味が。自分が何かを拒否しているという自覚は全くないのだ。自分のどこが他人と違うのか、そして清玄にしても、この奇蘭にしても、そして啓作にしても何で皆自分を見ただけで同じようなことを言うのか、分からなかった。

「分からないって顔してるわね。ね、じゃ、教えてくれる？　あなた旅行したことないの？」

「……旅行ぐらい、もちろん」

「そ、良かったわ。で、旅行は好き？」

「……いや、あんまり」

「どうして？」

「……落ち着かないから」

「どうして？　落ち着かないと嫌なの？」

「居心地がよくない……。好きじゃないです、とにかく」

「一人旅でも？」

「一人で旅行したことはありません」

「じゃ、親戚とかに一人で預けられたことは？」

「それなら、何度かありましたけど」

「どうだったの？」

「早く自分の家に、自分の部屋に帰りたかったです」

「どうして？　何も楽しいことがなかったの？」

「とにかく疲れるから。苦手なんです。周りに人が居るのが。一人が一番いいのに誰も一人にしてくれないし。お構いなくって、いくら言っても誰かが何のかんのと言ってくるし」

「それはね、あなたがあなたに自信を持ってないってことなの。あなた、あなた以外の誰も自分の世界に入ってきて欲しくないと思ってるの。そして他人も皆そうだと信じてるの。だから他人の領域に踏み込むのはこわいと思ってるのよ。分かる？」

奇蘭のこの言葉を聞いた瞬間、浩一には二つの全く異なる心の動きが現れた。一つはそうかもしれないという考えである。が、浩一自身、それに疑問を持った。もしかしたら、奇蘭を否定し、それで彼女を怒らすのではという遠慮で浮かんだ考えのようにも思ったのである。もう一つは、まるで自分が神経症のような精神病に侵された人間のように扱われていることの反発である。俺はまともだ。普通なんだと思った。が、真剣に話す奇蘭の顔を見るとどちらの心の動きからも言葉を発することはできなかった。

奇蘭は黙って、その浩一の様子を見つめ続けた。まるで浩一の中の葛藤を見透かすように。その気配に浩一の内面の怯えが一段と高まった。他人に自分の心を覗かれているという怯えだった。過去、自分が密かに一番恐れていたものだった。

「もう、やめてくれ。頼むから一人にしてくれ」

「あら、ここは私の部屋、私の空間なの。あなたには自分の意志を通す権利はないのよ。わたしはあなたをまだ解放してあげない。ここにいるの。私と一緒に。そして私に見られることがどういうことなのか、それが自分で分かるようになるまで。そしてあなたの心に私を住まわしてくれるまで」

浩一は思わず立ち上がった。そして唯一の出入り口の襖に向かって歩いた。

「逃げるの？」

背中に奇蘭の鋭い声が届いた。

さらに追い打ちがかかった。

「あなたは私よりも精神病院向きかもね、やっぱり」

「違う。俺はまともだ！」

思わず浩一は叫んだ。

「じゃあ、慌てて出ようとする必要はないでしょう。ここにはあなたを危険にするものは何もないのよ。ただ私がいるだけ。あなたは私が嫌い？」

浩一の奇蘭に対する感情を突然聞かれて、浩一は当惑した。これも分からないのである。もともと好き嫌いによる判断を嫌悪する傾向はあった。それは科学的態度ではないし、理性的なことではないと考えていたのである。だが、ほのかなあこがれや、妬みを感じることはある。だが、それらは常に無意識領域に押し込めていた。結局、彼にとって今までつきあってきたガールフレンドたちは、何らかの利害を一致させられる関係を共有できる存在にすぎなかった。それを肯定する表現が、浩一にとって「好きだ」という言葉になっていたのである。

が、当然奇蘭との間にそんな関係はない。判断基準は純粋に好き嫌いという自分の感情を論拠にするしかない。それも材料は第一印象プラスアルファぐらいしかない。返事を言える論拠が何も無かった。

返事を何も返せない浩一を見て、奇蘭はまた意外なことを言った。

「ごめんなさいね。それが簡単に言えるならここに来る必要はなかったんだもんね。いいわ、とにかくお座んなさい。後のことはあなたが少しずつ掴んでいけばいいことだから……」

その奇蘭の態度は、まるで母親が小さなこどもが駄々をこねているのを宥めるかのようなものに浩一には見えた。ムキになった自分が急に恥ずかしくなった。言われるままに再び座った。

「ありがとう。座ってくれて。とにかくあなたにお願いしたいの

は、この部屋に居て、私がここに居ても我慢してちょうだい。最初はそれだけでいいから……」

「それぐらいなら……」

と、浩一は言ったものの、実は浩一は言ったそばから、早くも落ち着きを失いかけていた。この部屋には座卓があり、奇蘭が居るほかは何もない部屋なのだ。窓も、絵も、テレビもない。見るものと言えば奇蘭しかなかった。

しかたなく、奇蘭を見た。

「ありがとう。やっと私のことをちゃんと見てくれたわね。でも、そんなに慌てなくていいわ。まだ見飽きるようになるにはかなりあるでしょうし。さてと、ちょっとごめんなさいね。お夕食の準備を少しだけしてくるから。あなたは一人で居たら落ち着くんでしょ。少し落ち着いてなさい。ここで」

奇蘭は立ち上がり襖を開けて部屋を出て行った。

一人になった浩一は占有の空間と時間を割り当てられたことでようやく本来の自分を取り戻した。疲労感が大きかった。そして次に来るのは、今日聞かされた、清玄と奇蘭の言葉である。彼らから見ると自分には明らかに欠陥があるように見えるらしいということだ。そして啓作もそれに気がつき心配していると。そのことは自分の結婚を危うくするものだとも言っていたように思う。

――……何故だ。何が俺の問題なんだ。どうして彼らはそんなことが言えるんだ……。

いくら考えても謎は相変わらず謎のままだった。

山奥のせいか、驚くほど静かな部屋だった。聞こえてくる音がない。いくら耳を澄ませても何も聞こえない部屋だった。鳥のさえずりもセミの声もない。九月中旬の山の中にある場所にしてはかなり異常だ。台所も遠いのか調理の音や水音なども全く聞こえない。浩一は座卓の脇で横になった。フシの目立つ天井板と電球の入った和紙で作られたライティングペンダントを見つめながら、さきほどの

ことを考え続けた。窓が無いので時間がどれほどたったのかわからない。ふと時間が気になって腕時計を見た。十六時五十八分。やはりまだ夜にはなっていなかった。が、占有の空間と時間の安心感とそれまでの緊張状態、そして静かで変化の無い部屋はやがて浩一を眠りに誘い込んだ。

「起きて下さい。ごはんができましたよ……」

頭の上から届いた奇蘭の声で浩一は目を覚ました。

起きあがり座卓の上を見ると、地味で質素な和食のセットが二膳並んでいた。奇蘭は一緒に食事をするつもりのようだ。ここはそもそも彼女の部屋なのである。だが、この状況は自分にとって異常であることは疑いないものの、彼女にとっても異常なのではないかと疑問に思った。一瞬口に出そうかとしたが、それはしまいこんだ。彼女のプライバシーの領域への立ち入りが過ぎると感じたのである。

「少し飲むでしょ。コップがいい？　それとも猪口にする？」

「猪口でいいです」

「そんなに畏まらなくていいわ。それから私のこと奇蘭って呼んでちょうだい。もし出来ればだけど……」

「え、あっ、はい」

二人は酒を飲み、食事を始めた。

食事は、一種の精進料理のようなものだった。浩一はあまりこういう食事を食べたことが無かった。どの料理にもはしをおそるおそる当てながら食べていた。

その様子を見ていた奇蘭が言った。

「あなたにおいしい？って、聞いたらダメね。え～っと、どんな味を感じるか、私に話して」

「何て言えばいいか……。すごく変わった味です」

「そう、変わった味なんだ。あなたにとっては。あなたはどんな食べものが好きなの？」

「マックのハンバーガーとか……」

「それはどうして好きになったの？」

「小さい頃、親に連れられて、そこで食べたらとってもおいしくて。それにおもちゃがもらえて楽しかったし……」

「うんうん。なるほど、わかるわ。で、おうちで食事が楽しいって感じたことは無かったんでしょ？」

図星だった。音を出すことに注意をし、はしや茶碗の持ち方をチェックされ、当然テレビも見ないで、会話することもない家での食事はどちらかと言えば苦痛だった。もっともそれは古い記憶である。慣れてしまえば何ともなかった。

「でもそんなもんでしょう。家での食事なんて……」

「そうかもね。いいわ。で、今、食べてるものなんだけど、何の味か分かる？」

浩一は首を振った。料理に興味はなかったし、どこかで食べたことはあるという認識はあったが、全くその味と材料の関係は分からなかった。

「分かりません」

「じゃ、教えてあげるわ。これが里芋ね。これはね。三月にこのすぐ入り口脇の菜園の隅に植えたの。今頃が一番おいしいのよ。この芋は一番端っこで花を咲かせたもので、さっき私がとってきたの。花が咲いたときはね、これが一番きれいだったのよ……。それからこっちの煮付けは大根ね。ちょっと前に収穫したものだから、鮮度が悪いんだけど。ここの奥の貯蔵倉に入れてたものなの。七月に収穫したのよ。先月種蒔いたのは十一月にならないと収穫できないのよ。大根は畝（うね）を深めに作らないといけないから結構重労働なの。掘るのも大変。今日ここに出したのはその中でも一番私を手こずらせたやつなの。もう、何度も途中で折ろうかと思ったんだけど、でも悔しいじゃない、大きくしたのを諦めるなんて。でも、食べるときは小さく切っちゃうのにね。本当はどうでもいいことなんだけどね。だけど大きいってのは栄養もよく取ってるってことだから、きっと他のものよりもおいしいと思うわ。大根の場合は生で食べてもある

程度分かるけどね。特に収穫した直後なら……」

奇蘭の説明は、料理の説明というより、今ここに並べられている料理の食材そのものが、この世に生まれて、ここに料理として並ぶまでの全プロセスに及ぶ食材の履歴のようなものだった。つまりこれらの食材を育て、収穫し、調理したのは全て彼女なのだ。買ったものは、若干の塩や油などの調味料ぐらいで食材というものの中には何もなかった。米、とうふ、みそ、醤油も例外ではなかった。そして彼女はたくさん並ぶ同じ材料の各プロセスーすなわち、間引き、収穫などの中でなぜそれを選んだのかという理由も語っていた。

料理のことなど興味はないし、そもそもそんなものを知りたいとも思っていなかった浩一も、その意表をつく説明に途中からだんだんと身を乗り出さないわけにはいかなくなった。最初はあぐらだったが、途中で正座に変わった。そうしなければ聞けない話だと思った。一つの野菜に、一つの料理に長い物語があるということを知らされた。それはどの野菜にも、どの食材にもある当たり前のことなのだろうが、自分が全く意識したことのない世界であった。理由はわからないが、久しく忘れていた「感動」という現象を少し味わった。

「どう、こういう話を聞いて、料理を食べるのも新鮮でしょ」

新鮮どころではなかった。浩一はなぜ感動したのかようやく理由が分った。奇蘭が食材としてそれを選ぶ判断基準は自分に一番おいしいものを食べさせようとしたことだと思ったからだ。

「すみません。僕のためにそこまでして頂いて……」

思わず口走った。

「ありがとう。でもね、それは違うのよ」

「え?」

「わたしにとって生きるということはそういうことなの。それはあなたがいたから、あなたがよろこぶのが私のよろこびになるから、わたしがわたしのためにやったことなの」

「……」

「あなた、さっき家での食事が楽しいもんじゃないって言ったけど、それはあなたが気がついていないことが多かったっていうことだけかも知れないのよ。あなた食事をするとき、それがどんなふうにそれが用意されたか、今までに何か考えたことあった？」

浩一は黙って首を振った。

「あのね。言葉で表せることは少ないのよ。料理に関しては。いくらおいしいとか、うまいとか言ってもらっても本心かどうかは作った本人にはすぐわかるのよ。そして料理の評価っていうのは食べた時の味がすべてではないの。人が人の為に作るんですから。そこには必ず心の交流があるはずなのよ。あなたはあなたの目の前であったことも見えていなかったのよ。ここに来て私がそういうことを具体的に話したらやっとそういう世界があるって気がついたんでしょ。わかる？　私の言っている意味？」

「……思いやり、ですか」

「そう、その通り。もう一つ言えば、思いやりを思いやる心」

「思いやりを思いやる心……」

「まあ、いいわ。食事でここまで理解ができたら大進歩。さあ、冷めないうちに召し上がれ」

その言葉は少々遅すぎ、ほとんど全ての料理は冷めていた。だが、浩一にはそれでも忘れられない味だと感じていた。味覚のことはよくわからないし、料理もごはんも、本当のところおいしいとは思わなかったのだが、これは決してまずいとは言ってはいけない味なんだと思った。

食べ終わった時、素直にこう言った。

「たいへんご馳走になりました」

もし説明を聞いていなかったら決して出なかった言葉である。何しろ、品数も少ないし、材料も貧相な食事だったのだから。だがそんなことはどうでも良かった。

「お粗末さまでした……、ってね。いやだわ。本当にお粗末な食事だったのに」

奇蘭は笑いながら、片付け始めた。

食べ終えた汚れ物一式と奇蘭が部屋を出て行った。再び浩一は部屋に一人取り残された。が、先ほどの時とは浩一自身が違っていた。寂しさを感じていた。奇蘭がここにいないことが苦痛だった。それはまだわずかなもので注意しないとわからないほど微弱なものであったのだが。

地底の奇蘭

一人になって再び浩一は横になった。浩一は奇蘭の語ってくれた料理の話を思い返した。何度も何度も奇蘭の声が頭の中で蘇った。中身はそれほど面白いものではない。種を蒔いた。水をやった。肥料をやった。雑草を取った。虫がついたものをのけた。花が咲いた。良いものを選んで収穫した。そしてそれを調理した。それだけのことだ。何もかも当たり前のことだ。が、何故か自分はそれに感動してしまった。それはものすごく懐かしい感覚だった。しかし、それに結びつく記憶は何もない。どうしてそういう感情が湧いたのかは分らなかった。むしろ表面的なこと、奇蘭の表情や仕草、声ばかりが強く記憶に残った。

「浩一さん、こちらへどうぞ」

襖の外側の遠くで叫ぶ奇蘭の声が部屋の中の浩一に呼びかけた。

立ち上がり、襖を開けた。だが、奇蘭の姿は見えない。すると玄関から奥に続いた薄暗い廊下の先から、再び奇蘭の声が聞こえた。

「こっちですよ」

突き当たりは左右に分かれ、左は台所のようだ。右を見るとそこに奇蘭が立っていた。ただし、先ほどまでとは少し違っていた。髪を上げ、結っていた。そして透き通る黒の襦袢を脱ぎ、白い着物姿になっていた。

「さあ、どうぞこちらへ」

彼女が指し示すところにはさらに奥に続く通路があるようだ。

浩一は言葉に従って左に続くその空間へと入った。

「あっ」

思わず声を上げた。建物の外に出ていた。だが、外は外でも様子がおかしい。真っ暗な空間である。それに、空気が違う。外気にしてはやけにひんやりとしている。そして先ほどの、自分が出した声が大きく残響を残していた。

「驚かれました？　ここは自然に出来た洞窟の中にある建物なん

です。その端っこの上に祠を一つ作って置いただけみたいな建物で。変わってますでしょ」

「いったい誰が？」

「さあ、かなり古くからあったものを修復しながら使ってたから。起源みたいな話は私も知らないの。それにおそらくそれは伝えられない秘密だったんでしょうね」

「秘密？」

「ええ、ここのことはすべて秘密。今でも似たようなものだけど」

「何故？」

「破門された宗派だったから」

「破門……」

「そう、いわゆる邪教なの。この祠が祀っている神様は」

「へえ、そんなものがあるんですか。じゃ、清玄さんは？」

「祠ごと何もかも匿ってくれてるの。ここは本当は隣の山とは無関係で、寺も全然関係ないんだけど、この山全部を隣のお寺の敷地ということにして、外からこの祠に通じていた道は全部塞いで」

「そこまでして、いったい誰から匿ってるんです？」

奇蘭は少し笑いを浮かべて言った。

「好奇心よ。世間の。私もここの信者さんもみんなそっとしておいて欲しいの。生活を乱されたくないの。ただそれだけ」

おもむろの奇蘭の手が動き、どこかのスイッチを入れたらしい。自分が今どんなところに立っているのか、浩一にもようやく確認できた。そこはまるで戦時中の防空壕か、あるいはトンネルの工事現場への通路のようなところだった。壁はコンクリートで塗り固められているが、それは分厚いものではなく、人間がコテを使って手作業で仕上げたもののようだった。その壁に電線を入れたパイプが取り付けられ、数メートルおきに金網で保護された電球が光っている。幅一メートルほどの通路は緩やかな傾斜で下りながら左にカーブしていった。

「さあ、こちらよ」

奇蘭が浩一の前を進む。
「いったいこれから何を？」
「おふろ」
「え、こんなところに？」
「そう。はい、ここ。入って」
通路の右の壁に小さな木戸が取り付けられていた。そこを開けるとなるほど中から熱気が出てきた。
「温泉だったら嬉しいんだけど、温泉はないの。だけど、地熱がかなりある岩が埋まってるのが見つかったの。とっても大きな石で、いつもその表面は八十度ぐらいあるの。たぶん、真下からの高温の熱気か水蒸気で暖められてるらしいわ。それでサウナを作ってもらったのよ。だから身体をこの部屋で暖めたら、この先の池に入って。この山、湧き水は少ししかないから、水は隣から簡易水道で引かしてもらってるの。だから本当は温水にしたいんだけど、そんなに沢山分けてもらえなくてね。こんな変なことになっちゃってるの。我慢してね。だけどそれでも疲れはとれるわ。それと身体を洗うのはそこのシャワーでね。電気で沸かしたお湯がタンクにある間だけ出るわ。そんなに長くはもたないけど」
浩一は中に入った。そこは脱衣所のようだった。中央に吊された小さな電球が唯一の照明だ。右にはサウナ室らしい木のドアがあり、左にもう一つ同じようなドアがある。おそらく池への通路になっているのだろう。
「ねえ、私もご一緒しちゃいけない？」
背中から奇蘭の声がかかった。
「もちろん、変なことしないわ。ただ、いつも一人だから。時にはお話しながらサウナもいいかなって……」
躊躇はあったが、そう言われると拒否はできなかった。こんなところで女一人が暮らすということがどんなものなのか、その想像がつかなかったが、たぶん大変なことなのだろうとだけ思った。
浩一はただ黙って頷いた。

「ありがとう。ね、服、脱がしてあげましょうかって、言いたいけど、今のあなたにそこまで望めないわね。いいわ、自分で脱いで。でも、できたら私が服を脱ぐところを見て欲しいんだけど……」

奇蘭はまたもや意外なことを言った。恋人でもない自分に、なんで奇蘭はこんなに無防備なのだろうとただ呆れた。自分を男と認めていないのかとも思ったが、それにしては、自分が服を脱ぐところを見て欲しいという意味がわからなかった。とにかく、こんなことを聞かされては奇蘭の前で服を脱ぐのを躊躇うわけにはいかないとだけ思った。それでとにかく着ていたポロシャツとジーンズ、下着をさっさと脱ぎ捨てた。

「まあ、さすが男性は早いのね。じゃ、こっちを見て頂戴。なかなか面白いものが見られるんだから」

いくら何でも女性の裸を全然見ていないというほどウブではない。なんでそんなことを言うのかと思って、言われるがままに奇蘭を見た。奇蘭は電球直下の一番明るいところに立って、背中を浩一に向け、やにわに白い着物をすべらせ足下に落とした。

「あっ」

浩一は息を呑んだ。現われた奇蘭の背中には、女性の彫り物があった。だが、その図案はよく見かける浮世絵のようなものではなかった。その顔も日本の絵の中に出てくるものとは似てはいるが違うようだ。女性のまとう衣服も、日本のものではないようである。それは古代ペルシャやインドとかを連想させるものだった。女性は、木の横に立っている。木には何かの実がなっている。いわゆる樹下美人の構図である。

「変わった彫り物ですね……」

「私が夜叉としてお仕えしてる神様というか仏様というか、とにかくそういうものよ。さあ早く入りましょう。続きの説明は中で」

奇蘭は全裸の裸身を揺らし、木戸を開けて中に入った。

浩一もそれに続いた。が、奇蘭の背中から目が離せなくなった。まるで樹下美人の虜にされたような感じだった。

熱気のこもった狭い空間で最初奇蘭と浩一は並んで長いすに腰掛けた。その三畳ほどの板張りの空間に小さな電球だけの寂しい照明だけがあった。だが、浩一は隣に座る奇蘭の背中が気になってしかたがない。身体を反らすようにして横目で見ようとする。浩一の様子に奇蘭が気がついた。

「あら、もっとこれが見たいのね。じゃ、ちょっと待って」

奇蘭は長いすの端で背中を浩一に向けるように座った。

「これならいいでしょ」

「この女性は？」

「ヨニという名前って言ってたわ」

「誰が？」

「私の父。もう他界したけど。これを描いて彫ったのは私の父なの。私はこれと一緒にここに奉納されたの」

「じゃあ……、もしかしてこの女性がここの……」

「そう。ご神体というわけ。だから私はいつもここに居なくちゃいけないの」

「で、いったいこの神様って、何の神様？」

「ありきたりなのよ。豊穣と子孫繁栄。昔、多神教が当たり前だった時代にはどこにでもいた普通の神さまだったのよ。ローマのビーナス、ギリシャのアフロディテ、ゲルマンのフライア。昔、冷害かいなごか何かで飢饉になった時に生まれたんですって。だから本当は豊作祈願だったのよ」

「で、それがなんで邪教なの？　あ、そうか……」

「そう。セックスが神に通じる行為なんて言い出したら、日本で、ただで済むはず無いでしょ。ここは儒教倫理が強い国なんだから。インドじゃなかったのよ。ヒンズー教の寺院みたいにセックス中の男女の裸体像をかざりまくっても、誰も文句を言わないような開放的な国じゃないの。で、そんな中で、ヒンズー教みたいなこと言い出したらどうなるかわかるでしょ。で、破門されちゃったの。仏教から」

「仏教から？」

「ええ、元々は托鉢して回っていたお坊さんが布教し始めたらしいわ。だから流れから言えば一応仏教から生まれてるの。ヒンズー教とも兄弟みたいな感じなんでしょうね。きっと」

サウナの熱気で、発汗が盛んになった。奇蘭の背中も汗のたまがびっしりとなった。そしてそのことが背中のヨニの表情を変え、まるで泣き顔のように見せた。浩一には、今の奇蘭の邪教の説明が彼女を泣かせたように思えた。なぜそこまで疎まれなければならなかったのか、と彼女は言っているように思えた。

浩一は不思議な気分を味わっていた。今までの自分なら、こんな状況であれば欲情を抑えるべきかどうか、少なからず悩んでいたはずである。もっとも今までの彼なら、そもそも、どんなことがあってもこんな状況に我が身をさらしてはいなかったはずだ。とにかく異常な経緯があったから生まれた状況なのだ。その異常さに輪をかけたのが奇蘭の背中にあるヨニの彫り物である。ヨニが何かを浩一に向かって話しかけている……。そんな気がしてならないのだ。おそらくそのせいで、奇蘭の裸身をずっと見ているにも関わらず欲情がちっとも湧かないのである。奇蘭をきれいだと思ったが、それまでなのである。抱きたいという欲望が生まれない。ただずっと見ていたかった。その背中を。

「もうそろそろいいでしょ。池にいきましょう。これだけ汗が出たら十分よ」

奇蘭が立ち上がった。背中に見とれる浩一も自動的に立ち上がった。そして夢遊病者のように奇蘭の背中を追った。

サウナ室を出て、もう一つのドアをくぐるとそこはかなり広い空間になっていた。奇蘭が電気を点けると、ちょっとした大浴場ぐらいの大きさの地底の池があった。奇蘭は池の中へ続く階段を下り、そのまま水の中へと入っていった。背中を追う浩一もそれに続く。

「うわっ。つめてぇ」

浩一が水の冷たさに思わず声を上げた。

「冷たいでしょう。一年中十五度ぐらいなの。地中から出てくる湧き水が溜まった池なのよ。でも湧水量は少ししかないからじゃんじゃん使うってわけにはいかないの。だからサウナの沐浴専用にしちゃったのよ。でも一度全身が痺れるぐらい浸かってから出るととっても気持ちがいいのよ」

奇蘭は肩まで水に入った。

それを見て浩一も続いた。

透明な水を透かし、奇蘭の水中の身体を、電球の光が意外なほどきれいにそしてはっきりと見せていた。

その視線に気がついた奇蘭が続けた。

「浩一さん、どうやらこの子が気に入ったみたいね。ね、そうでしょ……」

黙ったまま返事を返さない浩一に奇蘭はさらに続けた。

「そういうのを本当の意味で『好き』っていう状態なのよ。あなたの今の目はね、惚れたものを見る目だわ」

「惚れた？　その彫り物に？　だって彫り物なんだろ？」

「ちっともおかしくいわよ。名画と呼ばれる絵の中の女性に惚れる人なんてざらにいるわ。あのねえ、こういうものはね、自分の心の中に埋もれていた感情を引き出すものなのよ」

「え、僕の心の中？」

「そう。たとえばあなたの理性が押さえつけていた感情みたいなもの。この子のことがそんなに気になるんだとしたら、あなた本当はものすごく母性へのあこがれが強いのかも……」

「母性？」

「そう。だってこの子はねえ、すべての母みたいな存在らしいから……。ね、キスしたいならいいわよ。させてあげる」

奇蘭はそこで立ち上がり、背中を浩一に向けた。

浩一は自分でも驚くほど素直にその動きに反応した。奇蘭の言葉は彼の本音をズバリついていたのである。背中に顔を近づけ、その絵を、いやヨニを間近で見つめた。会ったこともないはずなのに、

どこかで会ったことがあるような気がした。何かを語りたい表情に見える。何かを自分に向かって言おうとしている。それは感じた。だがその中身は分らなかった。

背中に顔を近づけたまま、何もしない浩一に、奇蘭が聞いた。

「どうしたの？」

「いや、何か言おうとしてるように感じたんだ」

「まあ、あなたすごいわね。分るんだ」

「え、何が？」

「そうよ、この子はね。これから真理を語るところなんですって」

「真理？　真理って何？」

「それはわからないわ。たぶんこれを見る人見る人で全部違うんでしょうけど。真理なんて決して一つじゃないはずですもの」

「そうなのか。そういうものなのか」

「ええ。で、これでいいの？　キスはしなくてもいいの？」

「ああ。何かキスをするような相手じゃないって感じなんだ」

「そう。ふーん。それって、どういうことかしらね。面白いわ。あなたの反応」

「君はこういうことをしょっちゅうやってるのかい？」

「まあね。一種のおつとめみたいなものだから。だってご神体を拝みたいってなったら、こうでもしないと見られないでしょ。ストリップショーじゃあるまいし。邪念抜きでご神体と対面したかったら」

「なるほど。でも、君襲われたりしたことないの？」

「あってもいいのよ。だってそういう宗派なんですもん。セックスはお供えになるの」

「なるほど。君が男と一緒に風呂にはいっても平然としていられる理由はそれか」

「そうね。どっちみちそうしないと女は生きていけないでしょうし。男が必要だもの」

「でも好きな男なら、だろ」

「それは違うわ。女を好きにさせるのは男なの。女が最初に好きとか嫌いと判断したものは軽すぎるの。女が女であるためにはね」

「男が女を好きにさせるって、どういう意味？」

「女はね。男の欲望があるから女でいられるって意味。そういうものが無いところでね、いくら女が好きだとか嫌いだとか言ってもとっても虚しいだけなの」

「じゃあ、愛し合うっていうのはウソなのか？」

「それはね、最終段階というか、結果を表わす言葉ね。最初にそんな言葉が使えることはまず無いわ。現実問題としては」

「結果？　何の？」

「男が何をどれくらい愛したかの」

「奇蘭の話はむずかしいね。やっぱり分らないや。悪いけど」

「じゃあね。もう少し分りやすく言ってあげるとね、例えばあなたのお父さんとお母さんは愛し合ってると思う？」

「さあ、たぶん」

「どうしてそう言えるの？」

「……どうしてって」

「ね、わからないでしょ。そういうものなの。つまりね。結婚して、子どもがいて、幸せそうな外見の夫婦でも、本人同士が愛し合ってるかどうかとは全く関係ないのよ。たとえば暖かい家があって、収入があって、生活に心配ないからっていう、それだけの理由で夫婦生活を維持している人なんていくらでもいるものなの。決して愛情だけじゃないの。残念だけど、人間の社会ってそういうものなの。それをそのまんま認めたのが仏教で、それは違うと言ったのがこの子だったってこと。仏教では個人や社会を乱すものはみんな煩悩にされちゃうけどね。でもそういう煩悩の中にも人間が人間でいるために絶対必要なものもあるって考えちゃったわけ」

「じゃ、君のとこの宗派でいくと、愛が無い結婚こそ悪だ、みたいな考え方になるわけ？」

「まあね。それに近いわ。だけど愛がある、無いは当事者たちの

努力が大部分なの。だから愛が無いからという言い方は正しくないわ。愛を作り出そうとしなかった、あるいは努力が足りなかったって言い方でしょうね。正しくは」

「じゃ、愛のための努力って？」

「あれよ。思いやりと思いやりを思いやる心」

「思いやりは分るけど、思いやりを思いやる心って？」

「相手に届くから思いやりは意味があるの。相手に届かない思いやりは意味がないでしょ。で、思いやりが相手に届くために必要なものは？」

「あ、それで思いやりを思いやる心か」

「そういうこと。ところで私のことを思いやってくれない。ちょっと寒いんですけど」

「え、あ、すまん。じゃ、上がろう」

「いや。そうじゃないの。抱いて、私を」

「えっ、いいのか？」

「さあ、早く！　ぐずぐずしないで！」

強く叱責されて浩一は奇蘭を背中から覆うように抱きすくめた。

「ああ、気持ちいいわ。あなたのぬくもり。どう、あなたは？」

浩一は胸と腹に奇蘭の体温を感じていた。確かに気持ちが良かった。

「ああ、暖かくて気持ちがいい……」

「これがぬくもりを求め合うこと。だけどあなたは少なくとも私に言われてからこうしたから、まだ私への思いやりが十分じゃないわ。私が言う前にそうしなきゃいけなかったの。本当はね。さっきキスしていいわよって、私が言った時に」

「……」

「まあ、いいでしょ。ぬくもりだって知らなかったみたいだし。ぬくもりがいいものだってことが分ってもらえば十分よ。気にしなくていいわ。さあ、上がるわよ」

が、浩一は抱きつかせた手を離そうとしない。

「まあ、どうしたの？」
「わからないけど、もう少しこうしていたいんだ……」
「あら、あなた泣いてるの？」
首筋に熱いものを感じた奇蘭は聞いた。
「ああ、理由が分らないけど……。涙であることは間違いない」
「良かった。ここに来たことが無駄にならなくて」
「え、何で」
「それはあなたの凍っていた心が融けた証拠。心配いらないわ。でもね、悪いけど、私、本当に寒くてしょうがないの。あなたに付き合ってあげたいけど、もういい加減あがらして。お願いだから」
浩一はようやく奇蘭を離した。すると彼女は、振り返ると浩一の手を取って強く握った。そしてそのまま階段にむかって、水をザブザブいわせながら浩一を引いていった。奇蘭の背中のヨニが、浩一に再び微笑んだ。
すっかり身体が冷えていたので、結局二人はもう一度サウナに入った。熱い部屋の中で、奇蘭が思いがけないことを言った。
「ね、さっきみたいに、また抱いてくれない？」
「え、こんなに熱いところで？」
「いいから。やってみて」
奇蘭の意図がよくわからないまま、奇蘭を抱いてみた。
「どう、熱い？」
「いや……、不思議だ。熱くない。でも何で？」
「ぬくもりはね、外が熱いとか寒いとかとはあんまり関係ないの。だって体温っていつも一定なんでしょ」
「あ、そうか。それで気持ちいいのか。サウナの中でも」
「また一つ覚えたわね。人のことを」
奇蘭はそう言って、抱かれた腕をふりほどくと、今度はいきなり浩一の顔に自分の顔を近づけた。
「ごめんなさい。わたし、もう我慢できないわ」
そう一言言うと、浩一の首に両腕を巻き付けて抱きつき、自分の

口で浩一の口を塞いだ。

浩一はそれでも冷静だった。先ほどと違ってヨニを見ていなかったせいかもしれない、と自分で思っていた。冷静にモノを考えることのできるいつもの自分がいた。考えた。奇蘭のことを。いま、どうすることが彼女に対する思いやりになるのだろうかと。だが、彼女にそれだけのことをする価値が自分にあるのか、そもそも自分は彼女にとって何なのか、浩一は知らねばならない課題はまだたくさんあるのだと思った。

一向に反応を返さない浩一の様子に、奇蘭が気づいた。

浩一の目をのぞき込むと、口を離し、またしても意外なことを言った。

「ありがとう。いろいろ私のことを心配してくれて……。でも、あなたすごいわ。そこまで自分を冷静に見られるなんて。いい和尚さんになれるわ。きっと。でもね、一つだけ覚えておいて。他人のぬくもりは、もっと深いぬくもりを欲しがらせるものなのよ。誰にとっても。そのことだけは覚えてね。じゃ、ここは、もう出ましょ」

二人とも全身、汗でびしょぬれ状態だった。奇蘭が背中を向け、ヨニの顔が目にはいると、浩一はまた動悸が高鳴る気がした。どうやらヨニには自分の中の何かのスイッチを入れる働きがあるらしいと、ようやく浩一も気がついた。

二人はサウナから出て一度池に浸かると、まず奇蘭がシャワーを使った。

それから浩一が同じようにシャワーブースに入り、身体を洗ってから出ると、脱衣所には奇蘭がそのまま待っており、ハンドタオルを差し出した。

「ごめんなさいね。バスタオルはないのよ。ここ」

そういう奇蘭は着物を着ず、裸のままである。

「服、着ないの？」

「どうせ、あなたと一緒に寝るつもりですもの。いらないでしょ。ぬくもりの邪魔になるだけ」

そう言ってにっこりと微笑む。彼女の前で躊躇いという感情を持つことは無意味らしい。

こうなると浩一も服を着てはいけないことになる。

浩一は簡単に自分の身体をタオルで拭き取るとそのままタオルを奇蘭に返した。

奇蘭はそれを入り口横のバケツに放り込むと再び通路への木戸を開けた。

「こっちよ。ついてきて」

二人はバスを出た。

捧げられしもの

浩一自身気がついてはいなかったが、今まで浩一は他人を自分の心に住まわせたことは一度もなかった。奇蘭は初めてそれに成功した他人になった。奇蘭が何を言っても、何をしても、浩一はもう怯えも怒りも葛藤も何も感じないまま、素直に彼女を受け入れることができるとともに、自分もまた彼女が自分をどう見るかを気にせず、自分の考えでしゃべり自分の思うままに行動できるようになっていた。

奇蘭の寝室はバスルームのすぐ近くにあった。あの通路の少し先にある空間だったのである。だが、その寝室は寝室にしては相当異様であった。奇蘭が電気のスイッチを入れると浮かび上がったのは、壁を大きくくり抜いた空間である。丁度ベッドぐらいの高さになるようにまさに寝台となる空間がくり抜かれている。それはまるで昆虫のまゆのような輪郭をもっていた。その壁を見上げるように緩く傾斜のつけられた床が下っているのだ。床に立つ者からすると、壁に開けられた空間は、そこだけが照明によって浮かび上がる、見上げる先にある空間になっているのである。

「驚いた？」

奇蘭が振り返って浩一に突然尋ねた。

「ああ。これは……」

「言ってみれば三方みたいなものかしら。私用の。この空間にいる時の私が本当の意味でのここのご神体という状態になるの」

「じゃ、こっちの床がこんなふうになってるのは？」

「そう、私を拝みにくる信者さんたちのスペース」

「信者さんって沢山いるのか？」

「もう十数人ね。もうお年寄りばっかり。みんな死んじゃったわ」

「何故？」

「清玄さんとの約束で一切入信勧誘とか、布教とかはしないことになってるから。今居る信者さんしか、ここに来られないことにな

ってるの」

「じゃ、君が襲われるようなことはまずないんだ」

「そうね。残念ながら……」

「残念？」

「そう、残念なのよ。私にはね。それで人を救うのが私なのよ」

「そうか、そういうもんか。じゃ、俺みたいなのは例外なんだ」

「そういうこと。清玄さんたら、ここと私を診療所みたいなもんって考えてるの。もっともそういう人をここに連れてくることなんて滅多にないけどね」

「診療所……。じゃ、俺も病人みたいなものと思われたのか。あの清玄さんに……。いったい俺のどこが悪い？」

「悪いところがないのがあなた。でもそれって人間らしくないのよ。普通の人間は弱いところを人にさらすことで救いを得るの。あなたは聖人君主向きね。まあいいわ、さあそこの上に上がって。寝ましょう」

奇蘭が先にその空間に入り自らの身を横たえた。

浩一は照明で浮かぶあがる空間に横たわった奇蘭の身体に目を奪われた。きれいだと思った。今、背中は下側にまわっている。従ってヨニは見えない。今までヨニに注意力を奪われていたため、奇蘭そのものには関心があまり向かなかったのである。

横で立ちつくしたかのような浩一を見ると奇蘭はいきなり右手を伸ばし、浩一のペニスを手でつかんだ。

「あっ」

と、浩一は声を上げたが、次の瞬間、全身から力が抜け、奇蘭の横に倒れ込むように身を横たえた。

「うふふふ。良かった。反応が普通になって。これなら大丈夫ね」

「えっ、どういう意味？」

「昔から『急所をつかむ』とか、『タマをつかむ』っていう言葉を使うでしょ。肝心なことを押さえるって意味で」

「ああ」

「あれって文字通りの意味で事実なのよ。普通の男はね、今みたいにペニスをつかむともうそれだけでおとなしくなっちゃうのよ。こんなふうにされて、なお暴れる男なんてまずいないわ」

「じゃ、大丈夫の意味は？」

「ここに来た時のあなたはね、もし今みたいに私がしても、たぶん何にも感じないで手を振りほどけたでしょうね。あなたの理性はね、あなたの身体の欲望とか欲求とかを徹底的に無視するものだったから……。でもそれってね、お釈迦様とか、偉いお坊さんがね、いろいろな煩悩を克服して初めて得られるようなものなのよ。本当は。あなたがそんな状態だったのは、要するにあなたが赤ん坊みたいに何も知らない状態だったからなの。今、それがそうでなくなったっていうことはね、あなたが少しいろいろなことを分かるようになったっていうことなの。だから『大丈夫』って言ったのよ」

奇蘭は浩一のペニスをもてあそびながら語った。浩一はその言葉をなるほどと思いながら聴いた。確かに奇蘭の手で刺激を受けるペニスは興奮し硬度を上げるが、一方、浩一の全身では、ある種のけだるさ感がどんどん増しているのだ。この空間に入り込んだ最初は気が昂ぶり、まだ寝られるような状態でなかったはずなのに、奇蘭につかまれてからはそれがそうでなくなっていた。自由に身体を動かすことすらままならなかった。身体が重く感じられた。まさに奇蘭にタマをつかまれた状態の浩一だった。自分の身体なのに知らないことが随分あるもんだと浩一は妙な感慨を覚えた。

それを見抜いたかのように奇蘭が続けた。

「ね、他人はね。自分の知らない自分を教えてくれる存在でもあるの。だから他人を受け入れるっていうことは自分のためにとっても重要なことなの。わかるでしょ。もう今のあなたなら」

そう言うと、奇蘭はようやく手を離した。

すると浩一はその失った刺激を求める飢餓感のようなものを感じ、思わず奇蘭の身体に自分の身体を密着させた。

「俺、どうなったんだろう……」

「何も不思議がることはないのよ。あなたの身体が肉のぬくもりを求めてるだけ。それが自然なの」

「奇蘭はどうしてそんなに男のことに詳しいの？」

「先生がいたの。信者さんの中に。初潮があった時から、父に命じられてその女（ひと）たちにいろいろ教わったのよ」

「お母さんもその中に？」

「いいえ……。母は私が小さい時に死んだわ」

「ごめん、辛いこと聞いて」

「いいのよ。それにたぶんそれはウソなの」

「ウソ？」

「そ、母は死んでないのよ。たぶん。ただ私に会わせたくなかったんだと思う。だいたい分かるでしょう。娘をここに出すぐらいの人の妻ならどういう人か……。ついでに言えば、父もたぶん私の本当の父ではないのでしょうし……」

「真相を知りたいとは思わなかったの？」

「私が真相を知っても誰も喜べないとしても？」

「そうか……」

「さあ、抱いて、私を」

「でも、俺は君を愛してるわけじゃない」

「まあ、いいこだわりだわ。大事にしてなさい。その考え方。だけどね、あなた一つ忘れてることがあるわ」

「何？」

「さっきも言ったでしょ。愛があるかどうかを確かめることはとても難しいことなの。自分の親のことでもね。そして時によって一番難しいのは自分のことを知ることなのよ。だから、あなたが私を愛していないって断言するのも無理なはず。愛してるって断言するのと同じくらいね。だからね、愛してないから抱かないじゃ、ちっとも前に進めないわ。それじゃ、いよいよ確かめられないし、愛も作れない、育てられない。思いやりも生まれないの」

「じゃ……、いいのか？」

「もちろんよ、さあいらっしゃい」

奇蘭に手を取られ、浩一は奇蘭の上に自分の身体をかざした。すぐ下に奇蘭の顔があった。奇蘭の目がきらきらと輝いていることを確かめ、その目と目の間に口づけをし、そのまま鼻の稜線を舌でなぞりながら、奇蘭の口のところで彼女の舌と出会わせた。奇蘭の腕はいつのまにか浩一の首に巻かれ、強い力で引き寄せられていた。

「もっとちょうだい。あなたのぬくもり。……もっと私を覆って……。もっと……」

浩一は奇蘭の口をキスで塞ぎ、全身を奇蘭の身体に密着させた。確かに気持ちのいいぬくもりがあった。奇蘭の鼓動が自分に伝わる。奇蘭の息吹がすぐそこにあった。奇蘭の出す熱があった。自分の下に間違いなく別な命があることを実感した。そんなことを冷静に考えながら、舌を絡ませ合っていた。何度か深く舌を相手の奥底まで入れては出した。ふいに口を離した。奇蘭の手をペニスに感じたのだ。

「もういいでしょ、ね」

奇蘭が甘えるような声と表情で言う

浩一は黙って頷いた。

―　彼女が俺を求めているのだ。俺が襲っているんじゃないんだ。

頭の中で言い訳が走った。

奇蘭の手がペニスにかかると再び浩一は全身にけだるさを感じた。腕で自分の身体を支えるのが苦痛になり、上体を起こし、奇蘭を見下ろした。

ふいにペニスの先端に熱いモノを感じた。股間は視界に入っていなかったが、どうやら奇蘭はヴァギナに誘導してくれたらしい。熱い感触を気持ちのいい刺激と感じた浩一は、その熱さを楽しむように熱い池でペニスの先端を遊ばせ続けた。

奇蘭の息が急に荒くなり、彼女は突然叫んだ。

「いや、イジワル。もう焦らさないで……。お願いだから」

「奇蘭……」

「そうよ、もっと、もっと私を、奇蘭って呼んで……」

「奇蘭、奇蘭、いいか、行くぞ、奇蘭」

「いいわ、早く……。うっ……」

浩一はゆっくりと奇蘭を貫き、その熱い感触をペニス全体に感じたところで一度動きを止めた。

「ああ奇蘭。どうだ、これでいいか」

「いい……、いいわ。あなた、とっても……。じゃ、ゆっくり動いてちょうだい……。それから、おっぱいを吸って……」

浩一は背中を丸め奇蘭のおっぱいに舌を這わせ、それから乳首を吸い上げ、ゆっくりと腰を前後に動かした。

「ああ、いい。浩一さん、上手。もう身体が溶けそう……」

奇蘭の呼吸の擦過音のピッチが速くなり、それが大きくなった。

つられて、浩一の腰の動きも速くなった。

二人の身体はサウナの時のように汗が浮かんだ。

「……ああ、行きそう…、ねっ、いきたいの……、だから、ねぇ、……奇蘭ってもっと呼んで……、大きな声で……」

「奇蘭……奇蘭……奇蘭……いいか、これでいいのか奇蘭」

「そ、そうよ……、そのまま、そ、そのまま続けて……」

「奇蘭奇蘭奇蘭奇蘭奇蘭……」

頭を奇蘭の頭の横に落とし、耳元でそれを浩一は叫びながら腰の動きを一層激しくした。

「アアアアアいくうー」

と奇蘭が叫び声を上げた。

浩一もそのまま溜めていたものを奇蘭の中に出した。

ペニスがお湯の中に浸かった感触があった。

「とっても良かった。ありがとう、浩一さん」

耳元で囁くように奇蘭が言った。

浩一は全身から力が抜け、その重い身体をもてあますように奇蘭の身体から持ち上げて離し、それから奇蘭の横に我が身をゆっくりと横たえた。

「ねえ、あなたも良かった？」
「うん、良かったと思う」
「そう。ね、今私のことどう思うって聞いたらいけない？」
「いけなくなんてないさ。好きだよ、奇蘭」
自分でも驚くほど何の躊躇いもなく浩一はその言葉を言えた。
「まあ、自分に素直になれて良かったわね。だけどね、それ違うのよ」
「違うって、どういう意味？」
「今、あなたが言った『好き』はね、私が言わせたようなものなの」
「君が言わせた？　どうやって？」
「肉体関係があるっていう事実はね、一種の幻想を作り出すのよ。本当は何も知らないのに、何もかも分かったような感じでね。だって、男の欲望を満たすのがセックスだって男の人は考えるでしょう。つまり女がその男のすべてを受け入れてる証拠だって、勘違いしやすいのよ。だから普通、セックスで満足した状態で好きか嫌いかを聞いて、嫌いなんて言える人はもともとそんなにいないのよ。それに今はね、もう一つ仕掛けを入れたのよ」
「仕掛け？」
「そんなに大げさじゃないけど、効果的なの。私の名前を呼んで、私が頼んだでしょう。あれよ」
「俺が奇蘭って呼ぶと何がどう変わるんだ」
「あなたはあなた自身の言葉で自分の心の中に私を沢山住まわせたのよ。名前を呼ぶことでね。だからそこで私が『私のこと好き？』なんて聞いたら、嫌いなんて絶対言えなかったの」
「コワイもんだな。女性は。相手の心を操れるのか……」
「そうね、そういうこともあるわね。だけど、それが全部悪いことだって思わないで。そうすることで私の心の中であなたへの愛が成長するっていうこともあるんだから。男を騙す悪女って言われる女の人でも、どうしてそんなことをしたのかを全部知らないと、本

当にその女性が悪かったのか、それとも相手の男性が悪かったのかも分からないものなのよ。悪女かどうかを見極めることも難しいの。愛があるかどうかを見極めるのと同じくらい」

「お互いに影響し合うと……」

「そう、だから思いやりと思いやりを思いやる心の両方がいるのよ」

「むずかしいもんだな」

「それも違うわ。難しく考えちゃだめよ。特にあなたの場合は。素直に自分と相手のことを考えればいいの。その結論がね、自分の持ってる常識とか体裁とか、世間体とか、あるいは美学だとかそういうものとぶつかるとね、ウソを言わなきゃいけなくなって、みんな苦しむの。そういう状態ね。煩悩って。だから他人のことばかり考えたお釈迦様は苦しんだのよ。本当はあそこまでする必要はなかったんじゃないかしらね。浩一さんは真剣に悩んだら、本当にお釈迦様みたいになっちゃうかもよ」

奇蘭がおかしそうに笑い声を上げた。

「やっぱり私って夜叉ね。お釈迦様の後継者を堕落させてるわ」

「俺はそんなもんになりたくないよ」

「そう、なら良かった」

奇蘭は身体を横向きにし、自分の身体を浩一に密着させて、浩一の胸から腹へと右手を這わせた。

「ねえ、もう一回していいでしょう?」

「ああ、構わないよ。奇蘭とのセックスは勉強になるし」

「そう？　うれしい」

奇蘭は浩一の胸の上で顔を埋めた。

さざ波のような刺激が浩一の胸に届いた。舌を這わせているようだ。その細かな動きは微弱ではあったが、浩一の身体の力を蘇らすことはできるようだった。奇蘭から自分へと、力が注ぎ込まれ、蓄積されていく。浩一はそれを実感していた。下腹にも軽い接触感があった。どうやら奇蘭の乳首が時折腹をさすっているらしい。

次の瞬間、奇蘭は顔を上げ、一度浩一の顔を見てから、自分の身体を浩一の身体の上に引き上げ、そこに跨った。同時に浩一のペニスは再び奇蘭の手につかまれ、浩一は虜となった。

「ねっ、今度は女になった気分を味あわしてあげようか」

奇蘭はまたもや意外なことを言った。

「女になった気分って？」

「身体とか感覚とかはどうにもならないけどね。セックスの時の主導権を相手に持たれることがどういう気持ちにさせるかぐらいは確かめられるのよ。いい？　やっても？」

「あんまり興味ないけど、いいよ、やっても」

「じゃ、いくわよ」

奇蘭は自分の身体を浩一の足下へとずらした。それからつかんでいるペニスを両手で包み込み、最初はゆっくりと、時には止め、時には激しくそれをしごきはじめた。時折、舌を伸ばし、先端を舐め回し、キスをして、口に含み、それからまたほおずりをするような動きも加えている。浩一はその様子をただじっと見ていた。こんなことがどうして女の気分に通じるのかが分からない。

が、執拗なペニスへの愛撫は、下半身の血液と注意力をそこに集中させ、コチコチの状態にさせてしまった。浩一は身体が射精を求めていることを感じた。だが、その時、奇蘭はそれまでのペニスに対するすべての接触を止めてしまった。刺激を失うと急速に射精の欲求は消えた。ペニスもそれに対応するように血液の圧力は下がり、硬度も落ちたようだ。だがそうなったとたんに、奇蘭は再びペニスへのマッサージを始めたのである。

「！！」

浩一は奇蘭の行動に驚いていたが、そんな余裕はすぐになくなった。残り火というには十分すぎるほどのエネルギーを溜めていたペニスは僅かな接触でもかなりの快感をもたらすのである。浩一の中で再び射精への欲求が高まる。が、奇蘭は先ほどよりもマッサージのスピードを落とし、その攻撃はゆっくりとしたものに変えていた。

結果として、浩一は長い興奮の中に置かれることになった。いつまでも終わらない快感が浩一の脳髄を麻痺させていった。もうもたない、射精だと思った瞬間、奇蘭は動きを止めるのである、それへの未練から、思わず自分の手をペニスにかけようとすると、それは奇蘭に抑えられ、再び奇蘭の手がペニスをしごき始める。こんな行為が延々と続いた。浩一の心中には葛藤が渦巻き始めた。刺激を求める自分と、もう射精で終わりにして欲しいという自分の両方がせめぎ合っていた。自分で何とかしようとするとそれは奇蘭に抑えられた。

「ああ……、もう耐えられない……」

思わず口に出した。

「どう、セックス中の女の気持ちよ、それが。分かった?」

「えっ！　これが?」

「そう、自分で自分をどうすることもできないのが女なのよ。セックスの時に。すべて相手の男次第ってわけ。だから、自分が満足できないままに、勝手に先に男にいかれたらどんなに辛いか、今のあなたなら分かるでしょう?」

なるほど、自分の中途半端な状態をほったらかされて、このまま隣で寝られたら堪らないだろう、ということぐらいは浩一にもすぐに分かった。

「女はね、おしゃべりって言われるけど、その言葉でも自分の状態を相手に完全には伝えられないの。あなた今私に何して欲しいか言える?　言えないでしょう?」

熱く固くなったペニスを嬲られている浩一には、その言葉の意味がよく分かった。このまま続けて欲しいという思いと、もう終わりにして欲しいという思いが自分の中で葛藤していた。自分でそれを判断したくないと本気で思った。

「ああ、奇蘭の言うとおりだ。俺には俺のことが分からないらしい……」

「よろしい。それじゃ、このレッスンは終わり。じゃ、これはお

終い」

その言葉とともにペニスが解放された。だが、それは浩一に強い未練を残し、その気持ちが思わず自分の手をペニスへと走らせた。だが、奇蘭はそれを許さなかった。浩一の手を押さえた奇蘭が言った。

「心配しないで。あなたにはまだ続きを用意してあげるから」

そう言うと奇蘭は、再び身体を前進させ、股間のところをペニスに合わせるとゆっくりと身体を下ろした。このまま結合するつもりのようだ。ペニスは彼女の指で支えられ、位置と角度を調整されている。もとより硬度は十分に保たれている。何の問題もなく、あっさりとペニスは奇蘭に飲み込まれた。

「アアァ……」

かなりの勢いで自らを突き刺した奇蘭は一拍おいてから、自分の身体を前後に揺すり始めた。

顔を浩一に寄せてつぶやくように言う。

「お、おんなはね、本当はいつもこういうふうに自分でやりたいの。でもそれはできないの。許されないのよ」

浩一には言葉としての意味は分かったが、それの意味するところは分からなかった。なぜ、そんなことを奇蘭が言うのかも。

奇蘭はそう言いながらも激しく腰を振り、浩一を追い込んでいった。だが、気になるところを色々と抱えたままの浩一はなかなかそれに没頭は出来ない。いっこうに盛り上がらない浩一に奇蘭は動きを一度止めた。

「あなた、何を考えてるの？　私に何か不満があるの？」

「いや、そんなことはないんだけど……」

「じゃ、ラーゲ変えましょうか。あんまり女性上位って好きじゃないんでしょうね、きっと」

奇蘭はそう言うと、浩一の身体から下り、今度は背中を向け、四つん這いになった。後背位でやれという意味だろう。

が、浩一はその瞬間変わった。背中には当然ヨニが居る。ヨニに

見られた浩一は変わった。
奇蘭は一向に自分と繋がろうとしない浩一に不審を抱いた。
「どうしたの？」
「すまん、できなくなった」
「えっ？　どうして？」
「わからない……。だけど彼女を見たらそういう気分が消えた……」
浩一はそのまま奇蘭の背中に倒れ込むような姿勢をした。
奇蘭の腰を両腕で押さえ、ヨニを見つめているようだ。
「そう、あなたは彼女と何かあるみたいね……」
「何かって？」
「わからないわ、私にも。彼女を見てそんなふうになった人って、あなたが初めてだもの。普通の男の人はね、ヨニを目に入れたら、自分を忘れてセックスに狂っちゃうの。よほど特別な関係があるんでしょうね。この子とあなたは」
「教えてくれ。もっとヨニのことを」
「私もそんなに知っていることはないわ。ただ、豊穣と多産のシンボルが彼女だっていうぐらいで」
「僕は彼女に疎まれてる……そんな気がするんだ。ねえ、彼女の敵っていなかった？」
「……あ、ちょっと待って。敵ってほどじゃないでしょうけど同業者みたいなのはいたはず。彼女は母性の象徴なんだけど、同じ母性の象徴のライバルはいたわ」
「ライバル？」
「ライバルって言うと変かしら。でも競争相手だからライバルね。やっぱり」
「何で競争するの？」
「信者の奪い合いかな。同じ女神としてね」
「どんなライバルだったの？」
「名前は、何だったけ。ちょっと待って。もう少しで思い出せそ

う……。そう、サラじゃなかったかしら。彼女もヨニと同じ豊穣、多産までは一緒。で母性もまあ似たようなものなんだけど、そこで微妙に違うのよね。ヨニとは。父の話ではね」

「どう違うの？」

「ヨニが女性寄りだとしたら、サラは男性寄りの立場を取ってるって言ったらいいのかしら。所有権の考え方が違ってるのよね」

「所有権？」

「そう、こどもに対する所有権。ヨニはね、母親にこどもは依存するべしって感じ。だけどサラは生まれた瞬間から親の所有権を否定してるって感じらしいわ」

「親に依存しないこどもなんていないだろ」

「現実はね。だけどそういうことじゃなくて、問題なのは母親の心情よ。女はね、こどもを持ったら、常に夫かこどもかの選択を迫られ続けるの。その時に、ヨニの立場だったら、たいていはこども優先になるんだけど、サラの立場だと夫優先になるっていう差があるらしいわ」

「サラは不利そうだな」

「そうよ。だからヨニが残ったのよ。ここではね。だけど仏教でも他の宗教でもサラに近い考え方を取る方が主流派でしょう。だから結局勝ったのはサラなのよ。世の中全体では。でもあなたのことをもしヨニが受け入れないんだったら、あなたはもしかしたらサラの人なのかもね」

「サラの人ねぇ。そんな宗教に帰依した覚えはないんだが」

「それは信心の問題ではないの。あなた自身の生き方みたいなことよ」

「生き方？」

奇蘭は四つん這いの姿勢をやめ、再び仰向けに寝直し、浩一を見つめた。

「そうね。もしあなたがサラの人だとしたら、あなたはこどもが好きな女の人を奥さんに選んじゃいけないんでしょうね」

「それはこどもを持つべきじゃないってことか？」

「そういうことじゃないの。こどもを持つこととは何の関係もないわ。ただ、母の立場よりも妻の立場を重視する女性を伴侶に選ばないとあなたは辛い思いをするでしょうね。きっとこどもに妻を取られた気になってね」

「そうか……。奇蘭すまない。もう一度ヨニを見せてくれ」

「どうしたの？」

身体の向きを変えながら奇蘭が聞く。

「ヨニが何か言いたいことがあるような気がした」

奇蘭の背中のヨニを浩一は見つめた。二人とも無言のまま時だけが流れていった。

浩一が口を開いた。

「もういいよ。奇蘭」

「何かわかったの？」

「ああ、ヨニがいろいろと教えてくれたよ」

浩一は奇蘭と再び身体を並べた。

「ヨニが俺を拒んだのは、君が言った通りの理由だって。俺はサラの仲間だった者だそうだ。はるか昔。で、俺も夜叉なんだってさ」

「え、あなたが！　まさか、そんなことって……」

「ああ、そう言った。いや、正確にはそう言ったような気がした、かな。君がある種の仏教でいうところの煩悩の庇護者というのと同じように俺も何かを守る定めにあるんだって……」

「あなたが変わっていたのは、ご両親とは関係なかったのね」

「そうらしい。俺は宿命の子なんだそうだ」

「でも今までのところはヨニを見たときの態度以外は普通の男性だったけど。ね、ヨニはそのことの中身は言わなかったの？」

「いずれ分かるだってさ。結構気を持たせるのが好きな女らしい。おっと、それよりもおつとめしなくちゃな」

そう言うと浩一は奇蘭の頭を両腕で抱え、自分の顔の前へと運んだ。

「おつとめって、ヨニが何か言ったの？」
「ああ、ちゃんと奇蘭を満足させてから帰れ、だってさ。それがお布施なんだって」
「ま、そんなことをこの子ったら。いやあね。もう」
「でも、ヨニは君がとても気に入ってるから無茶はしないでくれって」
「そう、ヨニ、心配してくれてありがとう」
奇蘭は視線を肩越しに背中へ向けながら言った。
それから顔を浩一に戻し続けた。
「それじゃ、次はすべてあなたにお任せしていいのかしら？　そうじゃないと、お布施にならないもんね」
「自信がないけど、こういうことになると頑張るしかないね。俺としては」
「ヨニの言葉が聞けた人なんですもん。そんな心配いらないわ。でも一応頑張ってって言っておく。おざなりじゃいやだし」
「おざなりなんかにしないよ。真剣にやる。だけどヨニの言葉か……。別に聞こえた訳じゃないんだけど」
「じゃ、どうしてさっきあんなこと言ったの？」
「何となく感じたんだ。よく分らないけど、そういう意味なんだって、分った気がしたんだ」
「それでいいのよ。たぶんね。もっともそういうことが分かったって言った人は、あなた以外に一人しかいなかったけどね」
「君のことだろ？」
「ううん。私はこの子の言葉なんて感じたことないわ。一度もね」
「じゃ、誰？」
「決まってるじゃない。清玄さんよ」
「え、清玄さん？　それってまずいことじゃないの？」
「どうして？」
「どうしてって、あっちは仏教なんだろ、しかもこっちはその仏教に破門されたとこなんだろ。しかも僧侶だし」

奇蘭はそれを聞くと、笑いを必死にこらえるように言った。

「そう言われればそうね。私、そういうことがあるってことを、もう忘れてたわ。……だけど彼が私に興味をもってくれたから、私は今生きていられるの。で、とにかく、そういう出会いがあってね、彼はヨニを知ったの。そしたら、とんでもないことをヨニが彼に吹き込んだらしいのよ。そのときに」

「とんでもないこと？」

「そう。彼と初めてこうして寝てた時ね、突然彼がひどく塞ぎ込んじゃったのよ。それで気になるから、どうしたのって、聞いたんだけど、全然話をしてくれないの。で、とにかくずっと見てたら、突然帰るって言い出して、そのままお寺に戻っちゃったのよ」

「へえ、何かヨニに怒られたのかな」

「あのときは、まさかヨニが語りかけることがあるなんて、思わなかったからね、てっきり私が何か気に入らないことをしたのかとすごく気になったのよ。それとあの破門された宗派っていうこともね。だから、きっと嫌われたんだろうと思ってたの」

「でも違ってたんだ」

「翌日、また来たのよ。彼が。花と書類持って」

「花と書類？　どうして」

「書類は結婚届。花は結婚式の代わりだって」

「結婚って、奇蘭と清玄さんが？」

「そうよ」

「じゃ、もしかして清玄さんは旦那なの？」

「そう、少なくとも戸籍上は。私は彼の妻ってことになってるの」

「えええ、何でぇえええ？」

「うふふ。そんなにおかしい？」

「そりゃ、そうだろ。夫婦なのに俺を奥さんのところに泊まらせるなんて……。それに馴初めも、わけわかんないし。だいたい、どうしてそういうことになって、どうして君はそれを受けたのかも。それに戸籍上の夫婦って、どういうことだよ」

「それがね。とってもおかしいんだけど。……あっ、だけど約束してくれる。清玄さんには、私が話したことは絶対内緒にして」

「ああ、いいよ。でもどうして？」

「彼の世間体も考えなきゃ。私、彼の妻だし。一応」

「わかった」

「でね、要するに彼はこの子に説得されたらしいのよ。何しろ、彼、もともと女性が好きで、寺にも女性を引込んでたらしいけど、それが昂じてよりにもよって、邪教のご神体の女にまで手を出したわけじゃない……。この破戒坊主って、やられたらしいわよ」

「じゃ、手を出した後にヨニは語り始めたのか」

「そうね、セックスの最中に背中を彼に見せたら、むしろそれまでよりも、ずっと激しくされたから、あおってたんじゃないの。たぶん、この子の作戦勝ちなのよ」

「で、終わったら、お説教。でも、なんでそれで結婚になったんだ？」

「さんざん、戒律を破っておいて、しかも、よりにもよってよその宗教のご神体まで汚すやつは必ず呪ってやる。それが嫌なら、私の身元引受人になって守ってやれって。破戒坊主でも女を一人助けるぐらいの善ぐらいできるだろうってね。実際、その時は私たち本当に困ってたのよ。信者さんも少なくなっていくし、父も亡くなって。私、一人で本当に心細かったの。だからね、本当のこと言うと、彼が夜ここを訪ねてくれた時には嬉しかったぐらいなの」

浩一は、ほとんど自給自足生活をおくっていたに違いない奇蘭の状況を考えれば当然だろうと思った。

「で、それで結婚届に判を押したのか？」

「そう。それでね、この祠全体も助かったの。私だけじゃなくて。だけど、その時にね、約束もさせられたわ。決して布教しないってね。だけどそれをするつもりは元々無かったし、それでいいってことにしたのよ」

「で、戸籍上っていう意味は？」

「彼にとっても妻帯者であるということは大っぴらにしにくいことなの。ましてや邪教のご神体が奥方なんて絶対公表できないでしょう」

「じゃあ、普段は一緒には生活していないの？」

「それどころか結婚後も結婚前とあんまり変わらないわ。いいえ、彼はあの後、ここに近づくのも、私の背中を見るのも怖がってると思うわ。本心では。何しろ自分が帰依してる仏教の方で修行中そういう仏の言葉なんて聞いたこと無いって言ってたもの。それがよりにもよって、邪教の祠で仏みたいなものの声を聞かされたのよ。それがどれだけショックだったか分るでしょ。それにあなたに語った時と違って、この子、清玄さんを脅迫したわけでしょ。きっと、さぞかしコワーイ声で迫ったんだと思うわ。浩一さんにはそんなこと無かったでしょうけど」

奇蘭はまるでお化け屋敷のお化けがやるような顔をした。それからクスクスと笑った。坊主が幽霊に驚く漫画のシーンが浩一の脳裏を横切り、つられて浩一も笑った。

奇蘭から淑子へ

あの啓作をいとも簡単にあしらっていた和尚にこんな隠された一面があることなど思いもよらなかった。それを思い出した時、ふと啓作のことが引っかかった。

「あのさ、奇蘭」

「なあに？」

「伊集院啓作って男、ここに来たことない？」

「ああ、クルマのセールスさんね。知ってるわ。一番ここによく来てたもの。クルマの車検時期とかが近づくと日参って感じで。でもそれだけじゃないわね。たぶん清玄さんとも相当一緒に遊んでるんでしょうね。でも何で彼のことなんか聞くの？」

「俺を隣の寺に連れてきたのは彼なんだ。彼は俺の幼なじみなのさ」

「へえ、あのスーパーお調子者のクルマのセールスさんとあなたが？　ちょっと信じがたい組み合わせね。想像を絶するわ」

「彼は君とは一緒に寝たことはないのかい？」

「ええ、一度もないわ。だって彼自身、煩悩そのものみたいなもんでしょ。どうして今更煩悩と付き合う必要があって？」

「でも変だな。清玄さんの口ぶりじゃ、君がここにいて、しかも君がどういう人物かも知ってるような感じがしたけどな。それで、俺はここに連れてこられたのかって、清玄さん、一人で納得してた」

「それはねぇ、たぶん清玄さん、彼に私のことをいろいろと話したのよ。だいたい、クルマのセールスさんて、クルマの登録とか、保険関係の処理とかで、住民票やら戸籍やら宗教法人の登記簿とかも預かるし、見るしね。そういう意味では秘密を秘密にしておけない人間なのよ。で、そんな環境で似たような趣味の持ち主が二人集まったらどういうことになるかわかるでしょ。二人とも色事大好きみたいだし。表面的には結構激しくぶつかってるように見えるけど、あの二人すごく仲がいいの。いわゆる悪友ってやつね。たぶん、女紹介する見返りかなんかで。あの二人なら十分やりそうなことだと

思うわ。ま、彼のおかげで私もクルマ買ってもらったんだから、私たちのことを彼に話したからと言って怒れないわね、私も」

「君の啓作の観察は当たってると思うけど、よく君にアプローチしなかったな」

「目がね、怖がってるの。私を見るときの。クルマの納車の時だって、クルマ納めたら、すぐ逃げちゃうのよ。買う前は、怯えながらも何のかんのと言ってはしょっちゅう来て、長居をしていた人間が、それはもう見事なほど綺麗に手のひらを返して」

浩一は愉快だった。あの啓作がこの奇蘭を怖れた、ヨニを怖れたという話がおかしかった。まさかそんな女性が世の中にいるとは思わなかったし、その女性と自分がこんなに親密であるにも関わらず、啓作にはそういう関係が作れなかったという事実が心地よく響いていた。

「まあ、嬉しそうな顔しちゃって。今までよほど彼に当てられっぱなしだったのね。そんなに嬉しいの。彼が私たちを怖れていたことが」

「ああ、残念ながらその通りだ。あいつは女性の扱いが天才的にうまいから」

「何か寂しいわね。それほど女性に慣れてた人間に怖がられてた自分って考えると……」

「あ、ごめん。そんなつもりで言ったんじゃない。気にしないでくれ」

「分ってる。いいの。でも、いつか彼にも、抱いてもらえたら嬉しいかも……」

奇蘭のその言葉は、絶望的な孤独を知る人間だけが、言うことの許される言葉なのだろうと浩一は感じた。ご神体である自分は特定の人間にだけ受け入れられ認められるだけでは許されないのである。理想を言えば、全人類に受け入れられる者でありたい。そういう気持ちが奇蘭にあることを浩一はこの瞬間初めて理解した。そして、これから奇蘭と交わることの意味は、奇蘭にとって、奇蘭の存在価

値そのものが問われるほど神聖なものなのだということも……

―　俺は奇蘭を全力で愛してやる。この一瞬だけでも……

浩一はそういう決意を持った。持たねばならないと自分に命令した。奇蘭は、流される感情によってではなく、自分の意志で浩一が愛すると決めた最初の女になった。浩一は至って冷静であった。今までなら女の前ですぐ自分を失うような浩一であったのだが。そして女と一緒にいた時に冷静であったことはほとんどなかったのだが。今日は違っていた。冷静さを維持していた。そして考えていた。奇蘭の言葉を。思いやりと、思いやりを思いやる心。奇蘭に対し、何をどうすればそれにつながるのか。そう考えながら、じっと奇蘭を見た。

―　ぬくもり

ふと脳裏にこの言葉が浮かんだ。今の話の間、二人は身体を離していた。

―　そうだ、ぬくもりが好きだったはずだ

浩一は、身体を奇蘭の身体に沿わせるように置き、それからゆっくりと密着させていった。

奇蘭もそれに応えるように身体を寄せてきた。

浩一は身体の接触面が少しでも増えるように、足を奇蘭の足の下へと滑り込ませ、足を絡ませた。ついで、腰骨を真横に起し、腹、胸を奇蘭の上体に被せた。奇蘭もそれに応えて腕を伸ばし、浩一の首にそれを巻き付かせ、自分の上体が持ち上がるほど強く引いた。

奇蘭の潤んだ目がすぐ目の前にあった。口が半開きだ。欲望の色がそこにあった。浩一はキスを望まれていると感じた。

浩一が静かに口を開くと、それを待っていたかのように奇蘭が吸い付いてきた。首に回された手はだんだんと下がり、今は浩一の背中を強く圧迫していた。そのため、固くなった奇蘭の乳首が浩一の胸を刺激した。そのことで浩一は、奇蘭が乳首への愛撫を求めていると判断した。遊ばせていた左手で奇蘭の右の乳首を軽く転がす。キスを続けている口の奥から、わずかなあえぎ声が聞こえた。

しばらく、そのままの行為を続けていると、奇蘭は、自らの力で仰向けになり、ベッドに背中を密着させ、そのまま、浩一の身体を自分の身体の上に引き上げた。上に乗って欲しいということなのだろう。その姿勢へと変えると、奇蘭は今度はキスをやめ、口を離すと顔を横に向けた。奇蘭の横顔と、首筋、耳がよく見える状態になった。そのあまりに無防備な姿は、そこへの愛撫を望んでいるように思えた。先ほどと同様に静かに口を接近させ、少しだけ舌を出し、皮膚の表面にある産毛を舐めるように、耳たぶへ舌を這わせた。一瞬、目を強く閉じ、耐えるような表情を見せた奇蘭だったが、その後は、安心したような表情でその愛撫を静かに受けていた。舌は、耳たぶから一度、目元、ほっぺた、と寄り道をし、首筋を下へと辿りながらおっぱいへと徐々に近づいていった。首筋を通過する頃、奇蘭が再び姿勢を変えた。今度は顔を正面に戻し、両腕を浩一から離すと自分の両側で肘を立てて突っ張るのである。奇蘭の背中が浮いた。それを見た浩一はすかさず自分の腕をその背中へと回し、奇蘭の上体をしっかりと腕で支えながら、自分と奇蘭の身体の両方を起した。その際、一度膝を抜いて、奇蘭の腰を自分の太ももの上に乗せた。そうしておいて左腕でがっちりと奇蘭の身体を支えながら、いまや目の高さになった奇蘭の乳首を舌で転がし、右手を奇蘭の左足に置き、それを軽くさすりながら、ゆっくりと股間へ向かって這わせていった。手が痴毛の感触を感じた時、手の甲でそれを幾度もなで続け、それからやにわに手のひらで痴毛全体を覆い、全体をこすって摩擦を始めた。その動きを続けながら、奇蘭の反応を待った。また何かサインがあるだろうと思ったのである。奇蘭は時折、甘えるような、動物の鳴き声のような、声にならない声を出していた。

奇蘭が浩一の膝の上に乗せていた足を急に立てた。誘っているのである。すぐにその誘いに乗るべきなのか、それとも焦らすことがいいのか、浩一はその判断に迷った。先ほどの「女の気分」を味わった時のことを思い返した。おそらく今の奇蘭もどうして欲しいのか分からないのだろう。止めて欲しいと続けて欲しいの葛藤状態が

あるはずである。少し考えた末、この状態を少し長めに続けてみることにした。これも大事なプロセスだと考えたのだ。果たして、暫くこの状態が続くと、奇蘭が声を上げ始めた。

「もう……、お願い……、焦らさないで……」

これを待っていた浩一は、体勢を変えた。その時、自分でも意外なセリフが口から出た。

「奇蘭、奇蘭、もっと君をちゃんと見せてくれ」

「あああ、浩一さん。いいわ、いいわよ。もっと私を見て……」

奇蘭は明らかに浩一の言葉に踊らされていた。

自分から股を開き、両手をヴァギナに当てて、それを開くのである。

「きれいだよ。奇蘭、とっても。ピンク色が特にきれいだ」

「ああ、浩一さん、私、恥ずかしい……。でも、いいわ。とってもいいわ。もっとご覧になって……。奇蘭を見たいってもっと言って」

浩一の目に映る奇蘭の姿は、全身が興奮に染まっていた。下手な愛撫などよりも言葉による働きかけがこれほど女性に影響を与えるものなのかとただただ浩一は驚いていた。とにかく、奇蘭も言葉で浩一に具体的にせがんでいる。いや、甘えている。本当に奇蘭は可愛いい……。その気持ちが次の言葉を自然に出した。

「奇蘭、とってもきれいだ。そう、もっと奥まで見せて。きれいだ。本当に奇蘭はきれいだ」

そう、しゃべりながら、浩一は奇蘭の股間へと顔を近づけた。本当に目を近づけ、奇蘭のヴァギナをよく見たくなったのである。その気配を足に吹きかかる浩一の息で感じた奇蘭はさらに興奮を深めた。

「ど、どう？　よく見えますか？　奇蘭に満足して頂けました？　もっと奇蘭を見て頂けませんか？　奇蘭は……奇蘭は……」

奇蘭の浩一に対する言葉がだんだん敬語のようになっていった。

「ああ、いいよ、奇蘭。とっても可愛い。今までで一番可愛い奇

蘭だ」

そう言った直後、浩一は、舌を出し、奇蘭のクリトリスにそれを当てた。その瞬間、奇蘭の身体が固まった。

少し間があって、ようやく息を回復して奇蘭が声を出した。

「も、もう、十分です。それ以上は、もう刺激しないで……、お願いだから……、奇蘭が壊れてしまいます……。もう、抱いて下さい……。後生です」

再び、奇蘭の胸に顔を埋めるように身を乗り上げ、浩一は奇蘭の中に入った。そこは熱い海だった。さきほどまでのセックスとは全く違う状態になっていた。女の興奮度合いでこんなにも違うものかとまた浩一は驚いていた。声という武器の威力に気がついた浩一は、言葉による責めをやめない。奇蘭の気持ちに響く言葉を模索しては次から次へと口に乗せた。

「奇蘭、こんなに気持ちがいいなんて思わなかった」

「奇蘭の締め付け、すごくいいぞ」

「奇蘭はこんなに中が熱いんだな。やけどしそうだ」

当然、奇蘭はこの言葉で興奮を煽られ、それに負けまいとするような大声の嬌声を上げ始め、それがまた浩一の次の言葉を呼んだ。

「奇蘭は、いつもこんなに声を上げるのか」

「おい、奇蘭、隣の寺まで聞こえるんじゃないか、いくらなんでも」

「そんな色っぽい声を出したら、ヨニが奇蘭に当てられたって怒り出すかも」

煽りに煽られて、奇蘭は息も絶え絶えの状態になった。声もどこかハスキーになり、枯れ始めていた。

「……お願い、浩一さん、一緒にいって下さい……、もう奇蘭は持ちません…」

「ああ、もちろん。奇蘭と一緒にいくさ。だから安心していけ。ほら……ほら……ほら……」

浩一はトドメとばかりに激しく腰を動かし、精を放った。

最後に鶴の鳴き声のような悲鳴を一声あげ、奇蘭も果てた。

二人はそのまま静かに横になると、再びお互いの身体を慈しみ合うかのように肌を合わせ、身体を密着させた。全身にけだるさを感じながらも、浩一は身体を動かし、奇蘭の顔に自分の顔を近づけ、口元に軽いキスをした。

「どうかな。僕のお布施は？　足りたのかな」

奇蘭はにっこりと微笑んだ。

「まだダメ。離さないわ」

「そうか。やっぱり……」

「うふふふ。お釣りを渡さなきゃいけないほどだったのよ……。だからね、それをちゃんとしないと離せないの。それにしてもあなたすごいわ。ちゃんと私のことを思いやってくれて。よくそこまで私のことが分かるものだって感心しちゃった。それにとっても嬉しかった。やっぱりヨニが言ったとおりなのかもね。あなたは。普通の人じゃないような気がする」

「奇蘭に教わった通りのことをやったまでだよ。何にも特別なことはしてない」

「教えてもらったから、それがすぐできるなんて人は滅多にいないものなのよ。特に相手の気持ちを考えるなんてことはね。特にセックスみたいな自分の性欲を全面に出す行為の時に相手のことを考えるなんてことは分ってはいてもなかなか出来るもんじゃないの。どうしても自分の欲望に流されちゃうのよ。それなのにあなたは完全に自分を抑えていたわ。すごいわ。誰にでもできることじゃないわ」

「そう言ってもらうと何か嬉しくなるね。そんな大したことしたわけじゃないのに。……それに途中までは確かに奇蘭の言うとおり自分で自分をコントロール出来てたけど、途中からはそうでもなかった。なんか自分が勝手に動いてた」

「どの辺から？」

「奇蘭に、もっと見せてって言い出したあたりから……。本当は

あんなこと言うつもり全然なかったんだ。どうしてあんなこと言ったんだろ。それにその後も、もう勝手に自分の口がしゃべってるみたいだった」

「ああ、あれ。あれは確かに効いたわ。……もう、恥ずかしくって、恥ずかしくってしょうがないのに、ああ言われると嬉しくなっちゃうの。……でも、確かに変よね。浩一さんはもともとそんなことは歯が浮いて絶対に口に出せないような人なのにね。啓作さんとか、清玄さんなら言いそうだけど……。あっ、もしかしたら」

奇蘭は肩を捻って背中を見た。

「まさか。僕はヨニの声なんて聞いちゃいない」

「あら、そうなの。私はてっきりこの子が浩一さんに何かしたのかと思ったんだけど……」

奇蘭は背中が見えるように身体を横に向けた。浩一の目の前にヨニの顔が見えた。が、そこに先ほどのような意識は何もなく、それはただの彫り物でしかなかった。

「ねえ、浩一さん、この子に何か感じない？」

「……何だろうな。彼女が原因じゃないけど……、何か変な感じなんだ……。あれ……、これは、もしかしたら」

浩一はそのままヨニの顔に唇をつけた。そしてそれから少し舌を出し、ヨニの顔を這わしていった。

奇蘭は身体を震わせた。

「な、なに？　浩一さん、どうしちゃったの？　何してるの？」

奇蘭は背中から突然もたらされた激しい快感に狼狽していた。

「奇蘭がこうして欲しいと言ってるように感じた」

浩一は一言そう言うと、また舌を奇蘭の背中へと這わせた。

「ちょ、ちょっと、ちょっと待って。わ、わたし、そんなこと言ってませんって。アッ、ダメ、そこ。そんなにしちゃ、いや。アッ、や、やめて……。お願いだから……。アアアッ、また、イっちゃう……。た、助けて……、助けて下さい、こ、浩一さん……。あ、あ、あ、もう、ああ、いじわる、あああ」

奇蘭は背中を浩一の舌から離そうとかなりの力で動こうとしたのだが、浩一は奇蘭の両腕を後ろから押さえ込み、全く奇蘭に身動きを許さない状態で、舌でヨニの顔を責め続けた。

「し、死んじゃう。も、もう死んじゃう、いやあ、止めて」

背中への舌の愛撫がよほど堪えるのか、奇蘭は半狂乱状態になった。今までセックスをしていても、奇蘭がこれほど乱れたのを見ることはなかった。乱れる奇蘭を見て、浩一の興奮は高まる一方になった。奇蘭が言葉で何を言おうと奇蘭の身体は逆のことを語っているように思えたのである。身体は、もっと責めてと浩一に言っていた。

「はあああ、あああああ、ああ、あああ、はああ、あああ、あ」

奇蘭は息と悲鳴が混ざったような声を上げるだけに代わり、それがしばらく続いた後、全身を強い力でピンと突っ張り、数秒の間、その姿勢を完全に固めたあと、ゆっくりと身体を崩した。気絶したようだ。ようやく浩一も奇蘭の両腕を離した。

気絶した奇蘭の身体が再び浩一に語りかけた。

―浩一……

奇蘭の背中にぴったりと顔をつけていた浩一はその呼びかけに驚いて顔を離した。目の前にヨニの顔があった。

「ヨニ……」

―ありがとう

「え、何だって」

―さようなら

「ヨニ、何が何だか僕にはわからないよ」

―もう会えないわ……

「ヨニ、ちゃんと話してくれ」

だが、浩一にはもう何も感じることはできなくなっていた。

浩一は黙ってヨニの顔を見続けた。それはもうただの彫り物だった。浩一には何の感情も湧かなかった。が、ふいにそこに別な意識を感じた。それは奇蘭の一部、奇蘭の何かだった。さきほど浩一に

衝動的にキスをさせたものと同じものである。それにうながされるように、浩一は再び奇蘭の身体にぴったりと身を寄せた。その感触に反応するように奇蘭の全身が震えた。

突然、奇蘭が身を返した。

「浩一さん……、私に何をしたの……」

奇蘭の両目から涙が溢れていた。

「どうした？　奇蘭。何で泣いてるんだ？」

「わからないのよ。私にも……。さっき気絶して気がついたら、何かが無くなってるの。私の中から……」

「無くなってる？　何が？」

「それが分らないのよ……。だけど、それがすごく寂しいの。それだけが分かるの。こんなに寂しい想いをしたのはこれが初めてなのよ」

奇蘭は嗚咽した。そして静かに泣き始めた。また、さきほどの意識が浩一にうながした。浩一は奇蘭の肩に腕を回し、引き寄せた。浩一の胸に奇蘭の涙が落ちた。何をどう考えても浩一には今の状態の理解はできなかった。とにかく、奇蘭をこうして腕の中に置いておくことが奇蘭に対する何よりの思いやりなのだろうとそれだけを思った。奇蘭の泣き声はやがて静かになった。奇蘭の顔をのぞき込むと安心しきったような顔で寝ていた。脇にあった毛布を引き寄せ自分と奇蘭の上にかけた。

洞窟の中の電球の照明はそれほど明るいものではない。従って寝るときも点けたままだった。従って浩一が目を開けたとき、そこにいる空間の状態は寝る前と何も変わっていなかった。なにしろ外光は全く届かない場所なのである。今が朝なのか夜なのかも判別できなかった。脇には奇蘭がいた。抱いていたはずだが、寝ている間に離れていた。今毛布を胸に掛けた状態で仰向けになって静かに寝息を立てていた。夕べ、浩一の胸の上で見せていた寝顔同様、そこには安心感があった。幸せそうに見えた。夢でも見ているのか時折、

表情に笑みが表れる。浩一は奇蘭を起さずにそのままどろみを楽しむことにした。どうせ今日は日曜日のはずである。時間は言っていなかったが、清玄が迎えに来ることは大した問題ではないと考えた。どうせ彼が引込んだ話なのだから。改めて奇蘭の横に身を横たえ、昨日から今までのことを振り返った。昨日知り合ったばかりの奇蘭と、もう何十年も一緒にいるような気がした。それぐらい奇蘭は「親密な存在」になった。清玄の妻なのに夫婦ではない関係。それを考えると奇蘭が哀れに思えた。が、ご神体という彼女の非常に特殊な立場を考えるとたぶんどうにもならないことなのだろうと思った。奇蘭の父は、奇蘭がこういう人生を歩くということを予期していたのだろうか。もっと他に手はなかったのか。いろいろな想いが浩一の脳裏をかけめぐった。だが、そこには何の結論もなかった。どうにもならないこと……、それが結論だった。なんとなくやり切れない想いにとらわれ、浩一は意識を自分自身に向けた。昨日までの自分と今の自分。ここに来ていろいろなことを教えてもらった。

ぬくもり、思いやり、思いやりを思いやる心。食材に隠されたドラマ。そして、小さなかまどの火を消さないように気を配りながら料理をするのに似た、相手をいたわり静かに燃やすようなセックス。すべてが古い浩一を壊していた。ふと、そこでヨニの言葉が蘇った。

―　あなたも夜叉

これは謎のままだった。そのことが急に気になり始めた。まどろみを楽しむどころではなくなった。

起きあがり、奇蘭の身体を見た。ヨニと話したくなった。

奇蘭を起さないように注意しながら、ゆっくりと奇蘭の肩に手をかけ、背中を上に向けるように押した。

奇蘭の身体は毛布を引きずりながら、ゆっくりと回転した。

背中が上側に回った。

浩一は毛布をどけた。

その背中を見た浩一は愕然とした。

ヨニはいなかった。

あったはずの彫り物が消え、白い肌だけの背中があった。

「お、おい。き、奇蘭、奇蘭、起きてくれ……」

浩一の声はかすれていた。

その声が頼りないぶんだけ、それを補うかのように激しく奇蘭を揺さぶった。

「あ、おはよう。もう朝なの」

「いや、そんなことは分からないけど、奇蘭、とにかく自分の背中を見てみろ」

奇蘭は身体を起こし首を捻った。

「消えてる……。ヨニが……」

「奇蘭、他に身体に変わったことはないか？」

「え、ええ。別に。……そう言えば、なんか頭が妙にすっきりしてるかしら……。身体もどこかちょっと違う感じ。すごく身体が軽いわ。……あっ、私、奇蘭じゃないんだ。たぶん」

「奇蘭じゃないって、どういう意味？」

「奇蘭っていう名前は夜叉の名前なの。夜叉だったから奇蘭って呼ばれてたのよ」

「じゃ、今の君は誰？」

「えーと、宮本淑子（みやもととしこ）じゃなくて、今は清玄さんの奥さんだから霊山（よしおか）淑子（としこ）。ね、人間らしいでしょ」

「じゃ、君はいつ奇蘭になったの？　それと誰が奇蘭って言う名前だって言ったの？」

「父。すべては父が私にヨニの彫り物を彫った時から。そして父に言われたの。お前の名前はこれから夜叉の奇蘭だって」

「お父さんはなんでそんなことを？」

「お告げがあったんだって。それだけ。もともとここの守番だったのよ。父は。お告げに逆らえるはずないじゃない」

「そうか。すまない。変なこと聞いて」

「いいわ。でも、まさかこの彫り物が消える日が来るなんて思わなかった……。私、一生、ヨニと二人っきりで過ごすんだって思っ

てたのに。でもどうしてかしら。あなたが原因なのはこうなると間違いないけど。いったい何があったの？　昨日の夜、私にいったい何をしたの？」

「何をしたって？　君は何を覚えてる？」

「あなたが、ヨニの顔を見るために私の背中に回って、それから……、全身が痺れたのよ。身体のあらゆるところを一斉に舐め回されてるって感じで。快感があんまり激しくて息も満足にできなかったわ。あなたあのとき、何をしたの？　やめてって頼んだのにどうしてやめてくれなかったの？」

「僕はヨニの顔に舌を這わせただけだ。……君にうながされて。君の声が確かにやめてって、言っていたのは聞いた。だけどもう一つの君の声はもっと続けてって言ってた。だから僕はそっちの声に従ったんだ……。ついでに言えば、その前のセックスの時に僕を急におしゃべりにしたのもその声だった」

「ヨニじゃなくて、私なの？　分からないわ。それってどういうことなのかしら。しかもヨニの顔を舐められることが、どうして私には全身を痺れさせるほどの快感を感じることになったのかしら……。不思議ね。あなたに責められて、それでヨニは逃げ出したのかしら。……ヨニの声は聞かなかったの？」

「君が失神した後に聞いた」

「何て言ってた」

「さよならって言われた」

「そう。他には」

「何も。さよならだけだった。こっちから何のことか分からないから聞いたんだけど返事は無かった。それで君に触ったら君が気がついて。……そしたら、今度は君が泣き出して」

「ああ、そうか。そういうことだったんだ。あの寂しさ……」

「何か分かったの？」

「ヨニと奇蘭が出て行ったから、私の心の中にぽっかりと穴が空いちゃったのよ。それで、原因が何かもわからないまま、何もかも

無性に寂しく思えて……。だって、私、一生ヨニ達と一緒に生きていくつもりだったんだもの。急にいなくなられたら、ああなって当然だったのね。でも良かった。あなたがいてくれて。そしてあなたの上で泣かせてくれて。きっと一人だったら絶対耐えられなかったわ。あの寂しさには。自殺してたかも。……ねえ、サウナではどうしてヨニにキスしなかったの？」

「あの時は、きっと拒否されたんだ。……感じとしては、そうだな。プイって横向かれた感じ。もうそれ以上近寄らないで、て、言われた感じだった」

「そう、拒んだんだ。あなたのことを。でもなぜここでは拒まなかったのかしら……」

「さあ」

「何か言われなかったの」

「そうだな……。そう言えばさよならの前に、ありがとうって言ったような気がする」

「ありがとうねぇ……。ヨニは何に対して感謝したのかしら？」

二人は顔を見合わせた。が、結局何も思い浮かばなかった。

奇蘭、いや淑子がこれ以上の詮索を諦めるように言った。

「ねえ、おふろ行きましょ。汗いっぱいかいたし」

「あ、そうだ。俺の服」

「そうね。それもあったわね」

二人はサウナと池でさっぱりと汗を流し、すっきりとした気分になった。この洞窟内は一年中温度があまり変わらないということなので、この時期にしては涼しかった。

ようやく、浩一は服とともに自分の腕時計を取り戻し、時刻を知ることができた。浩一にとっては大いに意外なことに、まだ朝の八時であった。ここでの生活は基本的に体内時計勝負となる。何しろ外の光は入ってこないのである。そのことに対する無意識の緊張が睡眠時間を短くしたようだ。

困惑

淑子も白衣の上に半透明の黒い僧衣のような姿に戻っていた。
「ねえ、一つお願いしていいかしら」
「ああ、なんだい？」
「朝食作るの、手伝ってくださらない」
「もちろん。いったい何をすればいいの？」
「私についてきて」
淑子は通路を元の部屋へと向かい、途中のT字の廊下を直進してそのままその空間に入っていた。ここの部分は地上部のようである。そこは厨房であった。どこかに窓があるらしく、外光の青っぽい光が天井で反射している。厨房を突き抜けたところにドアがあった。
外に出た。まだ残暑の厳しい日のはずだが、山中でもあり、早朝でもあるためか空気は思いの外涼しかった。まわりをうっそうとした森で囲まれた畑であった。農具を納めているのか粗末で小さな小屋もある。ドアは崖ののり面にあった。この崖の中に洞窟があり、そして崖上に祠が建っているのだと分かった。
「こっちよ」
崖に沿って小さな畑を迂回していくと小さな野菜畑に出た。
「あなたはナス食べられる？」
「何でも食べるよ。ここのものなら。知らない野菜でも」
「うふふ。ありがたいわ。そう言ってくれると」
淑子は、明るい日の光の下で見ると、僧衣を着ていることが普通の娘と際だって違うだけで、身振りや仕草はどこにでもいる普通の若い女の子だった。ただ、浩一には、彼女の年齢の見当はつかなかった。昨夜からの会話を思い出しても、彼女の年齢を判断する情報はどこにもなかった。だが、今目の前を歩く淑子は、自分と人生をともに歩いたとしても決して不釣り合いではなく、清玄の伴侶であるということの方が絶対に無理があるとは思った。そしてそう思った瞬間、淑子を自分のものにしたいという欲望が生まれた。
「はい、これ持ってくださる？」

淑子は浩一の目の前に大きなかごを差し出した。収穫した野菜をこれに入れろということらしい。

淑子自身も手に鎌と小さなハサミを持っている。収穫は彼女が担当するらしい。

ナス畑、ネギ畑、ゴボウ畑と回っていった。

「ねえ、浩一さんは、今日帰っちゃうの？」

「うん。明日からはまた仕事だ」

「お仕事は何してるの？」

「建設会社で設計……。見習いだけどね、まだ」

引っこ抜いたゴボウを浩一の抱えたかごに入れながら、淑子も立ち上がった。

「じゃ、こんなところ滅多に来たことないでしょう。ねっ、お昼も食べていって……」

「ああ……、じゃ、そうする」

「それじゃあね、ちょっと離れてるけどこっちに来て、一緒にお昼の食材も取るから」

淑子は畑の畝の間をどんどん歩き、反対側の森へと入っていた。森と言っても平坦な森ではなく、山腹の森である。かなりの急斜面で、かごを支えながら上に向かって歩くのはかなり大変な作業だ。

一メートルぐらいの切断された木がたくさん積まれている場所でようやく淑子は止まった。

「これ。何か分かる？」

「ああ、しいたけか？」

「そうよ。結構ごちそうなの」

たぶん、ご神域ということで人間の手が加えられていないからであろう。ブナ、シイ、クヌギ、クリ、ナラ、コナラなどの広葉樹ばかりが目立つ森だった。だから地面は分厚いじゅうたんのようになった枯れ葉で覆われていた。その柔らかな感触と、冷たい空気が、そのしいたけの味を保証しているように浩一には思えた。淑子が木の間を行ったり来たりしていた。いつの間にか両手でかかえるほど

のしいたけを持っていた。

「そんなに食べられるのかい？」

淑子が渡してくれたビニール袋一杯のしいたけを受け取りながら浩一が訊いた。

「大丈夫。二人ならこれぐらいぺロリなのよ。来月になれば、この上の方の森の中にはもっといろいろキノコが出るの。もちろん天然物でね。それから、やまぶどうとか、あけびとか、それから栗も拾えるし。見かけよりもこの森は豊かなの。ただヘビ、たぬき、いのししも多いの。くまが出たこともあるわ。まわりの森が開発されてそれでこの寺の土地に入ってくるみたい。数が増えてるわ。ここの畑も一度荒らされたことがあるのよ。でも仕方ないわね。みんな必死に生きてるんだから」

淑子が楽しそうに森の話をするのを浩一はやや複雑な気持ちで聞いた。淑子の生活感覚、淑子の喜びを自分が共有できないことに気がついたのである。あまりにも育った環境が違いすぎた。

「さあ、下りましょう」

淑子が先を歩き、それに先導されるようにかごを抱えた浩一が続いた。

ふいに淑子が立ち止まり、浩一の歩みを手で押さえた。

「待って……」

何が起こったのかわからない浩一はただ言われるままに止まった。

「もういいわ。敵意はないみたいね」

「何？」

「まむし。そこでこっちの様子をうかがってたの。向こうから襲ってくることはまずないけど、まだ寝てたんでしょうね。寝起きで機嫌が悪かったみたい」

浩一が驚いて淑子の視線の向けられた方向を見ると確かにヘビが一匹、向こうの方へ去っていくのが見えた。正直なところ気持ちが悪かった。山の中で野生の蛇に出会ったことなど一度もなかったのである。淑子はそれを日常の風景と捉えている。淑子と自分の間に

はかなり深い溝があると感じた。淑子を幸せにする自信は、自分にはないと思った。

「さあ、行きましょう。もうお腹減ったでしょ」

淑子はまた歩き出した。時折、座り込んでは生えている草を取り、浩一のかごに入れる。山菜のようだが、浩一にはぜんまい以外、見たことのないものばかりだった。

「君は肉は食べないのかい？」

「ふだんは食べないわ」

「じゃ、食べるときもあるの？」

「そりゃそうよ。町に出た時なんか、何を頼んでも肉が入ってるじゃない。食べたくなくても食べることになっちゃうわ」

「肉は好きじゃないんだ」

「そうね。あんまり。何しろ食べ慣れてないし」

「戒律とかで？」

「仏教だからね。ここを始めた人の出身は。うるさく言われたことはないけど、食べないのが当たり前の感じではあるわね」

浩一にはショックだった。浩一は、夕食はかならず肉食という家庭で育った人間だったのである。これでは淑子と一緒になったら、きっと俺が不幸になる……。やはり無理なのかと落胆した。

「浩一さんはお肉好きなの？」

「う、うん。一応ね。一番食べ慣れてるから」

「そう、じゃ、残念だわ。昔は信者さんがよく山鳥とかキジを届けてくれてたんだけど、そういう猟師さん、もう亡くなってみんないなくなっちゃって。たぶん山にもそういう鳥は少なくなったんでしょうけど。とってもおいしい肉だったのにね」

浩一は山鳥もキジも食べたことはなかった。

―　そうか、肉と言えば豚や牛じゃなくて、山鳥かキジになるのか……。淑子は心の底から、ここここの山を愛してるんだ。だからこそ、ご神体になれたんだ……

が、そういう理性的な部分で自分とのギャップの大きさが明らか

になればなるほど、淑子を欲しいという欲求も高まるのである。自分と異なるものへの憧憬のようなものが渦巻いていた。浩一は心のうちに大きな葛藤を抱え込んでしまった。

「な、何か手伝えることないかい？」

二人が厨房に戻った時、浩一は思わず口にした。本当のところ、少しでも長く淑子と一緒にいたかったのである。彼女を視界にいれておきたかった。

「まあ、ありがとう。そうね、手伝ってくれるんだったら……。そうね、あれをお願いしようかしら……」

浩一は厨房の外に出されて、根菜類の泥を水で洗い落とす仕事に回された。

「作戦失敗だな……」

一人の外は楽しくも何ともなかった。淑子がいるから山の風景が生き生きしているように見えたのである。いなければ浩一の興味を誘う場所ではなかった。

なかなか落ちない泥に辟易しながらも、ようやくすべてをきれいにすると、厨房へ戻った。かなり大きな厨房である。おそらく昔信者がたくさん居た時代に作られたからであろう。大鍋がたくさん壁際に置かれているが、最近使われた様子はなかった。淑子は、一番隅の小さなコンロ端で何かしていた。彼女のいる辺りだけが、磨かれ、手入れがされている。彼女一人なら、それだけで十分ということなのだろう。案の定、どこの家にでもありそうな小さな鍋をいくつか出して、仕込みをしていた。電気冷蔵庫もあった。電気炊飯器もあった。そこからは湯気が立ち上っていた。

「終わったよ。これでいいかい」

「どうもありがとう。助かったわ。泥、なかなか落ちなくて大変だったでしょう。ここの土は粘土分が多いから。一種の火山灰かもしれないけど」

「ふ～ん、そういうこともあるのか。で、他に何かやることある？」

「う～ん、もういいと思う。後は私がやるから、部屋の方で休ん

でいて」

「あのさ、上の祠、覗いてきていいかな。どんなものなのかちゃんと見たくて」

「あら、いいわよ。でも何にもないんだけど」

「まあ、雰囲気だけでも知りたいのさ」

「ふーん、じゃ、どうぞ。一度玄関から出て、そとからぐるっと回ってね」

「ああ、わかった」

浩一は祠に向かった。別に建築に興味があるとか、宗教に興味を持ったからではない。淑子に関係することはすべて知っておきたかったのである。淑子、いや夜叉の奇蘭とは何だったのか、それを知る手がかりが何かあるのではないかと考えたのである。

高座の秘密

何も説明を聞いていなければ、普通の祠と何も変わるところはない。ただ、屋根の張り出しを支える梁に施された彫刻は、普通の寺院のものとは明らかに違った。

女人像ばかりなのだ。

豊かな胸を露出したものが多い。もっとも彫刻の大きさは小さいし、高さがある場所なので、かなり注意深く見ないとそれとはわからない。ギリギリの妥協だったのだろう。

本堂に入る正面の階段に靴を脱いで足をかけた。築百年は過ぎているだろうという痛み方だ。木材が太いのでこれでももっているが、細く製材された材木だったら、とうの昔に朽ち果てていただろう。大学で習った知識から、浩一は江戸中期頃の建築物と見た。原木の形をむりやり直方体に加工するようなことは、ほとんどしていないのである。自然の状態での幹の形が思い浮かぶ材木が多い。そんな不規則極まりない形である材木であるのに、柱と梁は見事に勘合で位置を決めてある。当時の大工の技術力の高さが偲ばれた。そういう古い建築物独特の特徴が、このお堂にある種の怪しさを演出していることは間違いないが、それは浩一の目で見れば取り立てて奇異なことではなく、ただこの建物が古いというだけのことである。縁側に立ち、まわりを見回す。別に変わった点はなかった。障子の一つを開けて中を見た。なるほど寺のように仰々しい仏像や、金色や赤の派手な飾り付けは何もない。申し訳程度の赤い染色が一部に入った布が梁のところにある他は、装飾は何もない板の間だった。壁にも絵も掛けられておらず、お経が掛けられてあるわけでもなく、ただ板の壁があるだけである。ただ、中央が十センチほど高く段差がつけられ、その真四角の空間の四隅に柱があるのが他の寺院にはない特徴だった。寺では見ないが、神楽を奉納するための能舞台には時々見られる構造である。部分的に神道の様式を取り入れているようだった。となるとやはり何か人間が演じるものが奉納されていたのだろう。奇蘭の説明にウソや誇張はなかった。おそらくそれは

セックスそのものだったのだろう。だが、どこにも奉納をすべき相手が見あたらないのが腑に落ちない。確かに奇蘭が居たら奇蘭がご神体だから、そんなものはいらないということは分かる。だが、奇蘭の父が奇蘭を作る前はどうしていたのだろう。何か拝むシンボルのようなものがあったのだろう。それが無ければ信仰を集めることは難しかったはずだ……。

浩一は高座に乗り、そこを確かめ、それから周囲を見回した。だが、それらしきものはどこにも見えなかった。床はただの木の板の間である。

「こういうもんなのかなぁ……」

そもそも信仰心などと浩一は無縁の存在として過ごしてきた。礼拝の場所にどういう機能が必要かなど今まで考えたこともなかったのである。何となく高座の上で腰を下ろした。両腕を背中側について改めて見回す。何もない。天井を見るつもりでそのまま仰向けに寝た。天井は、少しは凝った造りにはなっているが、それでもまな板天井の仲間であることは間違いない。天井画のようなものもない。ただ、この高座の真上の天井は床に段差が設けられてあるのと同じようにかなり立派な欄間によって周囲の天井と区切られているのだが、その欄間が全体のバランスから見ると異様に大きすぎるほどのサイズになっていることが変と言えば変だった。浩一の注意はその四方にめぐらされた欄間に向かった。大きさだけでなく形も変なのである。装飾にしてはデザイン的な配慮が全くされていないような無骨な形状の突起や、強度だけはありそうな、黒く塗られた大きな鋲で打ち付けられた銅板。しかもそのところどころには夥しい数の穴までも空けられている。しかもこの欄間はこの部分の四方を支えている太い四本の柱に勘合で組まれている。おそらく、この建物が上から強い力で押さえつけられても、この高座の部分だけは元の形を維持するほど高い強度があるように思えた。浩一は学生時代に受講した日本建築の講義を思い返したが、こんな梁の紹介など、見た記憶はどこにも無かった。

―もしかしたら日本建築史上、稀に見る珍品なのかなぁ……

と漠然と思った。だが、その意味、機能はさっぱり見当がつかない。寝そべった頭の下に両手を置き、その風変わりな欄間を見つめていると、ふいに浩一は睡魔に襲われた。やはり昨夜は寝不足だったのだ……。そんな漠然とした思いで意識は消えていった。

気がつくと浩一は大勢の人混みが自分の前に背中を向けているところにいた。皆座り込んで前を見ている。

―ちょんまげ？　きもの？

見ている者は全員が、男も女もすべて髪を結い粗末な和服を身にまとっていた。まるで江戸時代のようだ。周囲の明かりは皿のところで油を燃やすものが、部屋の中の何カ所かに置かれている。みんなが見ている先には、あの高座があった。今、そこには誰もいない。まわりの人間は皆、何か盛んに話をしている素振りだ。だが、浩一にはその声は届かない。無声のテレビのようだ。

―夢か……

突然、人々の視線が入り口の方、すなわち浩一の方を見た。多くの者といきなり視線が合い、浩一は当惑した。が、誰も浩一に注意を払ってはいないようだった。自分は存在していない存在のようだった。自分の隣から、いきなり木の長い棒が姿を現した。男がその棒を担いで中に入ってきた。人々は高座への道を造るため、位置を変えた。また別な男が、木で出来た違う形のものを抱えて入ってきた。その板は雲のような奇妙な形をしていた。ところどころに金属の部品があるので、それ自体が何かを固定する道具になるもののようだ。さらにもう一人同じような道具を持つものが入り、最後に僧衣を着込んだ三十ぐらいの女が入ってきた。そしてこの一団の最後には、まだ前髪を残したままの、つまり大人と呼べないぐらいの若い男が白い着物を着せられて入ってきた。

女が、高座のところで集まった人間に向かって何かを言っている。どうやら一種の説教なのだろう。かなり長い時間それは続いた。この間、道具を運んできた男と白装束の少年は、女の足下でおとなし

く座っていた。女の説教は、だんだんと激しいものになっていくようだ。声は聞こえないが、身振りや顔の表情からするともう何かに憑かれているような感じであった。その興奮は周囲の群衆にも伝わっているようで、皆異様に昂ぶった目をしている。

女の目が、突然足下の少年に向けられた。それを合図に道具を抱えた男たちが一斉に動いた。少年はおびえを隠しきれていなかった。その恐怖に引きつる顔の少年の着物を脱がし、裸にすると男たちはあの道具を取り付けていく。首と手は板状の拘束具でがっちりと固定された。それから、その拘束具の両端には縄が取り付けられ、その反対側の端は高座の上にある欄間に括り付けられていた。高座の中央で立った姿のまま、少年は晒された。両足も開かれ、それぞれの足首は縄で四隅の柱のうちの二本に固定されている。少年は自分で体を動かすことはできなくなっていた。

が、少年は全裸ではなかった。股間にはまだ白い褌（ふんどし）が残っていた。

女が少年に近づいた。女の手が褌を止めているひもにかかった。褌はすぐに少年の足下に落ちた。すでに少年は興奮しており、股間からは男根が天井に向かって首を上げていた。女の手がそれにかかり、しばらくしごいた。少年は顔に苦痛の表情を浮かべた。男根の角度はもう最大になり、亀頭はほとんど真上を向いていた。そこで、女は手を離し、ふところから赤い色のヒモを取り出すとそれを男根の根本に巻き始めた。少年の苦痛の顔がさらにゆがむ。かなり強い力で巻かれているようだ。男根の根本がまるで赤い布で覆われたようになると女が離れた。こんどは木の棒を持った男が少年の背中側から近づき、少年の背中をその棒で打ち始めた。

棒が打撃を加えるごとに正面では男根が大きく反る動きを繰り返す。赤い色がそれを如実に見せていた。

それを脇で見ていた女が自分の僧衣を脱ぎ始め、あっというまに素っ裸になった。そしてそのまま拘束された少年に抱きつくと右足を大きく上げその男根を自分の女陰に指で押し込んだ。女がそうした。

ている間も背中の木の棒は止まらない。

背中に打撃が加わる度に、女が背を反らす。打たれる度に動く男根の動きも変わっていないのだろう。背中を打つ木の棒の動きと、女が背を反らすタイミングは完全に合っていた。その淫靡な光景は浩一の脳髄を痺れさせた。まわりの群衆もそれを感じているようである。あちこちで体勢を崩し、自慰を始める者、交わり始めるものなどが現れ始めた。やがて、女が自分から崩れた。するとそれを待っていたかのように数人の男が女に駆け寄り、たちまち女を空中に持ち上げ、手足、胴体に縄を巻き付け、その縄を欄間に固定してしまった。女は中空で泳ぐような姿勢になった。女の顔の目の前にはあの少年の股間で今も打たれる度に動いている男根があった。

一人の男が女のあごに手をかけ、口に少年の男根を含ませた。その反対側では、開脚された女の足の間に立ち、女を貫く男が立った。その男の後ろには二人、三人と順番待ちの列が出来ている。また女の真下に入り込み、下から乳房を舐める者もいる。かと思うと、女の脇に立って、白い背中に向かって細い木の棒を叩きつけている者もいる。その男の真向かいに来た男は火のついたろうそくを手に持ち、木の棒が打つ場所に、ろうそくのろうを垂らし始める。女はあらゆる刺激で縛られた全身を痙攣させていた。

次の瞬間、映像は急に小さくなり、やがて見えなくなった。

何もない空間に再び映像が現れた。さきほどの映像とは全く違う。木の床の上に布団が敷かれてあった。

そこに横たわっているのは少女だ。背中を出し、うつぶせになっている。その背中に向かって中年の男が筆を走らせている。

その中年の男は何事かを呟いていた。

少女は苦痛に耐えるような表情しながら目を閉じていた。

―　淑子

浩一は叫んだ。だが、その声が届いた感じはない。誰も浩一に注意を向けない。その異様な感覚に浩一はまわりを見た。大勢の人間

が居た。皆、少女の方に向かって手を合わせ、口を動かしている。お経を詠んでいるようにも見えるが、声は聞こえない。

よく見ると淑子は今の淑子よりもかなり若い。童顔の残る顔だ。

―　これも夢？

淑子の背中に向かい、筆を走らせる中年の男は今まさにヨニを淑子の背中に描いていた。彼こそ、淑子の父親なのだろう。

ふいに誰かの意識のような声が聞こえた。集まった信者のうちの誰かの声らしかったが、誰のものかはわからなかった。

―　ほんにこれで救われるのかのう

―　何にせよ、淑子ちゃん、これで辛い思いをせずに済むならそれに越したことはない

―　ヨニ様、これでほんとに納得していただけるのかのう。わしはそれが心配じゃ

―　お告げじゃと言うんじゃ、確かめようもないわな。もし何か変なことがあれば、淑子にはやっぱり役目を果たしてもらわねばなるまいて……。その時は、その時じゃ。

―　そうじゃな。それしかあるまいな

その言葉を最後にすべてのイメージが消えた。

浩一は全てが真っ白の世界に一人立っていた。

―　お前の娘、淑子をわらわに夜叉　奇蘭として差し出せ、さすれば、巫女としての役目、免除してつかわす……

何もない空間にあのヨニの声だけが響いていた。

次の瞬間、白い空間は一瞬にして暗黒の空間に変わった。

―　ヨニ様。もう私の役割は終わりました

聞き覚えのある声が響き、浩一は緊張した。淑子、いや奇蘭の声だ。が、何も見えない。だが、二つの意識がそこに存在することを浩一は、はっきりと感じていた。

―　これからどうする

ヨニの声が聞こえた。

―　もう淑子を奇蘭にしておく意味はありません。あの男は私が

抑えていた淑子の意識を覚醒させてしまいました。もう私は淑子とは一緒に居られません

―　これからどうするつもりなのじゃ

―　淑子はもう解放しましょう。どうせ信者もほとんどいないのです。それよりもあの男を利用すべきです

―　利用とな……

―　あの者の因果ぐらいならなんとかなりましょう……。ヨニ様のお力をほんの少しだけお貸しいただければ、わたくしめが、あの者をヨニ様のご満足なさるような方向に導くことが出来るかと存じます

―　そちの好きにするがよい……

今の奇蘭と呼ばれていた意識は、昨日までの奇蘭とはまた違う存在のようだ。だが、今の会話で一番気になったのは、「あの男」というのが自分であるということである。自分の登場が淑子をヨニから解放した。それは分かった。だが、なぜ。そして自分の因果というものにこれから何かしようという意図があることも。何の目的があるのか、何をさせようというのか、それが何も分からなかった。ヨニが望む世界とは何なんだろう……

「浩一さん、浩一さんてば、浩一さん、起きてくださいな。朝ご飯が出来たんですから。浩一さん」

強く身体を揺すられ、淑子の呼びかけでようやく浩一は目を覚ました。目の前に淑子の姿があった。

「呆れた。まさかこんなところで寝てるなんて……」

本堂中心部の高座の上である。

「あ、ああ……。ちっとも眠たくなんかなかったのに、変だな。ここでこうやって座り込んだら急に眠くなってしまって」

「もういいです。とにかく、早く朝ご飯をどうぞ。もうすっかり冷めちゃってますけど。たぶん」

淑子の声には明らかに落胆が混じっていた。待ってくれているという期待が大きかったのだろう。淑子にとって人をもてなす食事を

作るということは、滅多にない大イベントだったはずだ。

「すまない。すぐ降りよう」

浩一は立ち上がり、今の夢の詮索は後回しにして、とりあえずは、淑子の朝食を食べることが先決だと判断した。

再び最初の部屋へと戻ると、昨日の夕食よりもずっと品数の揃った朝食が座卓の上に並べられていた。座卓に並んで二人揃って箸をとった。

「いただきます」

ふだんは言ったことのない言葉だが、浩一はこのときは大きな声でこの言葉を出した。

「はい、どうぞ。召し上がれ」

その様子で淑子もようやく表情を緩め、少し笑みを浮かべながら、自分も箸を持って食べ始めた。

浩一にその淑子の姿はうれしさを全身で表わしているように見えた。それほど彼女の孤独というものは深かったのだろう。いくら夜叉とはいえ、直接ヨニの声も聞こえなかった彼女がよくぞ今まで一人住まいをこんなところで続けられたものだと驚くというよりも、不思議に思えた。

「ねえ、ちょっと聞いていいかな」

「何です」

「その、もし言いたくなかったら言わなくていいけど……、ずっとここに一人で住んでて寂しくなかったの？」

「うふふ。別に言いたくないなんてことないですよ。そおねえ、半分はその通り。半分は全然はずれってとこかしら」

「半分ははずれなの！？」

「ええ、確かに人間がいないことについては言うとおり。だけどね、人間だけじゃないんですよ。私が心を通わせてる相手は。その、自然とかね、ここのまわりのもの全てが友達だと思ってるし。野菜とか動物とか虫とかも」

「そうか。君は強いんだな。僕なんかとは全然違う。僕が君の立

場だったら、三ヶ月、いや一ヶ月ももたないかもしれない」

「あら、たぶんそれは間違ってますよ」

「どこが？」

「そうねえ、じゃ、私が聞きましょうか。浩一さんは今親御さんとご一緒に生活されてるんでしょ？」

「ああ、その通りだ」

「一緒に生活してることでね、毎日ご両親と心を通わせてると、実感されてます？」

「……いや、それは……」

浩一は、家での自分たちの生活を考えた。自分と父親、自分と母親、あるいは父と母、そのどの関係を考えてもそういう実感があるようには思えなかった。ただ一緒に共同生活をして、それぞれが割り当てられた役をこなしているという表現の方が当たっているように思える。特に自分の場合は、最近、親の姿を見るのも苦痛に感じるようになってきている。話もできたらしたくなかった。だから食事もほとんど外食で済ましている。

「あの、こんな言い方をしたら悪いのかもしれないけど、一緒に住んでるだけの家族だったら、一人住まいとあまり変わらないと私は思ってるんです。だって、一緒にいても心は通い合わないんですから。それはいないのと一緒なんです。いいえ、いないよりもひどい場合もあるようです。何しろ妬みや憎しみも生み出しますから。ただの他人をむやみに自分の視界の中に入れることは……」

淑子は浩一の心の中を見通したかの言葉を語った。

淑子は平穏を望んでいる。それは寂しいということと紙一重の状態なのかもしれない。だが、平穏を破ってまで寂しいから逃げ出すことは無益だと考えている。浩一は淑子の心中をそう見て取った。

「じゃあ、淑子さんは、これからもここで一人暮らしていくつもりなの？」

「はい」

「もう、奇蘭じゃなくても？」

「別にそのせいでここに居たということだけでもありませんし。清玄さんもたぶんそう言うでしょうし」

浩一は清玄の名前を聞くと自分が熱くなるのを感じた。

「あのさ、清玄さんのこと、本当に自分の夫と見られるの？」

「まあ、何でそんなこと聞くんです？」

「だって、君のことを怖がって近づかなかったんだろ。ただヨニに脅迫されて婚姻届け出しただけなんだろ。清玄さんが君を愛してるとはとても思えない気がする」

「そうですね。でも愛がある、ないと結婚とは関係ないことだってお話したでしょ？　でも浩一さん、変ですよ。何でそんなこと言うんです？　まるで私に清玄さんと別れるように説得してるみたいな……」

淑子は笑みを浮かべて浩一を見た。浩一の心中は荒れに荒れていた。理性が崩れかかっていた。自分が本音であると信じたいものを言おうとする力、それはウソだと語っている力、何を考えてるんだと絶叫している力、いろいろなものが大げんかをしていた。痴呆のようなポカンとした表情だけが残った。

「ま、変な顔しちゃって。もう私のことはいいから、早く食べてください」

淑子の言葉でようやく浩一は食事に戻った。

清玄の不安

朝食が終わっても、浩一と淑子の間に会話は戻らなかった。さきほどの会話のしこりがお互いに気まずい思いを残していた。

することもないまま、同じ部屋で二人はすごした。ただ一緒にいたという状態である。が、言葉は交わさなくても心の会話は行われていた。何度も二人は目を見つめ合った。言葉がなくても何が言いたいのかお互いに分かったのである。

「淑子さん……」

ようやく浩一が意を決したように口を開いた。

「ありがとう。お気持ちだけで十分。もうその先は言わなくていいから。私はここも、この山も、清玄さんもみんな大事なの。これ以上私に関わるときっとあなたも私も不幸になるわ」

まるで待っていたかのような淑子の答えだった。反論の全ての道が断たれていた。

浩一の決意は見事に空振りに終わった。

「そ、そうですか……。まいったな」

浩一は頭をかいた。それぐらいしかできなかった。

「ごめんなさいね。でもどうにもならないことは多いの。世の中は。それにあなたにはあなたを待っている人がちゃんといるわ。私にはわかる。それは私じゃないってことが」

「……」

淑子は啓作の申し出の話は知らないはずである。たぶんなにがしかの人並み以上の霊力のようなものを備えているであろう淑子の言葉にはどことなく重みがあった。そう言われると、自分の中の未練の心が癒された。

二人は最後の食事、昼ご飯をお堂の外で食べることにした。

淑子の提案で、おそらく浩一の舌の都合を考えてくれたのか、例のしいたけをバターをひいた鉄板の上で焼きながら食べる一種のバーベキューをすることになったのである。精進料理はいかになんでも浩一の舌においしいと感じるものではなかった。そういう味に対

する飢餓感がたかまっていたところに、新鮮なしいたけのバーベキューが予想外においしいことが加わり、浩一にとっては今までになく気分のいい食事だった。だが、それは再び淑子への未練を目覚めさせるものでもあった。が、すでに決着のついた話である。浩一は冷静にそれを抑えた。

「ねえ、浩一さん。あなた、この食事が終わったら、もう下山しなさい。清玄さんには私からお話しておくから。それの方がいいでしょう。ご自分のためにも。ね、そうなさいね」

もっともな提案だった。今は冷静でいられるものの、ここで清玄に逢ったら、またも嵐が吹き荒れる危険性は十分ある。淑子は平穏を乱されたくないのだ。浩一は頷いた。

食事が終わり、今は淑子と少数の信者以外誰も使わない間道から浩一を下山させ、後片付けをして、ようやく淑子は一息いれた。あのいつもの部屋で座卓の上に載せた茶碗で冷めたお茶を飲んだ。

先ほどまで浩一がたたずんでいた空間を見た。

―楽しかった……

浩一がいなくなった今、その想いが走る。が、どうにもならないことだ、と自分を納得させていた。そして次の瞬間、淑子の関心は「自分」に向いていた。浩一にはああ言ったものの、夜叉の奇蘭というここのご神体の役割を失った今、ここにいる意味はかなり小さくなった。清玄もおそらく自分への接し方を変えるだろう。離婚されたらどうしようか。そんなことが突然思い浮かんだ。再び浩一の顔が脳裏をよぎる。とにかく清玄に状況をどう説明しようかと悩んだ。

もう日がかなり傾き、日の光が赤い色になった頃、玄関に清玄の声が聞こえた。

「奇蘭、奇蘭、わしじゃあ、清玄じゃ。例の男を返してくれ。もう返さにゃならんて」

騒々しい声に、淑子は救われる思いで、立ち上がりあえて襖から顔を出さないまま、部屋の中から清玄を呼んだ。

「清玄様、少々お話ししたいことがございます。どうぞ部屋にお入りになって下さいまし」

玄関の物音が一瞬にして凍り付いた。清玄はやはり奇蘭が恐ろしいのである。それを考えると淑子はおかしくなった。もう一度繰り返した。

「さあ、お早くどうぞ」

やがて観念したかのように、履物を脱ぎ上に上がった音がした。襖が開けられ清玄が顔を出した。

「む、奇蘭、一人か。あの男はどうした……、あっ、奇蘭、お前、いったいどうしたというんじゃ……。いつもならお前の後ろに立つヨニの姿が見えん」

「これをご覧下さい」

淑子は立ち上がると清玄に背中を向け着物を下へ滑らせた。

ヨニの絵のない真っ白な淑子の背中に清玄は腰を抜かさんばかりに驚いた。

「こ、これは……、いったいこれはどうしたというんじゃ」

「今からお話しします」

淑子は足下に落ちた着物を拾い上げ、身体にはおって腕を通し、帯を止めると再び清玄の方を向き、そこに座った。

それにつられて、向かいでポカンとしていた清玄も座卓を挟んで座った。

淑子は浩一がここに来てからのことを、順を追って話した。身体を求め合ったこともすべてそのまま話した。

「不思議なこともあるものよのう。あの煩悩など何も知らぬ者と思っていた若者がよりにもよって夜叉だったとは……。で、彼は今どこに？」

「お昼を一緒に食べた後、下山させました」

「何故？」

「清玄様と逢わせたくなかったからです。理由は……、お察し下さい」

「……そうか。奇蘭、いや淑子よ。もしお前が望むならそうしてやっても良いのだぞ」

「いいえ、淑子は清玄様の妻で満足です」

「そうか……。が、それにしてもあの男もよく納得して一人で下りたのう。わしだったら強引に連れて下りていただろうに」

「私が断りました」

「そうか。そうだろうな。それしかあるまいな。……淑子、お前はもうここのご神体でも何でも無くなったんじゃろうが。それならここにいなければならぬ理由も消えたはず。違うか？」

「はい、その通りです」

「ならば、わしの寺にわしと一緒に住め。本当の夫婦になってくれ。わしもわしの跡取りが欲しい。そなたわしの子を産んでくれんか」

「はい、おっしゃる通りに致します。どうか淑子を一生お側に置いて下さいまし」

「いや、わしこそ頼む。いやはや、一時はヨニにこのまま呪い殺されるかと思ったが、こうなるとヨニには感謝せねばなるまいなぁ」

「まあ、そんなことを。それよりいいんですの。お坊さんが子どもなんて……」

「仏教にもいろいろある。まだ頭の固いのもいるが、うちの禅宗なぞはかなり進歩的な部類でな。寺の相続の問題があるから、どこも皆子沢山の寺ばかりじゃ。わしのところがむしろ変わり者だったんじゃ。実を言えばな。……さりとて戸籍上はお前が妻としているから他から娶ることもできんし、年をとってこどもも作れなんだら、この寺は将来どうなるかとわしも心配じゃったし、檀家衆も皆心配という有様でな。正直良かったと思ったんじゃよ」

「わたしは、子供を産むためだけの女ですの？」

「いや、そんなつもりはない。すまん。ちょっと言い過ぎた。そうではないが、何しろ今まではお前に近づこうとすると、ヨニが祟るぞと言って現われるので、近づくこともできんかったんじゃから。

これからお前のことをうんとかわいがるから心配するな」

「まあ、いいでしょう。それじゃこれからは本当に夫婦ですね。でも一つお願いがあります。お寺に入っても、時々この祠の手入れをさせて欲しいのですけど」

「ああ、もちろん構わんとも。ヘタに荒らして、またヨニが現われても困る」

「良かった」

「お前のことはこれでいいが、あの若者のことは少し気になるのう……」

「おそらく大丈夫でしょう。何しろ奇蘭でさえも驚いていましたから」

「何にじゃ？」

「力って言ってたような気がします……。私も奇蘭の意識ってそんなに感じ取れたわけじゃないんですけど、時折、どこかで彼女が呟くのを感じたんです。確か、彼の力は自分より強いみたいなことを言ってたように思います」

「奇蘭よりも強い力か……。いずれにせよ魔性のものなんじゃろうがなぁ。むしろそんな男を野に放ってしまったことの方が怖いことなのかも知れんが……。のう、それで、彼には何か変わったことはあったか？」

「変わったと言えば変わったでしょうね……。すごく純粋に感動してました。私の話に。大した話でもないのに。彼、とっても人のぬくもりに飢えてたんですね……。それと人との付き合い方も知らなかったみたいだし」

「だから、お前に任せたんじゃ。煩悩を守護する夜叉ならば、煩悩を悟らせるにはもってこいじゃろうからな。じゃが、それはそれで良かったにしても、夜叉が夜叉を目覚めさせたということになるのう。そのことが気に掛かるが、何か無かったか？」

「別に変なことはありませんでしたけど……。あえて言えば、今朝、朝食の前に、祠を見たいというのでどうぞと言ったら、なかな

か帰ってこなくて。朝食も冷めるし、それで見に行ったら、彼ったら本堂の高座のところでぐうぐう寝てるんですよ。それだけですけど」

「高座のところでか？　お前、あそこがどういう場所なのか、話したのか？」

「まさか、言えるわけありませんでしょ。まだ奇蘭の時ならともかく、淑子に戻ったらちょっと話せない内容ですから」

「そうだろうなあ。何もないならそれはそれでいいが……。何にせよ、あの男のおかげでヨニは去ったんじゃから、ただ者であるはずはない。が、わしらにできること、心配してやれることはもう無いんじゃろうな。あとは御仏にすがるのみということになるのかのう。それにしても啓作はえらい男を連れてきおった」

「啓作さん、いったい何で彼をここへ連れてきたんです？」

「何でもあやつ自分の女の後始末をするのにあの男を使うつもりらしい……。全くとんでもない極道もんじゃ」

「まあ、なんてことを。でも、何で彼に？」

「見れば分かるじゃろうが。それぐらい。啓作もあの男に惚れきってるんじゃ。だから自分が愛している女をあの男に引き取らせたいのじゃよ」

「浩一さんて、男も惚れさす魅力があるんですね」

「もしかしたら、夜叉としての力なのかも知れんがな。……もし、そうなら、……なるほどヨニが喜ぶような世界を作るのかも知れんのう、あの男」

清玄は、目を大きく開き、淑子を見た。清玄の目の奥で何かが踊ったように淑子には見えた。

その意味は、少し遅れて淑子にも分かった。

「まさか、そんなこと！」

「そのまさかがあるから、ヨニはお前を解放したんじゃ。それしかあるまい。お前を解放する理由は」

「でも彼はサラの夜叉でしょう？」

「わしもその辺がどうなってるのかさっぱりわからんが、どうでもよくなったのと違うか。この際、利用できるものは全て利用しようと、そんな感じじゃなかろうかのう」

「浩一さん……」

淑子は、浩一をあそこで、一人で帰したことが本当に正しかったことなのか改めて自分に問いただすことになった。

第六章　意志と情熱と

お見合い話

「龍造寺さんですか、受付ですが、お客様がお見えになられています」

「客？　おかしいな今日は何のアポも無かったはずだけど」

「伊集院さんという方ですが」

「そうか、分かった。すぐ行く」

「それでは第三面会室にお通し致しますので」

受付からの電話を切ると龍造寺浩一は製図板に向かう椅子から立ち上がった。

啓作の用事の見当はついていた。大方、知恵の問題である。寺から帰った後、浩一は啓作達と接触することを避けていたのだ。

が、いつまでも中途半端に話を中断もできない。とにかく会うだけは会おうと思った。

面会室へ入ると、啓作が典型的なセールスマンという風体で浩一を待っていた。

「ずいぶんつれないじゃないか、下山後は一切コンタクト無しとは。もっとも清玄和尚から話は聞いたが、お前は実は大変な男だったらしいな。奥さんを普通の人にしてしまったらしいじゃないか」

「よせよ。俺のせいかどうかも分からない。偶然だっただけということもある」

「お前がどう言おうと、俺には分かる。今日のお前は以前のお前とは全然違って見える。俺だけじゃないだろう。きっとここの誰かにも言われたはずだ」

図星だった。寺から帰った後、浩一は会社でも得意先でも実家でもどこか変わったと言われていた。が、そんなことはおくびにも出さず、浩一は静かに言った。

「お前だけだよ。そんなこと言うのは」

「そうか。じゃ、この会社も大したことはないな。お前早く辞めて独立した方がいいぞ。いい客掴まえたら、すぐおさらばした方が

いいな」

「啓作、少しは遠慮してくれ。一応俺はここの社員だ。見習いでも」

「これは申し訳ない。ちょっとストレートに言い過ぎたな。で、今日俺がここに来た理由は分かってるんだろ」

「だいたいは……。お前が俺をあの寺に連れて行ってくれて、貴重な体験をさせてくれたことは感謝してる。だが、知恵さんのことについてはやっぱり俺には荷が重い。きっぱり断らしてもらう」

「何故だ？　いったい何が不満なんだ？」

「俺はあの山で奇蘭さん、いや淑子さんにいろいろなことを教わった。俺は分かったんだ。何が自分に欠けてるか。周囲に気を遣うのがいやで逃げていた自分がよく分かった。その上で、人を愛するということがどういうことなのかも分かった。それで今の俺の知恵さんに対する気持ちを言えば、好意は持っている。だが、彼女を愛するという自分の意志は持てない。だから彼女とは付き合えない。そういうことだ」

「そうか、お前の意志が問題か。それは困ったな。お前は俺が押しつけた格好になっていることが気に入らないのか」

「はっきりとは俺にも分からない。ただ知恵を愛したいと思わないんだ。悪いが」

「やれやれ、ようやくまともな男になったと思ったら、この有様か。まったく世の中はうまくできてないもんだな。そうきっぱりと言われたらとりつく島もない。俺の面目がつぶれるくらいは大した問題じゃないが、知恵にはかわいそうなことになったもんだ」

「よせよ。俺の目の前でそういう話をしないでくれ」

「ああ、確かにそうだ。お前の言うとおりだ。だが、一つだけ言っておく。俺がお前に目をつけたのは知恵がお前に惚れてることを知っていたからだ。まあ、その気持ちをどう見て考えるかはお前の自由だがな。それじゃ、邪魔したな。済まなかった。いろいろ引きずり回して」

浩一は啓作に一瞬知恵をどうするつもりだと質問を出しかかった。しかし、それはもう自分とは関係ないことだと思い直し、結局啓作が部屋を出て行くのを黙って見送った。頭ではこれで良かったんだと思っても、心には妙なわだかまりが残り、とても問題の解決した爽快感とは言える状態ではなかった。浩一は何となく自分に対して腹がたってきた。

―俺は心が狭いだけなのかもしれない。啓作に対するコンプレックスだけで自分の意志を決めたのではないのか……

奇蘭、いや淑子なら、どう言うだろう。そんな思いが頭を駆け抜けた。結局、啓作にはっきりと返事をしたものの、自分の中のわだかまりはかえって深まっただけであった。

気を取り直して製図板に向かい、仕事に没頭することにした。とにかく何もかも忘れるには図面の中の世界に入り込むことが一番だと思ったのである。

「おい、龍造寺！」

自分の名前を大きな声で呼ばれて浩一はようやく我に返った。呼んだのは主任だった。

「おい、聞いてるのか、龍造寺。お前いったい何を書いてるんだ？」

「あ、え、その川原邸ですけど……」

「おい、馬鹿も休み休み言え。川原邸のことは今朝相原のチームに任せるからと言ったはずだぞ。俺たちがやるのは田辺邸だ。お前何も聞いてなかったのか？」

言われて浩一はそのことを思い出した。ちょうどその話を聞いて製図板の図面を変えようとしていたところに、啓作が現われたので、図面を張り替えるのをすっかり忘れたまま、仕事に没頭していたのである。

「あ、どうもすみません。すぐやり直します」

「そんなことじゃ困るんだがな。明日には概略を説明に行くからって営業には急かされてるんだ。こんなことで時間を無駄に使わないでくれ」

「申し訳ありません」

「最近少し一人前になったかなと思ってたんだが、やっぱりまだまだだな……。そうか、そういえば、お前がいたんだなぁ。おい、龍造寺、ちょっとこっちに来い」

主任は先ほどまでの怒声とはかなり違う、どこか嬉しそうな声で浩一を呼んだ。大失敗の直後の浩一にはもちろんそんな判断がつくはずもなく、呼ばれるままに主任が指さした打ち合わせ机に向かった。

「及川主任、何か？」

「うん、仕事のことじゃないんだ。君、今付き合ってる人とか、フィアンセとかいるのかな？」

浩一はその言葉で、見合い話だとすぐに分かった。一瞬の躊躇いを感じたが、自分で押し切るようにこう口に出した。

「いえ、そういう人はいません」

「そうか、それなら、ものは相談だが、ちょっと会ってみないか？いい人がいるんだが。君にとっても、いろいろと身の回りの世話を見てくれる人がいた方が仕事も落ち着いたものになるんじゃないかと思ってね」

「はあ……」

「うん、どうやらあんまり嬉しそうじゃないな。そうか、やっぱりお前に向いてないのかな。お見合いなんて」

この及川という主任は、まだ三十過ぎの若さだったが、なかなかのたぬきで有名な男だった。浩一の興味の有無の見極めをつけようとしきりと瀬踏みする言葉を繰り返す。が、時間が経てば経つほど、浩一の心はむしろ冷ややかなものに変わってきていた。サラリーマンとしての当たり前の態度とは、こういう場合、上司に声を掛けられたら、喜んでそれに応じるものだろうということは頭では理解していた。だが、納得はできなかった。なんだかんだと言っても、本人達の気持ちや希望などよりも、その話を世話したことによる人脈作りが重視されていることに間違いはないのだ。だから、本人達の

希望など何であっても、そういう決して「潰されてはならない顔」が介在する以上、本人に会ったらまず断ることなどできないのである。

「あの、主任。僕にはそういうお話は結構ですから……」

及川はその言葉を聞くと鼻白んだような顔をした。これで浩一の心証は相当悪化したはずだと浩一にも分かっていた。

「君にそういう希望がないんじゃあ、しょうがないな。いいよ、もう席に戻っても」

再び製図板に向き合った時、浩一は知恵の話を思い出していた。さっきのような見合い話と、啓作の荒唐無稽な話、どちらが当の本人のことを親身になって考えてくれているかという比較である。啓作への反発が全然ないと言えばうそになるが、それでも及川の持ち出しかけた見合いよりは、真摯に聞ける話だと思った。なぜならそこに人脈やコネづくりの期待のような邪心はどこにもなかったからである。仮にそのことが将来的な経済的成功が密接に結びついていたとしても、そういうものを選択する自分は許せないと思った。

淑子たちのおかげで、浩一は人間のことはだいぶわかるようにはなったが、分かったからといって、それをすぐに容認できた訳ではなかったのである。いや、分かったことで浩一にはより純粋なものに対するあこがれ、熱意、希望、そうしたものにより強く執着するようになったとも言えた。社会を理解はしたものの、決して社会に飼い慣らされた存在にはなっていなかったのである。

夕方までに何とか新しい図面を仕上げ、ほっとしていたところで、電話が鳴った。

「はい、栃木中央技研ですが」

「俺だよ。啓作だよ」

「何だ。もう話のカタはついてるだろう」

「まあな、だから迷惑掛けたお詫びにご馳走しようと思って電話したんだ。どうかな」

「あ、ああ。気持ちはありがたいが、今日は遠慮しておく。そう

いう気分じゃないんだ。他にもいろいろあって……」

「そうか。分かった。それじゃ無理強いはしない。また機会を改めて誘わせてもらう。じゃあな」

会いに来た時も、今の電話にしても、啓作にしては、あまりにも簡単に諦めるので浩一は少々拍子抜けしていた。そのことが、何か釈然としない気持ちを自分に持たせているのだとようやく気がついた。啓作はまだ何か企んでいるのだろうか……。そんな疑いがほんの少し産まれた。しかし、自分が今日語った中身は啓作の持論とも完全に一致している話である。意志による愛。そう考えると啓作が強く出ないのも頷けた。

また脳裏に淑子の顔が浮かんだ。淑子に会いたかった。今の自分の気持ちを理解してくれるのは淑子だけだと思った。

「はああ」

「どうしたんです？　龍造寺さん、そんなため息なんかついちゃって」

隣の製図板に向かっている同僚の吉田が声をかけてきた。この吉田は滅多に話しかけてこない。一応先輩社員なのだが、そういうふうに振る舞おうともしない。浩一同様、自分の世界を持っている男であった。無口で話をしない浩一に話しかけてくることなど一度もなかったのである。従って浩一は吉田のことをほとんど何も知らなかった。

「え、あ、はい。不謹慎でした。どうも済みません」

浩一は素直に謝った。

「え、そんなつもりで言ったんじゃないですよ。別にいいじゃないですか。ため息ぐらい……。ねえ、龍造寺さん、もう仕事終りなんでしょう。一度一緒に飲みに行きませんか？」

「え、あ、はい。いいですよ」

浩一には断る理由がなかった。この近くに居ながら、言葉を交わすことがほとんどなかった吉田という人物とはいずれこういう機会を持った方がいいと思っていたのである。

夕食を兼ねて二人は会社近くの炉端焼きの店に入り、カウンターで並んだ。もちろん浩一には慣れない世界ですべて吉田に引っ張られるようにそうなったのである。ただ、山での経験の結果、こういう店にも料理にもそれほどの拒否反応は無くなっていた。

突然、吉田が浩一に言った。

「龍造寺さん、最近急に雰囲気変わりましたね。何かあったんです？」

「い、いや、別に……」

「そうかなぁ。以前だったら、声かける前に、僕には声をかけないで下さいみたいな臭いをプンプンさせてたのに。そういう臭いが全然しなくなったし。仕事中の龍造寺さんも以前は殺気があって、物音一つ立てられないような雰囲気だったのが、急に普通の感じになっちゃって、もうびっくりしてたんですけどねぇ」

「え、そうだったんですか！？」

浩一には意外だった。今の話からすると吉田が無口だったのは自分が原因だったらしい。

「そっか、龍造寺さん、自覚は全くなかったんだ。それじゃあしょうがないや。でも助かりました。何にせよ、人を威嚇する雰囲気が無くなってくれて。正直息苦しいくらいだったし」

「え、そんな思いまでさせてたんですか。どうもすみません」

「いや、緊張してたんでしょうね。それだけ。だけど新人が緊張してても普通はせいぜい二時間ぐらいですよ。でもあなたの場合は、丸二年はそんな状態だったんだからやっぱり普通じゃないね。アハハハハ」

なるほど自分を啓作、清玄、淑子が揃って普通じゃないと言ったはずである。自分が浮いていたということを指摘することも憚られるぐらい、自分は周囲に違和感を与えていたのかと改めて驚く浩一であった。

にこやかに微笑む吉田の顔は初めて見たものだった。自分の記憶にある吉田はいつも厳しい顔をしていた。だが、あれは自分がそう

させてしまっていたらしい。その微笑む顔につられるように、浩一も笑った。

吉田は饒舌だった。会社のこと、仕事のこと、友達のこと、家族のこと、何でも話に出していた。一方の浩一には話す内容はほとんど無かった。なるほど淑子に言われた通り、心の通わない他人との接触を続けていたことがよく分かった。そんなだったから、浩一側の口はどうしても重くなる。吉田がいろいろと質問をするような場面展開になった。それは自然と先輩社員と後輩社員の交流へと変わっていった。

「さっきは、なんであんな深くため息ついてたの？」

「実は主任から、見合い話を持ちかけられそうになったのを断ったところだったんです」

「断ったの？　そうか。君、フィアンセがいるんだ」

「いや、そうじゃないんですけど、何となく、会社の人間関係にプライベートが巻き込まれるのってかなわないなぁって」

「ああ、なるほどね。君らしいや。そうか、じゃ、及川のやつ、面食らったろうな」

「あれ、吉田さんは及川さんと同期なんですか？」

「ああ、そうだよ。まあ、君が嫌いな選択をしたのが及川だって考えたらどういう状況かすぐわかるだろ」

「ああ、そういうことなんですか」

「及川はおとなだよ。だからそういうことを簡単に割り切れるんだ。それでたぶん及川は満足できてる。だけどそれだけさ。人生なんていろいろある。及川には君の選択の理由はわからないだろうけど、それはまたそれで淋しいことなんだよな。本人にとって」

「どういうことです？」

「及川の周囲の人間が全員会社の人間だったらそれでハッピーなんだろうが、家族とか親戚とかそうじゃない人間も多いだろう。そういうところでは、君が選択したような判断が正しいとされる場合も多いのさ。だから会社だけ、家だけでは何も分からない。そうい

うもんさ。人生は。何にせよ、君は君が正しいと思うことを進めばいい。ただ、結果は必ずついて回る。それから逃げるなというだけ」

吉田との会話は、なんとなく釈然としていなかった浩一の気分をようやく晴らしてくれるものだった。酒はあまり飲みつけていなかったが、それでも楽しい酒だと感じていた。

「吉田さん」

突然カウンターに向かって座る二人の真後ろから女性の声がした。驚いて振り返ると、背の高い、かなりの美人がそこで微笑んでいた。

「あ、仁科君。何で君がこんなところに？」

「あらいけません。炉端焼きおいしいじゃない。それにお酒も。デートかと思って冷やかそうと思ったら、一緒の方は男性ですの。お淋しいんじゃなくて？」

「ご挨拶だな。そういう君こそ、デートなんだろ。いいよ。僕たちに気をつかわなくても。彼氏のところに戻りたまえ」

「まあ、それこそご挨拶ですわ。私、これでも先ほどまでここで仕事をしておりましたの」

「仕事？　じゃあ、この店の取材かね」

「いいえ、そうじゃなくて、インタビュー」

「ああ、そういうことか。で、そのインタビューは終わったのかい？」

「ええ。ようやく。言ってることが分からなくて、何度も同じことを説明してもらって、おかげで時間を大幅にオーバーしちゃったんです。で、先方にお引き取りいただいた後、一人でご飯を食べて、そのまま飲んでいたんです。そういうことなので、よろしいですか？ご一緒しても」

「ああ、構わんよ。あ、そうそう、彼はうちの会社の同僚の龍造寺君。それから、こっちは大学の後輩で……、何と紹介すればいいのかな、君の商売は？」

「そうですね。作家志望のジャーナリストかしら」

「だそうだ。の仁科陽子女史」

一色強兵

「仁科陽子です」

「はじめまして、龍造寺です」

こうして浩一はこの仁科陽子という女性と出会ってしまった。

燃える女

女性とは分からないものだとＢＭＷ３２０ｉの助手席に座った浩一は思っていた。自分が何故今こうしているのかも冷静に事態を振り返っても飲み込めないのである。それほどに仁科陽子の浩一に対する行動は何もかも唐突だった。

あの夜、浩一の目の前に現われた時からそれは始まっていた。

「じゃ、僕は先に帰らしてもらうから……。あ、ここは僕のおごりでいいからね。誘ったのは僕だし……」

仁科陽子が現われて吉田と三人で炉端焼きに並んで座って三十分もすると吉田は唐突にこう言って席を立った。

「え、まだいいじゃないですか」

「ま、妻帯者はいろいろあってね。君たちほどのんびりできないんだ」

「まあ、奥様が羨ましいわ」

そんな言葉を背中に受けながら、吉田は店を出た。

後に残された陽子と浩一は似合いのツーショットで並ぶことになった。

「ね、龍造寺君は今付き合ってる女性いるの？」

「ずいぶんとストレートに聞くんですね」

「だって、射程の中に入ってるかどうかは大事なことじゃない？」

「射程？　狙われてるんですか？　僕は？」

「そう。私、何となくあなたに興味が湧いたの。だからちょっと付き合ってみたいなって」

「僕はあなたのような洗練されてる女性の相手はできませんよ。お前には女性の相手は無理だって、回りからいつも言われてるし」

「まあ、いいレスポンスだこと」

「いいレスポンス？　何で？」

「だって並の男なら、みんな私が興味を持ってるって言ったら、見ておかしくなるぐらい自分のことを格好つけて紹介するものな

のに、あなたったら、全然そっけなくて。わたしってそんなに魅力がないのかしらって、結構傷つくのよね～。これでも」

「あ、そうだったんですか。どうもすみません……」

浩一は本当に済まなそうに頭を下げた。

「ほほほほ。あなた面白いわ。そんなまじめに受け取らないで。こっちも気恥ずかしくなっちゃう……。なんかまるで中学生の男の子と話してるみたい。ねえ、ぼく。彼女いないんでしょ」

「か、からかうのはやめてくれませんか！」

「あ、ごめんなさい。つい、うっかり。気を悪くした？　本当にごめんなさい。でもあなた本当に面白い……、また失礼なこと言っちゃったわ。面白いじゃなくて、純粋なのね。私初めてだわ。こんな純粋な男性に会ったの。ねえ、もっとあなたのお話聞かせて」

「そんな、あなたに話せるようなことは何もありませんよ。だいたい何で僕があなたに僕の話をしなくちゃいけないんです？」

「そう、そのレスポンスよ。私が興味をそそられるのは」

「今の僕のどこが変なんです？　僕は当たり前のことを言ったまでです」

「偶然でも、私みたいな美女に出会ったらね、普通の男は気があろうと無かろうと、たいていは気をつかってね、本当か嘘かは別にして、まあそれなりに面白い話を聞かせてくれるものなの。ところがあなたったら、私がこれだけモーションかけてるのに、全然それに乗ろうとしないし、それどころかムキになって反発してくるし。興味が湧かないわけないじゃない」

「そうですか。それはどうも失礼しました。僕は女性と話すの慣れてなくて……」

「そんなふうに謝られても……、どう反応していいのか困っちゃうわね、こういうのも。ねえ、私と暫く付き合ってみる気なあい？　どうせ彼女もいないんでしょう？　あ、いけない。今のはナシ。聞かなかったことにして」

陽子は浩一に向かって両手を合わせて頭を下げた。

―何なんだ？　この女。まるで啓作を女にしたようなやつ……

「別に構いませんけど、多分あなたを失望させるだけですよ」

「付き合ってって、こっちからお願いまでして、ここまでそっけないオーケーをもらったのはこれが初めてだわ……。きっとそれがあなたらしいって言うんでしょうね。しっかし、癪に障るわね。少しは私に魅力を感じてくれてもいいんじゃないの？」

陽子はぷいと頬を膨らませ、ふてくされたように言った。

「あ、ごめん。気がつかなくて……。そんなつもりじゃあ……」

「ほほほほ。そう言うと思った。まあいいわ。私もあなたなら天狗になる心配しなくていいもの。率直なご感想をどうもありがとう。多分あなた以外の男性からは絶対もらえないアドバイスね。感謝するわ」

そう言うと、陽子はいきなり浩一のあごを持ち上げるように自分の指を当て、浩一の顔を自分の方へ引き寄せるといきなり浩一の口に軽いキスをした。唐突で素早いキスに浩一は身体を硬直させた。

「い、いきなりですか……。すごい人ですね。あなたは」

「あら、そう？　だって付き合ってくれるんでしょう。私と。それだったらキスぐらい何でもないじゃない」

「まあ、それはそうかも知れませんが……、ちょっと早すぎませんか？」

「そんなこと言ってたらね、すぐおじいちゃん、おばあちゃんになっちゃうのよ。フィーリングが大事なの。恋はね。私あなたが気に入ったわ。それだけでキスしちゃいけない？」

「……いけなくはないでしょうけど……」

「じゃ、いいじゃない。それとも私とキスはしたくなかった？」

「いいえ」

「じゃ、問題ないわね。ね、そろそろここは出ましょう。もっと楽しめるところがあるの。私が知ってるいい店があるから」

「あの、僕はあんまり持ち合わせを持ってないんですけど」

「おほほほ。いいわあ。あなた。全然自分をかざろうとしないの

ね。いいわ。私が誘ったんだから、奢るから心配しないでついてらっしゃい」

そう言うと陽子は席を立った。つられて浩一も立ち上がり、陽子の後に続いた。

陽子が浩一を案内した店はディスコティックだった。ビートの効いたリズムに合わせて若者が思い思いのダンスを光る床の上で繰り広げ、上からはミラーボールに当てられた光が店内を満たしていた。が、その音のボリュームは浩一には全くの初体験で、ただただ圧倒されていた。こんなところがどこが楽しいのだというのが正直な気持ちだった。だが、案内されたテーブルでほんの少し出された水割りに口をつけると、陽子は浩一の手をつかみ、かなりの力で強引にフロアへ引っ張り出した。

「さ、踊りましょう。踊ったことないぐらい分かるけど、まあリズムに合わせて身体を揺らすぐらいなら出来るでしょ。それで十分だから」

スーツの上着を脱ぎ、白いシャツと濃い赤のスカート姿の陽子が身体をひねらす。ダンスのことはよく分からなかったが、見た目にも決まっている感じはあった。相当踊っているのだろうと思った。気乗りはしなかったが、目の前で踊りながら浩一をずっと見ている陽子の手前、全く何もしないという訳にもいかず、ヒザを少し曲げ、身体を左右に揺らしながら、手を身体の前で上下させると何となく格好はついた。回りを見てもその程度の踊りの人間が幾人か混じっていた。しかも最初は学生のような若者ばかりの店かと思っていたが、よく見るとネクタイ、スーツ姿の社会人もかなり混じっていた。どう見ても自分と同世代の人間である。

浩一は同世代の中でも浮いていたということに気づかされた。

「結構いけるじゃない。前にも来たことあった?」

陽子が半ば怒鳴ったような声で訊いてきた。

浩一も怒鳴り返した。

「まったくはじめて」

「センスあるのね。きっと」

二人はそのまま踊り続けた。最初はぎくしゃくとやっていたが、段々音に乗る感覚がついてくると、自然と身体が動くようになった。それとともに、気分も良くなりこれが楽しいということが分かるようになった。

その浩一の変化に気がついたのか、陽子がまた怒鳴ってきた。

「楽しい？」

浩一は声の返事ではなく、ダンスの動きとして右手を挙げてそれを左右に振ってみせた。

陽子がそれを見て笑顔を見せた。

かかっている曲はどれも知らないものだったが、リズムがはっきりしていることはどれも変わらず、適当に踊れることは踊れた。夢中になって踊っていると、何曲目かが終わったところで突然フロアの照明が落とされ、静かな曲に変わり、深海の底のような別世界になった。

当惑しているとすぐ目の前に陽子が居た。

「チークタイムって言うの。スローダンスの時間。こんなふうにして踊るの」

そう言うと、自分の身体を浩一に密着させてきた。回りを見ても同じように抱き合っている男女が何組かいた。ただ、一人ではいられないので、先ほどまで一人だけで踊っていた連中は席に戻って休んでいるようだ。フロアは急に広々とした。

「ねえ、訊いていい？」

「何を？」

「もちろんあなたのこと。何で恋人がいなかったの？」

「……そうだな。どうしてかな。僕にも分からない」

「あなたのルックスならもてたと思うけど」

「そうかもしれないけど、女性と一緒にいるのは怖かったから」

「どうして？」

「どうしても……。だけどこの間ようやく直してもらった」

「直してもらった？　病院で？」
「いや、お寺」
「おほほほ。どう訊いても面白いわ。あなたのお話。ね、今晩は徹底的に付き合ってね。どうせ待ってる人もいないんでしょ」
その返事を口に出しかけたところで浩一の口は陽子の口に塞がれた。
こうして、陽子との関係は陽子の意志によって着々と既成事実化されていった。

「このアパートなの？」
電信柱の後ろにつけるようにＢＭＷ３２０ｉを停めた陽子が助手席の浩一に訊いた。
「そう。家賃が安いというだけで選んだアパートだから……」
「なるほどね。今時の若い人が借りるとしたら、それしか理由が思い浮かばないようなアパートだものね」
ゆうに築二十年は過ぎていそうなその佇まいは、昼間でなくても、また中に入らなくてもそのボロさを十分感じ取ることができた。
「ね、誘ってくれないの？」
黙って下りようとする浩一に陽子が声をかけた。
「え、あのアパートに？　いくら何でも女性を誘うような場所じゃないよ」
「何、水くさいこと言ってんのよ。さっさと誘いなさいよ。待ってるんだから」
「本気……ですか？」
「私はあなたの彼女なのよ！　どうしてあなたが遠慮する必要があって？　あなた男でしょ。もっと自分に自信持ちなさいよ」
「はあ、それじゃ……、ちょっと上がっていきませんか？」
「全く、その言葉が出るまで何でこんなにめんどくさい会話をしなきゃいけないのかしら。本当にあなたは手がかかるわ」
「はあ、どうもすみません」

「それが余計なの！」

「……」

浩一はクルマを降りて運転席側に回ると、陽子のドアを外から開けた。

「ありがとう。ようやく彼女らしく扱ってくれたわね」

「……」

浩一は下手に言葉を出すとまた怒られることを懸念し、黙ったままアパートへ先導した。

狭い通路、裸電球の照明、下水から立ち昇る臭い……、浩一には陽子のような女性が好き好んではいる場所ではないという確信だけがあった。が、

「実を言えば私もね、ちょっと前までこんなアパートに住んでたのよ。お金無かったし。最近になってようやく記事が売れるようになって、思い切って高いところに引っ越したんだけど、別に寝るだけに戻ってるような場所だから、嬉しかったのは最初のうちだけだったわ」

と陽子が後ろから語りかけてきた。

「陽子さんの実家は？」

「日光。観光旅館なの」

「じゃ、おかみになるんだ」

「残念でした。姉が二人もいるから、私にはそれはないわね。それに客商売の辛さは何度も見たから、自分でやりたいとも思わない。モノカキの方が性に合ってる」

浩一には、陽子のはっきりした物言いなら、却って旅館のおかみに向いているように思えたものの、反論の嵐になることを避けてあえてそれは口に出さなかった。自分の部屋の前に来て、鍵を取り出しドアを開けた。

「汚いところだけど、どうぞ」

「悪いけど、今日はここまでにさせてもらうわ。私、実は明日の締め切りの仕事が残ってるの。で、案内してもらったのはあなたの

部屋を教えて欲しかったからなのよ。ごめんなさいね。期待させちゃって」

「い、いや、別に気にしてないよ。こんな汚い部屋に君が来ることと自体、全然考えてなかったんだから。でも、何で僕のアパートを知りたかったの？」

「決まってるじゃない。あなたをいつでも襲えるようによ。それじゃ、これで失礼するわ。お休みなさい」

そう言うと、陽子は再び来た道を引き返していった。

浩一は呆気にとられ挨拶をすることも忘れ、その姿を見送った。

尾行

「おい、まさか。うそだろ」

公用車の公開入札に応札するために市役所を訪れていた啓作は、駐車場に停めたクルマの中で、突然目の前に現われた光景に愕然としていた。

「見間違いじゃないよなぁ」

そんなことを一人呟いた。

その視線の先には一組の男女が居た。男はネクタイにスーツのズボン、黒の革靴で、上着だけは設計技師などがよく着ているクリーム色の作業服の上着を着て、手にはＡ４の大きな茶封筒を持っていた。その服装は啓作の記憶にもあるものだった。間違いなく龍造寺浩一であった。が、浩一と一緒に歩くその女性は啓作の全く知らない女性である。しかも遠目で見てもスタイルがよく、黒い大きな瞳の目立つ美人である。しかも、その二人の距離は、二人が単なる仕事上の付き合いの関係以上にあるように啓作には思えた。女性の位置は、浩一の懐にあるように見えるのである。

浩一がどういう人間かを知らない人間であれば、古くからの友達なのだろうという推測も成り立つ。だが、啓作は浩一のことをよく知っていた。山に連れて行く前の浩一は、織江とのデートの時でも、あんなに近くには立てなかった人間なのである。つまり、その女性が誰であれ、山から下りた後の浩一でなければ、あの距離を保てる関係にはなれないということを意味していた。

「……あいつ、いつの間に……。意外だったな。知恵のために山に連れて行ったことが結局は知恵には悪い結果を作ったのか……。いや、もしそんなことになったら、知恵に申し訳が立たなくなる……」

啓作には一つの計算があった。それはいかに山で浩一が教育されて人間が成長しても、つまるところ、浩一の純粋さをそのまま受け入れられるような女性は知恵以外、いないはずだという確信から来ていた。つまり、浩一が啓作の頼みを断っても、結局のところ、知

恵は浩一と一緒になるはずだと計算していた。だから、無理に浩一を説得しなかったのである。そんなことをすれば浩一に妙な意地をはらせかねない。だから安心して浩一の動きを待っていたのである。

が、山から下りて数日も経たないうちに、親しげに、しかも浩一に連れ添うように歩く謎の美人の出現は、啓作にとって衝撃であった。

――このまま見過ごす訳にはいかないな……。といっても邪魔したりすれば、浩一のことだからいよいよ知恵とのことは意地になって拒むだろうし。さてどうしようか……

とにかく相手が何者で、どういう人間かを知ることが先決だ。こう考えた啓作は、二人を尾行することにした。こういう場合、セールスマンは便利である。ふだんから常に見込み客を捜しているので、尾行ぐらいならすぐ対応できる。

サングラスをかけてクルマを下りた啓作は、二人の後を追った。市役所の横から奥の図書館に向かっている。ざっと四十メートルの距離を置いて観察した二人の間は、やはり「仲睦まじそう」に見える関係だった。

浩一の方に時折向けられた女の横顔には、恋する相手を見る輝くまなざしがあった。決して、単なる仕事上の付き合いという関係ではないと啓作は確信した。ただ、浩一は遠目に見ても決してそれに積極的に応えてるふうにも見えない。むしろ、びくびくしているようにすら見えた。

――あいつ、いざ女と二人になるとまだ完全に自分に自信は持てていないんだな。浩一はやっぱり浩一か。するとアプローチしたのは女の方か。メンクイ女は多いからな……。だが、あれほど美人なら自分からアプローチなんかする奴はあんまりいないはずだが。いったい何者なんだ、あの女。

その女は濃いワインレッドのシックなビジネススーツを着ていた。髪も後ろできれいにまとめ、見るからに仕事のできそうなＯＬのように見えた。少なくとも浩一の勤めるあの設計事務所に生息してい

る種族でないことだけは間違いない。声が聞こえているわけではないが、感じからすると、かなり話し好きの上に、相手の気を惹く技術にも長けているようだ。山でだいぶ改善されたとはいえ、あの浩一にあれだけ話をさせるのなら、大したものである。

―　インテリでいい女か……。名前は売れてそうだな……

女の肩から提げられたハンドバックに無造作に手帳、それもビジネス手帳とか、システム手帳のようなものではなく、文房具屋で売られている普通の大学ノートのミニチュア版のような手帳が入っているのが見えた。

―　刑事？　探偵？　記者？

啓作の知識、セールスマンとしての知識がそういう判断をした。メモを仕事に欠かすことの出来ない、しかもそれでいて机で仕事をする時間が限られる人間たちである。書く量が多いから刑事や記者は、ああいう普通の大学ノートのミニチュア版を使うのだ。が、刑事の線はすぐに頭の中で消された。司法警察官独特の雰囲気を啓作はよく知っていた。その昔、繁華街で暴れ回っていた学生時代の経験でそれを知っていた。なにしろ始末書を書かされたことは数え切れないぐらいあるのである。あんな雰囲気の女刑事は見たことが無かった。探偵のことは分からないが、おそらく刑事に近いだろうということでここで落とされた。

―　記者か……。しかし、なんで浩一のところに……

女と浩一はそのまま歩いていたが建物が切れたところで、浩一が急に離れ見えなくなった。女はそのままっすぐに歩いている。浩一が見えなくなった場所に来て右を見ると看板が見えた。

「都市計画課はこちら→」

浩一は業務で来ていたようだった。別れの挨拶をしなかったようなので、用事を済ませたらまた会うつもりなのだろう。

啓作は女の後を追った。女はそのまま図書館に入った。啓作もそのまま入り、様子をうかがうことにした。

やはり女は記者のようだ。一般図書のコーナーには目もくれず、

まっすぐに向かった先には新聞の縮刷版のコーナーである。どうやら過去の事件を調べに来たらしい。

啓作は連れを待つふりをして、ベンチに腰掛け、女の様子を伺うことにした。

縮刷版を机の上に広げて、例の手帳というよりメモ帳に丹念に何かを書き写していた。それが終わると縮刷版を元の書架に戻し、今度は一般書のコーナーに行った。啓作はしめたと思った。すかさず立ち上がり、自分も一般書のコーナーに向かい手元の書架から本を一冊抜いた。女は、文芸書のところで何かを一冊取り、貸し出しカウンターに向かった。啓作も自分で取った本を持って、彼女を追った。貸し出しカウンターの隣で貸出票に書き込んでいる女の手元を、隣で同じように貸出票を記入しながら覗き込んだ。

―　仁科陽子

名前が割れた。

すぐにカウンターを離れ、本を書架に返すと、啓作は図書館の外に出た。この界隈は啓作にとっては庭同然である。入るなと言われなかった建物にはすべて飛び込み訪問をかけていた。それもほぼ毎日やったのである。名刺を配りまくっていた。そのおかげでどこにどんな建物があり、そこにどういう人間がいるのかを知り尽くしていた。

役所の裏口から外に出て、隣接地にある警察署と背中合わせになった敷地に建っている目立たない雑居ビルに向かった。そこの二階に新聞社の出張所があり記者が二人ほど常駐し、目の前の警察に入り浸っては事件ネタを取るのである。

その狭い事務所のドアを開けると小太りの中年男が机に向かっていた。もう一つの机は空いている。どうやら出かけているらしい。

啓作は無造作にその空いた椅子に座り、中年男に挨拶をした。

「こんちわ、米村さん」

「お、キダさんか？　今日は何？　また新車展示会かい？」

キダというのは啓作の勤めているディーラーの所属するメーカー

の名前である。啓作はほとんどの場所でキダさんと呼ばれていた。

「いや、そうじゃなくて、ちょっと教えてもらいたいことがあって……」

「この俺に？　よせやい。俺はクルマのことなんか何にもわからん。まあ動かすことだけはできるけどな」

「いや、そうじゃなくてちょっと気になる女性のことで」

「お前さんも好きだね。だが、俺はあいにくお前さんほど盛んじゃないけど。そっちの方は。まあ最近仏さんになった女のことなら詳しいかも知れないけどな」

「それがね、たぶん同じ記者さんだと思うんです。すごい美人で、名前は仁科陽子って言うんですけど、聞いたことありませんか？」

「仁科陽子？　ああ、一応知ってるな。確かに美人だ。お前さん彼女を狙ってるのか。さすが、めざといというかよく見つけたもんだ」

「おたくの記者さんなんですか？」

「いや、違う。記者と言っても、ありゃ、契約記者だ。本当はフリーランスなんだと思う」

「じゃ、仕事単位で契約してるような？」

「そう。だから、以前夕刊に載せる主婦向けの家庭欄用のコラムを書いてもらったことがあった。それで知ってるだけだ。だけど書いた記事見たら、あれは相当だな」

「相当？　何がです？」

「情熱というか、思い入れがすごい。まあ新聞記者には一番向かないタイプの文章を書く。たぶん小説家か、エッセイスト志望でバイトで記者してるって感じだった」

「へえ、情熱家ですか……」

「実際に話をしたらそんな感じはしないんだけどね。いやあ女ってのは分からんね。まさかあんな原稿持ってくるなんて、ちっとも思わなかったもの」

「で、反響は？」

「そこそこ良かったよ。ただ、毎日あんなもの見せられたら読者もたまらんからね。だから契約記者なのさ。普通の記者の記事にみんなが飽きた頃にお呼びが掛かる……」

「なるほどねぇ、情熱家か。面白そうだな」

「よせよせ、火傷するのがオチだ」

「やけど？」

「ああ、俺もそこのレーヴのママから聞いただけなんだが、彼女おそろしく惚れっぽいけど、乗り換えるのも、もの凄く早いんだそうな。男は何がなんだか分からないうちにフラれてるらしい……。泣かせた男は下手なホステスより多いんじゃないかって」

「そうですか。なかなか興味深い女性ですねえ。何かチャレンジしろと言われてるような……」

「なるほど、難攻不落なら攻め甲斐もあるか。いかにも君らしいね。それじゃ、まあ頑張ってくれ」

「彼女の連絡先教えてもらえませんか」

「ふーん、まあ、君ならいいだろう。えーと、これがオフィスの電話番号だ」

米村は手帳をチェックし、メモ紙に鉛筆で番号を書いて啓作に渡した。

「ありがとうございます。今度オイルをタダで交換しますよ」

「そうか。悪いね。じゃ、頑張れよ……。しかし、いいねえ、若いっていうのは……」

「ま、今のうちだけですからね、それじゃあ、どうも」

― 惚れっぽくて移り気の激しい情熱家の女か……

自分のクルマに戻った啓作は、米村から受け取ったメモを見ながら、これからどうするかを考えた。

普通に考えれば、破局は時間の問題である。だが、その破局がもたらすであろう、浩一の受けるダメージはかなり大きいはずである。浩一が、もし山で教育されていなかったら精神障害を心配しなけれ

ばいけないところだ。だが、たぶんもうそれは大丈夫だろう。

―そうか、知恵という女がどれだけ貴重な存在なのか、知恵の価値を浩一に分からせるにはちょうどいいのか……。雨が降らないと地面は固まらないな……

啓作は仁科陽子の電話番号のメモを名刺入れに挟み込んだ。

夜叉の力

陽子は積極的だった。ディスコで踊り明かした翌日も、会社へ電話が入り、社用外出の時間はないかと聞かれ、その結果市役所で待ち合わせて近くにあるレストランで昼食を一緒に取ることになった。さらに遅い夕食を一緒に取るという約束までさせられた。恋人として付き合うことを了承させられていたから、基本的に断ることは許されない。おかしなことになったものだ、と浩一は思っていた。

市内高級ホテルの最上階のレストランで共に夕食を取った後、当然のように陽子はそのホテルに浩一とともにチェックインした。予約もしてあったようだ。陽子のやることは徹底していた。

シャワーを浴びてベッドルームに戻ると先にシャワーを浴びていた陽子はすでにベッドに潜り込んでいた。

浩一の姿に気がつくとまくらに腕枕を立てるようにして浩一の姿を見た。浩一は腰にバスタオルを巻いただけの姿だった。

「浩一さんは、女性にうぶってわけじゃないのね。これも意外だわ」

「どうして？」

「だってホテルに一緒に入ったときも、私が先にシャワーを浴びに行った時も、全然普通だったじゃない。普通の男ならもっと欲望が燃えさかったような目をしてるものなのに、ちっとも私を見ようともしなかったし……」

「お互い様だろう。君だって大胆なものだ。想像を絶するね。それにここまで周到に準備までして僕とセックスしたいのかい？」

「だって、抱かれないと男の価値は分からないもの」

「男の価値か。セックスに強いことが大事だって？」

「違うわ。女はね、セックスで男のことがいろいろ分かるのよ。セックスがうまい下手はそれはそれで重要だけど、それよりもずっと重要なことがいくつもあるわ。見かけ倒しのハリボテ野郎とか、大きいことを言っているくせに中身は薄っぺらな奴とか、調子いいことばかり言ってるけど実はすべて他人任せの男とか。そういうこ

とがセックスですぐ分かるの。だから男の価値を見極めるならセックスするのが一番早いと考えたわけ」

「それにしても大胆すぎないかい？　君のやり方は」

「それはあなたのせい」

「僕のせい？」

「そうよ。あなたのせい。それは間違いないの。もしあなたが普通の男がするように振る舞う男性だったら、私ももっと普通にふるまってたわ」

「普通にふるまうってどういうふうに？　何が普通なの？」

「そうね。女は、男にどう思われるかをとっても気にしてるってわかるでしょ？」

「ああ」

「だから、普通は自分が淫乱だと思われないようにって考えるから、こんな大胆な行動を取ったりしないわ。だからホテルになんか絶対誘ってなかったわ」

「じゃ、僕の場合はそういう心配がいらないのか？」

「そういうこと。あなたがそんなことを気にする人じゃないってこの間分かったから。いいえ、気にするどころじゃなくて、何故そんなことを気にしなきゃいけないのか分からないってレベルかしら……」

浩一はベッドに腰掛けて陽子の顔を見ながら答えた。

「……よくわかるもんだな」

「それなのに、ベッドルームで女と二人っきりでいるのにちっとも興奮してない。こんなことってあるものなの？　まるでもう結婚した人みたいに」

「それはねぇ。なんと言えばいいのかな。ついこの間特訓を受けたばかりだったから。女性と二人っきりでいることの」

「おほほほほ。そうなの。そういうことなら分かるわ。でも何でそんな特訓なんか。でもあなたの答えはいつも私の想像を超えてるわ。こっちこそ想像を絶するわね、でもどうして特訓なの……。ホ

テルにまで誘ったんだからそれぐらい教えてくれてもいいんじゃない。あなたいったいどういう人なの？」

が浩一は深刻な顔つきになり黙ってしまった。

突然陽子は毛布をはねのけ、後ろから浩一に裸の身体を抱きつかせ、そのまま後ろ側に引き倒した。浩一の顔の真上に上から覗き込む陽子の顔がきた。

「こら、返事は？」

「まだ言える気分じゃない」

「まあ憎らしい人。それならこうよ」

陽子は浩一の腰のタオルを取り去り、浩一のペニスに向かって身体を前進させた。浩一の顔の真上を陽子の垂れ下がったおっぱいが通過し、次に股間が真上に見えた。下着を全く着けずにベッドにいたのである。陰毛がはっきりと見えた。

再び上から陽子の声が聞こえた。

「何でよ。ここまで見せてるのに何であなた全然なの？　失礼しちゃうわ」

「失礼？」

「そうよ、男ならこういう時は意地でも勃起させるものなのよ。女に恥をかかせてることになるの！」

「そっか、そういうもんなのか……。初めて聞いた……」

「呆れた。まさか、あなたインポテンツじゃないでしょうね？」

「あ、ああ。それこそ君が試してみればすぐ分かるんじゃないのか？」

「まあ、私にそんなことまでやらせるつもりなの。しょうがないわね。何て面倒くさい男なの。ヤレヤレだわ」

「じゃ、埋め合わせにこっちはこっちでサービスするから」

そう言って、浩一は真上にある陽子の尻に両手をかけ、それを目の前に引き寄せた。女の亀裂は浩一の舌の射程内に入った。

舌を伸ばしかけて、そこで動きを止めた。何かが浩一に囁いた気がしたのである。そこではないと。次の瞬間、ペニスに陽子の手を

感じた。ゆっくりとしごきながらさらに先端に熱いものを感じた。口に含んでいるようだ。その刺激はすぐにペニスを固くする信号に繋がった。徐々に硬度があがると陽子の動きもすこしずつ大きくなっていく。浩一は伸ばしかけた舌を亀裂ではなく、すぐ横の左ふとももの内側へと走らせ、そこから繊毛を撫でるように亀裂に向かってすこしずつ動かす運動を選んだ。すると一瞬、ペニスに加えられた陽子の握る力が大きくなったのを感じた。しばらく同じ動きを繰り返していると、太ももの肉が自分に何かを言っているように感じた。もう少し上に……。そう言われた気がした。少し首を伸ばしてさきほどよりも上側のラインで同じことを繰り返した。

またしばらくすると同じようなメッセージで右の太ももへうつった。どういうわけか、ペニスへの陽子の刺激は極めておざなりで、時折手が止まってしまい、陽子の動きは停滞気味だった。

同じように意識に響く声を頼りに少し上のラインで舌のマッサージをしていると、今度は陽子の声がした。

「ああ、もう焦らさないで……。もうあそこを構って……」

だが同時に浩一は陽子の別な声も聞いていた。まさに奇蘭の時と同じ状況である。そちらの方は浩一の意識に直接語っていた。

〈今度はおしりの上側をお願い〉

一瞬迷ったが、浩一は奇蘭の時と同じように心に響いた声に従った。

「はあああああ……」

陽子が息を吸い込み、そのまま息を止めた。何かをこらえているようだった。

「あ、あ、う、うそ、な、なんなのよ、こ、これは……」

〈指でクリトリスを撫で上げて。舌はそのまま〉

どちらも陽子の声だ。

意識の指示通りに指がクリトリスの刺激を開始すると、陽子は浩一の身体の上で大げさにもだえ狂った。

「ああ、や、やめなさい、い、いや、やめ、やめて、やめてくだ

さい、お、お、おねがい、だ、か、ら…、あああ」

〈そうよ、それでいいのよ、もっと激しくもっと強く、ほら、もうすぐゴールだから。いけるわ、久しぶりにいけるのよ……〉

「だ、ダメ、ダメになる、な、なに、なにしてるのよ、だ、ダメだってばあ・・・・・。アアアアアアアッ」

結局、陽子とセックスをする前に、陽子は浩一の上で気を失ってしまった。全身から力の抜けた陽子の重い身体を少し持ち上げて、浩一はその下から抜け出した。陽子は目をつむり寝ているように見えた。

「おい、君、大丈夫か。しっかりしろ」

陽子の身体を揺さぶるとか細い声で陽子が答えた。

「……だ、大丈夫よ。少し休ませて……」

浩一は返事があったことに安心し、毛布を一度どかしてから、陽子の身体をベッドの上に寝かしなおした。それからその横に自分の身体を横たえ、陽子と並んで寝た。

「ねえ、あなた……」

「何？」

「どうして分かったの？」

「何が」

「私の弱点」

「弱点？」

「そう、一番感じちゃうところ。あなた最初から最後まで全然それをはずさなかったじゃない。おかげで前戯のつもりが、それだけでいっちゃったじゃないよ」

「そうか、君の弱点だったのか。知らなかった」

「え、それじゃ偶然だったの？」

「……君に……、いや、そうかも知れない」

「そんなことってあるのかしら……。まあいいわ、もう一回やれば分かることだし。ねえ、あなたはいつでも準備ＯＫよね？　何もしてないんだから」

「まあね」

「じゃ、今度は油断しないわよ。さっきは何であんなふうに大胆に身体をあなたにさらしちゃったのかしら。そもそもあれが失敗だったのね。今度は必ずあなたをひいひい言わせてあげるから。覚悟してなさいよ」

「そんな戦闘的になられても……。セックスってそういうもんなのかい？」

「おほほほ。そうね。あなたの言うとおりだわ。でもね、やっぱり悔しいのよね。一人でいかされるのって。やっぱり一緒じゃないと嫌なのよ」

「うん。そういう話ならわかる。思いやりだね」

「思いやり？　うん、まあそういうことかも知れないけど……。なんかそう言われると調子狂っちゃうわ。何かあなたが言うと重いのよ」

「重い？」

「あら、変な日本語使っちゃったわ。英語の訳よ。Heavy ってこと。言うでしょ、口語で盛んに」

「ああなるほど……。そう聞けば分かる。やりすぎとか、たまんねぇみたいな感じかな」

「そうそう。分かるでしょ、私の感想」

「そうか僕は真剣に君の言葉を受け取り過ぎてるってこと？　でも、それって悪いことかい？」

「……そうねぇ、悪いことじゃないわね。そう改まって聞かれちゃうと。ただ、私の気分がいつも慣れてる気分と違って来ちゃうのよ。何か私が慣れ親しんできた世界から、どこかヨソに連れて行かれる感じなの」

「そうか、僕は君を誘拐してるのか」

「あはははは。それ面白いわ。そうか、そう考えれば結構楽しいかも。あなたがどんなところに私を連れて行くのか興味あるし。いいわ、あなたの流儀でお好きにやりなさい」

「それじゃあと、まずやっぱり最初は行儀良く寝てもらわないと……」

浩一は陽子の身体を正しくベッドの方向と合わせ、頭を枕に載せた。

「まあ、行儀作法にうるさそうね」

「ああ、そうかもしれない。でもこうしないとやっぱりぬくもりが楽しめないし」

「ぬくもり？」

「そうぬくもり。ほらこんなふうにね」

浩一は陽子の横に横たわり頭からつま先まですべてを陽子に密着させた。右腕は陽子の身体に巻き付かせた。

陽子は浩一の体温を感じていた。浩一の鼓動も呼吸も感じていた。自分が母親の胎内に戻される感覚があった。妙に心が落ち着いていった。

「なるほどね……。あなたらしい愛し方ね……」

陽子の声は先ほどよりも一気にボリュームが下がり、小さく囁くような声になった。

浩一はしばらく陽子のぬくもりを楽しんだ後、陽子の顔をのぞき込んだ。陽子の大きな目がしっかりと自分を見つめていた。

何も言わず、口から舌を出した。すると陽子もそれを見て自分の舌を出す。舌と舌が口の中間で出会い、舌先同士が相手をまさぐりあった。浩一の中で淑子の声が響いていた。

「慌てちゃダメよ。相手が何を望んでいるのかじっくりと見極めてからでも遅くないんだから……」

―　分かってるよ……、奇蘭

浩一は心の中で呟いてから気がついた。そうだ、奇蘭だ。淑子と奇蘭は、同じ声でも少しだけ調子が違った。今浩一の頭に響いた声は淑子ではなく奇蘭だった。奇蘭？　夜叉の奇蘭がどうしてここに？　まさぐりあいを続けながら、頭の中でそう叫んだ。

「ふふふ、ようやく気がついた？　そうよ、奇蘭よ。淑子じゃな

いの。ヨニ様が教えてくれたでしょう。あなたは夜叉だって。だから聞けるの。ヨニ様の声も、私の声も。それだけじゃないわ、普通の女の心の声も」

― そういうことか……

「いい能力持ってるんだから存分に使わなくちゃね」

〈背中をさわって……〉

「ほうら、きた。頑張りなさい。この女はいつも満足出来なくて、お腹を空かした狼みたいに飢えてる可哀想な女なんだから……」

― 飢えてる？　彼女が？

「そうよ。本人は遊びだって思ってるけど違うの。本気になれるほど満足したことがないの。ま、ほんの少し普通の女性と性感帯の場所がずれてるせいみたいだけど。それに気がつく男性がいなかったっていうことだけの話」

浩一は右手を陽子の右肩にかけ、ゆっくりと自分の方へ引いた。陽子の身体は横向きになり、浩一の方を向いた。浩一は右手を上になった陽子の左脇腹の上の載せて少しずつ背中側に回り込ませた。すると、陽子の反応が変わった。背中に刺激が加わり出すと急に浩一の口に吸い付いてきた。ディープキスに変わった。

「ほらね。彼女、心では自分の弱点をいつも叫ぶのよ。だけど可哀想に。自分に素直じゃないから、それを口では相手に説明できないの」

― なるほど

「感心するのはまだ早いわ。この女の隠されてるヴェールはまだあるんだから。もしあなたが全部それを取ってさらけ出したら、もう彼女、あなたにモノも言えなくなるわよ……。さてと、もう言うことはないわ。それじゃ頑張ってね」

浩一の頭の中の一部にあった意識が忽然と姿を消した。奇蘭が立ち去ったことを意味しているらしい。

〈背中を舐めて〉

ディープキスを止め、陽子の上になった肩をそのまま手前に引き

倒した。そして上側になった背中に舌を這わせた。最初は首のすぐ下、それから段々と腰へと移動していった。

「あふん」

陽子が珍しく声を出した。

浩一は片膝をつくような姿勢で陽子の横に並び、背中へのキスを続けながら、両手で脇腹や乳房のふちを刺激していった。口が腰の辺りまで来たとき、浩一は方向を変え、再び頭の方向に戻ろうとした。

〈ダメ、そうじゃないの〉

浩一は慌てて、引き返すのを止めた。尻の領域に入り込んだ。

〈そうよ、それでいいのよ〉

声に押され、浩一は夢中になって陽子の尻への愛撫を続けた。

身体は自然と陽子の足の方へと移動し、陽子の後ろ側から四つん這いでのし掛るような体勢に変わっていった。

陽子の亀裂からは既に夥しい分泌物が出ているのが見えた。先ほどといい、今回といい、尻が陽子の一番敏感なところであることは間違いなかった。尻たぼへの口でのペッティングを続けながら、両手を尻に掛けた。やることと言えば同じように尻たぼを撫でさするか、亀裂に指を這わすか、あるいは肛門に向かうしかない。

取りあえずは、尻全体に刺激を送るつもりで両手を当てた。

「うぐっ……」

こんなことで、と浩一が訝しく思うほど、陽子の反応は激しかった。

「はあはあはあはあ」

何かに耐えるような息とも声ともつかない音を発生している。

〈肛門を舐めて〉

尻のマッサージは手に任せ、口は肛門に向かった。舌の先端が、肛門のまわりの筋肉を舐め始めると陽子の狂い方は一段と激しくなった。

「あああああ、だめ、そんなことしちゃだめ」

〈いい、いいわ、そうよもっと舐めて〉

口と心の声が正反対の叫び声を上げていた。浩一は両手も肛門攻撃に参加させた。いまや両手の全ての指と舌が肛門を徹底的に責めっていた。

すると陽子が奇妙な動きを始めた。自分の左手を自分の背中に乗せて、尻へ手を伸ばそうとするのを自分でまた押しとどめるような動きを見せたのである。しかもさらに時間が経つとそれに右手も加わった。自分の背中で出会った陽子の両手はお互いにお互いを押さえつけるように握り合った。その姿はまるで自分を自分で拘束しているように見えた。

〈縛って、私を〉

浩一は顔を上げ、辺りを見回した。視界の端にホテル備え付けのたたまれた浴衣があるのか見えた。その上に丸められた帯が載っていた。

――あれなら使えるかな

立ち上がって、クロークのトレイに載せられていたその帯を手に取りベッドに戻った。陽子の握られた手首に帯を巻き付けて引き絞った。

「あああ」

陽子が感極まったような声を上げた。反抗の声は全くなかった。両腕を一本になるように帯で縛りあげた。陽子の姿が急になまめかしくなったように見えた。腕の幅の分、上半身が細くなり、結果的に尻が一層大きく見えるようになった。亀裂からの分泌物はさらに量を増していた。もうしずくが滴り落ちていた。が、浩一はその亀裂には一切手をかけなかった。そこは感じない点なのだ。陽子の場合は。肛門への手の攻撃を再開した。もう十分なマッサージで柔らかくされた肛門括約筋は、指一本で十分に変形するほど柔らかくされていた。試しに、指三本を束ねるようにしてその穴を貫いた。

「あああああ、だ、だめ、そ、そんなことしちゃ、いやあああ」

〈ああ、もう最高よ……。もっと無茶苦茶にしてお願いだから〉

矛盾する声が響いた。陽子のアナルがかなりの快感スポットになっていることはもう疑いは無かった。浩一は、亀裂側からの分泌液を指に掬い取っては、アナルへと塗りつけ始めた。かなりの時間その作業を丹念に行った。それ自体、陽子は気持ちよく感じるらしく、亀裂からの分泌液の量は増大する一方だった。ようやくアナルの内側までテカテカに光るほど、塗りたくった後、浩一は陽子のアナルにペニスの先端を当てた。

その感触で事態を悟った陽子が声を上げた。

「だめえ、そこは違うわ！」

〈いいわ、そこよ、そこに欲しいの！〉

浩一は腰を前進させた。めりめりという感覚があって、それからズブズブとペニスはアナルに呑み込まれていった。

「あああああああっ、すごいっ、すごいわぁ」

陽子は全く痛がることなく、縛られた腕を突っ張り、身体を硬直させていた。陽子の反応が一段落するのを待ってから、浩一はゆっくりと腰を前後に動かし始めた。

そのリズムに合わせるように、陽子から一定のリズムのあえぎ声が聞こえ始めた。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あん、あっ、あっ」

背中もかなりの性感帯であったことを思い出した浩一は、陽子を抱えるように自分の上半身を陽子の背中に密着させてキスの雨を背中に降らせた。そして手は後ろから抱えるようにして両方のおっぱいを揉みくしゃにしていた。陽子が狂乱するのに大した時間はかからなかった。

「あああああ、どうなっちゃうの私。こんなの初めて、ああ、だめ、もうダメだわ。溶けちゃう、私、溶けちゃう。あああいやああ、来る、来るわ、あああああっ」

一際甲高い絶叫が上がると、浩一の腕の中で陽子はぐったりとなった。が、浩一には、終わりは来なかった。

陽子の身体から離れた。陽子は崩れるようにベッドに沈んだ。

浩一もその横に身を横たえた。

先ほどの奇蘭の言葉が思い出された。

―　飢えている……、性感帯が少しずれている……

なるほど事実だと思った。それとともに陽子への同情が湧いた。満足を求めて男と付き合ってもそれが満たされなかった陽子。その欲望が積極的な男へのアプローチを続けさせていたのだ。たぶん本人も気がついていなかったのだろう。自分の性感帯が他の女性と違うということを。本当は感じやすい女なのだ。だが、その的がずれているから、自分を不感症だと思ったか、思われたかしたに違いなかった。だが、浩一には不思議なことに、以前の淑子に抱いたような愛というか、思慕の情のようなものはこの陽子に関しては一向に感じないのである。だから冷静でいられた。目の前でいかに陽子が狂おしい姿を見せ、悩ましい声を上げても、浩一の冷静さは一向に失われなかった。だから射精もしなかった。

外見から言えば、かつての知恵、淑子の二人と比べても、顔、容姿はこの仁科陽子が一番だと思う。たぶん、十人の男に聞いても九人までは同じ答えを出すだろう。それぐらい陽子は美人だった。が、そういう容姿にはどこか白々しさがあった。浩一には馴染めない感覚があった。たぶんそのことが素直に陽子を受け入れられない理由なのだろうと自分では思った。

隣から気配を感じた。気を失っていた陽子が正気を取り戻したらしい。

うつぶせでまくらに横顔を押しつけた状態の陽子が浩一を見ていた。が、先ほどまでの陽子の目とは様子が違った。何か焦点が狂ったような、幻を見るような目で浩一を見ていた。

「こ・う・い・ち・さ・ま」

陽子の小さなかすれた声が届いた。

「こういちさま？　どうしたんだ？　急に」

「こういちさまは私の神様」

「はあ」

「だって私のことみんな知ってるんですもん。きっと人間じゃないわ……」

「僕は普通の男だよ」

「いい。どっちでも。私にとって神様であることは間違いないから」

「はあ……」

「ずっと私の恋人になって……、お願いだから」

「分からない」

「どうして？　何が分からないの？」

「君を愛してるかどうかが……」

「ほほほ、当然よね。ずっと私がリードしてるんですもの。じゃ、言い方を変えるわ。ずっと私についてきてくれたら嬉しい」

「ちょっと待ってくれ。たぶん君は誤解してる。たぶん君が僕を高く買ってくれてるのは、君が満足できた男が少なかったからかもしれないけど、それは僕に言わせればそんな大変なことじゃない」

「あら、どうして？」

「何となく気がついたんだ。君の身体が普通と違うことに」

「違う？　私の身体が？」

「ああ、そうだ。君の性感帯は他の女性とはちょっと違ってる感じがする。ちょうど身体の表と裏が逆になってる感じがする。前の性感帯が後ろに引っ越してるような感じなんだ」

「まあ、そうだったの。なるほどね。それでいきなりアナルセックスしてきたわけ？」

「ああ、君の反応を見てたら、そっちが正解だっていう気がしたんだ。君の身体がそう言ってた」

「そう、そうだったんだ。私の身体。じゃあ、こんなふうに腕を縛ったのは？」

「それも君が促したように感じたから。腕が誘ってた。早く縛ってって」

「あなた私の知らないところで私と話をしてるみたいね。やっぱ

り普通の男じゃないわ。私、こんなことされたの初めてなのに、それなのに、ものすごく嬉しかったの……」

「マゾなのかな」

浩一の脳裏には啓作と知恵の姿がよぎっていた。あれを見ていたから出てきた言葉だった。

「きっとそうね。わたし、あなたの下僕でも奴隷にでも何でもなるから。遠慮無く無茶苦茶にして、私のことを。あなた嫌いじゃないんでしょう？　こういうこと」

「あ、ああ。それじゃあ頑張る」

「ありがとう」

こうして、陽子との関係は決定的なものになった。

が、このことは浩一に新たな難題を突きつけることにもなった。

描かれた世界

「龍造寺君」
吉田が話しかけてきた。あれ以来、吉田は浩一にとって面倒見のいい先輩社員に変わった。何かあるごとに声をかけてくれるようになった。浩一も仕事のことで行き詰まりを感じても今までのように一人で悩まずに積極的に吉田に相談するようになっていた。
「はい、吉田さん。何でしょう」
製図板から顔を上げて浩一が答えた。
吉田は最近導入されたばかりのパソコンのモニターに向かって顔を向けていた。
「このモニターに出てるこの線って実線かね、一点破線かね。ちょっと君見てくれないか。どうもパソコンの図面は見にくくてかなわん」
「ああ、それなら、こうすれば確か部分的に拡大表示するはずですよ」
浩一はマウスを操作した。が、クルクルと回るポインターが出たままなかなか画面は切り替わらない。
横ではディスクドライブ装置のたくさん並んだランプが盛んに明滅し、カシャ、カシャカシャカシャと大きな音が響いていた。
「まだ、図面はきついんでしょうね。コンピューターで処理するのは……。手で書いた方が早そうだ」
「だけど相互チェックなんかは楽だしな。今度出てくる32ビットマシンならかなり良くなるのかな」
「どうでしょ。ハードだけの問題じゃないでしょうし。ソフトもまだどこも研究始めたばかりだって。ゲーム作る方が金になるから優秀なプログラマーはゲームばかりやってるらしいですよ。こんな地味な設計図ソフトなんか、かなりマイナーなものらしいから。それに大手のジェネコンなんかは、大型コンピューター使ってるからこういう小さなコンピューターを使うニーズが少ないから金になると思われてないって話ですよ」

「やれやれ、零細事業者はいつも割を食うことになるのか」

ようやく画面がゆっくりと上から下へ再描画されていった。

図面は見事に拡大表示されていた。

「まあ少しだけ我々が我慢すればそれで済むと思えばいいじゃないですか。それにコンピューターの性能はこれから半年単位で世代代わりするって言われてるらしいから、案外近い将来まともな性能になるかもしれませんよ」

「それじゃ、このマシンを使い込むのはあんまり意味がないかもな。まあ、とにかくありがとう。助かったよ。……ところで話は変わるけど、この間はどうした？」

「この間って、ああ飲みに行った時の話ですか」

「そう、仁科が来たから、僕は慌てて逃げたんだけど、君無事だったかなって気になってたんだ」

「吉田さんが逃げた？　仁科さんてそんなに怖い女性なんですか？」

「怖いというと語弊があるけど、まあ注意が必要な女性であることは間違いない……。君、まさか彼女と付き合ってたりしてない？」

「え、いけなかったですか？」

「やっぱり……。そうか、いやそういうことなら、もう何も言うまい。君が選んだことだから。すまん、変なこと聞いて」

「ちょっと吉田さん。それじゃ、かえって気になります。彼女どうして注意がいるんですか？　一応聞かせてください」

「他愛もない話と言えば話だが、彼女は僕の大学の同じサークルの後輩だった。で、当時から有名だったのさ。プレイボーイならぬ、プレイガールとして。彼女ルックスいいだろう。もう彼女が入ってきた途端、うちのサークルは彼女目当てで参加者急増でね」

「何のサークルだったんです？」

「お茶」

「はっ？」

「お茶、茶道だよ。ほら、表千家とか裏千家とかってやつ」

「吉田さんがお茶を？」
「悪いか？」
「いや、悪くないけど、意外でした。じゃ、彼女もお茶を？」
「そうだよ。そりゃ和服姿もばっちり決まってたし、もう彼女が立てた茶を飲みたがるやつはいくらでもいた。で、彼女、今はともかく当時はものすごくおとなしそうに見えてたから、それに騙された男はたくさんいてね。それこそ、毎週のようにふられた男が出てた」
「もしかして吉田さんも？」
「ああ、なにしろ先輩だったからな。順番はかなり早かった。でふられたのも早かった」
「なるほど」
「それで君にも注意しろと言いたかったわけさ。彼女悪気はないんだろうが、とにかく移り気が激しいというか、情熱家で。熱湯みたいに熱くなってると思ったら、翌日には突然ドライアイスになってるというタイプなんだ」
「なんとなく分かります」
「そうか、もうそこまで付き合いは進んだのか。相変わらず素早いな、彼女のやることは。あの時、もしやとは思ったんだが、本人の目の前でこんな話をすることもできなくて、助言するチャンスがなかったんだ」
「いえ、聞かせていただいて良かったです。もしふられても自分が原因だったかどうか悩まなくて済みますから……」
「そうか、それなら良かった。しかし、龍造寺君は意外に女性に対して冷静なんだな。僕なんか彼女と付き合ってた頃はそれこそ有頂天で天にも昇る気持ちだったのに。まるで君は他人事みたいな顔してる」
「はあ、そうですか。いちおう嬉しいつもりではいますけど……」
「いいねえ、君らしい反応で。そうか、君なら彼女もかなりてこずるだろうな。きっと君と付き合うことは彼女にとってもいいこと

なんだと思う。まあ、しっかりやってくれたまえ」

苦笑しながら浩一は答えた。

「それじゃあ、まあ頑張ります。ふられたら必ずちゃんとご報告しますから、先輩」

二人は笑いあった。

が、浩一の心底では、吉田に対して反論の声も上がっていた。

――違うんだ。吉田さん。彼女は誤解されてるんだ。何故そうなったかということが、本人にももちろん、他の誰にも分からなくて……

夕方、勤務時間の終了は五時半と決められていたが、定時で帰るのは女子社員だけである。浩一はそれほど忙しくはなかったが、それでも会社を出るのは七時ぐらいだった。それが浩一の定時だった。いわゆるサービス残業である。

「それじゃ吉田さん、お先に」

こう挨拶をすると

「おーい、ちょっと」

吉田は浩一を手招きする。

「なんです？」

「これ、君にあげようと思って」

吉田は古い雑誌を手渡した。

「これは？」

「彼女のことがよくわかると思う。この雑誌には彼女が投稿した小説が掲載されてるんだ。ペンネームは確か……仁科無聊（ぶりょう）だったかな。ほらここだ」

吉田は雑誌をめくって見せた。そこには確かにそういう名前があった。そこには作品のタイトルらしい言葉もあった。「アドヴァンスペイメント（前払い）」と読めた。

「まるで男みたいな名前じゃないですか」

「彼女もそれを狙ってこういう名前にしたんだろうな。実際、読

んでみれば分かるけど、知らなかったら男が書いてると思うような文だもの。気持ちいいといえば気持ちいいが、ちょっとついていけないというところもある。女流作家には見えないね。だけど情念の深さみたいなものは女かなやっぱり。何にしても彼女がどういう人間かを知る上では参考になるだろう」

「どうもありがとうございます。それじゃお借りします」

「いいよ、返さなくて」

「じゃ、ふられたら返します」

「ま、敗軍の将じゃ、アドバイスとか何とか偉そうなことは何も言えないけどな。じゃ、とりあえずそういうことにしておこう。しかしあれだな。もし君が彼女の攻略に成功して、結婚とでもなったら、それこそ誰かから命を狙われるんじゃないか？　君は」

そう言って吉田は笑った。浩一もつられて笑った。

浩一はアパートを借りていた。実家でも通勤に何の不自由もなかったが、なんとなく親との同居が煩わしくなっていたのである。山に行ったおかげで、今なら同居もできそうだったが、それでも自分から同居したいとは思っていなかった。おそらく両親から見ても同じようなものなのだろう。

今日はさすがに陽子からのアプローチはなく、帰り道の途中牛丼屋で簡単に夕食を済ませると、まっすぐ家に戻った。

シャワーを浴びて着替えると早速、吉田の渡してくれた、雑誌の小説を読み始めた。

アドヴァンスペイメント

仁科無聊

その女は俺がいつも座る席にいた。

自分の居場所を取られた俺は、なんとなく不機嫌になりながらその席を見た。黒いワンピースに赤いカーディガンを羽織った女。ド派手だ。横顔を見る限り、化粧もかなり濃い。水商売の女か。

け、どうせならもう少し期待の持てそうな女に座って欲しかった。どうせ取られるのなら。

女は俺の視線に気がついたようだ。一瞬、俺の方を見て、ウィンクをしやがった。何て奴だ！　俺は急に腹が立ってきた。まるで俺の席を先に取ったことを誇ったような態度だったからだ。最初、彼女の近くに座ろうと思っていた俺は考えを改めた。彼女の座る場所から居心地が良さそうに見える場所はどこだったか？　俺は記憶の糸をまさぐった。そうだ。柱時計の横の窪んだスペース。そこは照明が半分だけになり、影がはっきり見えて、そこに座る人間を妙に立体的に見せる場所だ。俺はいつもの席で、そこに座る人間がいつも気になっていた。俺の今日の場所はこうして決まった。

「どうもすみません。初めてのお客さんみたいで」

馴染みのバーテンがこう声をかけてきた。

「ああ、構わないよ。しかし変わった女だな。何でよりにもよってあんな隅の席に。他がすべて空いてるのに」

「あれ、お客さんなら分かるんじゃないんですか、その気持ち？」

バーテンが言うとおりだ。全く同じ状況で俺はいつもそうしてる。

「俺の理由は、俺に一番似合いの場所だからだ」

「はは、彼女も同じ理由だったりして？　聞いてみましょうか？　何なら。もし同じだったら、お客さんの勝ち、バーボンシングル一杯ね。逆なら私、それでどうです？」

「それじゃ割に合わないだろう。俺の理由は一つだけじゃ」

「そうか。じゃ、こうしましょう。もし答えが『何となく』とか、『理由がない』というのもお客さんの勝ち。そうでなければ私の勝ちでは？」

「いいだろう」

俺はそのまま窪みのところの席へと向かった。

バーテンは女のところで話し込んでいる。
暫くすると、バーテンが俺のところに水割りを二つ持ってやってきた。
「賭は私の勝ちのようです。だから、これはお客さんの奢りということで」
「そうか。何だった理由は？」
「それは彼女が直接あなたにお話しすると。それではまた」
バーテンは立ち去り、すぐ後にあの女が来た。自分のグラスまで持参している。一緒に飲むつもりらしい。
「ごめんなさいね。奢らせちゃって」
「初対面なのに、事情通だな」
「まあね、あなたの性格読んでたし。それが私の狙いだったし」
「狙い？　じゃ、まさかあそこに座ってたのは？」
「そう、あなたに声をかけさせるため」
「何故？」
「決まってるじゃない。あなたを気に入ったからよ。女は簡単にナンパできないでしょう。結構いろいろ考えたのよ。これでも」
「初対面でありながら、どうして俺狙いのナンパなんだ？」
「精神分析論ではね、性格による行動パターンがかなり明瞭に規定できるのよ。要するに私の狙いの男ならこの場所にいつも座るだろうっていう考え方」
「まるでルーレットじゃないか」
「そうね。で、あなたは見事にそれにはまったってわけ。愛し合うのに十分なきっかけだと思わない？」
女は食い入るような目つきで俺を見た。
「そんな簡単な出会いでいいのか？」
「簡単じゃないわよ。私好みの店で私好みの酒があって、私好みの男が好みそうな席があって、それを一番先におさえられて、しかも目論見通りに男がそれを見て悔しがって、バーテンと賭をしてもその理由を聞きに来る。こんなシナリオ通りにきれいに現

われた現実を、どうして簡単と呼べるの？」

けっ、何て女だ！　それじゃあ、この俺は女があこがれるようなシチュエーションを演じた単なるアホじゃないか！　俺の俺に対するイメージじゃねえ。だが、どうやったらそれをこのバカ女に分からせられるんだ？

「君はずいぶんと大胆な賭をするんだね。それでこの俺が君の目にはどう見えたか是非聞きたいね」

「一言で言えば一匹狼の風来坊って感じかしら。仲間が群れるのは嫌いっていう感じ。俺は誰の命令も聞かない。自分に命令するのは俺だけだ……って、強気なんだけど、反面、人一倍寂しがりやなのよね。これが。どう、違う？」

「残念ながら……」

と言いかけて俺は言葉を失っていた。図星だった。俺が何となく思っている俺の印象をこの女はズバリと当てていた。

「残念ながらって言ってるけど、目がマジじゃない。どうやら図星だったみたい。ねえそうでしょ。まだあるわ。あなた自分のことを誰にも知られたくない、知っていると思われたくないって思ってるでしょう。矛盾だらけよね。寂しがりやのくせに」

俺はノックアウト寸前だった。どうやら俺のガードは全くなっていなかったらしい。女のたたみかける攻撃はまだ続いていた。

「あなたは自分を目立たせたくないって思って地味な服ばかり選んでる。だけど行動は思い切りウケ狙いよね。いつも。これも矛盾してるわね。私はね、そんな見かけと中身がずれてる男が好きなの」

「こ、光栄だね。そこまでご婦人に言われると。もう勘弁してくれ。俺のことは。ところで君が何者か知りたいね。俺にこんなに冷や汗をかかした女性は何者か是非知りたい。カップサイズも含めて」

「まだダメよ。そういうことはベッドの上で聞くものなの」

俺は結局女の言うとおりその夜を共に過ごすことに同意した。

俺は俺の完敗を認めないわけにはいかなかった。
が、ホテルに入り、先に女にシャワーを使わせ、次に俺がシャワーに入った途端に、背中に激痛が走った。
振り向くと女が大きなナイフを持って立っていた。
「何をする！」
自分の背中から鮮血が吹き出していた。
「悪いけど、死んでちょうだい」
「何故？」
「以前あんたと同じ手で引っかけた男、私を裏切って他の女と逃げたの。だからこれは私にとって一種の復讐なの」
俺は朦朧とする意識の中でこれだけを叫んだ。
「俺は無関係だ」
「だめ、過去そうだったっていうだけじゃない。きっと未来で同じことやってるわ。だから今、私が復讐の前払いをするの」
俺は意識を失い血の海に倒れた。
遠くに女の笑い声が聞こえた。

完

「なるほど……、すごいや」
浩一は、熱い時の状態ならともかく、ドライアイスに変わった時の陽子は想像を絶する冷たさになるのだろうと思った。
だが、作者としての彼女の視点は男側にある。一見すると女の方が彼女を表わしているように感じるが、よく考えてみると常識的な判断の男側に自分の視線を置いているのだ。ということは、話中の女の考え方や行動ではなく、むしろ男の考え方や行動が彼女に近いのではないかと、浩一は考え始めた。運命的な出会い、意外性、自分の理解者への憧れ、そういうものが彼女にとって物語を書かせる大きな動機なのではないか。そう理解する方が、現実の陽子をよく表わしているように思える。
だが、プレイガールという面についてはよく分からない。彼女がもしそういう女性なら、この話はかなり矛盾しているような気がす

る。自分を捨てたというだけで相手を刺す事件を発想するようにはどうしても思えないのだ。

やはり空想で書いた話をいくら考えても、本人の考え方はやはり見えないものなのかも知れない、浩一は結局そう結論づけた。

迷走

「キダさん、あんたさぁ、仁科陽子をものにしたの？」
「よして下さいよ、いきなり何を言い出すんです、米村さん」
「だって仁科君の連絡先教えてあげたじゃないか。当然アプローチしたんだろう？」
「え、あ、あれですか。いやちょっと仕事が立て込んでてまだ…。すみません、せっかく教えていただいたのに」
「あんたねえ、それじゃ営業は勤まらないよ。せっかく紹介あげたのに……」
「は、おっしゃる通りです。どうも申し訳ありませんでした」
「ははは、そんなふうに謝られると困るな。でもそうか、じゃ、君のことじゃないのか」
「何がです？」
「おう、それがな、あの仁科をものにした男がいるってすごい噂になってるんだ。最初はまた、すぐふられるクチだってみんな思ってたらしいが、どうも今回についてはゾッコンなのはどうも彼女らしいって。だからてっきり僕はお前さんかなと思ってたんだ」
啓作はその言葉に強いショックを受けていた。が、考えてみれば浩一はもともと女にはもてていた。そこで山の修行が入って、相当普通の男らしくなっていた。考えてみれば、女が放って置くはずがなかった。
―まずいことになった……
内心そう思いながら、しゃらっと返答した。
「で、どんな男なんです？」
「二枚目らしいよ。もっとも見た人間は少ないらしいけど。なんでも真面目そうな男らしい。まあ中身は知らないが。君だって実態を知らなかったら、二枚目で真面目そうに見えるもんな。それで俺はてっきりあんたかと」
「何ですか、その実態を知らなかったらっていうのは？」
「おっと、これは僕としたことが、失言失言。今のは撤回だ。忘

れてくれ。しかし、あのドライアイス女がね。どう考えても信じがたい」

「そんなにすごい入れ込み方なんですか？」

「俺もそんなに詳しくは知らない。だけど本社の奴の聞き込んだ話では男のところに入り浸ってるって話だ。もう同棲状態だとさ。それで本社でアプローチして肘鉄食らった連中がちょっと憤ってる。じき収まるがな」

―男のところ？　浩一のところか……

「そっかー。惜しいことしたな。そんなところまで行ってたら、逆転は難しそうですねぇ、もう」

「まあ、彼女のことだから、これから大どんでん返しが絶対無いとも言えないけどな。何しろ前科が前科だ。被害者総数の実態は未だに謎とされてるんだからな」

が、啓作は米村のその言葉を素直に聞けなかった。カンが働いていた。陽子は浩一にベタ惚れ状態なのだと、そのカンは告げていた。

「どうした？　あんた顔色悪くないかい？」

「いや、ちょっとクルマ乗ったり下りたりしてたから、温度差でかぜ引きかけてるみたいで……」

「そうか。まああんたの商売も大変だと思うよ。身体あっての商売だからな。女もほどほどにしておけよ」

「ほどほどなんて、私に女っ気なんて全然ありませんよ」

「おいおい、冗談は休み休みに言えよ」

「おかしいなあ。どうしてそう見られるんだろうな」

「こら、こっちを甘くみるなよ。お前さんの名前がどれだけここいらのバーのホステスの間で知れてるかぐらい、ちゃんとつかんでるんだぞ」

「いやあ、これはまいったな。さすが記者さんですね。あんまり変な噂流さないでくださいね。商売に響きますから」

「噂？　人聞きの悪い言い方しないでくれ。うちは事実を報道するの。流すなら証拠写真付きぐらいで流すよ」

「いよいよまずいですねぇ。こりゃ、迂闊に夜の町に出られなくなった」

「ま、お互い様なんだろうけどな。ところでレーヴには最近顔を出してないみたいじゃないか。どうなったんだ？　あそこの夏美とは？」

「あれ、知らなかったんですか？　もうとうの昔にふられてますよ」

「なんだ。そっか。遠慮してる場合じゃなかったな。よし今度は俺がアプローチしようっと」

「全く、人のことをいろいろ言う癖に」

「ま、そう言うなって」

二人は声を上げて笑った。

その夜、夜間訪問に二軒ほど回った後、啓作は急に陽子のことが気になった。このまま、浩一と陽子が結ばれるような事態になると啓作は知恵と交わした約束が果たせなくなる。それは何としても避けたかった。だが、何もいいアイデアは浮かばない。当事者同士が好きあっているのなら、もうどうしようもないと思った。だが、それでも、様子を見ておきたかったのである。

時計を見た。もう時刻は十時を回った。浩一も陽子も戻っているだろう。啓作は浩一のアパートへとクルマを走らせた。何をどう考えたのか知らないが、下山後、浩一がアパートに移ったと電話に出た母親から聞かされていたのである。だが、浩一のアパートを自分が訪ねたら、たぶん浩一の態度をいよいよ硬化させるだけだという計算も働いていた。啓作にできることはせいぜいアパートのすぐ脇に止めた車の中から中を伺うことぐらいだった。

―　処置無しだなあ……

アパートの横に止めた車の窓からアパートの部屋の窓を眺めながら啓作は呟いた。自分の前には赤いＢＭＷ３２０ｉがあった。直感で陽子のクルマだと思った。それにしても、こんな派手なクルマに

乗る女がどうして浩一のような地味な男に惚れたのだろうと啓作は初めて疑問に思った。浩一は確かに昔から女にもてる奴だった。しかし、彼に近づく女は、どちらかと言えば、派手さとは無縁の女が多かったのである。派手な女なら、浩一よりも啓作の方が昔からよほど人気があった。

―何か変だな。やっぱり。

そう考えた時に、寺に浩一を迎えに行った時に清玄和尚から聞いた話を思い出した。

「ぬしが連れてきたあの男は夜叉だったそうな」

「は？」

「わしのかみさんと同類という意味じゃ」

「？」

「もうよい。とにかく、あの男は一人で先に帰った。もうここにはいない」

「はあ……」

この後、啓作は何度も何度も和尚に同じことを聞いて、ようやく事態を納得したのである。その中身はそれぐらい荒唐無稽だった。

最後に清玄和尚の残した言葉が気になった。

「あの男、奇蘭でさえ驚く力を持っていたそうな。わしにはどうも邪神がそれを利用しようとしているような気がしてならん。変な事件を起こさねば良いがと思っておる」

清玄の語る浩一についての話はもちろん啓作にとっても意外だった。だが、山で何があったにしろ、そこまで浩一が変わったとはとても思えなかった。実際に浩一と会ってみても、山に連れて行く前よりもまともになったという感想以外何も持てなかったからである。

が、陽子というおよそ浩一には似合いそうにない女が浩一にベタ惚れになっているという話を聞くと、その信憑性を考えざるを得なくなってきた。いや、仮に陽子とのことが何もなくても、知恵のために、浩一のことを改めて知っておく必要があるという考えに変わってきていた。啓作はクルマから下りた。何をするという計画があ

るわけでもなかったが、とにかく外に出た。浩一の住むアパートは木造二階建てのかなり古いアパートで家賃が安いというだけが取り柄としか言いようのないシロモノだった。よく、こんなところに通う気になったものだと、改めて女の浩一に対する異常な熱意を感じた。

浩一の部屋の窓はカーテンが下がり、それがほんのりと浮かび上がって見えていた。弱い灯りが中で点されているようだった。その窓を見上げながら、そちらの方へ歩みを進めた。が、いくら窓を見ても何の変化も無い。カーテンは完全に閉まっているから、どこかによじ登っても内部を伺えそうにはなかった。

―帰るか……

やることもないので、引き返そうとしたその時、啓作の耳にそれは届いた。

かすかだが、女のあえぎ声に間違いなかった。歩みを止め、電信柱の影に入ってたばこに火を付けた。

耳を澄ませると、泣き叫ぶようなあえぎ声が延々と続いている。かなり激しく女は責められているようだ。が、残念ながら、その声が浩一の部屋から出ているのかどうかは分からない。両隣の部屋にもカーテンが同じように下がり人がいる気配があったからである。その両隣のどちらかの部屋からという可能性も消せなかった。

すると右端の窓に異変があった。カーテンが開けられ、その次に窓が開かれた。スリップ姿の若い女が、身を乗り出して左の窓に向かって怒鳴った。

「ちょっと、いい加減にしなさいよ。毎晩、毎晩、盛りのついた猫みたいに。うるさくてかなわないんだから！　やるんならもっと静かにやりなさいよ。まったくもう、こっちは独り寝だっていうのに。冗談じゃないわ」

それだけ言うとピシャリと音を立てて窓を閉め、カーテンもすぐ閉められた。おそらく壁一枚隔てた隣室へはかなり伝わっていたのだろう。

もうこれではっきりした。女は浩一の部屋に間違いなく入り浸りなのである。

こうなると清玄の不安が的中したと考えるしかなかった。浩一とは全く似合わない女が浩一に夢中になっている。それ以外の理由はありえないと思った。

啓作は清玄和尚の元を再び訪ねることにした。

変貌

無聊のペンネームの小説を読んだ、と浩一が陽子に告げたとき、陽子はとても嬉しそうな顔をした。

「どうでした？　感想を聞かせて」

「君のイメージと全然違うって感じた。男に捨てられただけで、全然関係ない男を刺す女なんて……。でも、そうか君の視点は男にあったね。するとどういうことなんだろう。ああいう深情けみたいな女は君の憧れなのかな。それとも怖れてるのかな」

「ふふふ、まるで私のことを知りたいから読んだって感じね。そういうことは別にして、面白かった？　それともつまらなかった？」

「面白い範疇にはあったと思う。『復讐の前払い』ていう発想がすごかったね。未来予測が殺人の理由になるなんて」

「そう、最初にそれを思いついたから、あれを書いたの」

「でも、あれじゃ男が可哀想すぎるだろ。まだ何にも悪いことしていないのに」

「だから女の思いが引き立つの。男と女が同じレベルでものを考えてたら面白くないでしょ」

「要するに演出ってこと？」

「まあ、そうね。ありきたりのお話を書いたって誰も読まないでしょう？」

「やれやれ、ちょっと心配だったんだ。いきなりグサッてくるんじゃないかって」

「まあ、心配させちゃった。でもそうね。私を捨てたりしたら、そうなるかも。あなたにならそれぐらいやりそうだわ」

「おいおい。だけど君こそ何人の男を袖にしたかわからないぐらいの実績を積んでるそうじゃないか。刺されるなら君が先だ」

「大丈夫。そういう男は選んでいなかったから。みんな軽かった。すぐ分かったもの。この人違うって」

「何が違う？」

「私が求めている人じゃないってこと」

「それじゃ、君のめがねに叶わなかったってだけじゃないか。中には、相当君に入れ込んでいた人間がいたって聞かされたけど」

「吉田さんね。余計なおしゃべりをしたのは……。否定はしないわ。私が一方的にふった人かなりいたもの」

「僕もふられるんだろうって皆思ってるよ」

「ふりたくてもふれないの」

「なぜ？」

「理由はたくさんあるわ。愛してるなんて、単純な話じゃないことだけは確かね。皆そこを誤解してたわ、そう言えば。愛があるから別れない。愛が消えたから別れるって、皆信じてた」

「違うのか？」

「そういうふうに素直に聞いてくるのがあなたらしいわ。下手に愛とかに舞い上がってるよりはずっと正解ね。……間違いよ。愛なんかあってもなくても一緒。フィーリングが合えば愛してるって誰でも言えるんだから」

「そんなに軽いのか、愛は？」

「そういう愛もあるってこと」

「じゃ、僕をふれない理由は？」

「私の心と体が認めちゃってるの。あなたは私の支配者だって」

「支配者？」

「そんな言葉しか思い浮かばないわ。あなたの場合は。恋人ぐらいだったらいつでもふれるのにね。あなたをふるなんて、とてもできないわ」

「心だけじゃなくて体もなのか？」

「そうよ。私の身体が納得しないの。あなたに抱かれないと。だからあなたと別れたら、私、狂うわ。間違いなく」

「で、僕が君を捨てたりしたらグサッとなるのか？」

「そう。だからもう諦めなさい。私からは離れられないって。別れる時は、自分の命の心配をするのよ。分かった？」

浩一は返事をせずに黙って陽子を見つめた。陽子の双眸にには燃

えたぎる炎があった。本気なのだ。返事を返さない浩一に陽子はさらに続けた。

「とりあえずキスして。そうされたくなかったら」

「脅迫するとはね」

「夢中にさせたあなたが悪いの」

「俺の責任かぁ……」

最後の言葉は突然吸い付いてきた陽子の口に塞がれ、言葉にならなかった。

二人は身体を求め合った。

途中までは前とあまり変わらないセックスだった。浩一は陽子の叫ぶ心の声を頼りに、陽子の背中側の快感スポットを攻撃し、アナルセックスへと移った。だが抱く度に陽子は変わっていった。以前ならば、すぐに落ちていたが落ちなくなった。しかも、どん欲になり、執拗になり、限度がなくなっていった。

奇妙な野獣の咆哮をあげながら、夢中になって浩一の身体を食らっていた。浩一の身体は陽子にとっては、おいしい肉の塊だった。むさぼり味わっていた。陽子は肉欲の虜になったかのようだった。浩一は呆然としていた。

「こういちさま、もっとちょうだい……。陽子をもっと突いて、もっと激しく……、もっと壊して……」

〈そうよ、そう。もうどこでもいいわ。もう私の身体なんてどうなってもいいのよ〉

「こういちさまのペニスさま……、ペニスさま、もっと気持ちよくして……、もっと深く陽子のことを刺して……。あああ、ペニスさま……」

激しいセックスが終わっても、陽子は元の状態には戻らなかった。浩一のペニスから手を離さず、なおもしゃぶり、ほおずりをし、まるで自分の宝物のようにそれを慈しんだ。

「ああ、こういちさまのペニス様、ありがたいわ。陽子は何でもします。陽子はペニス様の奴隷です」

陽子は自分の言葉で興奮し、浩一を神と崇め、ペニスを拝んだ。
陽子の理性をどこにも感じることができなかった。
―　なんということだ！　陽子との関係は続けてはいけないんだ。このままでは二人とも不幸になる……
そういう確信が浩一の胸中に生まれた。
まるで霊につかれた巫女のようなトランス状態に見えていた陽子が甲高い声を一つあげて唐突に気を失い倒れた。
その横に身体を横たえた浩一はふいに何かに話しかけられた。
「ここまでになるとは思わなかったわ」
―　奇蘭か？
「そう、お久しぶり。ね、私の言った通りでしょう」
―　ああ。だが、これは異常じゃないのか？
「うーん。まさかここまで色欲に溺れる女だとは思わなかったものねえ」
―　じゃ、このままこの生活を続けてたらどうなる？
「あなたの考えてる通りね。もう彼女、自分を見失いかけてるわ。頭の中はあなたのペニスのことでいっぱいなの。だけどこれは彼女にとってとっても幸せな状態でもあるのよ……。あなたと一緒だと彼女はずっと天国にいるようなものなの。ヨニ様が彼女を哀れんであなたと引き合わしたのよ」
―　じゃあ、君たちが仕組んだことだったのか！
「仕組んだなんて人聞きの悪いこと言わないで。こっちだって人を救いたくてやったんだから。で、ちゃんと救われたじゃないの」
確かに陽子の悩みは解決していた。だが……
―　救われたと言えるのか、これで。
「困った人ね。まるで仏教のお坊さんみたいなこと言うじゃないの。あなたも夜叉なら夜叉らしい自覚持ちなさいよ。あなたは、煩悩の守護なんだから」
奇蘭の言葉で、浩一は逆に煩悩というものの恐ろしさを知らされた。

―　これが煩悩なのか……。ここまで人間を狂わすのか……

「相変わらず理解にずれがあるわね。だから仏教の人たちは私たちを邪教呼ばわりしたんだけど。でも人間らしいと思わない？　こういうことがあるから人間は人間らしい存在でいられるのよ。もしこういう悩みや楽しみから無縁だったら、機械と変わらないわ」

―　それはそうかも知れない……。じゃ、こう言おう。彼女は煩悩に少しばかりのめり込み過ぎた。それをほんの少し引き戻すにはどうしたらいいんだ？

「今となっては彼女にとっては相当辛いでしょうね。あなたのことを忘れなきゃいけないって意味よ」

―　やっぱり夜叉の俺とは一緒にいられない運命なのか？

「まあね。あなたがそういう未来を受け入れたくないなら」

―　どういう未来？

「色欲に狂った女に神と崇められて暮らす未来。あなたにとっても悪くないと思うんだけど」

―　なるほど君たちの宗教が好きそうな世界だな。

「ヨニ様もそれをお望みなの」

―　そうか。だが、残念だな。少なくとも僕は彼女にそうなって欲しいとは思わない。

「それはあなたの自由よ。好きにしなさい」

―　彼女を元に戻せるのか？

「もちろん」

―　どうやって？

「そんなこと決まってるじゃない。お寺よ」

―　修行？

「仏教に限った話ではないけど、煩悩に惑わされないようにするって言えば、仏教が代表格かしら。だからお寺で修行って相場は決まってるわ」

―　そうか。ありがとう。奇蘭。

「もしかして淑子さんのところへ連れて行くの？」

―　ああ、それが一番説明が少なくて済みそうだから

「そう、それじゃ、淑子さんに楽しかったって伝えて」

―　ああ、分かった

奇蘭の意識は消えた。

浩一は今の話を考えていた。

自分は間違いなく夜叉なのである。自分に我欲を引き出され、煩悩に翻弄されるような目に遭うのは決して偶然ではなく、必然なのである。

陽子の肉欲に溺れる姿はそのことを浩一に教えていた。

淑子の推理

浩一が陽子に、陽子が今どれだけ異常な状態になっているのかをいくら説明しても陽子はそれを受け入れなかった。陽子は肝心なことを何も覚えていないのである。ただ、満足感だけはしっかりと残っているらしい。従って、いくら浩一がこの関係を終わりにしたいと言っても全く聞く耳を持たなかった。いやそれどころか、別れ話を持ち出したことで、陽子の浩一に対する執着心はいよいよ高まったらしく、事実上浩一の行動はいつも陽子に監視されているような状況になってしまった。従って陽子を寺に連れていく計画など全く立てられる状況ではなくなってしまった。

結果、浩一の話は啓作によって清玄たちへと先にもたらされた。

いつものお堂で清玄と淑子の二人が並んで座る前で啓作は浩一の近況を説明した。その上で、過去の長い付き合いから見て、浩一に何か大きな変化が起きているに違いないという自分の意見をそれにくっつけた。

先に口を開いたのは淑子だった。

「伊集院さんの言う通りね。浩一さん、やっぱり夜叉の力に目覚めたんだわ。そうでなければ、そんなにしっかりした、自立した女性が自分から入り浸りになったりすることはありえないもの……」

清玄がそれを受けて聞き返した。

「淑子、もし、それがヨニの目論見と一致してる話だとしたら、その女はどうなるのじゃ？　おぬしなら読めるじゃろう」

「私が思うには、おそらくあの祠にいたかつての巫女たちのようになるのではないでしょうか」

「おぬしが彫り物でその難を逃れたやつか」

「左様です」

啓作が口を挟んだ。

「何です？　巫女って？」

「ヨニを祀る神官です。自ら肉欲に溺れる姿を信者達の前に曝し、信者たちを性行為に導く役割を担わされていました。自らの肉体を

信者達に提供しながら、信者を狂わせる。そのためにまず自分が肉欲に狂う。ひどいときには、肉欲のために平然と人を殺めることもあったと聞きます。古い言い伝えですけど」

「狂ってしまうってことですか？」

「狂わされてしまうという言い方が正しいでしょう。そしておそらく今の浩一さんには人をそういうふうに狂わす力があるのです。私が奇蘭であった時には、私にもそれはあると聞かされていました。使ったことはありませんでしたけどね。だけどどっちにしても奇蘭よりは浩一さんの力の方が上でしょうね。奇蘭が驚いているのを私感じてましたから。だから、ヨニと奇蘭は私を解放したんです」

「すると、彼女は浩一のその能力で狂わされていると？」

「まあ、そう考えるのが自然じゃろうのう」

「じゃあ、今の浩一は相手がどんな女性でも……？」

「……たぶん、同じ結果を作るでしょう」

淑子が頷いた。

「それを普通にする方法はないんですか？　巫女達は元に戻ることはなかったんですか？　浩一は、いや夜叉はもう普通の人間には戻れないんですか？」

「私がお答えできるところはほとんどありません。知らないんです。ただ、どれも全く出来ないということはないと思います。方法は知りませんが……。おそらく浩一さんなら分かるかも……」

「どうして？　何故、浩一には分かると思うのです？」

「彼は、ヨニとも奇蘭とも話ができるから……。私にはなかった能力です。私は奇蘭の意識を楽屋裏から覗く感じで時折感じることはできたけど、直接話は出来なかった……。彼にはそういう能力もあったようです」

「じゃあ、彼もこういう状態に自分がなっていることを自分で知ってる？」

「その可能性はあると思います。断言はできませんけど。何しろいくら話ができるにしたって、相手が現れてくれないと何も始まら

ないわけですから」

「何にせよ、おぬしがもう一度彼と話をするのが先決のようじゃな。その上で我らにできることがあれば力になろう。今言えるのはそれぐらいじゃ」

「はい、早速浩一に会ってみます」

啓作は深々と頭を下げ寺を辞した。

第七章　救出

不審人物

「吉田さん、ちょっとちょっと」

受付事務をやっている田中みさ恵が、吉田を呼びに来た。

吉田の席は受付に隣接する設計室の一番端にあり、受付で何かあると位置的に一番呼ばれやすい場所であった。おおかた、しつこい訪問販売員でも来たのだろう、と吉田は考え席を立った。

「どうした？」

「それが、何か変な女がさっきからこっちの様子を伺ってるんです。ほらあそこ」

設計事務所のビルはそれほど大きくはない。道路に面した玄関はガラス張りになっていて通りがよく見えた。田中の差し示す方向を見ると木陰にこちらを見ている女性の姿があった。吉田の見たことのない女性である。

「今朝からね、ああいうふうに現われたり消えたり繰り返してるんですよ。何かあたしゃ、気持ち悪くって……」

「気持ち悪いってことはないだろう。それにしても外は結構冷えるのに何であんなところで。うちの誰かが出てくるのを待ってるのかなあ。ねえ、田中さん、ちょっと声掛けて聞いてあげたら？」

「ええ、あたしが……、まあ、そう言われればしょうがないですかねぇ……」

田中はブツブツと言いながら、表に出て行った。が、田中がその女のいる木陰に向かって歩いていくと、女は急に後ろを振り返った。するとそちらを見たまま動かなくなった。

「？」

田中は途中で止まり、引き返してきた。

「どうしたの？」

「それが、私が近づいていったら、ちょうどその向こうから来た男が女に向かって何か言ったらしくて……、なんか私が話しかけられ

る雰囲気じゃなくなったので……」

「男の連れがいるのか？　何だろうな。二人組となると刑事かな？」

「何でうちに刑事なのよ？」

「田中さん、何かやったんじゃないの？」

「ちょっとお、どおしてそうなるわけ？　人聞きの悪いこと言わないで。失礼しちゃうわね」

「ごめんごめん。冗談だって。まあ、彼女のことは放っておいたら？用事があればむこうから何か言ってくるさ」

「そうね。悪かったわ。お仕事の邪魔しちゃって」

「お互い様」

吉田は自分の席に戻った。

田中は時折、あの木陰に目をやった。だが、二人はどこへか姿を消したようでその後は見えなかった。

だが、夕方になって、そろそろ帰り支度を考え始めたとき、ふと木陰を見るとまたあの女がいるのが見えた。

「本格的ねぇ。やっぱり刑事なのかしら。だとしたら何なの？　うちに犯罪者でもいるのかしら……」

吉田が言った言葉を急に真に受ける気になった。

「……こんなところに長居をしてて、巻き添えなんて真っ平だわ。今日は早く帰らなきゃ……」

だが、田中の定時までにはまだ十五分ほどの時間があった。田中は何となくいらいらしながら時間が過ぎるのを待った。

視線をそこに合わせないように注意しながら、外の様子をうかがい続けた。すると、赤いクルマが会社の玄関前の駐車場に入ってくるのが見えた。だが、そのクルマに田中は見覚えが無かった。

―　何よ。今頃来客なの？　全く何者かしら……

不審に思いながら見ていると、ドアが開き、サングラスをかけた颯爽とした感じの若い女性がクルマから下りてきた。まっすぐこちらに向かってくる。

―　誰かしら？　若くて美人がうちの会社に用事なんて珍しいわね？

ガラスの自動扉が開いて中に入ってきた。

「いらっしゃいませ。ご用件をどうぞ」

「えーっと、仁科と申します。設計の龍造寺さんにお目に掛かりたいのですが……」

「はい。ただいま龍造寺をお呼びしますので、そちらでお掛けになってお待ち下さい」

そう言ってから、インターコムで浩一を呼び出した。

「はい、龍造寺です」

「あの、仁科様という方が受付でお待ちですが……」

と告げた時に、玄関の自動ドアが再び開き、男女の二人組が入って来た。

「それじゃ、すぐ行く」

とインターコムの向こうからの返事を聞くのもそこそこに、田中は慌てて新たな来訪者に同じように声をかけた。が、内心かなり動揺していた。昼間から見張りを続けていたあの女が一緒だったのである。

連れの男が答えようとしたとき、浩一が受付に現われた。

「ごめんなさい、お仕事中にお邪魔して……」

先に座っていた陽子が浩一にこう声をかけたが、浩一は陽子の方を見ていなかった。二人連れの方を見ていた。

陽子も自分以外に浩一を訪ねてきた別な来訪者がそこにいるという事態にようやく気がついた。

「啓作、それに知恵さん……」

「久しぶりだな。それから、初めまして、私はこの龍造寺君とは幼なじみの伊集院啓作と申します。仁科陽子さん」

男はいきなり途中で陽子に挨拶をした。

自分の名前を正確に呼ばれたことに驚いてこの来訪者を見た。

「それから、こちらは早川知恵と言って、私同様彼の友人です」

啓作は手際よくお互いにお互いが何者であるのかをすべて明らかにしてしまった。

田中は、とにかく、二人は刑事でもなんでもなかったとホッとはしたものの、その場に妙な緊張感が漂っていることを敏感に嗅ぎ取り、すぐに奥へと引っ込み、吉田のところへ事態の報告をしに行った。

浩一は混乱していた。別に慌てなければいけない理由は何もないはずだが、久しぶりに見た知恵がその冷静さをなぜか壊していた。視線を知恵に合わせないようにした。

啓作が黙って皆を見まわしているだけの浩一に向かってさらに話を続けた。

「浩一、それから仁科さん。僕たちはあなたたちに話があるんです。申し訳ないが、これからお時間を頂けませんか。できればご一緒に夕食でも……」

「え、ええ。私は構いませんことよ」

陽子はそう啓作に答え、ボールを浩一に投げた。

「分かった。じゃ、ちょっと上司に説明して抜けてくるから、暫くそこで待っててくれ」

浩一はそう言って、再び奥へと戻っていった。

設計室へ戻ると吉田と田中が自分をじっと見ていた。

「おい、何か仁科絡みでトラブルか？」

吉田が聞いてきた。

「いや、そんなんじゃありません。ちょっと昔の友人が突然訪ねてきたもので今日は抜けさせてもらいたいんですけど」

「ああ、それは構わないけど。じゃ、僕から及川には言っておくから、君は早く行きたまえ。待たしてるんだろ、人を」

「え、あ、どうも済みません。それじゃお言葉に甘えさせていただきます。あ、C―3はそっちの二枚目に入ってますから……」

「わかった。後のことは任せておけ。例の修正のことだろ？」

「そうです。じゃ済みませんがお先に失礼します」

浩一はロッカーのところで作業服の上着を脱ぎ、スーツの上着に着

替えた。頭を仕事から彼らのことへと切り替えた。陽子の用件は知らないが、どうせ大したものではないだろう。問題は啓作と知恵である。啓作だけならともかく知恵まで一緒とはどういうつもりだろうか。それが気に掛かった。さらに、もう一つ、啓作が陽子のことを知っていたことも気に掛かった。啓作はまるで浩一と陽子がどういう関係かを知った上で知恵を連れてきたことになる……。

――いったい何を考えてるんだ……

仕事以上の緊張が浩一を襲った。

山中の密会

知恵と啓作の乗るクルマが先導し、その後を浩一と陽子の乗るＢＭＷが続いた。啓作が食事の場所に案内すると言ったのである。

クルマの中でハンドルを握る陽子が訊いてきた。

「ね、あの知恵さんと啓作さんって、恋人同士なの？」

「恋人同士だった……」

「今は違うの？」

「別れたはずだ」

「じゃ、彼女は何で一緒にいるの？」

「……わからない」

浩一には、陽子に今までの啓作と知恵と自分についての経緯を説明すれば、陽子がさらに煩悩に踊らされるように思えてならなかった。その危惧が真実を語ることを躊躇わせた。

「へえ、変わってるのね。そう言えば、あの彼も何か気になる存在だわ。あなたの友達って感じが全然しない。友達だって聞いてなかったら、絶対に違う世界の人間にしか見えないもの」

「たぶん、そうだろうな。そして君にはきっと彼の方が俺よりも向いてるよ」

「あら、そう？　そうね、お馴染みって感じがするわ。彼だったらすぐふれそう」

「そうか、そういうことになるのか。君の場合は」

「彼、何してる人？」

「クルマのセールスマン。だけど本当は社長の御曹司なんだ。親父の命令で、武者修行のセールスってわけさ……。もっとも本人はかなり気に入ってるみたいだけどね。セールス向きなんだ。とにかく男でも女でもたらし込むのはうまいから……」

「まあ、それじゃ相当の大物ね。あなたの友達らしいわ。そう聞くと。で、そんな大物が私たちに話っていったい何なの？　知ってるか見当ぐらいついてるんでしょ？」

「それがさっぱりわからないんだ。僕にも」

ほんの少し躊躇いを感じながら浩一は答えた。

「そう言えば、あなた、驚いてた顔してたもんね。あの二人見てた時……。いったい何の話があるのかしら」

対向車のライトで時折照らされる陽子の顔は、明らかに敵意の混じった厳しいものになっており、先行する啓作のクルマのテールランプを鋭く睨み付けハンドルを握っていた。浩一はそこに煩悩に取り憑かれた陽子の姿を感じていた。

車中は無言の世界になった。

啓作のクルマは市内を出て郊外の山の中に入っていった。もう道沿いにあまり家や商店がなくなった頃、一つのカーブを曲がったところで、真っ暗な闇のど真ん中に大きな農家が全体をサーチライトに照らされた姿で突然現われた。

そこが目的地だった。

「どうだい、こういうレストランも。なかなか趣があるだろう」

クルマを降りると先にクルマから降りていた啓作がそんなことを言った。

「変わってるな……。どこかから移築したんだな。材料なんか今じゃ手に入らないものばかりだ……」

「もういい、分かった。どうも建築の人間ってのは情緒に乏しいな。もう少し気の利いたこと言えないのかなあ。とにかく中に入ってくれ。部屋を取ってある」

入り口で啓作が伊集院と名乗ると奥の座敷に通された。内部はレストランとしてきれいにされていたが、民芸風のつもりなのか、少々耳に触る花笠音頭がＢＧＭとして流され、それが少々うるさかったが、幸いなことに座敷には流されていなかった。

掘りごたつのように腰掛けられる座卓を囲んだ。

「まだ連れが来るはずなんだけど」

啓作が意外なことを言った。

「そうですか。それでしたら、料理はもう少しお待ちしましょうか。先に飲み物だけでも」

「じゃ、そうしてくれ。ビールとつまみを適当に」
啓作は場をどんどん仕切り、てきぱきと準備は進められていった。
「誰が来るんだ」
「お前の昔馴染み。すぐ分かる」
そう言われても心当たりがまるで無かった。
ビールが運ばれた。
啓作は、
「じゃ、とりあえず、みんなよろしくということで乾杯だ」
と甚だいい加減な音頭を取って、釈然としない気持ちをみんなに持たせながら強引に乾杯をさせた。
「まだ話してくれないのか？」
グラスを置いて浩一が聞いた。
「ああ、俺には難しすぎる中身だ。お前には簡単な話らしいんだが」
啓作の答えはいよいよ不可解なものに浩一には思えた。
その間、知恵はずっと浩一を見ていた。それはまるで目に焼き付けておこうとするかのような見方であった。その視線に気がつくと、浩一は自分の目を知恵に向けることができなくなった。また、陽子も知恵の視線に気がつき、牽制するためか、威嚇する視線を知恵に投げ返していた。
結局、それ以外、誰も何も話さず、皆、通夜のようにビールを飲んでいた。
「お連れ様がお着きになりました」
襖が開き、仲居がそう告げた。
「あっ」
浩一は思わず声を上げた。
現われたのは清玄と淑子だった。
浩一の顔を見るなり、清玄が言った。
「ぬし、やってくれたのう。しかもロクに挨拶もなしに下山しおって。とんでもない奴じゃ」
「その節は大変ご無礼を、何とお詫びを申し上げていいか……」

あわてて、浩一は座卓から抜けて、襖のところに立つ清玄の足下に土下座をするように頭を下げて詫びた。

「はっはっはっは。冗談じゃ、冗談。気にするでない。いや、ぬしのおかげで、淑子から奇蘭とヨニが出ていった。感謝こそすれ、ぬしに腹を立てたことなど一度もない」

「そ、そうですか。それなら、まあ」

どういう態度を取ればいいのか分からず、浩一は思わず頭を掻いた。

「そういうところは山に来た日とそう変わらんのだがのう」

「浩一さん、お元気そうで何よりです」

淑子が清玄の後ろから声を出した。

その声は、ただただ、懐かしかった。心が安まる声だと思った。

「あ、あのう、ほ、本当に、いろいろ教えていただいて、な、何とお礼を、言って、いいか……」

「ほれ、見てみい。山に来た日とちっとも変わっておらん。はっはっはっは」

清玄が再び笑った。

陽子はびっくりしてその光景を見ていた。先に現われた男は、頭に巾着のようなものを乗せ、僧衣である。見るからに坊主だった。そしてその後に続いて入って来た若い女は、長い髪ではあるが、やはり僧衣である。浩一が言っていた、寺で直してもらったという話は正真正銘の事実であるということがようやく分かった。それにしても今日の浩一は、ふだん以上に動揺し、あがっているように見えた。陽子は女の直感で、知恵という女と、この坊主にくっついてきた女に原因があるとにらんでいた。

「さあ、清玄さんも淑子さんもこちらにお座り下さい。あ、君、早速、ビールと料理を……」

再び啓作が名幹事役を発揮した。

「さてと役者も揃いましたが、ややこしい話は後に置いておいて、先に食事を済ませましょう。皆さんのご紹介は食事が終わった後に私から致しますから……」

清玄達が加わったおかげと、料理のおかげで、少なくとも先ほどよりは雰囲気がかなり明るくはなった。もっともお互いにお互いを観察する緊張感の高まりもあり、決して打ち解けたムードとは言えなかった。気楽なマイペースを守っているように見えたのは、啓作と清玄だけだったのである。

それぞれの苦悩

時折、清玄と淑子、清玄と啓作の間で会話があった他は、ほとんど会話らしい会話のない、奇妙な会食だった。

料理はいのししなべというかなり強いみそ仕立ての郷土料理のようなものだった。

淑子が淑子らしい感想を言っていた。

「このいのしし、味が違うわ。あんまりおいしくない」

「これは養殖なんじゃよ。淑子の知っている天然のものとはかなり味が違う。出来の悪いブタ肉みたいなものじゃ」

僧侶でありながら、肉の味にうるさいことなど、清玄らしいと浩一は思った。それと同時に清玄と淑子がここに来てくれたのは好都合だと浩一は考えていた。

―　なんとか、陽子のことを相談したい

だが、啓作と知恵の存在は邪魔だった。彼らが居なくなるチャンスを待とうと考えていた。ただ黙ったままビールを飲みながら、食事をしていた。

一方、表面的にはいつも通りの自分を演出し続ける啓作も心中は穏やかではなかった。今日、浩一の事務所の前をクルマで偶然に通りかかった時に、歩道から事務所の中を伺う知恵の姿を発見したのである。啓作の知恵に対する観察はさすがだった。知恵もまた、自分のパートナーは浩一であるべきだと考えていたのである。

知恵が哀れに思えた。このまま放っておくことはできないと思った。それで慌てて知恵のところに行き、何も事情を知らない知恵に、浩一には今付き合っている女性がいるが、浩一もその女性もどちらも大変なことになっているということを簡単に説明したのだ。そしてその勢いで、もはや事態は一刻の猶予も許されていないと考え、寺に電話を入れ、この会食をセットしたのだ。ところが、夕方、浩一を待ちかまえていた啓作に第二の誤算が発生した。陽子が来てしまったのだ。陽子は職場へ直接姿を現すことを憚っていたように見えていたのが、いきなり浩一の事務所に姿を現したことで啓作は再

び計画変更を迫られた。いや、もう計画と呼べそうなプランではなく、単に博打をするための場所を用意したという結果が今であった。

だから、笑顔の裏ではこれからどうすることがいいことなのかを必死に考えていた。淑子の語るいのししの肉の感想など、全く頭には入っていなかった。

陽子が突然浩一の事務所にやってきたのは、自分の肉欲に負けたからであった。少しでも早く浩一に会いたい、少しでも長く浩一と一緒にいたいという想いが、仕事場から浩一の事務所へ陽子を直行させた。だから、陽子は突然現れ、自分たちの逢瀬を邪魔するこの人間達に憤っていた。いや、陽子ではない。陽子の身体が憤慨していた。早く自分たちを解放して欲しいと陽子の身体が思っていた。が、当の浩一の様子はそうではなく、おとなしくその輪に加わっている以上、陽子も自分の身体を説得し、おとなしくさせるしかなかった。逆に言えば、もしこの瞬間、浩一以外の人間が消えることがあるのならば、すぐにでも浩一に襲いかかるつもりだったのが今の陽子だった。

知恵は、自分が生まれてからほとんど体験したことのない感情に責められていた。嫉妬である。もともと、知恵という人間は、ものごとや持ち物においても、あるいはそれが恋人であっても、私欲というものに翻弄されることのない人間である。だから、芳子との生活を続けることも出来たし、またその破綻処理に同意することもできたのである。だが、何故か浩一に限っては、その知恵の冷静さが維持されなかった。それは昼間の啓作から話を聞いた時点で始まっていた。だいたい、浩一の事務所の様子を伺うなどという行為自体、以前の知恵にはありえない行動だった。

啓作と芳子から離れ、一人暮らしを始めた知恵は、改めて自分を見つめ直すことになった。自分を見つめ直すこと自体、これが初めてではない。少なくともはっきりそれをしたという記憶に残るイベントがあった。それは啓作、浩一と三人で過ごしたあの牧場の一夜である。あの夜、知恵は自分がどういう人間なのか知った。それは

それで前進だったと自分では思う。だが、考えてみれば、あの夜、非常に重要な間違いも犯していた。そのことに気がついたのである。

つまり、自分が主人として受け入れるべき男は、啓作ではなく、浩一であったのではないかという思いだった。

が、何故そう思ったのかは知恵にも分からない。惚れたとか、忘れられないとか言う言葉で表現されるものとも違った。とにかく浩一は自分にとって特別な存在だという淡い認識があのとき知恵に生まれていた。しかしそのことに気がついたのは最近のことである。

事務所の外で浩一の様子を伺っていた理由を、啓作にそう説明した。何故か、啓作にはそれですべて飲み込めたようだった。が、その後、啓作が話をしてくれた中身は、知恵の心を大きく乱すことになった。

知恵は生まれて初めて激しい嫉妬心の洗礼を受けたのである。

そしてそのショックも十分に癒えぬままに、当の仁科陽子の実物を見た。高級外車を乗り回し、センスのいい服装に身を包んだ、自分よりも遙かに美人の出現は、知恵を一層混乱させた。絶望と呼んでもいい気分を味あわされていた。だが、啓作は、それでも知恵に心配するなと言った。啓作はこういう場合、単なる気休めの言葉を絶対に言わない。そのことを知っていた知恵は、文字通り一縷の望みをかけて、啓作の言葉に従い、彼の言うとおりに行動することにしたのである。

従って、知恵は終始無言で事態の成り行きを注視していた。だが、久しぶりに視界に入った浩一の姿はそれでも知恵を揺さぶった。隣の陽子から鋭い視線を浴びせられても、知恵は浩一を凝視し続けた。だが、肝心の浩一は全く自分を見ようとしない。

知恵もまた淑子の述べたいのしし肉の感想などが聞き取れる状態ではなかったのである。

鞘当て

「それじゃあ、食事もだいたい終わられたようですから、私から今日何故皆さんにお集まり頂いたのかご説明したいと思います」

啓作が立ち上がり、全員を見まわしながら声を上げた。

「おっと、その前に改めて今お集まりの方がどういう方か、簡単に紹介だけしておきましょう。全員共通で知人と言えるのは、ここに座る龍造寺君だけですから。まず私は彼の幼なじみの伊集院啓作といいます。それから、こちらの女性が、龍造寺君と私の共通のガールフレンドである早川知恵さん……」

知恵はペコリと頭を下げた。だが、表情は硬いままだった。仁科陽子から鋭い視線が浴びせかけられていた。また、淑子からは疑問の浮かんだ視線が同じように向けられた。

「それから、こちらの和尚が、正円寺の住職の霊山さん……」

「清玄でいいわい」

「は、それでは清玄さん、それから淑子さん……」

淑子は静かに頭を下げた。

「それから、このメンバーの中で一番新しい龍造寺君の知人である仁科陽子さん……」

「私は一番新しい知人じゃなくて、彼の恋人と紹介して頂けませんの？」

陽子は強い調子で抗議をした。知恵はその言葉に凍り付いていた。淑子は、不思議そうな顔で陽子を見ていた。浩一は、例によって当惑の表情を浮かべていた。

「……いや、それは……」

としゃべりかけた浩一を啓作が制した。

「そのことは、今日集まってもらった理由と大いに関係があるので、今そういう言い方をするのは不適切だと考えました。とりあえずは、そういうことでご理解下さい」

「何か、意味深そうなお話ね。いいわ、じゃ、それで。……で、いったいこれだけの人間の雁首を揃えておいて、どんな面白いお話

を聞かせてもらえるのかしら」

浩一は、自分を挟んでやりあう啓作と陽子の姿を、まるで男と女の二人に別れて争っている二人の啓作を見ているように感じていた。

「納得頂いてありがとう。じゃ、改めて今日の会合の趣旨説明に入らしてもらいます。問題はこの男、龍造寺浩一が抱えている問題が議題の全てといっていいでしょう……。ただ、その問題はかなり普通じゃない話も含んでいます。それでその説明をお願いしようと思って、清玄和尚と淑子さんにもおいで頂いたということです。それから、もう一つ別件と言った方がいいかな、あなたと彼女の問題もあります。だが、この話は最初の彼自身の問題が解決しないと中に入ることが出来ない……」

「よく分からないわ。あなたが何を言っているのか……」

陽子が答えた。

「それに、そちらの女性が何を言おうと彼は私のものよ。絶対に譲らないわ」

啓作は陽子に対し強い調子で言い返した。

「君の意見は分かったが、今その話をするのは無意味なんだ」

「なぜ？」

「それも説明のうちだ。それじゃ、清玄さん、いや、淑子さんがいいのかな。どちらでも結構です。後はお願いします」

清玄と淑子が顔を見合わせ、清玄があごを突き出した。

「それでは私から……。ですが、説明の前に、浩一さんに質問するのが先です。よろしいでしょうか？」

淑子は浩一に向かって聞いた。

「は、はい。どうぞ」

浩一は目の前に陽子、淑子と知恵がいるという事態に適応がうまくできなかった。声が裏返りかけていた。

「浩一さん、私どもの山から下りた後、夜叉としての能力を感じたことはありますか？」

「は、はい。あります」

その返事は、啓作と清玄の目を大きく開かせた。陽子と知恵には質問の意味も答えの意味も分からなかった。

「あのう、意味が……」

と陽子が言いかけると清玄が口を開いた。

「その説明は後じゃ。今は事実の確認が先じゃ。淑子、続けよ」

「はい。では、ヨニか、奇蘭と話をしましたか？　戻った後」

「はい、奇蘭とは話をしました。ヨニとはしてません」

「で、奇蘭と何の話をしたのです？」

「この陽子のことについてです」

「そう……。やっぱり……。では、浩一さんは、いま、陽子さんがどういう状態にあるのかご存じなんですね」

「ええ、奇蘭から聞きました」

自分の名前が出たことで陽子は再び淑子の顔を凝視した。だが、さきほど清玄に釘を刺されたのでとにかく黙っていた。

「彼女を今の状態のままにしておくのがいいことだと思っていますか？」

「とんでもない。こんなことになるなんて全く考えてもいなかったんです。僕は、自分の能力が、いや、煩悩というものがいかに恐ろしいものかよく分かった……」

「それでは、これからどうするつもりだったのです？」

「陽子を淑子さんのところに連れて行くつもりでした……」

「私のところに？　どうして？」

「奇蘭が言ってたんです。もし、陽子を元の人間に戻すなら、お寺で修行させて、煩悩を抑えることのできる人間にするしかないと」

「何じゃと……」

清玄が驚いたように浩一の顔を睨み付けた。

「本当に奇蘭はそんなことを言ったのか」

「はい」

「馬鹿な。それこそわしのようなプロの僧侶でもそんな境地にはたどり着けないでおるというのに、普通のおなごがすぐにそんな簡

単に煩悩から解放されるものか。……淑子はどう思う？」

「わかりません。奇蘭がそんなことを言ったこと自体がどこか変という気もしますし……。なんでわざわざ仏教の話などするのでしょう？　それはもっと別なことを言いたくなかったからのような気がします……。陽子さんのことは今はこれぐらいまでですね。それから浩一さんの能力のことですけど、具体的には何ができました？」

「奇蘭の声を聞くことと、陽子の心の声のようなものを聞けることです」

「なるほどね。だいたい分かりました。それでその声の通りにしていたら、陽子さんの様子が変わっていったと」

「そうです」

「あの時の私と同じですね」

「はい」

「そうですか。じゃ、浩一さんはご自分がどういうことになっていて、陽子さんが今どうなってるか全て理解されていると。ただ、ご存じない方もおられるし、あるいは分かっていてもそれがどういうことを意味してるのかを知らない方もおられるので私からまとめて説明します」

淑子の言葉に一斉に全員の注目が集まった。

邪神の夢

「まず、私は、今でこそ淑子という人間の名前で呼ばれてますが、実はこの浩一さんが山に来られるまでは、別の名前で呼ばれていました。その時の名前は、夜叉の奇蘭。夜叉とはもともとは神様の一人だったようですけど、仏教の人たちが、邪神を守るもの、あるいは世俗のものを惑わす煩悩を守るものという意味を込めて呼んだ言葉です。鬼という言葉にもほぼ同じ意味があると申し上げればお分かり頂けるでしょう。そして私は邪教の祠のご神体を兼ねた存在として小さな祠を守っていました。そこへこの浩一さんが連れてこられたのです。その時の浩一さんは、私からは本当に不完全な人間に見えました。他人の気持ちを理解できず、自分だけの世界を作ってそこに閉じこもろうとする。そんな人でした。それで、人間の欲望とか煩悩とかを教えて欲しいと私のところに連れてこられました。私は、私の流儀で、彼の凍り付いた心を溶かしました。彼は見事にそれに応え急に変わったんです。人の思いやりや心といったものをそのまま素直に受け入れられるようになって、それは私自身にとっても、ものすごく嬉しかったものです……」

訥々と語られる淑子の話に全員が聞き入っていた。浩一もあの山での一夜の情景を思い浮かべ、幸せな気分を味わっていた。

「ところが、そこにはとんでもない落とし穴が待っていました。私にはその邪教の神、ヨニの姿が背中に彫られてありました。ところが、彼がそれに口づけをした途端、私はそれに狂わされて自分を見失ったのです。次に目が覚めた時、大変なことが起こっていました。背中の彫り物が消え、私の意識の中にぽっかりと空洞ができていたのです……。後で分かったことですが、その瞬間、私は夜叉の奇蘭ではなくなったのです。そしてその神、ヨニと夜叉の奇蘭は今もどこかをさまよっているようです。浩一さんは、その時に浩一さんも夜叉だとヨニに言われたそうです。が、私には私の背中からヨニの絵が消えたこととそのことがどう繋がるのか全く分かりませんでした。ところが、浩一さんが山から下りられた後、この清玄とそ

の話をしていたときに、その意味が分かりました。

浩一さんはヨニに選ばれてしまったということです。奇蘭であった私よりも強い力を持つ新たな夜叉、それが浩一さんだったと。そして浩一さんはヨニからおそらく期待されているのです。ヨニの望むような世の中を作ることを……」

「それでそれはどういう……」

啓作が口を挟んだ。

「ヨニは豊穣多産の神だそうです。もともとは。ですから、神事はセックスそのもの。巫女は乱交パーティの主催者のようなものです。ヨニに見込まれた夜叉である浩一さんは、おそらく相手の女性を誰でも簡単に色欲に溺れさせる能力を持っています。いずれは本人にもどうにもならない状態、ほとんど廃人のようにしてしまうのでしょう。私のいた祠には、かつてそういうふうになった女性達が沢山居たそうです。そしてそういう女達を求めた男がまた集まると。あの祠の周囲は一種の売春街のようになっていた時代もあったようです。彼女たちの多くは、もともとは巫女としてヨニに仕えていたそうです。私は、私がそうなることを怖れた父によって、代わりにヨニの姿を背中に彫り込まれたのです」

「じゃあ、陽子さんは……」

啓作の質問に答えたのは、淑子ではなく浩一だった。

「淑子さんの言うとおりだ。彼女はセックスの途中から様子がおかしくなる……。俺には分かる、ヨニは、陽子を巫女にしてしまうつもりだ……。もうすでに陽子は自分を見失いかけてる……。だから、彼女が狂わないようにと、俺は別れ話を持ちかけたんだが、彼女にはそういう自覚がまるでないんだ」

陽子は、その言葉にヒステリックな叫びで答えた。

「な、何を言い出すの。私が狂いかけてるって？　これだけの人間を揃えて、話の中身ってそれなの。あなたたちこそ、どこかおかしいんじゃないの。人をきちがい扱いして。あんた、変なことを浩一さんに吹き込んで何が面白いのよ。もういい加減にしてちょうだ

い。こんなところにはとてもいられないわ。私は帰らしてもらいます」

淑子に向かって罵声を浴びせた陽子は、ハンドバックを肩からさげ、立ち上がった。

だが、浩一はそんな陽子の対応を全く無視するように全く身動きを見せなかった。

全員が立ち上がった陽子に冷たい目を向けていた。

希望

「浩一さんも行きましょ。私は大丈夫だから。あんな女の話は嘘っぱちに決まってるんだから。おおかた三流伝奇小説の読み過ぎで変な妄想に取り憑かれてしまったんでしょうけど。お気の毒様」

陽子は、そう言いながら浩一の腕に手をかけ、浩一を立ち上がらせようとした。

だが、浩一は低く抑えた声でこう語りかけた。

「陽子さん、悪いが僕には君の心の声が聞こえるんだ。君は分かっているじゃないか。君から聞こえてくるのは、泣き叫んでいる声だ。悲鳴そのものだ。恐怖に君は自分を見失いかけてる……。今、ここで帰っても、君にも僕にも未来はない。絶対に不幸になるだけだ。だが、ここで冷静になって考えたら、まだ何か道が見つかるかも知れない。頼む。落ち着いて座ってくれ……」

その浩一の言葉は、陽子に届いた。自失してペタンと尻餅をついた。

「ご、ごめんなさい……。わ、わたしにも、分かってた……。で、でもどうしようもないの……。自分で自分を抑えられないのよ……。わ、私、これから、ど、どうしたらいいの……」

陽子はその場で泣き崩れた。

「清玄さん、淑子さん、お願いします。何とか、何とか陽子を元の生活に戻れるようにしてやって下さい……」

浩一は両手をついて清玄に向かって土下座をした。

「……」

一座の者は言葉を失った。ようやく、清玄が一言、言った。

「おぬし、奇蘭とまた話せぬのか？」

「わかりません。いつも突然に意識の中に現われるのです。そしてすぐいなくなる。でもどうして？」

「この人を助ける方法を知っているのはヨニか奇蘭だけじゃと思うからじゃ。だが、ヨニは彼女が狂うことを望んでいる。ヨニにしてみれば世の中の女がすべて狂うことぐらい、望みかねないからの

う。それとおぬしも問題じゃ。おぬしの能力をこのまま放っておけば、おそらく第二、第三の被害者を作る……。おぬしにその意図がなくともじゃ。恐ろしいことじゃ。答えを知っているのは結局首謀者たちだけか……。どうにもならんのかのう」

知恵は事態の思わぬ展開に新たな絶望感を感じていた。自分の希望の星は重い病に冒されていると聞かされたようなものだ。それとともに、先ほどまで嫉妬の対象だった陽子が、今は同情の対象に変わっていた。見方によっては自分の身代わりになったようなものである。何とか助けてあげたいと思った。

啓作だけは少しばかり様子が違っていた。彼はまわりの状況とは無関係に自分の考え、推理、計画をまとめることができるのである。今そういう能力が発揮されていた。しばらく陽子を見ていた啓作だが、あるところから、淑子の顔をずっと睨み付けるように見ていた。

その刺すような視線に、淑子は違和感を感じていた。以前の啓作は奇蘭であった淑子にまともに視線を合わそうとさえしなかったのである。ただの臆病なクルマのセールスマンだと思っていた男がこんなにも鋭く、強い意志を持つ視線を自分に浴びせかけるなど想像もつかなかった。啓作が単なるお調子者でないことが、淑子にもようやく分かった。

「あの、何か？」

いたたまれなくなった淑子が啓作に聞いた。

「いくつか腑に落ちない点があるんです。まず、あなたは奇蘭の時にその邪教の信者さんたちと交わったりしてたのでしょう？」

「はい」

淑子は少々躊躇いを感じながら答えた。

「で、あなたのせいで狂った信者さんはいたのですか？」

「いいえ、誰も」

「それじゃあ、あなた自身は？　あなたが自分のことを何も覚えていないほど狂ったことはなかったのですか？」

「それもありません」

「それじゃあ、何故浩一は、あなたを色欲に狂わせられなかったのでしょう？」

「それもわかりません。あ、だけど狂いかけたのです。彼が彫り物のヨニにキスをした時に、そしてその後、絵も何もかも消えたのです」

「それまでに背中のヨニにキスした人間は居なかったのですか？」

「いいえ、たくさん居ました」

「それなのにあなたは浩一の時だけ狂いかけたのですか？」

「そ、そうなります……。確かに変ですね。何故かしら」

「もし仮にあなたに彫られていたヨニの彫り物には、夜叉奇蘭の力を無効にする力がそもそも備わっていたとするなら、あなたが、信者の誰も狂わさなかったという説明ができる。しかし、それだけでは、なぜ浩一がキスをした時にあなたが狂いかけたのかの説明がつかない」

「あ、もしかしたら……」

「どうしました？」

「奇蘭はヨニのしもべですから、ヨニにその力を封じられていると見ることは出来ます。でも浩一さんは、夜叉は夜叉でも主人はヨニじゃないんです。ヨニとはライバルになるええっと、確か、そうサラという別の神様のしもべなんです。ね、確かそう言われたんでしたよね」

淑子は浩一の方へ顔を向けた。浩一は黙って頷いた。

「そうですか。それなら分かる。だから、封印としてのヨニの彫り物は浩一には効かなかったんだ。それでヨニの封印で抑えられていた夜叉奇蘭は、夜叉浩一がヨニの封印そのものを壊してしまったから解放されたと考えれば辻褄があう」

成り行きを聞いていた清玄と浩一も啓作のこの言葉に驚きの声を上げた。

「そうか！　そういうことだったのか！」

「奇蘭が言いたくないのも道理」

「あなたに彫り物を施したのはお父さんだそうですけど、何かお父さんは残されなかったのですか。そういうことについて」

「さあ。実は父は祠には住んでいなかったもので。今は廃屋になっている家が山の中腹にあって、そこに私と父は住んでました。父の遺品はほとんどそちらの方にあるはずなのですが。私も奇蘭になってからは祠を離れることが滅多に無くなっていたもので、今その廃屋がどんな状況になっているかもよく分からないのです」

「いずれにしても、浩一の夜叉としての力がもし封印できるとしたら、ヨニの彫り物じゃなくて、サラの彫り物ということになるんだろうな。だが、そんなもの見つかるのかなあ」

「そういうことなら、わしの大学時代の知り合いのつてがある。そういう鬼道のことばかり研究している人間なら、仏教関係の大学にはごろごろしてるからな。そっちは心配するな」

「鬼道って何です？」

浩一が尋ねた。

「鬼道とは、仏の道、正道に対してはずれたものを指す。つまり、悪魔、邪神、鬼や夜叉、まあそういうものを信じる宗教かのう。しかし、それにしても、啓作は、やはり単なる女ったらしではなかったんじゃなぁ。いやあ、これほど見事に謎を見破るとは思わなんだ」

「和尚、褒めるんなら、もう少しこっちが気分良く受けられるような褒め方をしてもらえませんか？　それじゃ、はいそうですって言ったとたんに、女ったらしも同時に認めることになる」

「事実じゃから、ええじゃないか」

が、この会話で笑いを漏らせたのは、淑子だけだった。他の三人にその余裕は無かった。

合意

バツの悪そうな清玄と啓作だったが、場を見まわしていた清玄がふと知恵に目を止めた。そしてその目は知恵に釘付けになった。

「どうしました？　和尚？」

「あの女性は？」

「さっき、紹介したでしょう。早川知恵です。私と浩一の共通の友人……」

「おぬしの友人？　嘘をつけ。おぬしの女じゃろうが。しかし、よく見つけたものじゃ」

「え、彼女が何か？」

「わしの目を節穴と思ってるんじゃないだろうな。見れば分かる。おぬしがどういう好みをもってるかぐらい。まるでそっくりではないか、ほれ、あの男と」

清玄のあごが自分に向かって突き出されたのを見た浩一は当惑した。

「は、和尚にもやはり似ていると感じますか？」

「似てるなんてもんじゃないな。同じ匂いとでも言うのかのう。おぬし、しかし、欲張りな奴じゃのう。とことん気に入ったものは全部自分のものにしておろうが」

「いや、和尚。それは誤解です。彼女は確かに私の恋人でしたが、ほら、話したでしょう。浩一と似合いなんじゃないかと考えて……」

「ああ、あの話は彼女のことじゃったのか……。すると何じゃな。うちの山に連れてきたことは大失敗だったということじゃな」

「……それは言ってもしょうがないことで。とにかく、今は浩一と陽子さんをどうにかするのが先決ですから」

「そうじゃなあ。……淑子、わしが思うには、陽子さんにはうちの山にこのまま来て頂いた方が良いのではないか……。辛いだろうが、とにかく少しでも彼とは離しておいた方がよかろう。一人で帰しても、自分で自分を抑えられまい。それよりも山に行って、実際に祠を見てもらった方が、自分が今どういう状態にあるのかを正し

く理解してもらえるじゃろう。煩悩を克服することができなくても」

「陽子さん、私もそう思います。お辛いでしょうけど、そうなさい。浩一さんはとってもいい人で、あなたのお気持ちは分かります。私も彼が好きでしたから。だけど今の彼はあなたには危険すぎます。いえ、あなただけじゃなくて、世の中のすべての女性にとって彼は危険な存在なんです。ね、私たちと一緒に山に行きましょう。しばらく、お仕事もお休みにして私たちと山で過ごしましょう。きっとあなたの身体を元に戻す方法が見つかると思いますから……」

「陽子さん、僕からも頼む。清玄さんたちと一緒に山に行ってくれ。少なくとも僕と一緒にいるよりは絶対君のためになるから……」

無表情の陽子は、ようやく口元を緩め、ほんの少し笑みを浮かべながら静かに話を始めた。

「変ね。あれほどたくさんの男をふってきた私が、たった一人の男をふることにこれほど苦しむなんて……。これも大した理由（わけ）もなく男たちをふったことの報いなのかしらね……。ようやく本物に出会えたと喜んでいたら……、その相手は鬼だったなんて、三文小説もいいところ、まったくとんだお笑いぐさだったわ……。いいわ、あなたたちの望み通り、わたしは山に行くわ……。わたしにはそれしかないみたいだし。これで人生を終りにしたいなんて思えないしね。いくら彼が好きだったとしても。もっとも、私にも彼が本当に好きなのかはよく分からないの。そういう意味では確かね。あなたの話は。……肉欲の虜か……。そんなの言葉だけだと思ってた。まさか自分がそんなことになってるなんて、男に夢中になるだけじゃなくて、ペニスそのものの虜になってるなんて……。本当にお笑いぐさだわ。……まったく、自分で自分をコントロールすることも出来ないだなんて……、そんなことも人に頼らなきゃいけないだなんて……。自分で自分が嫌になるわよ」

陽子は涙声に変わった弱々しい声でなおも続けた。もう自分でもその言葉を止めることも難しそうだった。

「……そうよ、きっと子どもなのよ……。まだ親が必要だったん

だわ。やーね、親元から離れて、ちょっと世間で認められて仕事して自分で稼いで、外車乗り回して、すっかり自分では大人だと思いこんでたのに……。肝心なところがちっとも大人じゃなくて。きっとそのせいだったんだわ、相手の気持ちも考えずに寄ってくる男をさっさとふっていたのも。ほほほほ。当然の報いね。私にふさわしい話だわ。これじゃあ、夜叉の餌食にされちゃうのも無理ないわよね。……因果応報ってわけなのね。まさか、そんな宗教めいた言葉に自分が縛られることになるなんて思ってもみなかったわよ。それどころか、山で修行ですって？　もう漫画ね、まるっきり。私はマンガの世界に生まれた人間なのね……」

「陽子さん、もういい。じゅうぶんだ。もうやめてくれ」

「ごめんなさいね。大人になりきれないマンガ女の私のせいであなたをこんなに悩ましちゃって……」

「陽子、黙ってくれ、頼むから。もういいんだ、何も言わなくても……」

浩一は口が止まらなくなった陽子を引き寄せ、両腕をがっちりとその身体に巻き付け、しゃべりを止めない口を口で塞いだ。

口を離した時、浩一の腕の中の陽子が小さく言った。

「ずっとこのままいられたらいいのに……」

「君の人生はまだ終わったわけじゃない。いくらでもいい恋はできるさ」

「そうね。あなたの言うとおりだわ。どうもありがとう。いよいよ本当にお別れね。こんな形であなたと別れるなんて思わなかったわ……。こんなことになると知ってたら、本当にあなたを刺しておけばよかった。誰かに取られるんじゃないかって心配しなくてすんだもの……。もし、生まれ代わって、またあなたに会えたら、その時は絶対に離さないから。それじゃ、さようなら」

「あ、ああ。いろいろありがとう。さようなら……」

浩一は腕をほどき、陽子の身体を離した。陽子は立ち上がった。

それを見て、清玄と淑子も立ち上がった。

第八章　克服

出発

「それじゃあ、お願いします」

「ああ、彼女はたぶん大丈夫だと思う。心配するな。それよりもぬしの方が、まだ解決できんがのう。まあ、そっちの方も何か分かればまた連絡する。ぬしもまた奇蘭から何か聞いたら教えてくれ」

「はい。……あ、そう言えば今思い出した。奇蘭が言ってました。淑子さんに楽しかったって伝えておいてって」

「奇蘭が淑子に？　何か変だな。なんでそんなことを言ったんだろう？」

清玄は淑子の方を見た。

「そうですね。直接話ができたわけでもないのに、何故楽しかったなんて感想が出てくるんでしょう。まあ私を通して何か感じていたにしても私に言う言葉としては何か変ですね」

「まあ、ヨニの幻を見せて喜んでいたとしたら楽しかったと言われても返す言葉がないが……」

「夜叉が楽しい……、夜叉の楽しみ……」

「人を食らうことか、人の精を吸うことか、大方そんなもんじゃろう」

「広い意味の夜叉ならそうでしょうけど、奇蘭の場合はもっと別なことがあるような気がします……。浩一さん、奇蘭が楽しかったって言ったのは、どういう話をしていた時なの？」

「えーっと、確か、そうそう、奇蘭が寺に陽子を連れて行けと言った後、僕が、じゃ、そうするみたいなことを言ったら、奇蘭が聞いてきたんです。淑子さんのところへ連れて行くのかって。それでそうだって答えたら、楽しかったって伝えろと……」

「それじゃ、何か関係ありそうね。陽子さんのことと……。でもそれが何かわからないわ。でもそのうち何か思い出すかもしれない。とにかくありがとう」

襖を開けて三人が先に座敷の外に出た。残りの三人も見送るために座敷から出た。

「あんた、クルマの運転大丈夫か？　代行を呼ぼうか？」

「ええ、お願いします。お酒のせいじゃないけど、とても運転できそうにありません」

「そうじゃろうな。あんたも辛いじゃろうが、何とかこらえてくれ。淑子、お前はこの人のクルマに一緒に乗れ。わしらのクルマはわしが乗って帰るから」

清玄は店の者に代行を頼んだ。店の外に出ると外は満天の星空だった。店の外の照明はすでに落とされ、月もなく、あたりは文字通りの暗闇であった。店の者の話では代行は十分ぐらいで来るとのことだった。

見るものもなく、皆、満天の星空を見上げた。夏の王者の蠍座が半分南西の平地に向かう地平線に掛かっていた。銀河がはっきりとその周囲に見えた。

「溺れるさそりか……。なんか、壮絶な眺めだな」

啓作には似合わない言葉が出たなと浩一は思った。その時、淑子が思わぬ反応を返した。

「何だっけ、何か引っかかる」

「どうした？」

「何か思い出しそうだったんですけど」

「そうか……。慌てることもあるまい。とにかく早く彼女を祠に連れて行くことじゃ。そこできっと何かわかるはずじゃからな」

代行のクルマが来た。

クルマに乗り込む時、陽子はもう浩一を見ようとはしなかった。だが、知恵には視線を向けた。クルマに乗り込もうとしていたのを一度中止し、啓作の横から見ていた知恵の前に歩み出た。

「早川さんって言ったわね。私はあなたが羨ましいわ……」

「何がです？」

「だって分かるもの。あなたは彼にとっての宿命の人だって」

「本当にそうなのでしょうか？」

「半分狂った女はきっと霊力もあるのよ。わたし、あなたを見てなかったら、きっと山に行く気にならなかったわ。あなたを見たから、私思ったの。もうどうしようもないって。だから私の言葉を信じなさい。それにしても、私もあなたみたいに生まれたかった。本当に残念だわ……。それじゃ、もうあなたとも会うことはないと思うけど。彼のことをよろしくとでも言えばいいのかしら。でもそれも変ね。彼はあなたのものなのに……。そうね、やっぱりこう言うべきね。……お幸せに」

そう言うと、陽子はＢＭＷのリアシートに乗りこんだ。

知恵は何か言葉をかけたかったが、あまりに唐突な陽子の言葉に返す言葉が見つからず、結局無言のままそのクルマが出て行くのを眺めた。

後ろから、啓作が知恵の肩を叩いた。

「さあ、中へ入ろう。話をしたいだろう、浩一と。何なら俺は遠慮してもいいんだぜ」

「いいえ、一緒にいて下さい……。私には分からないことでも啓作さんには分かるようですから」

「そうか、じゃあ、そうしよう」

啓作は振り返り、後ろから二人の様子を見ていた浩一に向かって声をかけた。

「よう、聞いていたか、色男。そういうことだから、悪いが邪魔させてもらうぜ」

「あ、ああ」

山寺

クルマは山門をくぐりようやく境内の中の駐車場へと入った。
代行に料金を払い、彼らを見送った後、淑子は陽子に話しかけた。
「びっくりしたでしょう、本当に山の中で」
「ここが淑子さんの言われていた祠なんですか？」
「いえ、そうじゃないのよ。今日はもう遅いから、明日夜が明けてから案内してあげるわ。ここは清玄が住職をしている正真正銘の仏教のお寺だから。禅宗よ」
「あの一つ伺ってよろしいですか？」
「ええ、何でもどうぞ」
「清玄さんと淑子さんのご関係は？」
「あら、いやだ。そう言えば、啓作さんたら肝心なことを説明してなかったのね。私は、清玄の妻なの」
「え、奥さん！　いいんですか、仏教のお坊さんとご夫婦なんて……」
「知らない人にはいつも驚かれるの。でも事情がおかしくてね。まあ、そのうちゆっくりとお話してあげるわ。ヨニも浩一さんも登場する面白い話よ」
「え、浩一さんが？」
「そう。彼がいなかったら、今頃こんなふうに私は奥さん然としてここにはいられなかったもの。それにヨニがいなかったら、清玄を夫に選んでもいなかったわ」
「まあ」
「おーい、お前たちそんなところで何をしてるんじゃ、早く入らんか、山の中じゃて冷え込みはかなり厳しいんじゃ。油断するとかぜを引くぞ」
「はいはい、今行きます。さあ、中へ入りましょう」
清玄の呼びかけに答え、淑子は本堂に隣接する住居部分の玄関から中へと陽子を案内した。
「淑子、陽子さんには、修験場を使ってもらおうと思うがどうじ

や？」

「あそこは広すぎるし、建物が古いから、すきま風とかも激しいし。いくら何でも女性を置く場所ではありません」

「そうか、淑子も来たし、そろそろここも改築を考えねばならんな。広い割に使える部屋が少なすぎる……」

「それでしたらこうしましょう。今晩は、陽子さんには私と一緒に本堂で寝てもらいます。そして明日以降は、祠の方で生活して頂こうかと。どうせあそこに行かねばならないのだし、少なくとも生活する上では、あそこはかなり快適ですからね。ここの修験場よりも」

「じゃ、淑子もしばらく一緒に行くのか」

「まあ、そうなりますね。お淋しいですか？」

「そりゃ、ようやく来てもらった嫁が実家に帰ると言ってるようなものだからな。まあ仕方がない。それから、明日の昼間には、お父さんの遺品探しにも行かねばなるまいてな……。結構、忙しかろう。今日は早めに休むがよかろう」

「それでは、お世話になります。あの明日の朝、電話を貸して頂きたいのですが……。何しろ急にこういうことになったので、仕事の関係先などに連絡を入れたいので……」

「おお、そうじゃな。他に何か入り用なものは？　服などは、寺としての体裁もあるので、この淑子が着ているような法衣をここにおる間は着て欲しいんじゃが……」

「はい、それで結構です。あと、出来ましたら、紙と鉛筆を頂けると嬉しいのですけど」

「何か書かれるのか？」

「私一応作家志望ですので、せっかくの貴重な体験ですから、将来のためにメモに残しておこうと思いまして……」

「左様か。分かった。明日の朝用意しておく」

「ありがとうございます」

「それじゃ、淑子、後は任せたぞ。わしはもう休む。啓作の相手

をするのはいつも疲れる。今日は格別じゃがな」

「はい、わかりました。それでは陽子さんこちらへどうぞ」

淑子は陽子を本堂に案内し、本殿横のふだんは控えの間として使っている部屋に入れた。

知恵の覚悟

「本当にいいのか？　これで」
「今は仕方がありません」
「そうか……。そうだな。きっと近い将来ちゃんと話せるように必ずなる。それを信じてくれ。それに清玄和尚も、あの陽子さんまでも、知恵こそ、あいつにふさわしいパートナーだと認めてくれたじゃないか。勿論、俺もそう思う。ただ、浩一は山で鍛えられたとは言っても、やっぱり俺に対する妙な意地があって、どうしても俺との関係で、自分に素直になれないんだ。そこをどうクリアすればいいかがいつもネックになる……」
「本当にそれだけでしょうか？」
「なぜ？」
「彼は私を避けてます。あの牧場の時から……。私、疎まれてるんじゃないでしょうか……。啓作さんへの遠慮が原因ではないような気がしてなりません……。でも、それなのに私、彼のことが忘れられないんです……。彼を思わずにはいられないんです」
「知恵……」
クルマで浩一をアパートに送った後、知恵をアパートに送る途中のクルマの中での会話だった。
清玄達が去った後の、知恵、浩一、啓作の会談は、まったく実りのないものだった。知恵には浩一にかける言葉が見つからなかったし、浩一も知恵に何を語ればいいのかわからなかった。啓作にしても、知恵の出現は予定外だったのだから、もし何か進展があれば儲け物程度の期待しかかけていなかった。それにもし、二人にその気があっても、少なくとも今の浩一に知恵を抱かせるわけにはいかなかった。無論そのことは浩一にも知恵にも分かっている。そういう発展性が全くない状況では、会話が盛り上がる可能性はもともと少なかったのである。結局、陽子と浩一のことを案じるような外交辞令的な話題に止まり、それ以上のものは何もない話し合いだった。
ただ、双方とも、相手にとって自分は特別と思えるようになったこ

とだけは間違いない、と啓作は判断した。が、いくらポジティブな評価を下しても、陽子と浩一の治癒の目処が立たないと、これ以上の進展を図るスケジュールも立てられない。啓作も実のところこれ以上は打つ手がなかった。すべては清玄たちからの連絡待ちになったのである。

「でも、浩一さん、随分立派になられてましたね。あの牧場で会ったときは、まるで大きな中学生みたいだったのに……」

「そうだな、淑子さんと陽子さんのお陰なのかな。急に大人になった……。そう考えれば、山に連れて行ったのは大成功だったんだが……」

「そうですね……。でも不思議なことってあるんですね」

「……」

「浩一さんはもともとが夜叉だったのなら、淑子さんと違って元に戻るということは無いんでしょうね……」

「……そうかもしれない。だが、奇蘭がそうであったように、夜叉としての魔力みたいなものを使えなくしてしまえば、普通の人間として生活することはできるだろう……」

「そうですか……。あ、そこでもう結構です。ここで下ろしてください」

「そうか、上まで上がらなくていいか？」

「階段なら一分もかかりませんけど、クルマだと迂回で五分ぐらいかかりますから。もうここでいいです」

「そうか。今日は大した進展はなかったけど、そのうち必ず何とかする。心配しないで待っててくれ」

「啓作さん……。いえ、いいの。さあ、早く芳子のところに戻ってあげないと……。今日はどうもありがとう。お休みなさい」

「あ、ああ、おやすみ」

走り去る啓作の車を見送りながら、知恵は胸の中で啓作に言いかけた言葉を反芻していた。知恵は覚悟を決めていたのである。

―　浩一さんのことはもう私に任せて頂いてもいいんです……。

一色強兵

私は狂っても構わないんだから……

陽子と淑子

「淑子さん、もう寝ました？」
ふとんに入った陽子が隣の淑子に話しかけた。
「いいえ、どうしたの？」
「浩一さんて、何なんでしょうね。私初めて会ったとき、別にフィーリングが合ったわけでもないし、一目惚れしたつもりもないし、何で彼とこんな仲になったのかどうしても理由が分からないの」
「陽子さんは、人と人が付き合うのに理由が無いと変だと思う？」
「え、あ、そういうことって……、やっぱり」
「理由はね、人が後からくっつけた言い訳よ。理由なんかいらないわ。男と女がいたら求め合うのが自然なのよ。もともとはね。理由がいるような社会にしたのは人間の都合。その都合が理由ってこと」
暗闇の中で、陽子が淑子を凝視する気配が流れた。
「面白い考えですね。それは淑子さんの個人の考えです？　それとも、例の宗教の教えみたいなものですか？」
「ふふふ。今は、もうご神体と無縁だから私個人の考えでしょう。ちょっと前だったら、教えの一部になっていたのかしらね」
「そういうものなんですか。ご神体であるということは」
「さあね。私にもわからないわ」
「淑子さんは、昨日浩一さんと久しぶりに会われて、目の前に私が現れたことに、嫉妬みたいなことは感じなかったのです？　だって、浩一さんのこと好きだって言われてましたよね」
「嫉妬かあ。嫉妬ならいつもしてたから。きっと忘れちゃったのね」
「いつもしてた？　どういう意味です？」
「そうねえ、今となっては口に出すのも恥ずかしいけど、夜叉の奇蘭の頃は、私を拝みに来る人が居て、そういう人たちの中の男は、私とセックスするのよ。それがお布施みたいなものだから。もちろん私が相手じゃなくてもよくて、連れてきた女性と私の目の前で交

わることもあったわ。そんな時ね、感じてた。どうして私を選んでくれないのって……。それが私の嫉妬なの」

「そんな……。それは肉欲みたいなものですか？」

「肉欲じゃなかったと思う。義務感みたいなもの。自分がご神体だっていう」

「義務感……。よくわからない」

「宗教の主催者だから、基本的には誰にでも受け入れられる存在になりたいというのが私の立場だったの。だからそれは義務でもあるの」

「愛の宗教？」

「そうね、そんなふうに呼んでもらえれば嬉しいわ」

再び、陽子の凝視の空気が流れた。

陽子は、淑子と話すごとに何か自分が癒される想いにとらわれていた。淑子がご神体であったということが素直に理解できた。淑子の話を聞いて、心が乱れる人間は少ないだろう。一方で、淑子の立場というものがいかに厳しいものであったのかもよく分かった。淑子と自分を比べると、自分の存在を小さなものに感じざるを得なかった。

「あの、もう一つだけ」

「どうぞ」

「私を初めて見た時、どんな印象に見えたか聞かせてもらえませんか？」

「啓作さんのそっくりさん」

「啓作さん？　ああ、あの会食を取り仕切っていた人ですね。彼が私のそっくりさん？」

「そう、頭が良くて、世の中を渡るのが上手で、人の心をよく読んでるように見えるけど、実はポカも多くて、でも人柄でその欠点を憎めないものにしてる。器用だけど、器用貧乏。でもスケールは大きいわ。何にしても自分の人生に前向きに取り組んでるわ。だけど、そうね、問題があるとしたら、ことの善悪とか、社会への配慮

が少ないことかしら。彼にとってはそんなこと閑人の考えることだってことかな。宗教を一番必要としない人ね。自分を神以上に信じてるんだから」

「じゃ、それが私にも？」

「似てませんか？　うふふふふ」

「自分のことは分かりません……。でもきっとそうなんでしょうね。淑子さんに言われるともう反論する気が消えてしまいます」

「まあ、まるで信者さんみたい。おほほほほ」

「そうですね、ふふふ。すみません、変なお話ばかりして。でも淑子さんのお話を聞くのは癒されます。またいろいろ聞かせてください」

「ええ、いつでもどうぞ。それじゃおやすみなさい」

「おやすみなさい」

廃屋

淑子の生まれ育った廃屋の場所は、祠と里を繋いでいた参道沿いにあった。ところが、清玄が祠へ通じる道を塞いだ時に、この参道も行き来できないように、入り口を柵で塞いでしまっていた。

もともとが獣道が大きくなったような道だったから、草木に覆われるのにそう時間は掛からなかったろう。最初、祠側から、下りて行こうとしたのだが、坂道を上に向かって生えてくる灌木が多く、中々進めないことが分かり、里側にまわって、柵を壊して下から上に上るルートでそこへ向かうことにした。淑子にとっては、通学に使った想い出の多い道でもあったが、その荒れ様は、淑子の心中を暗いものにした。

「まさか、こんなことになるとは思わなかった。わしもやりすぎた。許してくれ」

ナタをふるい、蔓草や灌木を切って道を開きながら先頭を歩く清玄が淑子に言った。

「仕方ありません。言ってもしょうがないことです」

冬の気配が近い時期だったので、おそらく草も少なくなっているし、また気候が、身体を動かしていてちょうどいいくらいだったのは幸いだった。清玄の奮闘のお陰で、二時間ほどで、目的の廃屋のところに着いた。

廃屋とは言ってもかなり大きな家で、普通の農家ぐらいの大きさはある。ただ、住人がいないから、荒れ放題であることは間違いない。

「ここで淑子さんは育ったんですか？」

陽子が興味深そうに屋敷の中をのぞき込みながら話した。

「ええ、そうよ。ここに父と二人でずっと住んでいたの。祠に移るまで。私が祠に移った後は、父が独りで住んでいたわ。さあ、こっちよ。懐中電灯出して」

引き違い戸には鍵らしいものは見あたらず、淑子は無造作にそれを引いた。ガラガラと大きな音を立てて、簡単に開いた。

「鍵とかかけてなかったんですか」

「都会の人らしい言葉ね。ここに住んでる時の感覚で言えば、どうして鍵が必要なのって感じ。さあ、入って」

内部の構造も農家のように、玄関から台所までは土足で移動できる土間続きになっている。淑子はまっすぐ奥に繋がる土間を歩き、台所の手前の右側の障子を開いた。

「あらあら、こんなに汚れてちゃ、靴は脱げないわ。よいしょっと」

淑子はそのまま畳の上に上がった。

「ここが父の部屋だったの。もし何かあるとすれば、ここだと思うけど」

だが、その部屋は一瞥しただけでも、ものが少ないことは一目瞭然だった。押し入れもふとんがあるだけである。襖で続く隣の部屋は客間だったということだが、そこも同じようだものである。

淑子の説明では、もともとモノが少ない家だったと。経済的な理由もあったし、電気は来てはいたが、その供給量は小さく、照明以上のものは何も使えなかったと。だから電気製品を買う必要がそもそもなかったそうである。冷房はもちろんなく、暖房は火鉢が三つとこたつが一つだけ。テレビもないので、夜はごはんを食べておふろに入ったら、本を読むか寝るだけだったということだった。

「そうじゃ、本はどこにあるのじゃ。きっとその中じゃろう」

「そういえば父の部屋にあったはずの本棚もありませんね。どこかに動かしたんだわ」

「淑子さんの部屋じゃないんですか？　空き部屋になってたんでしょ」

「そうか。父がやりそうなことだわ。こっち」

淑子は一度土間に下り、反対側の障子を開けてその部屋に入った。

「あっ」

淑子は叫び声を上げた。

淑子の持った懐中電灯の光で浮かび上がった壁には、淑子の背中

にあった彫り物の下絵が貼られていたのである。

「ヨニ……。そうか、お父さんにとっては、淑子はヨニになったようなもんじゃった……」

「これも何かの役に立つかもしれませんね。祠へ持って行きましょう」

下絵を壁からはずすと淑子は、部屋中に懐中電灯を当てながら見回した。

「やっぱり家中の本はこの部屋に来てるんですね。ここは書斎にされたんだわ。ああ、これが父の書架です。こっちは私の。まあ懐かしい……って、こんなことしてる場合じゃなかったですね」

淑子は一冊手にとって中を見ようとしたが、それは止めた。だが、その本を先ほどの下絵と一緒に持った。一緒に持って帰るつもりなのだろう。

清玄が言った。

「これは、すぐに分かるというものでは無さそうだ。人を頼んで、本棚ごと寺に運ばせよう。そうでないと何を見落とすかわかったもんじゃないわい」

「そうですね。それがいいと思います」

確かにその書架はかなり大きなもので、中を丹念に調べるのはかなり日数がいるように思われた。

「よし、今日のところはこれで引き上げよう。まあ、状態が確認できたし、道もちゃんとしてることが分かったんだから上出来じゃ」

「あ、ちょっとだけ、済みません」

淑子は一番奥の本棚から小さなアルバムというより写真帳を何冊か取ってきた。

「写真ですか？」

「ええ、写真なんて滅多に撮ること無かったから、これぐらいしかないの。でも今となっては貴重な想い出だから……」

「そうですね。大事な品ですね。でも今までずっとここに？　どうして祠に持って行かなかったんですか？」

「私、奉納されたんですもの。そういうものは持って行くなって父に言われたの。自分はもう公の存在で私の存在じゃ無いんだからって」

「厳しいんですね」

「仕方なかったのよ。好きでしたことじゃない。だけどもし写真が手元にあったら、悲しくなってしょうがなかったかもね。何もなかったから平気でいられたのかも。私、今もこれをちゃんと見られるか自信ないもの」

そう言いながら淑子はそれを両腕でしっかりと抱え込んだ。

池

寺に戻ると淑子はすぐに陽子を連れて祠へと向かった。寺からの例の尾根づたいにいく獣道である。案内された道があまりにもひどい道なので、陽子はかなり驚いたようだ。それとともに、よくこんなところで淑子が一人で生活できたものだと感心していた。

清玄は一人寺に残った。住職はそうそう寺を留守にするわけにはいかないのである。

ようやく辿り着いた先にあった祠は陽子のイメージよりはかなり大きなものに見えた。建物はそう大きくはないが、高さがあることと、周囲を柵できれいに囲まれてることが威厳を作り出しているように見えた。

「こっち」

正面側にまわろうとした陽子を止めて裏側へ案内する。

「こっちが玄関なの」

と言われても事情を知らない陽子には納得はいかなかった。

下へ下りる石段で普通の民家の玄関先に辿り着いて、ようやく事情が飲み込めた。

淑子が唐突に言った。

「ねえ、汗いっぱいかいたでしょ。まずサウナに入らない？」

「サウナですか？　ここにそんなものがあるんですか？」

「そう。浩一さんも結構気に入っていたみたいよ」

浩一の名前が出ると、陽子は表情をやや暗くした。

「あら、気がつかなくてごめんなさい。あなたにはまだ辛かったのね」

「いいえ、いいんです。それにもっと聞きたいです。彼がここで過ごしたこと。だいたい、彼がここでの体験を匂わしたような話をするから、それに私興味を持って彼と付き合うようになったんですから……」

「まあ、そうだったの。……だとしたら、やっぱり」

「やっぱり？　何なんです？　やっぱりって」

「たぶん、あなたたちの出会いはヨニに仕組まれたことだったんでしょうね。ヨニは因果、要するに人の出会いを自由に操れる力があるっていう話を父から聞いたことがあるの」

「まあ、じゃあ、私も見込まれたから……」

「そういうことでしょう。だってあなたたちの話を聞いてたら、二人とも一目惚れなんかしてないって言うし、別れる時だって、愛してるかどうかわからないって言い方してたじゃない。仕組まれたのよ。ヨニに……」

「じゃあ、私にもヨニの声が聞こえるようになったりするのかしら」

「それはわからない。わたしも聞いたことないし。私なんか、身体を一番いいように使われたのに、ちっとも私自身には声をかけてもらえなくて、ホント失礼よね。挨拶ぐらいして欲しいものだわ」

淑子はそう言って笑った。陽子もつられて微笑んだ。

「さあ、こっちよ」

廊下をずんずんと進み、淑子は陽子をサウナ室へと導いた。

「まあ、立派なサウナじゃないですか。私家庭用のスチームサウナが置いてあるだけかと思っちゃった」

「しかも完全に天然なのよ。熱源は地熱だから」

「へえ、すごいですね」

そう言いながら、淑子はさっさと法衣を脱ぎ捨て、素裸になった。それを見て陽子も法衣を脱ぎ始めた。

「さあ、まずここで汗をかいて、それからあっちの池で水浴びするの」

そう言いながらサウナ室の方へ淑子は入っていった。

ようやく脱ぎ終えた陽子もすぐその後に続いた。

「私ね、ここで浩一さんの唇を奪ったの。どうしても我慢できなかったのよねぇ。あの時は。でも何でそんな気分になったのかしら」

ベンチに並んで座った淑子が突然そんなことを言い始めた。

「好きだったんじゃないんですか？」

「あの時は、まだそんな感情なかったわ。もちろん嫌いでもなかったけど。まるでこどもみたいに見えてたの。あの人、何も知らなくてね。人間のことを」

「人間？」

「そう。人と人とのつながりのこと。それをね、教えてあげたの。そしたら、みるみるうちに変わっていったわ。あんなの初めてだった。きっとこどもを育てる気分ってああいうものなんでしょうね」

「ああ、それじゃ、淑子さんは彼のお母さんだったんでしょう」

「まあ……。そうなの、それでキスしたくなったの。あれは愛する子供へのキスだったのね……。やーね、まだこどもも産んだことないのに」

「でも、あのレストランで、浩一さんが淑子さんを見る目は、恋人とか愛人を見る目とはどこか違ってました。何か懐かしいものを見ているような視線でしたよ。やっぱり彼にとって淑子さんはお母さんのように見えていたんでしょう」

「そう……。お母さんか……。でも陽子さんはどうしてそんなことを？」

「だって……、あの状況で若い女性が二人も現れたら、気にならない訳ないでしょう。だからすごく忙しかったです。淑子さん、知恵さんの様子と浩一さんの様子を同時に見なくちゃいけなくて。頭がパンクしそうでした。もうやめてって言いたかったぐらい……」

「そんなに浩一さんを独占したかったんだ……」

「はい。彼にも言いました。他の女に取られるぐらいなら私が刺し殺した方がマシだって……。でも彼を愛してるのかって言われても素直にそうだって言えなかった。やっぱり私の身体が彼を離したくなかったというのが本当だったんだと思います」

「今はどう？」

「彼と離れたせいか、前よりは収まりました。だけどまだ時折身体が疼きます」

「もう少しの我慢が必要よ。とにかく頑張って」

「はい」

「もう汗びっしょりね。そろそろ出ましょう」

淑子はサウナ室を出て池に続くドアを開けた。陽子もその後を追った。淑子がそのままざぶざぶと水の中へ進んでいった。

「まあ、地底にこんな池があるなんて。もし隠された秘境とでも紹介したら人間が殺到しますね。このサウナだけでも」

ドアのところで中を見回した陽子がそう声を上げた。

「まあ、そうなの。それは大変。私の楽しみがなくなっちゃうわ……。はっ」

先に水に入っていた淑子が、緊張したような声を上げた。

「どうしたんですか？」

「私の楽しみじゃなかった……。サウナに入るのは私の楽しみじゃなかったの。もともとは」

「？」

「私はここが嫌いだったの。普通の温泉が好きだったの。今思い出したわ。でも何でサウナ好きになったのかしら？　もしかして、奇蘭になったから……。そうよ、きっと奇蘭はサウナが楽しみだったんだわ。それで私もそういう身体に変わってしまったのね……。だとすると……。奇蘭はこれを私に伝えようとしたんだわ。でもなぜ？　陽子さん、早く入ってみて」

ドアのところで淑子の話を聞いていた陽子は恐る恐る水に足を入れた。

「ア」

が、足が水についたとたんにすぐ引っ込めた。

「冷たいけど馴れれば平気よ」

「そうじゃありません。熱いんです。この水は」

「何ですって？」

陽子の返事を聞いた淑子はすぐに陽子のところに戻った。

「こんなに冷たいのに。十五度ぐらいしかないのよ。この水は」

「でも熱いんです。私には」

「陽子さん、水に入ったことあるわよね。泳げるわよね」
「ええ、もちろん」
「だとすると、この水が熱く感じる理由はただ一つね。あなたの身体に入り込んでる夜叉浩一さんの力のせい。……陽子さん、ごめんなさいね」
言い終わると、淑子は陽子の両腕を強く掴んで、思い切りの力で水に向かって陽子を引きずりこんだ。
バシャーン
水に倒れ込んだ陽子が水柱を立てた。
「ア、アア、アッチ、アツイ、アツイ、アアアア、助けて……、アツイ……」
顔を上げ、ようやく立ち上がると陽子は慌てて自ら上がろうとする、だが、この池で完全に水から上がれる場所は、淑子のいる出入り口一カ所しかない。淑子は勢いよく走り込み、上に上がろうとする陽子を再び両腕で突き落とした。
バシャーン
今度は背中から水に落ちた。
「陽子さん、早く元に戻って、お願いだから」
淑子はそう口の中で呟いた。
「ウォー」
陽子は一度立ち上がり大きく叫んだ。だが、そのあとすぐに陽子の全身がなぜか水に沈み込んでいった。それはまるで池の底が急に深くなったかのような動きだった。
頭まで完全に見えなくなった陽子を見て、淑子も再び水に入った。
水中の陽子の頭を手でつかむと水面まで引き上げた。
「陽子さん、しっかりして！　陽子さん！」
強く揺さぶられた陽子は、ようやく少し、目を開いた。
「あ、淑子さん……」
「良かった。気がついてくれて。ね、水は熱くないでしょ？」
「え、ええ、すごく冷たいです。気持ちいいぐらい……」

「そう、もう大丈夫ね。ね、あなた立てる？」
「は、はい」
陽子はふらふらと立ち上がった。
「歩けるかしら、一度池を出ましょう」
「はい。あら、どうしたのかしら……」
「なにかあるの？」
「え、ええ、急に身体が軽くなった感じがするんです」
「そう、良かった」
「良かったって？」
「おめでとう、陽子さん。あなた浩一さんの呪縛から抜けたのよ」
「え、そうなんですか？」
「絶対間違いないわ。もういつでも山を下りて大丈夫だから。安心なさい」
二人の女は池から上がりと、更衣室のベンチに座った。
「どうもありがとうございます。でも何で池が」
「私にもよくわからないけど、こういうことじゃないかしら。この池はもともとご神体である私とセットだったってことは、ヨニゆかりの池なのよ。なにしろいつも私が使ってたんだから。ところがあなたの身体に送り込まれた夜叉浩一の力というのは、ヨニとはライバルのサラという神様に由来する力でしょ。だから一種の拒否反応を起したんじゃないのかしら。あなたの身体が」
「それで水を熱いお湯のように感じた……。最後にはその力そのものが消されてしまった……」
「たぶんね。いずれにしても今晩あなたが身体の疼きを全然感じないようだったら、もう絶対大丈夫だと思うけど」
「それはもう大丈夫だと思います」
「どうして？」
「私の心の中で、浩一さんが消えちゃってます。さっきから何か物足りない感じがあってどうしたんだろうって考えたら、彼への想いみたいなものがすっかり無くなってるんです」

「そう、それなら良かったわ。ねえ、もう一回ちゃんとサウナ入り直さない？　私身体が冷え切っちゃったし」

「ええ、是非。今度は最初から気持ちよく池に入りたいし」

「それもそうね。ほほほほ」

淑子と陽子は再びサウナ室へ入った。

別離

仁科陽子と啓作、知恵の三人の登場の仕方は、何と言っても浩一の会社の中での立場を悪くした。

田中みさ恵はもともと社内放送局との異名を持つ人物である。そんな人間の前で明らかに何らかの葛藤がありそうな人間達が一同に会してしまったのだ。そんなオイシイネタを彼女が見逃すはずはなかった。

こってりと推測がてんこ盛りされた噂が瞬く間に社内中に広まった。

が、当然のことながら、当の浩一は全くそんなことに関心はもてない。本人がおとなしくしているという事態は、図に乗ってもっと噂を広めようとする輩を増やす一方で、その信憑性を疑う人間の数をも増やした。ただ、どちらにしても浩一が注目される事態であることには変わりなく、また以前のように浩一は浮き上がった存在に戻りつつあった。

浩一は周囲の思惑とは関係なく、陽子についての知らせをただ待っていた。そして自分が夜叉であるということの意味を考えていた。

従って今の浩一に仕事に向かうこと、即ち製図板に向かうことは、自分のことを忘れられる貴重な時間でもあった。だから、そういう姿の浩一は以前のように言葉をかけにくい、すさまじく重い雰囲気を漂わせていたのである。

こうなると噂に舞い上がっていた人たちも白けざるをえなくなり、結果的に田中みさ恵は非常にバツの悪い思いをすることになった。

「おい、一回謝ったらどうだ」

と同僚からも言われる始末である。

「何で私が謝らなくちゃいけないのよ。私は何もしてないでしょ」

「お前が原因でなかったら、何で龍造寺は、あんなに暗くなったんだ。せっかくまともに人と話ができるようになったと思ったのに。お前があることないこと言いふらすから、あいつ、人間不信になったんだぜ」

「ちょっとお、吉田さん。いい加減にしてよ」

とプイとふくれっ面になった田中は、そう反論しつつも自分に非があることを認めないわけにもいかず、頭の片隅では浩一にどうやって謝ろうかという考えをもすこしずつ育てることになった。が、その田中にも浩一に話しかける勇気はなかった。それほど浩一の周りの空気は厳しいものだったのである。

結局、田中は話しかけるきっかけを待つだけという状態になった。本当は仲の良い、そして社内でも評判の美人、板橋澄江に頼んで、仲立ちをしてもらおうかとも思ったのだが、自分が撒き散らした噂の中身が悪すぎた。

田中によれば、身重になった彼女をふって、新しい彼女とデートしようとしていたところに、その身重になった彼女とその実兄が尋ねてきたという話になっていたのである。今更他の女子社員にあれはウソだったとも言えなかった。

そんなうつうつとしていた午後、いつものように受付に座る田中の目に、赤いＢＭＷが滑り込んできた。

田中は目を大きく見開いた。あのＢＭＷだったからである。そして両方のドアが同時に開き、二人の女がそこに下り立った。

一人はこの間現れた仁科陽子と名乗った女性である。だが、もう一人はまだ見たことのない女性だった。若いが尼さんの着るような和服姿である。仁科はしゃれたツーピースのスーツなので、かなり奇妙な取り合わせの二人組であった。

田中は来客が玄関に入るのも待たず、すぐに浩一へのインターコムを繋いだ。

「はい、龍造寺です」

「受付です。ただいま仁科陽子さんとお連れ様がお見えです」

「は、はい、わかりました。すぐ行きます」

田中はこの機会に詫びの言葉を挟むつもりだったのだが、浩一の反応は異常に早く、それを言えるチャンスはなかった。玄関の中に二人の女性が入ってくるのと、浩一がロビーに現れたのはほぼ同時

だった。

「陽子さん、それに淑子さんも。ここに来られたということは、もうよろしいんですか？」

浩一は二人をロビーの片隅に置いてあるソファーセットに案内しながら話しかけた。

田中は話の中身に強い好奇心を感じつつも、この間のことで懲りたため、あえて聞き耳は立てないようにした。

「それが浩一さんが奇蘭から伝えられたことの意味がやっと分かって、それですぐ陽子さんは回復されたんです……」

と淑子が説明した。

「あの池にそんな力が……」

「私もびっくりでした」

「本当にありがとうございます。これで僕も安心できます」

「待って、浩一さん。それはちょっと違うかもしれないから。ね、陽子さん」

「ええ、実は今日こちらにお邪魔させていただいたのは、ご報告とお別れをちゃんと言うつもりで……」

「そうですか。……いやそれがいいと僕も思います。あなたに僕は似合わないし……」

「それに浩一さんには私よりもずっと相応しい女性がいらっしゃいますものね。ただ、私の身体が元に戻ったことは嬉しいのですけど、浩一さんのことが……」

「申し訳ありません。清玄がいろいろと父の日記を調べたり、大学の知人などに手紙で相談したりしてますが、まだこれといった妙案が見つからなくて……」

「いや、僕のことなんかいいです。でも本当に陽子さんが元に戻って良かった。陽子さんにも僕はいろいろ教わりました。本当にありがとうございます。どうかこれに懲りず、いい方を見つけて幸せな人生を歩いてください」

「まあ、やっと、浩一さんをふってやったと思ったのに、お礼を

言われるだなんて……。どこまでも女を満足させてくれないのね。浩一さんは」

「あ、そうか、どうもすみません」

三人は声を上げて笑った。

二人が帰った時、妙に機嫌の良さそうな浩一が残っていて、田中はまたまた虚をつかれて謝ることができなかった。

「田中さん、どうもありがとう」

「え、何が」

「いや、すぐインターコムで僕を呼んでくれたこと。感謝してるから」

そう言い捨ててすぐに設計室へ戻ったのである。そしてまだこのドラマは終わらなかった。

今度は設計室から吉田が出てきたのである。

「おい、田中。お前なんか龍造寺に謝ったか何かしたのか」

「え、どうしてです？」

「龍造寺のやつ、気味の悪いぐらい機嫌が良くて、あの重い空気が全部飛んでるんだ。さっき玄関にあいつ行っただろう。いったい何があった？」

「さあ、私は何も見てませんし、聞いてもいませんし、存じません。そんなことは」

「チェ、ケチ」

吉田は設計室に戻った。

すると今度は浩一が吉田のところに来た。

「はい、コレ。お返しします」

陽子の小説が掲載されていた雑誌である。

「うん、どうしてコレを？」

「約束したでしょう。僕、彼女にふられましたから」

「ふられて、何でそんなにふうに嬉しそうな顔ができるんだ？お前。ショックが大きすぎて頭おかしくなってないか？」

「まあ、ちょっと異常であることは間違いないんですけど。たぶ

んまだ大丈夫だと思います。どうもありがとうございました」

と酔っているようにも見える機嫌の良さで浩一は答えた。

「さあ、仕事、仕事っと」

上機嫌で製図板に向かう浩一の姿を見て、吉田は首を捻るばかりだった。

終章

夜叉の正体

「おーい、伊集院、電話だ。お客さんからだぞー」

営業所の裏で納車前の新車の点検と清掃をしていた啓作は、赤城孝人の呼ぶ声に立ち上がった。

―誰だろう、こんな時間に……

月末は、月内登録に間に合わず、登録されなければ、販売したとみなされず、結果としてその月の自分の実績にカウントされないという理由で多くのセールスはお客への攻勢にあまり出ない。見込みのありそうな客は来月分実績のストックとするのだ。従って、その月に販売した分の納車などは月末近くに自動的に集中させることになる。だから盛り上がった商談の少ないこの時期にお客さんからの電話はそれほど多くはない。もちろん契約終了納車前のお客さんならいろいろあるが、そういうことは啓作ほど要領のいいセールスになればほとんど関係がなかった。要領が悪いセールスほど、自分で自分を忙しくさせてしまうものなのである。

「啓作か？　わしじゃ」

「なんだ、誰かと思えば清玄和尚。そういえば、陽子さんを無事元に戻したそうですね。浩一からお礼を言われました。僕は何もしなかったのに。僕もお礼を言うべき立場なんでしょうね。どうもありがとうございます」

「あれは淑子の仕事じゃ、わしは何もしとらん。淑子が一人で何もかも解決してしもうた。わしの出る幕は無かった。だからお礼を言われる筋合いはない」

「でも清玄さんが奥さんを働かせてくれたからの結果じゃないですか。そんな他人行儀にしたら、かえって変でしょう」

「そうか？　おぬしが言うのじゃったら、そうなのだろう。わしは俗世でのやりとりが苦手でな。まあそんなことはどうでもいい。啓作、ちと手伝ってくれ」

「それは他ならぬ清玄和尚の頼みなら。何をすればいいんです？」

「明日、東京からうちの本山の方が一人宇都宮に来られるんじゃ。彼はこちらは初めてなんで、わしが駅に迎えに行くつもりじゃったんじゃが、生憎、葬式が入ってしまって、淑子もわしも寺を離れられんのじゃ。寺関係の人間もそちらに駆り出さねばならんし、回す人手がない。それと、彼にここに来てもらったのは、あの男の問題絡みなんじゃよ」

「浩一……」

「そうじゃ。はっきり言うと、淑子の父親の残した日記などにはヨニのことならいろいろと書いてあったが、サラの話は何も無かったんじゃ。それでそういう鬼道を知っておる者はいないかといろいろ探した結果見つけたのが彼でな。だからわしも一度会ったことがあるというだけでそれほどはよく知らん。ただ書いたものを見ると相当いろいろな研究をされておる。それでお出で頂いたんじゃよ」

「じゃあ、私がその人を駅に迎えに行って、そちらへお連れすればいいんですね」

「もう一人頼む。あの男も。で、明日、あさってと寺に泊まりということでな」

「なるほど。わかりました。そういうことなら、最優先でやらせてもらいます。それで、到着は何時で、どういうお名前……」

翌日、啓作は宇都宮駅でその人物、岩下正道と会った。こういう場合、お坊さんという人種は便利である。かなりの人が居たが、袈裟姿の岩下を見つけることは簡単だった。

「岩下さんですね。私、霊山清玄さんから頼まれて代理でお迎えにあがりました、伊集院啓作と申します」

「あ、これはどうも。私が岩下です。わざわざお迎えありがとうございます」

岩下は清玄よりはだいぶ若く、また、体格もそれほど大きくなく、やせ形だった。見た目の印象も清玄のような荒法師のようなイメージはどこにもなく、眼鏡をかけたほそおもての面構えは、学者のよ

うに見えた。声もその印象通りの静かにゆっくりと語る口調である。

坊さんでもいろいろなんだな、と啓作は内心思いながら、岩下の手荷物を持ってクルマへと案内した。

「それで、あなたが、夜叉さんなんですか？」

クルマをスタートさせて暫くすると黙っていた岩下が急に訊いてきた。

「いえ、僕じゃあ、ありません。それは僕の友達です。これから彼を途中で乗せて、そのまま清玄さんのところにお連れしますから……」

「ああ、それはどうも失礼しました」

「あの、夜叉って本当にいるものなんです？」

「だって、現にあなたのお友達は夜叉なんでしょう？　私はそれを疑う根拠を何も持ってません」

「はああ、まあ、そうですね。確かに」

どうも学者との話は苦手だと啓作は内心思った。それと同時に本当にこんなやつに浩一をどうにかできるのだろうかという不安も持った。

栃木中央技研の社屋前の歩道に浩一は立っていた。ほぼ時間通りに移動できていた。

「初めまして、龍造寺浩一と申します」

クルマを止めたところで、歩道から助手席の岩下に向かって浩一が挨拶をした。

「あなたが、夜叉さんですか？　岩下です」

「は、はい。一応夜叉らしいです。あんまり自覚はありませんけど」

「夜叉の自覚ってどういうものなのでしょうね。いやあ実に興味深い」

そんな冗談のような受け答えをしながらも、岩下の目は先ほどまでの柔和な目から一転して、鋭い観察眼に変わっていた。が、浩一がクルマに乗り込むとそれもすぐに消えた。

正円寺までの途中、付近の紅葉などを話題にするのどかなドライブが続いた。夕暮れの中、斜光線になった日が紅葉を見事に浮き上がらせ、眩しいほどに光り輝いた。

「いや、これは見事だ。もし夜叉の話が無かったにしても、来た甲斐はあった」

と岩下は少々、啓作たちをがっかりさせることを呟いたりした。

「が、龍造寺さん。別に夜叉になったから困ったこともないのじゃろう」

「は、はあ。私自身はそれほどはありませんが……」

啓作が口を挟んだ。

「彼と一緒にいる女性がひどいことになるのです」

「ほお、その女性というのは恋人かな？　それともフィアンセ、いや、奥様かな」

「いや、そういう決まった言葉に当たる女性ではないのですが……」

「そりゃあ、いい加減に女性と付き合えばいろいろたたりがあるのは世の常でしょう」

「いやまあ、それはそうでしょうけど……」

何となく話がかみ合わないのでさすがの啓作も黙ってしまった。

―　いったいこのおっさん、何が言いたいんだ？

啓作の心の中でその不信感は徐々に増大していった。

クルマはようやく山門を通り抜けた。

寺に着くと、なるほどさきほどまで葬式をやっていた名残があちこちに残っていた。いつになく、人も多く、後ろの駐車場にも今日はクルマが沢山入っている。

「これは文字通りの修羅場だな」

という坊主が口にしていいのか疑問に思うような言葉を岩下は洩らし、それを聞き逃さなかった啓作の心証をまた悪くした。

いつもなら玄関で大声をあげて清玄を呼ぶのだが、この有様ではそんなことも言ってられないだろうと、啓作は岩下を案内して、勝

手に上がり込んだ。そして大広間に出てみると清玄も淑子もそこにいたが、そこには弔問客がまだ残っており、話ができる状態ではなかった。

すでに日は暮れているので、もう半時もすれば、かなりの人が減るだろうという感じではあったのだが。

淑子が啓作に気がつき、立ち上がって、三人を次の間に導いた。

「岩下さん、清玄の妻の淑子でございます。せっかくおいで頂いたのに、間が悪くて申し訳ありません」

「いえいえ、寺に葬式はつきものですから、どうかお気になさらずに」

「すぐ清玄も来ると思いますので、それまでこちらでおくつろぎになってくださいまし」

そう言うと、淑子は再び立ち上がった。

襖の向こうへ淑子が消えると岩下はポツリと言った。

「なるほど、ヨニに見込まれそうな女性だな。本当に女性らしい女性だ」

その言葉に啓作と浩一は互いに顔を見合わせた。

「ヨニには女性の好みがあるんですか？」

「無い方が不思議だと思わない？　君たちは神とか仏を人間とは全く別のものと考えてるようだが、たぶんそれは西洋流の考え方に馴れてるせいだ。日本では人間にもっと近い存在なんだよ。まあ、この辺は、一神教と多神教の世界観の差と言ってもいいかもしれないけどね。だから特別扱いしたらかえってその本質を見失う」

「はあ……、なるほど……」

と言ったものの、浩一にはその後の言葉は続かなかった。そういうことがあったとしても、それがどういうことを意味するのかはさっぱり分からなかったからである。

「岩下さんも住職さんなんですか？」

今度は啓作が尋ねた。

「いや、寺を任されてはいない。本部派遣の教導師という仕事を

してるんだ」

岩下は二人とも自分よりも若いことが分かって、かなり打ち解けた話し方に変わった。先ほどまで大学の先生だったのが、今は高校の教師のように見える。

「きょうどうしって何です」

「各地の傘下寺院住職を教育する係」

「なるほど。意外としっかりした組織なんですね」

「それは君の認識不足だな。言い方が違うよ。組織という概念は宗教から始まったんだ。だから宗教を真似たのが、政府であり会社であり軍隊なんだ」

「はあ、そうなんですか。知らなかった」

「ついでに言えば、宗教の組織というのは、特に多神教の場合は、神々の間の関係に模して作るのが普通なんでね。その意味で言えば、やっぱり神々の間の関係が組織の始まりってことになるのかな」

「一つ気になるんですけど、あの邪宗のご神体だった淑子さんが清玄さんの奥さんになって、そのそちらのご本部の方で、何か問題にされたりしないんでしょうか？　教導師さんて住職さんのお目付役みたいなこともするんでしょう？」

「あはははは、君はずいぶんと気が回る御仁のようだ。その心配は無用だよ。いや、結婚前の、こちらの住職の素行なら問題にされる危険性は確かにあったけどね」

「いいんですか、邪宗でも」

「だって本人が邪宗に改宗したって話はどこにもないだろう。それに変な教えを広めたわけでもない。それに君たちは邪宗邪宗って言うけど、そんなものは誰かの都合で作られた言い方だからね。仮にも神と崇める人がいる限り、そんなに簡単に使っていい言葉じゃない。そういうところの度量が広いのが仏教のいいところなのさ。一神教みたいに狭いことを言わない」

「でも、邪教って呼んで破門したのは仏教だって」

「大方真宗あたりだろう。あそこにかかれば真宗以外全部邪教ぐ

らい言いかねない人物はいるから。何しろ気位が高い」

「はあ、気位の問題ですか」

「だが、一神教となるとそんな気位の問題じゃ済まない。それは屋台骨の問題だから。今、イスラムとキリスト、ユダヤが、過激派以外はおとなしく共存共栄していられるようになった論理が何か君たち知ってるかい？」

啓作も、浩一も首を横に振った。

「彼らは皆同じ神様を信じてるって合意があるからだよ」

「同じ神様って？」

「つまり、聞いた神の言葉は違うけど、同じ神様だって相互に認め合ったからさ。キリスト教で神と呼ぶ存在、ユダヤ教で神と呼ぶ存在、イスラム教で神と呼ぶ存在は同じものだってね。こうしておけば、どれが正当な神かって争わなくて済むだろう。だからこういう決着が図られた。窮屈な世界なんだ、一神教は」

「まあそうですね」

「何しろあちらで神と言えば人間と対峙して契約する神だからね。初めから人間と対等なものじゃない。ところが多神教で八百万の神々を認めた日本の神というのはそういう存在じゃない。人間の存在が拡大したようなものなんだ」

「人間の拡大？」

「そうだよ。死んだ人が神になり、山が神になり、川が神になる。人間が人間らしく生活するために必要なものが皆、神と崇められる……。そしてこれが重要なんだが、鬼も神様なんだ」

「え、鬼も？」

「そう、人間にとって都合の悪いことをする神を鬼と呼んだって考えればいいかな。龍造寺君が呼ばれてる夜叉という言葉は、もともとはサンスクリットでヤークシーニーと呼ばれた神のこと。これが転じて薬師とか夜叉とか、薬叉とかの言葉を生んだ。この言葉はほとんど鬼と同じ意味でも使われる。だから鬼も神様」

「じゃ、お前、神様なんだ」

啓作は浩一の肩を叩いて笑った。
「まあそういうことだ」
岩下も微笑みながら浩一を見た。
その時、襖が開き、清玄と淑子が入ってきた。淑子はお茶の乗った盆を手で支えていた。
茶が配られ、一同が改めて座を正し、礼をした。
「このたびは遠路はるばる……」
清玄がこう言いかけると、岩下がそれを遮った。
「いや清玄さん、それは止めておきましょう。今日は教導師として来た訳ではないし、彼らのような外部の人間もいるし、打ち解けた雰囲気の方が、話が早い」
「そう言われるとこちらも助かる。特に今日は葬式で朝から決まり文句の繰り返しだったから、わっはははは」
清玄の笑いで座が元の和やかな雰囲気に戻った。
食事をしながら話は続いていた。
「それでサラと呼ばれている神のことは？」
清玄が岩下に質問した。
「いや、ほとんど何も。言葉だけで神を断定するのは極めて難しい。せめて絵とか像とか、どういう活躍をしたとかそんな話があればまだ見当がつくのですが」
「八百万の神の国だからなぁ、日本は。土着信仰まで入れたらいったい何柱の神様がいるのか見当もつかんなあ。確かに。いやそれどころか、どの神とどの神が同じ神なのか特定するのも難しかろう」
「仰せのとおり」
「そうなると彼を普通の生活に戻すことは不可能ということになるのか」
「いや不可能なんてことはたぶんありませんよ」
「どうしてじゃ？　この男は夜叉としての能力があるんじゃぞ。現に女が一人狂いかかった。このままではこの男は結婚もまともに

できまい。妻となったものが狂ってしまうでな」

「それは狂わなければならないものを相手にさせたからではないでしょうか」

「な、何、どういう意味じゃ」

「今も彼らに話をしていた途中ですが、東洋、とくに日本の神については、人間世界を反映しているのが神の世界です。だから、神も仏も、そして夜叉や鬼も、すべて見るものの視点に左右されます。もし彼の能力がそういう現象を引き起こすのだとすれば、それはそういうものがそもそもそこにあったからだという言い方も出来る。つけこむ隙があれば神は鬼にもなる。無ければ神は神のままです。崇らねばならないときに崇る、それが日本の神々」

「それでは、あの女性に問題があったと？」

「そういう言い方は不適切でしょう。この場合問題になるのは、彼の視点から彼女がどう見えていたかです。彼女を好ましくない性質、疎ましい性質と感じていたから、夜叉の能力が発揮された。もし彼が何もそういうものを感じない女性であれば、そういうことは絶対に無かった、と私は思います」

「つまりはこの男の度量か……」

「そういうとらえ方もありえるし、あるいは女性の選び方の問題であるとも言える」

「浩一、お前、陽子さんに惚れて付き合ってたんじゃなかったのか？」

清玄と岩下の会話を聞いていた啓作が浩一に尋ねた。

「いや、……そうじゃない。俺がナンパされたようなもんだ……」

「そうか。だが、それだってつきあってれば、好意が生まれて愛が生まれるもんだろうが。普通なら」

「いや、そんな時間は無かった。何しろナンパされた翌日にホテルまで行ったんだ」

「なるほどのう。夜叉が現われてもおかしくない状態だったのか……。しかし、彼女も大胆な女性じゃのう」

「僕のせいらしいです。彼女言ってました。他の男だったら絶対こんなことしてなかったって。僕があまりにも世間知らずで、こんなことをしても自分が絶対に淫乱に見られたりする心配がないからホテルに誘ったって」

「これまた、微妙な話じゃな」

「しかし、だとすれば、彼の場合、夜叉が現われる確率はかなり高そうですな。何しろ清廉潔白すぎるというか純粋過ぎることが相手の女性の隙を誘うわけだから。彼の目で、相手の女性が祟るにふさわしい相手に見えたら、すぐ夜叉が出動しそうだ。だが、少々気になることもある……」

「何か、ご不審な点でも？」

「浩一君、君はその女性が祟られた姿を見て何を感じた？」

岩下は突然浩一に質問を向けた。

「何をって……。とにかくびっくりして、もうどうしたらいいかわからなくなって……」

「そうか……」

岩下は低く呟いた。

「何か？」

清玄はその様子に不安を感じ、再び尋ねた。

「気になることと言えばそうなのですが……。いや、まだ私にもよく分からんことです。もう少し、私に考えさせて下さい。辻褄の合う話にまとめられれば、いずれお話しします。だが、いずれにしても彼が夜叉の能力を十分に制御できないと見て間違いはないのでしょうね。彼自身にも、いつ自分の夜叉としての能力が現れるのかを察知できないと……」

座は沈黙に包まれた。

誰の脳裏にも、どうしようもないという諦めの気持ちが芽生えていた。ようやくその空気を押しのけるように清玄が口を開いた。

「のう、龍造寺さんや。ぬし、真面目に仏門に帰依することを考えてみんか。ぬしのその性質なら、間違いなく住職ぐらいにはなれ

る。それだけの資質があるとわしは思うとる。じゃから一度真剣に考えてみたらどうじゃ」

「はあ。それじゃ考えてみます」

「そうか、わかった。わしも全力でぬしを支えるから……」

が、岩下はあまりいい顔をせずこう言った。

「仏門入りは世を救う志を持つものに開かれるもの。少々動機が不純であるように思いますが……」

「あ、いや、それは、彼がこれから考えることじゃ。もちろん、そういう意志を持ってもらわねば困る」

「そういうことであれば……」

啓作と淑子はそのやりとりをただ黙って聞くだけだった。

夜叉の思いやり

「ねえ、あなた、本気で浩一さんをお坊さんにするつもりなの？」

淑子が横で寝ている清玄に声を掛けた。

「仕方があるまい。じゃが、あくまでも本人が望めばだ」

「そうね……。それなら仕方がないわ。……でもなんで奇蘭はあなたに祟らなかったのかしら？　今日の話でいけば、あなたが私を犯した時なんて、一番祟られそうなものなのに」

「祟られたから、お前がここに今居るんじゃないか」

「んまあ、私は祟りだって言いたいわけね。見てらっしゃい、元夜叉の力を見せてあげるから……」

淑子はむっくりと起きあがると長襦袢を脱ぎ素裸になった。

「お、おい、淑子、何をするつもりだ？」

「決まってるじゃない。あなたの精を徹底的にしゃぶりつくすのよ」

「おい、わしゃ、お前ほど若くないんじゃから、少しは手加減せい」

「いやよ。若いお嫁さんをもらったら、それぐらい覚悟するものなの。もう明日の朝まで寝かさないからそのつもりでいなさいよ」

淑子は、清玄の足下にうずくまると清玄の股間に手を這わし、マッサージを始めた。あの祠を守ってきた夜叉でもあった淑子の性技が、並のものでないことは清玄もよく知っていた。

「淑子、わしが悪かった。さっきの言葉は撤回するから、あんまりやりすぎんでくれ」

「もう遅いわ。それにあなたこども欲しいんでしょ。これぐらい頑張らないと……。じゃ、もっと気持ちよくなってもらいますから……」

清玄のペニスが淑子にいいようにおもちゃにされ、手でしごかれ、口で遊ばれるうちに清玄は、早くも絶頂を迎えそうになった。

「ま～だ、だめ。もっともっと切なくなってからよぉ」

淑子は例の「女の気持ちを味合わせる技」を使って清玄をいたぶ

った。射精直前までいろいろ刺激を加えながら、一向に頂上を極めさせず、射精もさせないあの技である。実は淑子は最近、気づいたことがあった。それは夫清玄が、実はマゾ嗜好の持ち主だということだった。つまらないことがきっかけで、いつもと違い淑子が怒りを露わにした声を上げた時に、清玄の表情がこどものように変わってしまったのだ。それでわかった。清玄には隠された幼児性があり、それは淑子が強い態度に出れば出るほど、表に引き出されてくるのである。それは僧侶という、自分よりも年上の人物に対してさえも、年上の大人として振る舞わなければならない職業を選んだために、抑えつけたことでかえって内心に蓄積されていた幼児的母親獲得願望が生み出したものだったようだ。清玄が女好きだったのは、エロ好きというよりもそこで蓄積されたものを吐き出す先を求めた母親探しだったのだと、淑子は夫を理解した。淑子は祠での経験で、男を見る目は肥えていたのである。以来、二人のセックスは本格的なものではないにしても、淑子が責め役のＳＭプレイのように変貌しつつあった。また、年の少々離れたこの夫婦の場合、そういう要素が無ければ、長い付き合いを全うできないだろうと清玄が考えているように思える節もあった。

「淑子、もう勘弁してくれ」

「何を言ってるの。全然ダメよ、こんなんじゃ」

淑子は一度立ち上がると、今度は、身体の向きを変えて、清玄の顔の上に自分の大きな尻を落とした。

「うふふふふ。ほら、奥様にちゃんとサービスしなさい。それが夫の義務でしょ。ほら、早く。私が満足しないと寝られないわよ」

清玄は手を淑子の尻にまわし、愛撫しながら、舌を淑子の亀裂に走らせた。

「ウッウウ……、ほら、もっとちゃんと……」

そう言いながら、淑子は先ほど自分が脱いだ襦袢に使っていた細紐の一本を拾い上げると、清玄のペニスの根本に巻き付け始めた。

「ほうら、こうしたら、男の人は簡単に終われないのよね。あな

た、とことん頑張るのよ」

そう言葉をかけると根本を縛られたペニスを口に含み、先端をしゃぶりながら、全体を両手で激しく上下にしごき始めた。

清玄は、混乱していた。快感はとうの昔に頂点に達しているが射精が出来ないことが、同時に激しい苦痛も呼んでいたのである。

「としこ……もう……ゆるせ……」

尻の下の口が弱々しく言った。

「そうね、そろそろ、次の段階に進んでもいいかもね。よいしょっと」

淑子はまた立ち上がり、向き直って今度は尻をペニスの上に静かに下ろした。縛られたペニスが淑子に咥え込まれた。ペニスの根本を縛った細紐は淑子のこぶしに巻き付けられていた。

「ああ、気持ちいいわあ、ああ、あああ、ああ、ああ」

淑子は腰を上下前後に動かし、それとともに、時折細紐を強く引いたり離したりを繰り返した。

清玄はもう快感と苦痛はさらに高められていった。

フーフーと大きく息を続ける清玄に向かって淑子が言った。いや、命じた。

「わたしのおっぱいを揉みなさい。早く」

そう言ってこぶしを振って細紐を強く一回引っ張る。

清玄は両腕を淑子のおっぱいにかけてゆっくりと揉み始めた。

「そうそう、それじゃ、今度は、乳首を舐めて、さあ早く」

また淑子のこぶしが一回振られ淑子の上半身が清玄の上に覆い被さった。

清玄は夢中になって、淑子の乳首に吸い付き、それを吸い上げた。

「ああ、いいわああ、もっともっと吸って」

淑子は清玄の身体の上で激しく身体を揺さぶった。

本当ならば清玄にはとうの昔に、射精を迎えているはずだが、淑子の巻いた細紐のおかげで、それはできない。

「ウウウウウッ」

清玄はうめき声を上げた。
それを聞いた淑子は清玄の顔を覗き込んだ。
案の定、表情がこどもになっていた。
「ぼうや、よく頑張ったわね。それじゃいかしてあげるわ」
根本で縛ったちょう結びを指でほどき、細紐をペニスからはずした。
「かはっ」
清玄はそう声を一つ発すると、すぐに淑子の中へ精子を放出し始めた。たまりに溜まった精子の勢いはかなりあり、それは淑子の子宮口をたたき、淑子にも絶頂の感覚をもたらした。
「あああああ、いいいいぃぃぃ」
淑子も清玄の身体の上で喉を反らせた。
淑子は清玄の上に倒れ込み、しばらくその状態を続けた。
「あなた、今のとってもよかったわよ。さあ、一休みしたら、次行くからね」
「おい、淑子、勘弁してくれ」
「だ〜め。こんなのまだ序の口なんだから。さ〜あ、いい子だから、おとなしく夜叉の餌食になりなさい」
淑子は一度清玄の身体から離れ、再び先ほどと同じように清玄の顔の上に座り直し、再び清玄のペニスを手にとってマッサージを始めた。
清玄にとって、もはやそこに快楽はどこにも無かった。ずきんずきんという衝撃的な刺激だけが頭を襲い、意識が遠のいていった。
— やはり祟りじゃ
消えゆく淵でそんな考えがぽっかり浮かんだ。
淑子の執拗な責めで、清玄はもう粉も出ない状態になりようやく解放された。ペニスから感覚が消えていた。淑子が触っているのかどうかもわからなくなっていた。実のところは、清玄のペニスから淑子は手を離してはいなかった。
今、淑子は清玄に身体をぴたりとつけたまま、すぐ横でようやく

寝入っていた。

清玄はくたくたではあったが眠ってはいなかった。若いものほど眠りに飢えてはいなかった。その淑子の寝顔を見た。

さきほどまで自分を激しく責めていた女には見えない、あどけない、そして安心しきった表情をしていた。無性に愛しいという気持ちがある一方で、自分の体力と年齢を考えると、本当に淑子を妻にしたことが彼女にとって幸せだったのか考えざるを得なかった。自分の身体がもつうちはできるだけ淑子の好きにさせてやろうと思うのだった。そんな気持ちから、淑子の顔に手を乗せた。

「あなた、まだ起きていらしたの」

淑子も寝てはいなかったようだ。

「すまん、起こしてしまったか」

「いえ、まだ寝てませんでした……。ありがとう」

「何がじゃ」

「私の好きにさせてくれて。きっとあなたのお年からしたら辛いのでしょうけど」

「いや、構わん。いつまでも相手ができるかわからんし。せいぜい楽しめるうちに楽しんでおけ……。それにわしも楽しい。お前の喜ぶ姿を見るのは」

「まあ、強がり言っちゃって……。ここは大丈夫？」

淑子はペニスをまた強く握った。

「うん、まあ何とかもっとる。だが、もう少し大事にしてくれるとありがたい」

「はいはい。私にとっても大切なものですから。以後はもっと大事に扱いましょう」

「のう、淑子。わしは先ほどお前の寝顔を見ていて思ったのじゃが、お前ならもしかして浩一と添い遂げられたのではなかったのだろうか。お前は、確かに仏教から見れば汚れたという言い方になるかもしれんが、夜叉の目では純粋そのものだとわしは思うのじゃが」

「何を言い出すかと思えば……。私を離縁されるおつもりで？」

「いや、そんなつもりはない。じゃが、一つだけ気になったのは、もしかしたら、あの時、あの男とお前を一緒にするのが天の意志だったのではないかとふと思ってな。ヨニの意志とは言わんが、何となくお前とあの男の間の絆のようなものを感じてならんのじゃ」

「たぶん、半分当たり。半分はずれですね」

「なんじゃ、それは？」

「私じゃないのです。彼との絆の相手は。奇蘭、もしかしたら、ヨニが、彼に惚れてるような気がしてます。私の感じでは」

「何じゃと！　そうか、そういうことがあってもおかしくはないのう。夜叉の力が及ぶ範囲は人に止まらずか」

「いえ、そういうことではないと思います。何というか、彼は、浩一さんは、たぶんお釈迦様に近いというか、自分を他人のように見ているところがあって、それが他の人間からすると彼を純粋に見せているように思えるのです。おそらくヨニや奇蘭からも。奇蘭であった時の記憶を辿ると彼についてはそんな印象のことばかりが思い出されるのです」

「じゃあ、あの男のつれ合いは人間では無理なのか」

「あなた、この間の陽子さんの事件の時に啓作さんが連れてきた知恵さんのこと覚えてます？」

「ああ、覚えとる。啓作好みのおなごじゃった」

「私、理由は分からないんですけど、彼女は浩一さんの分身のような気がしてならないんです」

「分身？」

「遠い昔、浩一さんと引き裂かれた相手みたいな。それぐらい同じ匂いを感じました」

「引き裂かれた相手……。どういうことかのう。夜叉なのかのう、彼女もまた……」

「分かりません。ですけど、浩一さんがあの人を避けてることは間違いないでしょうね」

「避けてる？　どうして分かる？」

「それぐらいは女なら見れば分かります。彼女、最初から最後まですがるような目つきで浩一さんを見ていたのに、浩一さんは全然視線を合わそうとしなかったんですもの。まるで彼女に怯えてるようだったわ」

「なぜじゃ」

「それはわかりません。何か感じるんでしょうね。普通以上に自分を冷静に見ることができる浩一さんがあれほど動揺するのなら。陽子さんに対しては最初から最後まで冷静だったのに。全然違うんですもの」

「因果がある？」

「もしヨニとか奇蘭とかが本命じゃなければ有力な候補でしょうね。私のカンですけど。だけど、あそこまで浩一さんが避けてるんじゃ難しいわね。あっ、もしかしたらヨニが彼らを会わさないようにしているのかも」

「やれやれ、何とも難しい男じゃ。しかし、あの男、考えようによってはすごいのう。男、女、女神にその夜叉、皆を惚れさせたのか……。なんでそんなにもてる？」

「まあ焼いてるんですの」

「焼かずにおらいでか」

「いいでしょ、あなたは私を彼から奪えたんだから」

「そういう問題じゃなくてだな、おかしいと思わんか？　あの男の立場になって考えてみろ。何もかも回りが勝手にお膳立てして動いているじゃろうが。いったいあの男の意志というものをわしたちは感じたことがあったか？　あの男はいつも受け身じゃ。そしてそのことが問題をいつも難しい方にしておる。あやつの問題はそこにあるのではないのかの」

「そう言われればそうですね。ほんの一瞬、奇蘭として彼に抱かれた時だけ少し彼の意志を感じたことがあったけど、それだって、意志というより義務感みたいな感じだったし、それ以外は確かに感じなかったわね。いつも内省的で自分を見ていた……」

「するとあやつの今の状況というのは、まるで修行中の釈迦を夜叉たちが邪魔をしたという話そのものじゃないか……」

「でも彼は仏じゃなくて夜叉でしょう？」

「もしそれが人間が勝手に呼び分けているだけじゃとしたら、あまり意味がないのかもしれんのう」

「お釈迦様はそういう状態の後、どうなるんです？」

「決まっておる。悟りを得られるんじゃ」

「悟りとは？」

「宇宙の真理」

「それを得てどうなったのです？」

「まあ完全になられたということじゃろうな」

「それだったら……、もし、彼にとって何かを克服することで完全になれるものがあるとしたら、彼女じゃないかしら。自分であって自分でないもの。きっとそれが彼女なんだわ」

「なぜじゃ？」

「わからないけど、感じる。たぶん奇蘭の気持ちみたいなもので」

「奇蘭の気持ち？　なんじゃそれは？」

「奇蘭だったらっていう感覚が少しあるんです。それがそう告げてるんです」

「何故奇蘭なのじゃ」

「たぶん、同じ夜叉だからじゃないかしら……。何て言えばいいかしら、彼への同情？　あるいは思いやりかも……」

「そうか、奇蘭の思いやりか……。淑子、お前は奇蘭であったことで随分といろいろなことを学んだのだのう……」

「あら、まだこれだけじゃありませんよ。何でしたら、もう少し違う技も……」

淑子のペニスにかかった手がまた動いた。

「あ、淑子、そういう意味じゃない。助けてくれ、もう今夜は勘弁せい……。わしの腰がもたん」

「あら、残念。でもしょうがないわね。大切な旦那様を壊したり

したら大変だし」

淑子は名残惜しそうに手を引っ込め、その代わりに改めて身体を清玄に寄り添えた。

「じゃ、続きは明日の夜ね」

「……」

とにかく寝るしかないと清玄は瞑目した。

目覚め

寺に泊まることとなった岩下、啓作、浩一の三人は、八十畳はあろうかという大広間に布団を敷いて一夜を過ごした。いつもはこんなところに人を泊めたりはしないが、昨日の葬式関係でいつものルールが乱れていた。

朝になると教導師である岩下が真っ先に目を覚ました。外は真っ白な霧に覆われていた。

すぐに手水場に出て、口をすすぎ、顔を洗い、頭に水をかけ、目が覚めたところで山の朝の空気の中で、深呼吸を繰り返した。これが岩下の健康法であった。

縁のところから、淑子が声をかけてきた。

「随分、お早いのですね」

「あ、おはようございます。淑子さん。いや、ふだんからの習慣ですから。そういう淑子さんもかなりお早いですね。そうか、淑子さんは仏教では無かったが、修行僧と似たような暮らしをされていたわけですな」

「まあ、そんなところです。何しろ朝食作りも、材料を畑から集めて来る暮らしでしたから」

「それは、いまどきたいそう贅沢な暮らしぶりと言わねばなるまい。本来、食事とはかくあるべし、と拙僧は思います」

「まあ、おかしな方。でも晴れて気持ちのいい朝ならともかく、雨や雪の日はどうしようかって、不安も多いのですよ」

「いや、これはご苦労に気が回りませんでした。大変失礼。時に、清玄さんはまだお休みかな？」

淑子は急に顔を下に向けた。

「それが……、少々、朝が弱いものでもうしばらく休ませてから」

「はて、彼が？　人は見かけによらぬものですな。低血圧でも」

「ハイ……、どうもそうみたいです……。あ、私、朝食の支度をしてまいりますので、どうぞごゆるりと……」

淑子は足早に立ち去った。

「はて、わしは何か気に障ることでも言うたかな……」

「岩下さん、おはようございます」

後ろから声が掛かった。振り返ると啓作が大広間の前の廊下に立っていた。さきほどからの様子を見ていたようだ。

「ダメですよ、岩下さん。あんなこと聞いちゃ。淑子さん、困ってたじゃないですか」

啓作は声を落として言った。

「え、わし、何かまずかったか？」

「清玄さん、たぶん淑子さんのせいで夕べ寝られなかったんですよ」

「あ、そういうことか。いやあ、これはうっかりしてしもうた」

「でも大変だろうな。あのお年で淑子さんの相手をするのは」

「すまんが、わしはそういう話題は苦手じゃ。少々遠慮してくれないか」

「あ、これはどうも失礼しました」

「時に、伊集院さんはもうご結婚されてるのかい？」

「いえ。でももう結婚したようなものですかね。結婚式の算段をしている最中なんです。いわゆる出来ちゃった婚です」

「なるほど君らしい。しかし、君と彼の組み合わせというのはどうにも理解しにくい組み合わせだな。君が陽なら彼は陰、電気ならプラスとマイナス、磁石ならN極とS極、すべてが逆という感じがするが。いったいどういう接点で友達になられた？」

「ただの幼なじみですよ」

「よく続いたものです。これほど違うと関係があるだけでも少々不思議に思えるほどに」

「そうですね。まあ言ってみれば僕の努力でしょうか」

「君の努力？」

「そう、嫌われても嫌われてもしつこくつきまとって、諦めさせたという関係」

「なるほど君らしい。だが、なぜそこまで彼に執着したのです？」

「それが僕にもよく分からないんです。いつの頃からか、気がついたら、とにかく彼の存在というのは、自分を確認するために無くてはならない存在になってましてね。彼が居れば安心できるんですよ」

「ほう。安心か。君がそもそも不安を感じるということも想像するのが難しいが、そんな君に安心をねえ。いや実に興味深い話です。で、何でそんな君を安心させられるような温和な男が邪教の祠に来ることになったのです？」

「すべて僕のせいです。ことの起こりは僕が心配したんです。僕の女友達を彼に紹介しようとしていた時に。彼、あまりにも人付き合いが出来なかったんで。それで清玄さんに何とかして欲しいと頼んだんです」

「人づき合いが出来ない？」

「清玄さんも同じように言ってましたよ。彼を最初に連れてきた時。何でも、彼は人であって人間ではないと清玄さんに言われたらしいです」

「そうか、それで煩悩を教えるつもりで祠へ……」

「そういうことらしいですね」

「じゃあ、彼はあれでもかなりふつうになったわけですね？」

「そうですよ。昔の彼を知ってる人間は、皆驚いてます。あまりに急激に変わったんで」

「そうでしたか。じゃあ、まだ完全ということじゃないのでしょうね」

「完全じゃない？　夜叉として？　まださらに変わるんですか？」

「まあ、そういう可能性もありうるという話です。この話は朝食が終わった後で皆でもう一回ゆるりとさせてもらうこととしよう。わたしも考えをまとめる時間が欲しいしね」

そう言うと、岩下は境内を横切って墓場の方へ出ていった。啓作は、岩下の背中を見送るともう一度大広間に戻った。

浩一はまだ寝ていた。

―　まったくのんきなものだ。みんな、お前を心配して集まってるというのに……。でも、やっぱりお前はただものじゃないな。俺と違って、お前は何もしてないのに、ずいぶんと多くの人間を動かせるじゃないか。これが器ってやつか。お前とは長いつきあいになるが、一番得体の知れない人間だったな。お前が……

そんなことを考えながら、浩一の寝顔を見ていた。

高校時代からあまり変わらない、童顔の強く残る顔である。寝顔だけを見れば、まるで中学生のように見えた。

―　まったく世の中は不公平なもんだ。お前なんか何にもしなくても、その寝顔だけで女を惚れさせそうだ……

そんなことを思いながら、浩一のふとんの横に並べてある自分のふとんの上に座り込み、脇にある座卓の上からたばことライターを取り、火を付けた。

カチッ

という着火音に、浩一の身体が一度揺れた。が、目を覚ますことはなく、身体を横向きにしただけだった。

―　よく寝るなぁ。そんなにお前疲れてたっけ？

啓作はようやく浩一の眠りが尋常ではないと思い始めた。

夕べは、夕食の後、少しだけビールを飲んだが、岩下があまり飲む質ではなくまた浩一もそれほど酒好きではない上に、酒好きな清玄と啓作は疲れが溜まっていたのである。もっとも話題が突拍子もない話だったから、啓作でさえも、神、夜叉、仏、鬼、煩悩、そんな言葉が飛び交う会話に酒が入っていなくても脳が痺れる想いをしていた。啓作は特定の宗教に帰依しているということはないし、宗教をことさら疎ましいと思っていたわけでもない。要するにごく普通の関心で接してきた。別に信じてない宗教であっても、敬意を払うという意味でどこでも普通に参拝できた。が、親友の身体に起こった事件を理解するために、宗教でよく使われる単語がたくさん散りばめられた話を聞くことになるなどとは、夢にも考えていなかっ

たのである。

たばこを一本吸い終わると、やることもないので、とりあえずは自分の寝ていた布団を片付けることにした。

リネン類をはずし、敷き布団、掛け布団をそれぞれ畳んでは部屋の隅に重ねた。リネン類は次の間に使用済みのリネンを入れる大きなバスケットがありそこに放り込んだ。最後にまくらを、これもたくさんのまくらが並んでいる棚に戻した。

当然、横でこれだけの作業をするのだから、かなりの振動、音、風が寝ている浩一にも伝わったはずである。だが、浩一はやはり目を覚まさなかった。

「呆れた奴。こんなに鈍感だとは思わなかった」

高校時分であれば、こんな奴を見つけていたら、顔中落書きだらけにしているところだが、啓作はそこまで若くはなかった。

座卓のところに戻り、急須に残っていた冷めた茶を茶碗に注いで、もう一本、たばこを点けた。

さきほどのたばこの煙はふとんを上げている時に、霧消していた。新たな煙がこの一画を覆い始めた頃、縁側に人影が動いた。どうやら、岩下が戻ったらしい。

障子が開き、岩下が神経質そうな顔を覗かせた。

「あれ、彼はまだ起きないんですか？」

「ええ。何しろ日曜日だから、身体が朝寝坊になるようになってるんじゃないですか。サラリーマンは週末に寝溜めする人間が多いから」

「ほう、そういうことがあるんですか。ちっとも知らなかった。わたしらにはあまり曜日は関係ないので。そういうことなら寝かしておきましょうか。淑子さんから、朝食の準備が整ったので食堂に来て欲しいと言われたのですが……」

「そうですか。彼寝かしておいてもまずくないですよね。もし大広間を使う用事が無ければですけど……」

「あるとしても昼過ぎでしょう。しばらくは心配いりません」

啓作はたばこをもみ消して立ち上がり、岩下とともに食堂へ向かった。大広間には浩一一人が残されることになった。

彼岸の淵

浩一は一面真っ白な世界にいた。一人では無かった。隣には裸で奇蘭が寝ていた。二人は夕べ再び出会った。そして奇蘭に誘われるままに浩一は奇蘭とともに寝た。

正直、奇蘭とまた会えたことが浩一には嬉しかった。奇蘭の背中には、あの懐かしいヨニの彫り物があった。そのヨニの顔も、浩一に微笑んでいるような気がした。

あの時と同じように、二人は唇を合わせ、身体を重ねた。それは浩一にとって懐かしさ以上のものがあった。腕の中に奇蘭の頭を置いて、彼女の顔を見ていた時、それがどういう感情なのか、ようやく浩一にも理解できた。あの時の、淑子に告白しようか悩んでいた時のあの気持ちを思い出していた。自分が愛したのは、淑子ではなく、奇蘭だったのか……、その思いが頭を駆けめぐった。

昨夜会った時に、最初に奇蘭が言った言葉はこうだった。

「良かった。また会えて嬉しいわ、浩一さん。いつ会えるか、私はこの機会をずっと楽しみに待ってたの」

その言葉を聞いた時、浩一は自分もそうだったように感じた。淑子に会ってもどこか物足りないと思っていた。それが何であったのか、自分では清玄の妻という立場が原因と判断していたものが間違っていたことを知った。

再会とともに燃え上がった恋は、たちまち二人に相手の身体を貪りあわせることになった。何度、思いを奇蘭の中に放出しても浩一は終わらなかった。奇蘭も何度絶頂を極めてもすぐ回復していた。

ようやくその行為に飽いた頃、浩一が奇蘭に聞いた。

「ここはいったいどこなの？」

「世界の境目みたいなところ」

「世界？」

「人間の世界と人間じゃないものの世界の間」

「人間じゃないものって？」

「私たち夜叉とか神様とか仏様とか、鬼も入るわね」

「僕はどっちにでも行けるのか？」
「そう、今のところはね」
「今のところ？」
「人間の世界で人間としているには身体が必要だけど、ここから向こうはそれがいらないのよ」
「じゃ、この身体は何？」
「私たちの意識が作り出した作り物の身体。ここでは意識だけでいいんだけど、あなたもわたしも身体を持っていた時の意識が強いから身体ができたのよ」
「じゃ、人間の世界のいる僕は今どうなってるんだ？」
「寝てるわ、ほら」
奇蘭が指し示した空間が窓のように透き通り、そこに大広間に敷かれた布団の上で寝ている自分の姿が映った。
「僕はあそこに戻れるのか？」
「もちろん。あなたの身体ですもの。だけど身体があるうちだけよ。無くなったら無理」
「どういうこと？」
「身体が死んじゃったら終り」
「身体が死んだ時、この僕はどうなる？」
「どうもしないわ。意識は死なないもの」
「じゃ、僕がここにずっといたら、あの身体はどうなる？」
「そうねえ、寝ているだけだから、当分は生きているけど、食事もしないんだから、栄養失調でそのうち死んじゃうでしょうね。もっとも点滴とかでそれが補給されてれば生き続けるでしょうけど」
「ふ～ん、そういうものなんだ」
「ここに来られる意識を、夜叉って呼んでいるようなものなのよ」
「君が淑子さんにいたときは、どういう状態だったの？」
「淑子の意識には私の中に入ってもらったの。だって邪魔なのよ。身体を動かすのに意識が二つあると。だから、オブザーバーみたいに自分のやることを見ることも、感じることもできるけど、意志は

持てない状態だったの。でも、私の考えを全部見ているわけだから、本人からすれば自分の意識なのか、私の意識なのかはっきりしなかったでしょうけどね。でもあなたが、全部パーにしちゃったけど」

「そんなふうに他人の身体に入ることもできるのか」

「簡単じゃないわ。本人も納得してないとダメだし。私たちレベルだけではダメ。私ならヨニ様、あなたならサラ様にも手伝って頂かないと」

「そうか……。君はずっとここにいるのか？」

「ここっていうほど、ここは狭くないけど。まあこの世界という言い方ならそうね。あなたもそうしていいのよ。どうせ、あなた人間界で坊さんやればなんて言われてたんでしょう？　そんなことするぐらいなら、さっさとこっちに来たら。そうしてくれれば、私も嬉しいし」

「うん、そうかもしれない。でも皆心配しないかなぁ」

「あのねぇ、人に心配を掛けるのが夜叉のお仕事なの。まったく自覚がないんだから。やんなっちゃうわ。それにね、人に迷惑を掛けるのを怖れていたから、結局、あなたはまわりに迷惑かけまくってたのよ。分かってる？　そのこと？」

「そっか、そうなるのか」

「あなたがそもそも自分で自分の意志をはっきりさせてたら、こんなにたくさんの人間があの寺に集まったりしてなかったわよ。ま、考えようによっては、夜叉として優等生なんだけどね。あなたの夜叉としてのすごいところは、無私無欲というところにあるんですもの。そのお陰で、あなたのまわりの人間の煩悩を引き出して拡大して、その上、また撒散らしてくれたんだから、それを悪くも言えないんだけど」

「褒められたのか、けなされたのか、よくわからない話だね。だけど君は、結局は陽子さんを助けてくれたよね。あれは夜叉にはあるまじき行いだったんじゃないのか？」

「だって、あなたの夜叉ぶりって、あの人が可哀想に思えるぐら

い些細なことから始まってるのよ。夜叉として見たら、あなたほど残酷な夜叉は滅多にいないわ。もう少し、祟られてもしょうがないなぁぐらいの話がないとね、いくらなんでもっていう気にこっちもなっちゃうでしょ」

「じゃ、君は彼女に同情してくれてたのか。ありがとう。でもさ、それってヨニの指示に逆らうことだったんじゃないの」

「ちょっとはね。でもヨニ様もそこまで執念深くないわよ。あの程度で十分なの」

「あの程度で十分？　そういうもんなの？」

「ま、加害者の癖に、よくそんなこと言えるもんだわ。自覚が無くてあなたらしいわね。とにかくしばらくこっちにいなさい。人間界のことなんか放っておいて」

「僕が人間界に居るという話だから、奇蘭はあそこを離れたんだろう。それなのに僕がこっちに来たら、またヨニの指示と違うことすることになるんじゃないの」

「いいのよ。私ちょっと頭きてるし……」

「何に？」

「ヨニ様によ。だって、あなたに甘すぎるんだもん」

「僕に？　ヨニが？」

「そう。何か私馬鹿みたいって気になってるの。だからこれぐれいでちょうどいいの。あなたはこっちにいなさい」

「じゃ、そうする」

浩一には人間界に強い執着が持てなかった。自分がトラブルメーカーなら、このまま人間界に戻らない方がいろいろな意味でいいのかもしれないと思っていたのである。

涙

食堂で朝食を終え、啓作、岩下、淑子の三人がいろいろと雑談をしているときに、清玄が現れた。

「おはよう。いやあ、すっかり寝過ごしてしもうた。どうも修行が足りんようじゃな。淑子、何か食べるものをくれないか。ありあわせで構わんから」

食堂の入り口でそんなことをわめきながら三人を見回し、そして自分の席に着いた。入れ違いになるように淑子が立ち上がり、清玄の食事を準備しはじめた。

「おや、あの男はどうしたんじゃ？」

「まだ、寝てますよ」

岩下がそっけない調子で言った。

「まだ寝てるか。いやあ若いものが羨ましい。年をとると寝ていたくても目が覚めてしまう」

「それは体力がなくなるからです。仕方ありません」

「え、体力が無いと寝られないんですか？」

啓作が岩下に訊いた。

「そうだよ。ずっと寝ているためにはそれなりの体力が必要なんだ。身体の中には、寝ている時に休む細胞もあるが、寝ている時にしか働かない細胞もある。ということは寝続けたら、そういう細胞は休めなくなるだろう。だから起きてもらわないと困るということが起こる。年寄りが目の覚めるのが早いのは身体に寝続けるだけの体力がないからなんだ。逆に成長期の若者なんかは、まさに成長という作業が行なわれるのは寝ている時だから、寝てはいてもものすごいエネルギーを使っている。だけど、身体も成長しようとしている状況だから、それでも睡眠欲求が大きくなる。体力もあるから、結局いくら寝ても、あの時期の若者はいつも睡眠不足になる」

「そうなんですか。じゃ、浩一はやっぱり若いのかな」

「いくらなんでも、成人としては寝過ぎじゃないかな」

淑子が清玄に食事を運んできた。

「そうと知ってれば、最初から食事にこんなに手間をかけなかったのに……」

「え、どうしてです？」

「彼、以前私の作った文字通りの粗食にすごく感激してくれたのよ。作った本人が恥ずかしくなるぐらいの粗食だったのに。だから、その名誉挽回にって、気合い入れて今朝の朝食は作ったの。それなのに当の本人が起きてこないんですもの。がっかりだわ」

「粗食に感激？　何ですかそれ？」

岩下が興味深そうに質問した。

「あの時の彼は、まだ人の他人に対する思いやりとか全然分かってなくて、とにかく他人と接触するのが嫌だっていう状態だったんです。それでそれを分からせるつもりで、どんな食事が好きかって訊いたら、マックのハンバーガーがいいって答えたんですよ。それでね、ちょっとカチンときて、説教するつもりで、運んできた食事を私がどういうふうに準備したのか、材料毎にお話して上げたんです。そしたら、貧しい食事だったにもかかわらず、彼、ものすごく感動しちゃって……。本当に何も知らなかったんだなって、すごくよくわかりました」

「それはいいお話を伺った。なるほど料理とは思いやりそのものですからな。だが意外とそれを教えてくれる話は少ない。いや、それどころか、思いやりの籠もった料理にすら、最近は滅多に出会えなくなった」

「それじゃ、今からでも起してきます。せっかく淑子さんの名誉回復の朝食なのに、寝溜めでそれをパスじゃ、それこそ人間にあるまじき行為になる……って、もう夜叉だったけど……」

啓作は苦笑しながら立ち上がった。

「おお、それがええ。今日の朝食は格別にうまいからのう。食わねば損じゃ」

朝食を食べている清玄がそう口を挟んだ。

「そうですか。じゃ、私も用意しておきます」

淑子も嬉しそうな顔を見せて立ち上がり、台所へ戻っていった。

だが、淑子が浩一用の朝食を用意して戻っても、さらにその上、かなりの時間が経っても、啓作も浩一もいっこうにやって来ない。

清玄も食事を終り、岩下、淑子とも、顔を見合わせた。

「かの御仁は、かくも朝寝坊がひどかったか？」

「そんなはずはありません。洞窟で過ごした翌朝は私よりも早く起きていましたから。あの日も日曜日だったけど……」

「様子を見に行くとするか」

清玄がそう言い、二人とも頷いた。

食堂を出て渡り廊下を通り、大広間のある離れの入り口にさしかかると啓作の叫ぶ声が聞こえた。

「こういちー。いったい、どうしたんだ。おまえ、起きろよ。返事をしてくれよー」

その声は、明らかにヒステリックに裏返り、泣き叫ぶ声のようにも聞こえた。

障子を開け、中へ入ると、浩一の身体にすがりつく啓作がいた。

三人が来たことを悟ると、啓作も顔を上げた。

その顔は泣きはらした顔になっていた。

「起きません。何をしても、いくら呼んでも……」

啓作は泣きはらした目と涙声でそう告げた。

清玄も淑子も涙を流した啓作を見るのは初めてだった。いや、啓作本人にとっても、涙を流した記憶はかなり長いこと無かった。

図らずも啓作の涙は、かつて清玄が言った啓作の浩一に対する執着を本人にも周囲の人間にもはっきりと教えることになった。

「息は、あるのか？」

「はい、ちゃんと鼓動も呼吸も普通です。だけど起きないんです」

嗚咽するように答える啓作の横を通り過ぎ、清玄と岩下が浩一の身体の横でしゃがみこんだ。淑子は浩一の身体を回り込んで反対側から、浩一を覗き込んだ。

誰の目にも異常があるようには見えなかった。
浩一の血色はよく、呼吸も正常だった。
「浩一さん、起きて、浩一さん」
胸の上に手を置いて、身体を揺すりながら、淑子が呼びかけた。
が、閉じられた瞼が開かれる気配は全くなかった。
続いて同じように、清玄がそれをやり、最後に啓作がまたそれをやった。岩下のみ、その様子を腕組みをしたまま黙って見つめていた。
だが、浩一はこんこんと眠り続けている。
「どうしたんじゃろうか？　こんな人間をわしゃ、見たことがない」
「啓作さん、淑子さん、彼の衣服を脱がせてくれませんか？」
突然、岩下がそう言った。
啓作と淑子は頷いて、浩一の衣服を脱がせ始めた。
やがて敷き布団の上に全裸で浩一は横たわることになった。
「清玄さん、淑子さん、何か感じませんか？」
「いや、特に変わったことはないと思うが」
「なんて言えばいいか、まるで抜け殻みたい。中身がない感じがします」
「ほう、淑子さんもそう見ましたか。実は私もそう感じました。彼の意識はここにはいない。どこかへ出かけてしまったようだ」
「どこか？　どこへ？」
啓作が訊いた。
「おそらく三途の川の向こう側、いわゆる彼岸というやつです。あの世と言ってもいい」
「それじゃ、浩一は死んでしまったんですか？」
啓作は驚いて聞き直した。
「普通の人間ならそういうことになるが、多分彼にとっては違う。また戻って来られる。彼が本物の夜叉であるなら。彼にとっては故郷のようなものでしょうから」

「で、いつ帰ってくるのです？」
「それはわからない。帰ってくるのかどうかも分からない」
「そんな……」
「とは言っても、これはあくまでも私の意見だ。伊集院さん、至急お医者をお呼び頂けませんか。我々の知らない病気という可能性もまたありうる……」
「わかりました」
「それだったら、私が」
と淑子は立ちかけたが、岩下はそれを制した。
「いや淑子さんにはまだ訊きたいことがある」
啓作は大広間から立ち去った。
「何でしょう？」
「彼を彼岸へ連れ出したものが居るとしたら、心当たりがおありなのではないかと……」
「ま、まさか奇蘭が……」
「淑子さんと奇蘭、どちらが彼への想いを強く持っていたと思われますか？」
「あっ」
淑子は声を上げ、顔を伏せた。
「やはり……。すると彼はこちらには戻らぬつもりなのかもしれない」
「どうなるのじゃ？　この身体は？」
「それはわたしには分かりません。お医者の意見を聞きましょう」
「……」
淑子と清玄は顔を見合わせた。岩下は浩一の身体に向かって合掌した。

前世

「なあ、奇蘭。君はいったいいつからここにいるの？」
「さあ、私にも分からないわ。ずっとずっと大昔。何度も生まれ変わってるし」
浩一はようやくここがどういうところなのか、自分で把握できるようになった。ここは心が主役の世界なのである。心の中の風景がそのまま世界になった。そして心を通わすことで他人も自分の世界の中に存在するものとして感知できる存在になるのである。最初、奇蘭と自分しかいないと思っていたのは、奇蘭しか心が通わなかったからであった。が、違う存在を感じ、意識をそこに向けると突然意識が現われていった。そういう存在はぽつりぽつりと増え続け、実はかなりの数の意識が自分たちのまわりに居たことに気がついて驚いていた。
「ここは何なの」
「人間が作った世界」
「人間が作った？」
「そう、人間の願いとか想いとかそんなものが集まって出来た世界。人間が滅亡したらここもおしまい。だけど願いとか想いとかを持ち続ける人間がいる限り、終りの無い世界」
「じゃ、生まれ変わりっていうのは？」
「人間たちの望む中身が変わることに対応したキャラクターチェンジってことかしら。人間たちだってどんどん変わるんだから、私たちも変わらなきゃね」
「じゃ、僕も最近何かから変わったわけ？」
「そうよ。あなたは以前は戦う人だったみたいね。人を殺して英雄になったの。だけど、最後には、あなたも奥さんに罠にかけられて殺されたの。それであなたは、その復讐心から夜叉になっちゃったみたいね」
浩一は驚いて奇蘭の顔を見た。
「なんでそんなことがわかる？」

「ここではね、意識の集中を上手にすればいろいろなことを知ることができるのよ。あなたにもそのうち分かるようになるわ」

「今の話っていつ頃の話？」

「さあ、九百年とか千年ぐらい前じゃないかな。そこまでちゃんと見なかった」

「そんなに前のこと……」

「昔の人間の方が今の人間よりここに来やすかったのよ。情念で生きてた人が多かったから。今の人間はね、理性的で煩悩が不足してるぐらいなの。ひどい目にあっても、目をぱちくりさせるばかりで怒りもしない人じゃ、夜叉になんかなれっこないでしょう。もっとも本来あるべきはずの感情を出さないことに耐えられなくなる人間も増えるわね。これからそういう感情の爆発に耐えられなくなって人を殺すようなこどもが増えるんじゃないかしら。時代が進むと、人間が機械に近づいていることがよくわかる。それでも、どうしても機械みたいになれない部分も残るわ……。だけど、それが人間の進化だとしたら、いずれはここも無くなるのでしょうね。とにかくこの世界では古い時代の出身が多数派なのよ。だからあなたは主流派」

「じゃ、君も？」

「そう。しかも、あなたよりももっと古いわ。人間界に居たときから神の声を伝える巫女だったの。で、当時の権力者に都合の悪い神のお告げを出して、殺されて夜叉になっちゃったって。もちろん何も覚えては居ないけどね」

「まるで野菜の話と一緒だね」

「何それ？」

「君がしてくれた、料理の話。あれは効いた。野菜の一つ一つにどれだけの物語があるのかを知らされて……。今の話も夜叉一人一人にたくさんのドラマがあるっていう意味では同じじゃないか」

「まあ、そう言えばそうね。ドラマチックに人生を終えた人がきっと夜叉になるものなのよ。たぶん」

肉体

浩一は大広間で寝続けていた。

医者の手配は予想以上に手間取っていた。

なにしろ、どういう状況なのかを説明しようとしても、起きない、寝てるとしか言いようがないのである。放っておけばいずれ起きると言われて電話を切られるばかりだった。どの医者もそんな離れた山深いところに出向きたくなかったのだ。困った啓作は、また、中川勝則のところに電話を入れた。もう同じ医者仲間同士で説明してもらえる人間にしか頼れないと思ったのである。幸いなことに中川は自宅に居た。養子縁組の約束をして以来、中川はいよいよ啓作を息子のように可愛がってくれるようになっていた。

「するとその友達というのは寝たまま起きないのかね」

「はい、そうなんです」

「寝始めてから、どれぐらい経ってる？」

「もうすぐ、十八時間ぐらいにはなりますね」

「それだけ時間が経ってるなら、排泄物が出たろう。どうだった？」

「はい、小便をそのままふとんに出してました。あわてて大人用のおむつを買ってきて、今はそれをつけてますけど……」

「君の言うとおり、かなり異常な状態だな。排泄でも目が覚めないとは。そうなると、水分と栄養の補給も必要だ。点滴がいる。どこかに入院させる必要があるな。ちょっと心当たりを当たってみるから、一度電話を切るから。アレンジが終わったらもう一度こっちから電話する」

「よろしくお願いします」

医者のことは、ようやく中川のおかげで前に動きそうだった。啓作はホッとしたものの、次に何をするべきかを考えていた。

が、事態が不可解という状態のままで両親や勤め先に連絡する気にはなれなかった。せめて医者の診断結果を聞いてからにしたかった。が、一人だけ例外がいた。知恵である。啓作の気持ちは、知恵

に危急を知らせたいという意味で知恵を思い浮かべたのではなく、知恵なら浩一を何とか出来るのではないかと漠然と感じたから知恵を思いついたのである。が、根拠は何も無かった。あえて言えば、自分の嗅ぎ取った匂いが、そう啓作に虫の知らせをもたらしていたというだけである。

数分、迷った後、知恵のアパートに電話を入れようとした。

が、受話器に手を掛けた瞬間、その電話が鳴った。

「はい、正円寺です」

「私、中川と申しますが……」

「あ、伊集院です」

「お、君か。電話を切ってから、少し考えたんだが、入院は考えなくてもいいだろう。それより彼の今の状況をもっと正確に知ることが大切だ。それで僕がこれから必要機材を持ってそこに行くことにした。で、行き方を教えてくれ」

啓作は中川に道順を教えた。その時に、ふとひらめいた。

「すみません、先生。一つお願いがあるのですが……」

「何かね？」

「一人女性を途中で拾って乗せてきて欲しいんです。彼のガールフレンドを」

「ああ、いいよ。場所はどこかね」

啓作は、知恵の名前、住所、電話番号を中川に告げた。だが、このひらめきは、結局は実らなかった。知恵は外出中で捕まらなかったのである。啓作は知恵の勤め先に電話を入れてみた。休みのはずだが、案の定、出勤している社員がいて、知恵の動向を知ることができた。彼女は今日、鬼怒川温泉へ取材に出かけているとのことだった。啓作は、知恵への伝言を頼み受話器を置いた。

夕方近くになって、中川がクルマで到着した。

「すまん、知恵君は拾えなかった」

「彼女の会社に確認しました。鬼怒川温泉にいるそうです。伝言を頼んだので別に来ると思います。どうも無駄足をさせてすみませ

んでした」

「それはよかった。じゃ、この機材を下ろすのを手伝ってくれ」

「あそこの離れの大広間に居ますから……。機材は運びます。先に見に行ってください」

「分かった。じゃ、頼む」

啓作が機材を浩一のまわりに並べ終わった時、中川は浩一の横に座り腕組みをしていた。

「先生、終わりました」

「お、そうか。これで何かが変わるとも思えんがな……」

中川は、ブドウ糖の点滴をまずセットし、それから、脳波計、心電図計を取り付けて様子を見た。

画面をのぞき込む中川に啓作が聞いた。

「何か変なことは？」

「いや、何もない。全く健常者と変わらない。もっともこんなおもちゃみたいな装置で分かることは限られてるがね。しかし、こんな病気は見たことがない。たった今、目を覚ましてもちっともおかしくないんだが……。とにかく彼の生命への危険はどこにもないね。ただ……」

「ただ、何です？」

「植物人間状態だから、水や栄養の補給が切れたらその限りでないことは間違いがない。それと、寝たきりになると全身の筋肉は急速に失われるし、骨もカルシウム分を急速に失う。そうなると、仮に覚醒しても、身体が持たなくて寝たきりが続く。回復には相当長期のリハビリが必要になる……。できるだけ早く覚醒させなければならないことは確かだが」

「気付け薬のようなものは？」

「さっき一通りやってみた。すべて効かなかった。前代未聞だ。こんな普通の脳波を出している患者に薬が全然効かないなんて」

中川は、そう言うと周りに座っている、清玄、淑子、岩下の様子に目を留めて、さらに続けた。

「医者としての私はかなり驚いているのに、どうやら皆さんには、彼がどういう状態かまるでご存じのように落ち着いていらっしゃる。よろしければお話頂けませんか？　皆さんのお考えを？」

「いえ、それほど、確信があるものではありません」

そう答えたのは岩下だった。

「根拠は全く不十分ですが、たぶん、彼の意識はこの肉体から離れている状態にあるのだろうと私は考えています」

「なるほど。そんなふうに言われればそう見える状態です。肉体には何も異常がないのに、全く生きた人間がそこにいるという感覚がない……。で、何かの祟りとか、妖怪とかそういう話に繋がるんですか？」

「それは我々にもわかりません。が、一番ありそうな話として我々が思っていることをあえてお話すれば、あの世のものに彼は惚れられたようです。おそらく連れて行かれたんでしょうね。彼岸に」

岩下の返事は、中川というよりも啓作を驚かせた。思わず、口走った。

「まさか、奇蘭が？」

「一番有力な容疑者だろうね。彼とコンタクトがあると、彼も認めていたんだから……。それ以外にもヨニという可能性もあることはあるが」

「何です？　その奇蘭とかヨニとかって？」

今度は中川が聞いた。

「人間ではないものたちです」

「妖怪ですか？」

「いや、むしろ神とか仏に近い存在なのでしょう。もっとも彼だけしか接触できなかったんですけど」

「それじゃ、霊能力が彼には備わっている？」

「そういうことなんでしょうね。私たちもそれほど詳しいわけではありません。何しろ体験できたという話はほとんど聞いたことがなかったもので」

「ただ、医学の知識では彼をどうする手だても見つけられないことはどうやら間違いないようだ。皆さんにはその方策がお分かりになるのではないですか？」

「それが見当もつかないんです」

「文字通り神仏に祈るとか？」

「いや、関わっているのが神そのものとなると、そんな簡単な話ではないでしょう。まず言えば、それらは私たち仏教の者からすればすべて邪教の存在、すなわち煩悩そのものとなりますし。下手に仏に救いを求めたりすれば、彼らの抹殺を願うことにもなりかねない。そもそも我々がふだん祈りを捧げている仏とは別物なのですから」

「そんな……、抹殺なんて……」

啓作が悲鳴のような声を上げた。

「仏教徒が目指すのは煩悩に惑わされず生きるということ、解脱にあるわけだからね。普通に考えればそういうことになるだろう」

「じゃあ、祈りも無力だと」

「いや、祈りが無力ということはたぶんない。ただ我々がそれに能わないことだけは確かだ」

「どういう意味ですか？」

「彼を救える祈りが出来る者、それはイコール、彼自身を神仏として崇められる者だろうと私は思う。そういう者の祈りなら、彼に届くかもしれない」

岩下の最後の言葉は、その場にいた全員のものを呆気にとらすものだった。

ほぼ聞いた全員が同じ言葉を胸に抱いた。

―　彼を崇める？　まさか？

そしてこの自問自答にその候補者の名前を浮かべた人間が二人いた。

啓作と淑子だった。

―　彼女だ！

その時、来訪者を告げるチャイムの音が響いた。
淑子が立ち上がり、啓作も立ち上がった。
「私が……」
「いえ、一緒に行かせてください。どうせ僕に出来ることは何もないし」
「そうですか……」
二人は一緒に離れから玄関へ向かった。
「啓作さんは、どうしてそれほど浩一さんのことを？」
「幼なじみだから、じゃ、弱いですか？　実は僕にもよくわからない。ただ、昔から彼が近くにいると落ち着いた。あいつは僕をむしろ毛嫌いしていたが、それでも、僕には彼がいると心地良かった。変ですね。清玄さんには、僕の片思いって言われたって浩一が言ってましたけど」
「変と言えば変。でもそれが当たり前になる理由がきっとどこかにあるんでしょう。人間には自分のことでも見えないところは多いものですから」
「……」
玄関に出ると外に真っ赤なウィンドブレーカーを着込んだ女性が立っているのがガラス越しに見えた。
「はーい、今開けます」
淑子が三和土に降りてガラスのはまった引き違い戸を開けると、そこに知恵が立っていた。
「夜分すいません。あ、この間はどうも。早川知恵です。浩一さんに何かあったんですか？」
「え、ええ、どうしてそれを？」
「僕が伝言を頼んでおいたのです。さあ、知恵、早く。こっちだ」
啓作は知恵の手を引いて再び大広間へと足早に戻っていった。
「やっぱり、あの二人、前世で浩一さんと何かあったのね……」
淑子は二人の後ろ姿を見てそう呟いた。

展望

啓作と知恵が大広間に戻った時、岩下と中川の間で今の事態について、意見交換のようなものが行われていたらしい。浩一の身体だけがその場に浮いた存在であり、岩下も中川も浩一のことよりも、むしろこの滅多に見ることのできない希有な現象に興奮しているように見えた。啓作は鼻白む想いに捕らわれた。

啓作に続き知恵が部屋に入ると、清玄がまずその姿に気がつき、軽く会釈をした。中川も啓作から話を聞いていたのですぐに会釈をした。

一人岩下のみ、彼女の出現に不思議そうな表情を見せた。

やや遅れて淑子が大広間に戻ったとき、啓作が知恵を中川と岩下に紹介しているところだった。

が、知恵本人はもう自分の紹介にも、中川のことも岩下のことにも関心は無かった。浩一の姿を見つけると、その脇に寄り添うように座った。

「浩一さん、いったいどうしたの？」

その呼びかけには誰も答えなかった。が、知恵は続けた。

「まあ、お出かけしてるのね……」

「知恵、浩一が今どういう状態なのか、分かるのか？」

その言葉を聞きつけた啓作が知恵に訊いた。

「ええ、これは彼じゃないもの……。彼はここにいないわ……」

「なぜわかる？」

「……何となくです……」

浩一が自分の近くに居るとき、知恵は自分で自分が興奮していくのがわかるほど身体が熱くなるのである。その自分自身の発する熱情を今は全く感じていなかった。だが、このことを他の人間に説明する気にはなれなかった。

「そうか……。今彼はどこへ？」

啓作もあえて理由を聞こうとはしなかった。

「それは分かりません……」

「知恵なら呼べるんじゃないのか？」

「どうしてです？」

「いや、なんとなくそう感じるだけだ。さっき、その岩下さんが話してくれたんだ。浩一に今意志を通じさせることが出来る人間は、限られているらしい。俺はその話を聞いた時に、それはお前だと思った。何故かは分からないが。だけど知恵と浩一の間にはものすごく強い絆があると感じるんだ。だから、知恵、頼む。彼に祈ってくれないか。またこっちに戻ってきてくれって。そうじゃないと、もう二度と生きたあいつには会えなくなるらしい。それにお前にとっても、浩一はたぶんかけがえのない存在のはずだ。な、そうだろ、知恵」

「わたしにとって、かけがえのない人……。この人が……。本当にそうなのでしょうか。あの時、陽子さんと最後に会ったとき、確かにそんな気もしてましたけど、でも私たちはいつもすれ違ってばかり。いいえ、私はいつも彼に疎まれて避けられてきました。この間だって、私はずっと彼を見ていたのに、彼は私を見ようともしなかったし。今度もそんなことになるんじゃないんでしょうか……」

「馬鹿。お前もこいつも本当に馬鹿だ。どうして一番肝心なときに自分に素直にならないんだ。どうして自分で自分に命令しないんだ。全くなんで、こんなところばっかり似てるんだお前たちは。だから、周りの人間が騙されるんだ。お前たちの気持ちを誤解して……。もう一回、ちゃんと自分の気持ちと相談してみろ。こいつはお前の何なんだって」

「……」

知恵は黙って横たわる浩一をしげしげと見つめた。

「淑子さん、清玄和尚。お二人には、分かりますよね？　浩一を救える人間がいるとしたら、知恵しかいないって。　でも浩一も知恵も、いつもこうなんです。横で見ている人間にはよく見えるのに、本人たちはいつも躊躇ってばかりで、放っておくといつもおかしな方向に話が行くんですよ。いったいどうしたらいいんですか？」

啓作は怒鳴るように叫んだ。

「二人とも欲がない者じゃからかのう……」

清玄が呟いた。

「いや、それだけではなさそうだ」

岩下が急に言葉を挟んだ。

「どういうことです？」

啓作が聞いた。

「浩一君が本当に夜叉なら、普通の人間である知恵さんの好意を躊躇う理由はない。それなら少なくとも知恵さんが積極的な姿勢を取った時は、少なくともすれ違いになる心配は皆無です。ところが今のお話だと、知恵さんが近づくと敬遠されているように感じたと聞こえましたが？　いかがです？　知恵さん？」

「はい、私は何回かそういう気持ちになりました。自分は避けられていると……」

「そんな……」

「いや、たぶんそれは伊集院さんの見方が大当たりなんですよ。知恵さんは間違いなく浩一さんと宿縁の関係があるのでしょう。そのことが知恵さんを避けている理由なのです」

「なぜです？」

「わかりませんが、おそらく彼の夜叉としての覚醒が十分でないということじゃないかと……。それとついでに言えば、宿縁があるということは知恵さんもただの人間ではない。その来歴に彼と何か接点があるという意味だと私は考えます。いずれにしても、今の時点で知恵さんのような人間が現われてくれたことは幸運なのでしょう。もし彼が知恵さんに躊躇うことがあるなら、なおさら知恵さんの力は彼に有効だということの証明でもあるのだから。……さて、我々は引き上げようじゃありませんか」

岩下は急に話を打ち切るように膝を立てた。

「引き上げる？　何故、どこへ？　どういう意味です？」

「伊集院さんの言うとおりにするには、我々がいたら邪魔でしょ

う。知恵さんが話をしなければならない相手は我々じゃない。だから、邪魔者は退散するということです。我々にできることは何もない。あとは知恵さんと彼の問題だ」

岩下はそう言いながら立ち上がった。

「そうか、ならば去ろう」

清玄もそして淑子も立ち上がった。

啓作もそれを見てようやく納得し頷いて立った。

知恵以外の全員が広間を出て障子を閉める時に、最後に淑子があとに残る知恵に一言だけ告げた。

「知恵さん、しっかりね。奇蘭に勝てるのはあなただけよ」

広い部屋には知恵と浩一だけが残された。

祈り

「岩下さん、浩一が夜叉として完全に覚醒してないってどういうことなんですか？」

食堂に戻った岩下に啓作が質問した。

「そうだな。その質問は私が答えるよりも淑子さんの方がうまく答えられるのではないかな？」

「え、私がですか？」

「そう、あなたは夜叉であった者でしょう？　私が思うには、夜叉の力というものは、本来ならば、夜叉の自由な意志によって自由に使えるものではないのですか？」

「私にはそれは分かりません。夜叉であった時、今しゃべっている私は、影から私をただ見ていただけの存在でしたから……。私の身体の主人は奇蘭だったのです」

「そうか。淑子さんの場合は奇蘭という夜叉に身体を乗っ取られていたようなものだったのか……」

「そんなはっきりとしたものではありませんけど……。自分でも淑子なのか奇蘭なのかその境界線がどこにあるかも判然としませんでしたし。ですけど信者さんの相手をしているときに、淑子だったら出来そうにないことを自分が平然とやっているのを見て驚いていた自分がいたような気はしますから、完全に同じというものでもなかったのだと思います」

「なるほど、大変興味深いお話だ。ならば淑子さんは、いや奇蘭は淑子さんの意識を自分の中に取り込んでいたのでしょうな」

「あのそれが何か？」

「浩一君の場合は、そういう二つの意識があるとは思えないでしょう？」

「ええ、まあそうですね」

「そこがポイントだと思うのですよ。彼はヨニの言葉を聞いたことで初めて自分が夜叉だということを知らされた。だが、声が聞けたということは、おそらくヨニの声を聞く前からすでに彼の夜叉と

しての能力はあったと考える方が自然だ。すると、彼は自分の能力に薄々は気がついていたが、それを自分自身が受け入れていなかった、要するに自分が自分を信用しないことで自分の夜叉としての能力を封殺していたのではないかと考えたのです。そう考えれば、祠に来て何故急に彼の能力が表に表れたのかよく分かる……」

「え、じゃあ、彼が人間として不完全、人づき合いができなかったのは、自分の夜叉としての能力が表に出ないようにするためだったのですか！」

「まあ、そう考えればいろいろなことの辻褄が合うと思いませんか？　無論、彼自身も知らないうちの、無意識の自我が取らせた行動だと思いますけどね」

「じゃ、完全に覚醒すると、どうなるんです？」

「私が思うには、少なくとも夜叉としての全ての能力が彼の思いのままに使えるようになるということでしょう。少なくとも自分でその結果に狼狽するようなことにはならないはずだ」

「そうか、こどもなんですね……。自分の能力がうまく制御できないのか。それで陽子さんはあんなことになったんだ」

「自分が夜叉だと知ることが第一歩だったんだから仕方のないことです。ただ、夜叉というのはそういう存在に辿り着くまでに何らかの情念、いや怨念のようなものがあったと考えるのが自然なのです。それを自覚することが第二段階なのでしょう。その時、初めて夜叉は復讐心の塊となって、夜叉としての能力を自由自在に扱えるのだろうと、拙僧は思ったのですよ」

「復讐心の塊……」

啓作が呻くように呟いた。

「知恵をあそこに放っておいて大丈夫なんですか？　突然浩一に殺されたりしないんでしょうか？」

「おや、君は彼女が特別な存在だと信じているのでしょう？」

「え、ええ。まあ……。あの、先ほど言われていた宿縁って何です？」

「宿縁ですか。それは、彼の場合で言えば、夜叉となるきっかけを作った事件の当事者であったものという意味です。おそらく彼が復讐心の塊に変化（へんげ）するのを抑える力を持つ。だから、夜叉は本質的にそういう人物の接近を怖れ、避けようとするのです。そんな人間がいたら、覚醒できませんからね。だから、もし彼女がそういう人物だとすれば、夜叉浩一は、彼女に対しては無力だろうと思います」

岩下の語る浩一の置かれた状況は、そこに居た清玄、淑子、中川、啓作に、考えもしなかったほどの不安を呼び覚ました。これは、大ばくちなのである。もし、知恵に対する自分の観察が間違っていたとしたら……。その考えは啓作のみならず、他の全員が持った考えであった。だが、誰もそれを口には出さなかった。もう他に選択肢はないのである。知恵は唯一の希望なのだ。

全員、無言のまま食卓のテーブルを囲む椅子に力なく腰掛けたまま、ただ時間が流れるのを待つしかなかった。

何かが変わるのを待つだけだった。そして、それが好ましいことであって欲しいと祈るだけだった。

「そんなこと言われたって……」

その頃、広い大広間に浩一と二人にされた知恵は、淑子の言った最後の言葉を気にしていた。奇蘭は淑子と同一のものだったはずなのに、それが壊れ、さらにその相手からまるで自分が奇蘭のライバルのように言われたことが心外だった。

だが、岩下に言われた言葉は意外というよりも、やっぱりという感触を残した。やはり避けられているのは間違いない。だが、それは自分を嫌いという意味ではなくて全く違う理由があるのだということを、それは示唆していた。その原因、理由になったことを自分が知ることはたぶん永久に無いだろう。だが、おそらく過去において、自分と浩一をつなぐ太い絆があったということの証左であるとしたら、自分にとってきっと幸せなことに違いないと思った。そうだ。きっと浩一との出会いは長い長い時間の積み重ねの上に現われ

た幸運なのだ。それを自分は今の今まで、ずーっと追い求めてきたのだ。そういう気持ちが生まれた。その気持ちが自分の手を動かし、横たわる浩一の手を握らせた。

浩一の手を握った。そのことは、浩一をついに自分の手にしたということである。意識の無い浩一であっても、知恵はこの瞬間を長いこと待っていたのだ。

祈るという行為、それはどういうことなのか、浩一の手のぬくもりが知恵に語っていた。浩一の身体は浩一の意識と結ばれた、たった一つの通信回線だった。それを通して浩一の意識に呼びかけること、それが祈りだと思った。

浩一の手を自分の胸に抱き寄せ、両目をつむった。

胸にこみ上げてきた想いが、口から言葉となってほとばしり出た時、それは知恵本人も全く考えていなかった言葉になっていた。

「もうお許しください。わたしにお帰りください」

幻想

―知恵さん！

知恵と見えた女は知恵では無かった。

頭は兜ではなく烏帽子姿だが、身体は鎧で覆われていた。

自分も兜こそかぶってはいなかったが、鎧をつけていた。辺りにも武装した武士が慌ただしく走り回っていた。知恵と見えた女は、多くの武士に守られていた。いや、そうではない。その女こそ、攻撃側を指揮する大将なのだ。女に叱咤激励され、男達はその殺気だった目をこちらに向けていた。

大きな屋敷の邸内にある庭のようだ。塀の外側にも旗指物が右に左に動き回っている。屋敷全体はとっくの昔に包囲されているようだった。屋敷内の戦闘も大方決着はついていた。もう女側の勝利は揺るがない情勢だ。もはや最後の瞬間が来るまで、それほどの時間はかからないことは明らかだった。

向こうの先鋒ととこちらの先鋒が時折つばぜり合いを演じている。が、利は包囲網を完成させた敵方にある。自分の手勢は一人、また一人と確実に数を減らされていた。だが、自分の心中は、目の前の敵に対する敵意が持てていなかった。心を支配しているものは諦観、つまり諦めである。

女は自分の妻であるらしかった。だが、自分に対する憎しみ、敵意に支配されているように見えた。

気がつけば、自分の手勢はただ一人だけになっていた。その男が自分を見上げた。顔には笑顔が浮かんでいた。

―啓作！

その男はもちろん啓作ではない。だが、その顔は啓作そのものだった。その一瞬の後、自分の目の前でその男の首が飛んだ。首のあった場所から、鮮血が噴水のように立ち昇った。

次の瞬間、自分の意識も消えた。最後に見えたのは嬌笑をしている、自分の妻の姿だった……。

「どうしたの？　浮かぬ顔して？」
「どうも自分の前世を見たらしい。最後の瞬間をね」
「そう、嫌なものでしょう。覚えてたら、きっとやりきれないでしょうね」
奇蘭はそう言って、浩一の胸に顔を埋めた。
「でも、覚えてはないのに知ってる顔が二人も出てきた」
「何ですって？　それって大変なことよ」
奇蘭は胸から顔を持上げて浩一の顔を見上げた。
「どうして？」
「それはね、あなたの転生をずっと追いかけている人間の魂があるっていう意味なの。ずっとあなたは追われてるの。しかも二人なんて、前代未聞だわ」
「追われてる？　夜叉の僕を？」
「滅多にない話だけどね。夜叉は何か怨みみたいなものを抱えることで成仏しないで夜叉になるけど、すごく深い未練とか後悔とかを感じた魂が他の魂を追っかけるために成仏しないことがあるのよ。たぶんそれでしょうね。あなたが亡くなったことで、生きていられなくなった人たち。たとえば心中みたいにほとんど同時に死んでるとか」
「ああ、一人は僕とほとんど同時に死んでた。だけどもう一人は僕を殺した側にいたけどな。でも不可解なのは、僕はちっとも戦おうとしてなかった。なんか一方的に殺されてた」
「相手が騙されてるって知ってたんでしょう。典型的なパターンね。あなたは相手が自分に向かって来る理由が誤解だって知ってたのよ。でも誤解を解く方法が無かったのね。だから無抵抗だったんだわ。たぶんあなたその人のこと愛してたんでしょうね」
「なるほど、でも何でこんなことを急に見たんだろう？」
「あなたが見たいと思って意識を集中したから見たんでしょう」
「いや、自分の前世なんて興味ない。煩わしいだけだ」
「まあ、じゃ、あなたが原因でないとしたら……」

奇蘭は空間に向かって手を伸ばした。
大広間の映像が映った。
寝ている自分に縋り付く知恵の姿があった。
「やっぱり……。あなた、祈られてるわよ。声が聞こえるんじゃないの」
「え、あ、これか」
浩一の脳裏に確かに言葉のようなものが届いていた。
「何て言ってるの？」
「謝ってるみたいだ。戻ってくれって」
「じゃ、あの女なのね。追っかけは」
「どうしよう」
「言うとおりにしてあげたら……。私には止められないわ。もし、あなたをここに引き留めておいたら、今度は彼女が夜叉になりそうだもの。どっちみち一度は彼女とあなたは一緒に過ごさなきゃいけない運命ってことね」
「君はそれで平気なの？」
「人間の寿命は短いわ。ちょっと待ち時間が延びただけ。大した問題じゃないわ」
「彼女が僕に関わって、狂ってしまうってことはないの？」
「それはないわ。あなたは彼女に対しては無力よ。きっとあなたが何をしても全部受け入れちゃうようになってるわ。それが彼女の希望で喜びだから」
「そんなに凄いのか。追っかけって？」
「本気で恋をした人間の女は恐ろしいらしいわよ。だから私はあなたを独占出来ない。ここからあなたを帰さなかったら間違いなくここへ来るわ。そうなったらもっと厄介。だから帰りなさい」
「分かった、じゃあそうする。いろいろとありがとう。奇蘭。だけど、暫くお別れだね」
「私には大した時間じゃないわ。あなたには長いでしょうけど。忘れちゃ嫌よ、って言いたいけど、無理なのよね」

「無理？」

「ここでの記憶は肉体には持ち込めないの。そういうルールだから。あなたはあなたの前世のこととか、ここで知ったことは全部忘れてるわ。自分の身体に戻ったらね。またいずれ会いましょう。それに、私が人間界に行けば、きっと話ぐらいならできるかもしれないし。そんなに辛いことでもないのよ」

その言葉とともに奇蘭の姿は消えた。浩一は自分の肉体を目指し、意識を移動させた。

告白

浩一が目を覚ました時、自分の胸の上に知恵の顔があった。

「良かった。目を覚ましてくれて……」

浩一は知恵の顔を一度見て、それから自分の頭、胸、腕に取り付けられている電極と点滴のチューブに目を止めた。

「知恵さん……。いつ、ここに？　それに、いったいこれは？」

「皆さんが心配して。浩一さんが長い時間起きなかったから」

「起きなかった？」

「そうです。他の人が何をしてもどうにもならないからと……」

「……そんな……、それで君は？」

「啓作さんに教えてもらいました。浩一さんが大変なことになってるから、すぐ来てくれと」

「どうして？」

「啓作さんが言うには、浩一さんはあの世に行ったまま帰ってこないかもしれない。連れ戻せるのは私だけだって……。いったいどこに行っていたのです？」

「わからない。何も覚えていない……。そうか、君が来たから僕は目を覚ましたのか……。でもどうしてなんだろう……」

「わたしが浩一さんを起こしたことは、そんなに変ですか？」

「だって君のことは、一度啓作に断ってる……」

「聞いてます。だから今度こそちゃんと直接お話しようと思って……」

「啓作にそうしろと？」

「いいえ、これは私の意志です。彼は私に対する支配権を手放したのです。だから彼はもう私に命令はしません。私も彼に指示を仰ぎません」

「そうか……。でも君は芳子さんのことも愛してたんだろう。それなのにそんなに簡単にあの二人から離れられるものなのかい？」

「いきなり、ずいぶんと辛いことを聞かれますのね……」

「あ、いや、すまん。聞くべきことじゃなかったな……」

「でも、いいでしょう。聞いていただきたいこともありますから」
「聞いてもらいたいこと？」
「私と芳子のことです。なぜ私たちが愛し合うようになったのかそれを知ってもらえば、今何故私が芳子から離れようとしているのか理解してもらえるでしょうし、なぜ芳子が急に私を排除したがるような態度を取るようになったかもわかるでしょうから」
「……別に辛い話を無理にしなくてもいい」
「いいえ、聞いていただいた方が、私が楽になれます」
「そうか……」
「私たちが中学生だった頃、芳子のお母さんが急性のガンで亡くなりました。ガンの進行がとても早くて、それが発見されてから亡くなるまでたった一ヶ月しかありませんでした。芳子はお母さん子だったらしくて、それはひどい落ち込みようで。で、それからです。芳子が家に帰るのを嫌がるようになったのは。仲の良かった私の家に何日も泊まりで遊びに来るようになりました。耐えられなかったんでしょう。お母さんの匂いが強く残る空間にいるのが。うちの両親は別にそんなことを気にしてはいなかったんですけど、芳子のお父さんが大変気にされてて……、でもそれでも無理に連れ帰るより、できるだけ本人の好きにさせたいということで結局そういう状態が続いたんです。ところがある日のこと、学校で心ない男のクラスメートが、いつも二人一緒にいる私たちのことを『お前たちレズなんだろ』って冷やかしたんです。私は、当時からそんなふうにからかわれるとすぐベソをかいてしまう方だったんで、ちゃんと反論もできず、いよいよその子たちを調子に乗せてしまったんです。そしたら、芳子がものすごい剣幕で怒って、私を泣かせた奴は絶対許さないって、すごい勢いでその子になぐりかかって……、中学時分って、女の子の方が身体も大きいし、力も強いから、その男の子コテンパンにされちゃったんです……。それからというもの、私はいつも芳子に守ってもらうような感じになって、芳子は芳子で私を守るのが生き甲斐みたいな感じになってたんです」

「なるほどね」

「ええ、だけど、それは私には居心地がとっても良かったことなんですけど、芳子にはそうでもなかったんだって、最近気がついたんです」

「……芳子さんは背伸びをしていたと？」

「それどころか、本当は私以上に誰かに甘えたかったんです」

「どうしてそれがわかったの？」

「芳子が私のアパートに連れてこられたとき、彼女を見て分かったんです。それまで私は、一緒に居ながら、全然そのことに気がつかなかった……」

知恵は急に感極まったように涙声に変わった。

「わ、わたしは、いつも芳子の背中に隠れてばっかり。ちっとも、芳子のことなんか、考えずに、じ、自分のことばかり、考えてたんです……。だから、アパートで裸にされて縛られてうっとりしている芳子の姿を見たときに、もう私は芳子に甘えるのは止めようと、芳子に甘えさせてあげようと……」

「芳子さんに甘えさせる……。君が今度は芳子さんを守るという意味か？」

「そうです。私が意気地無しだったから……、そんなだったから、芳子はお母さんが亡くなって、本当なら自分が一番淋しかったのに、無理に無理を重ねてずっと私を守ってきたんです……。それなのに私といえば、いかに半ば強制されたとはいえ、啓作さんに奴隷の誓いを立てて、その芳子の想いを裏切ってしまった……。だから、…だから、今度は私が芳子を守る立場になろうとその時決心したんです。それで私は彼女に女王さまとして接することに決めたんです」

「女王さま？　じゃ、彼女を苛めたのか？」

「そうです。私は、芳子のことを思いきりムチで打ったんです」

「何で？　それが甘えさせることになるのか？」

「そうです。だって芳子はマゾだって分かったから。マゾの気持ちなら私にはよく分かるんです。いっぱいいっぱい苛めてもらって、

その後ごしゅじんさまに褒めてもらいたいんです。よく頑張ったって。そんなふうに認めてもらって甘えたいものなんです。自分がそういう気持ちにいつもなっていたからよくわかるんです……。それに啓作さんからも、命令もされてました。芳子をちゃんとした奴隷に調教しろって」

浩一は不思議な物語を聞かされた気分になっていた。浩一には想像のつきにくい世界だった。

「……で、うまくいったんだ」

「はい。思った通り、責めて責めて責め抜いた後の芳子の可愛さったら、もう赤ちゃんみたいで。本当に満足そうでした」

「そうか……。じゃ、君たちは、その、啓作のところで今までとは全く違う関係になったということか。で、それでうまくいってたと。それなのに何故、芳子さんが妊娠しただけで関係がおかしくなったりしたんだ？　子どもができることぐらい、十分予想できたはずじゃないか？」

「それは、確かに予想できたし、実際そうなっても何も困らないだろうと思ってました。でも、一つだけ見落としていたことがありました」

「何？」

「芳子の気持ちの変化です。芳子は自分が身ごもったことで思い出したんです。お母さんのことを。そして自分に言い聞かせたんだと思います。守る立場に戻るように」

「守る立場か……。こどもをか？」

「いえ、正確には多分こどもということじゃなくて、こどもを産み育てられる環境全部、家庭と言ってもいいと思います」

「家庭……」

「そうです。たぶん芳子にとってお母さんはそういう存在だったんでしょう。だから身ごもった自覚を持ち始めたあたりから、私を見る目が急に変わったのを私は感じました。そして芳子がどれだけ深く啓作さんを愛しているかも……。それに比べれば私の啓作さん

への想いはとても敵わない……、そんな想いに捕らわれたんです。私にも芳子が妊娠したのではというカンも働いてましたから。本人も自分の気持ちの変化に当惑していたようですけど。でも私にはそれがどういうところから来たのかすぐわかりました。それで覚悟しました。先に妊娠したということは、神様が芳子をここに残すべきだと考えたんだと。自分はここに居てはいけない存在だと」

「啓作は芳子さんのことを知ってたのか？」

「いいえ。でも、一番辛い思いをしたのはたぶん芳子でしょうね。何で急に自分の言うことが変わったのか、妊娠で何でこうも自分の感情が激しく揺れ動くのか、分からなかったと思いますから……」

「そうか」

浩一は、啓作の当惑しきった表情を思い出した。啓作もまた混乱し、悩んでいた。確かに妊娠して冷静さを失った芳子と知恵を天秤にかけたら、知恵を取る選択はありえない。初めから知恵を捨てるつもりは無かったとすれば、確かに啓作の未練の大きさも分からないでもなかった。女のことをあれほどよく知っている啓作でさえも、なお、妊娠で女がどう変わるかまでは予想が出来なかったのだ。

自己過信。そんな言葉が浩一の脳裏を横切った。

知恵が啓作のところを離れることに何のわだかまりもないということ、そして啓作と芳子にとっても、それがいいと考えられていること、そういうことは分かった。だが、何故自分なのか。啓作が啓作の判断で自分を選んだというのは知っている。だが、それでは自分が納得できなかった。

「君が啓作と芳子さんのところから離れたがっているということは分かった。だが、どうして僕にそんなにこだわる。もっと啓作と全く縁のない人間を捜す方が、後々のことを考えればいいんじゃないか。もし僕と一緒になったら、それこそ啓作や芳子さんともこれからも顔を合わせる機会はかなりあるだろうし……」

「それは、啓作さんとか芳子の問題とかとは全く次元が違う問題なんです。わたしにとっては。あなたは特別な存在です……」

急に知恵はまた泣き声に変わった。昂ぶる感情を抑えられないようだ。

浩一も間近にあってぬくもりを伝えてくる知恵に感情の昂ぶりを感じていた。そうでなくとも知恵の存在は、あの牧場に一緒に行った時から、それだけで浩一から平常心を奪うのである。だから知恵をそのまま見ることをいつも避けていたのだ。だが、腕をつかまれ、間近から顔を覗き込まれている状態ではもう逃げようがなかった。そんな状態の中で、知恵は自らの情で崩れかかっているのである。浩一はかつて祠で奇蘭と初めて二人きりにされた時に感じていたあの恐怖に近いものを感じていた。しかし、知恵の熱い涙が自分の顔にとどめなく流れ落ちた時、それが変わった。何かが浩一の心を大きく揺さぶり始めていた。

「ど、どうしたんだ」

「それなのに、受け入れてもらえなかったから……、やっと会えたのに拒否されたから……、啓作さんの奴隷になったんです！」

「ぼ、僕が君を拒否した！？　いったい、いつ？」

「あの牧場での夜です。抱いて欲しいってお願いしたのに……」

「あの時……。あそこでは君のことは抱けなかった。どう言われてもしょうがないが、他に選択肢はなかった。だが、それで啓作の奴隷になったというのはどういう言い方なんだ？　まるで僕が抱いてたら、啓作を拒否したとでも言わんばかりの言い方じゃないか。それはいくら何でもひどいだろう。あの時は知り合って間もなかったし、それに啓作が言っていたが、あの夜の君の状態は、男なら誰でもいい状態だったはずだ。違うかい？」

浩一の中の冷静さを失った心が早口で必要以上の言い訳をさせた。浩一は思わず口に出した自分の言葉に、自分自身でおののいていた。

それを聞くと知恵は、かえって冷静さを回復したようだ。顔を上げ、少しばかり浩一の顔から自分の顔を離した。そして浩一とは対照的なゆっくりとした、諭すような口調で話し始めた。目を細め、口元には微笑も浮かんでいる。

「……そうね。そう言われたら私も私の状態がどうだったか自信はありません。ただ、あなたに受け入れてもらえなかったことは、とてもとても、言葉ではいいつくせないぐらい、すごく大きなショックに感じたということもどうか分かってください」

「そんなこと今頃言われても、としか言いようがないけどね。それに今の僕ならともかく、あの時点では君と二人きりで一緒に居ることすら、僕にとっては苦痛だったんだ」

浩一は自分の口を抑えたいと思いながらも、知恵に向かって妙になじるようなことをしゃべる自分の口をどうすることもできなかった。だが、知恵はまるでそういう浩一の対応を読んでいたかのように落ち着いて対応をしていた。

「そうでした。すみません、つまらないこと言って。でも、これだけは信じて。わたしにはあなたが必要なの。啓作さんのところで過ごしたことではっきりとそれがわかったの。おそらく啓作さんも同じことに気がついたみたい」

浩一の中で自制を失い暴れまわっていた心が、この知恵の言葉で突然動きを止めた。

「……僕が必要？　なぜ？」

「私にもよくわからないわ。たぶん理屈でも感情でもないのでしょう。だけどそれが一番私たちにとって正しい選択だと思います。あなたはまだ私のことを少ししか知らないけど、私はもうあなたのことをたくさん知ってるつもり。その上であなたとならきっとうまくやっていけるって思えます。それじゃいけませんか？」

「ぼ、僕は……」

「今度こそ拒まないで。何も言わず私を受け入れてください。何も心配しなくていいから。あなたが私をどう思っていようと私は全然それを気にしないから。それとも私が嫌い？　不潔だと思う？　一緒にいるのはいや？」

「そんなことはない。でも、僕は啓作みたいにはなれない。君を幸せにする自信はない……」

「あのね、浩一さん。浩一さんは私を愛するという意志を持てないと言ったんですって？」

「ああ。そういう考え方を啓作から教わったから……」

「女にも意志はあってもいいと思わない？」

「て、どういう？」

「私はね、あなたを私のごしゅじんさまにするって決めたの。これが私の意志。きっと最初からこうなるって自分で分かってたんだと思う。私はずっと前から気にしてたの。あなたが誰かと結婚しちゃうんじゃないかって。それがいつも気がかりだった……。だから啓作さんがあなたに私をやると言ったときにはすごく嬉しかったの」

「じゃ、君はいったいいつから僕のことを？」

「牧場へ行くクルマに乗る前。私言ったでしょう。彼に。あなたに乗り換えようかなって」

「最初に会ったあの時！　あんなところで。だけどそれはルックス目当ての軽い気持ちだったんだろう」

「彼がそう誤解しただけです。私はメンクイでも何でもないし。ただあなたを見たときに何かカミナリに打たれた感じがしてたんです。あのときはそれが何か分からなかったけど。……あの後啓作さんに、自分がマゾで、あんなふうに辱められて、苛められて、嬲られることを喜ぶ女なんだって教えられたでしょう。だけど責めてくれるのが啓作さんしかいなかったから、私は啓作さんをごしゅじんさまとして受け入れたの。だけど本当のことを言えば、それはあなたにそうなって欲しかったのよ。それがやっと分かったの。あなたと初めて会ったのは、ほとんど啓作さんの女としてみたいなものだったから、しかたがなかったけど」

「でも僕は夜叉だぞ。もしかしたら君を廃人にしてしまうかもしれないんだぞ。それでもいいのか？」

「あなたが夜叉であろうとなかろうと、私にはどうでもいいことなの。それから、あなたが私にどんな仕打ちをするかということも

同じようにどうでもいいこと。もしあなたが言うように私が廃人になるとしてもそれは私にとって本望なのよ……。

私、啓作さんと芳子のところから離れてから、あなたのことを忘れたことは一時もなかったわ。啓作さんへの未練は全然感じないのにね……。私をムチで打ってくれる人があなただったら、どんなに嬉しいか、あなたが私にろうそくを垂らしてくれたらどんなに嬉しいか、あなたに気絶するほど責められたらどんなに嬉しいかってね……。だから牧場で啓作さんに責められながら、あなたにその姿を見てもらえたのはすごく嬉しかったのよ。……私は、あなたがそう望むなら、犬でもブタでも何にでもなるわ。あなたの命令を聞くことは私のあこがれ。あなたが私を縛って吊して罰を与えることは私には甘い愛撫と同じ。私はあなたに仕える奴隷になれるなら何でもする。私はあなたの希望も願いも欲望も何もかも全部受け入れたいの。血を流すのも厭わないわ。あなたに無茶苦茶にされたいの。ね、だからお願い、私のごしゅじんさまになって」

知恵は浩一の上半身を引き起こし、ふとんの上に座らせると、浩一のひざの上にすわるようにして、自分の背中を浩一に預け、浩一の腕を自分の腰に巻き付けさせ、そして振り向くように浩一の口に吸い付いた。

浩一は知恵の告白を、ある種の戦慄を感じながら聞いていた。愛すると決めた女は恐ろしいとも思った。だが、その強い意志に逆らえるほど強い意志を自分が持っていないこと、そして知恵の意志を拒否する理由も、どこを探しても見あたらないことも分かった。

返事の代わりに、浩一は知恵の頭に自分の右手を当て、その髪をすくった。長い黒髪の感触が心地良かった。浩一は初めて知恵の身体の感触を知った瞬間、口を離し浩一が呟いた。

「あれ、どうしたんだろう?」

「何が?」

「君の髪の感触も、君の唇の感触も、初めてじゃない気がする……。ずっと前から知っていたような気がする」

「私もあなたの感触を知っていたような気がするの」

知恵もまた浩一の手が髪に触れる感触、唇の感触をなつかしいものと感じていた。まったく初めて触れたはずのものであったはずなのに。が、それよりも浩一の言葉の方が彼女には重要だった。

知恵は岩下の話はせずに、それだけを答えた。

「不思議だね」

「きっとこうなる運命だったのよ」

「運命……。それなら、夜叉も君には悪さができないんだろうなぁ、きっと」

その時、複数の足音が外からどやどやと近づいてきた。どうやら二人の話し声に気がついたらしい。

障子が開いて真っ先に飛び込んできたのは啓作だった。

「こ、こういち！　や、やっぱり、知恵は本物だったんだ」

全員が部屋になだれ込み、たちまち浩一のふとんを囲んで座った。

浩一はただポカンとするばかりだった。だいたい目の前で目を真っ赤にして泣いている啓作を見ることなど生まれてこのかた、一度も無かったことなのである。

「しかし、不思議なことはあるもんだ」

中川が言った。

「人間の知ってることの方がまだまだ少ないということですよ」

岩下がそれに答えた。

「よかったわね。知恵さん。やっぱり知恵さんじゃなきゃ駄目だったのね。でも私なんだか複雑だわ、私の分身が知恵さんに負けたような気がして」

淑子のこの言葉に、座に笑いが沸いた。

一人何のことか分からなかった浩一を除いて。

エピローグ

啓作と浩一

ものごとには勢いというものがある。その後、浩一、啓作、それぞれの結婚式が現実のタイムテーブル上に具体化されるのにそう時間は掛からなかった。しかも二人の式の話を聞いた清玄も自分たちの式の話を持ち出した。こうして三組合同の式が企画されることになった。その段取り決めなどが一段落した頃、啓作が一人ひょっこりと浩一の会社を訪ねてきた。一緒に飲みに行こうと言う。事実上二人とも妻帯者のような生活になっていたので、久しくサシで飲んでいなかったことに浩一も気がついた。

繰り出した先は、知恵の話を最初に聞くことになったあのバーだった。ウィークディの飲み屋に入るには少々早い時間である。案の定、客はまだ少なく、カウンターの一番隅に陣取り隠れるように座ったものの手空きのホステスがすぐ集まってきた。そのホステスたちを啓作が例の通り適当にあしらい、ようやく二人だけにしてもらったところで、啓作が浩一に話しかけた。

「知恵はどうだ？」

「うん、元気だよ」

「いや、そういうことじゃなくて、お前が気に入ったかどうかだ」

「あ、いや、それか。うん、そうだな。まあ、……かな」

浩一が小さくしかも早口に言ったので、啓作には肝心のところが、全く聞き取れなかった。

「ああん？　今何て言った？」

「まあ、いいよ」

「いいよって、何がいいんだよ」

「いや、だから知恵はいいよ」

浩一には珍しいことに顔を赤らめてややうつむき加減にぼそぼそと言った。

「なんだ、お前もしかして照れてるのか。ファファファファファ

ファ、これは傑作だ。まさかお前が女のことを話すのに照れる日が来るとは思わなかったぜ」

「そうか……」

そう言われた浩一も以前のように啓作に笑われてもムキになることは無かった。素直に啓作の笑いを受け入れ、自分もそれに微笑みを返していた。

「なんにせよ、いろいろとありがとう……。無茶苦茶なやりかただったし、とんでもないお化けも出てきたけど、お前のおかげで俺もようやく人並みに家庭を持つ自信がついたよ」

浩一は少しだけ微笑みを浮かべ静かに頭を下げて啓作に言った。

「よせよ。俺こそ、礼を言わなきゃいけないと思ってるのに……。知恵を受け入れてくれて感謝してる」

「それはお前が礼を言うべきことじゃないと思うな……。知恵も多分そう言うと思う」

「そうか……。そうかもしれん。ところで、お前知恵の心の声とか聞けるのか？」

「いや、それが不思議なんだが、知恵と一緒に生活をし始めたら、知恵どころか、誰の声も聞こえなくなった。もう俺は夜叉ではないのかもしれない。知恵がその力を消してしまったみたいだ」

「知恵はお前の封印でもあったんだな。淑子さんの背中の彫り物のような……」

「そうか、俺は知恵に封じられたのか……。そうかもしれない。知恵がいない人生は俺にはもう考えられなくなってるし……」

「何にせよ、結局俺は、知恵にもお前にも勝てなかったな……」

「勝てない？　どういう意味だ？」

「比喩だ。そう深い意味はない。俺には知恵という人間もお前という人間も、そのまま受け入れるには俺の器は小さすぎたという気がしてならないんだ。いや、そういう言い方は違うな。俺とお前たち二人をそもそも比較すること自体間違っているという言い方の方が正しいんだろうな……。俺は今度のことでお前たちがどういう人

間なのか分かった気がした。いや、それだけじゃない。俺自身もまたどういう人間なのか分かった気がしたんだ」

「お前には珍しく弱気な感じだな」

「弱気？　俺はいつも弱気なんだ。清玄和尚が言ってただろう。本当は人一倍弱虫なんだ。でそれが分かってるから、なんとかそれを悟られまいと頭を使い、身体を使い、虚勢を張る。もし俺がお前みたいな精神構造の持ち主だったら、今頃、自殺していたかもしれないな。だが、お前は違う。知恵も違う。世の中のものすべてが自分に向かってきても少しも怯まないような強さを感じる。俺が持とうと目指しているものが多分お前たちなんだろうな。きっと。お前にとっては強気であろうと弱気であろうと何も変わらないだろう？　俺にはそんなことはできない。そういう差だ。俺は寺でお前が目を覚まさなかった時、本当に狼狽したんだ。今だから白状するけど。……頭の中が真っ白になった。何も考えられなかった。それぐらい動揺していた。だが、知恵は、そんな状態のお前を見ても冷静だった。まるでお前を起こす自信があるみたいだった。……そしてお前もそうだ。たぶん、俺の記憶に間違いがなければ、お前が知恵とちゃんとスキンシップをとったのはあの晩が初めてだったんだろう？」

「あ、ああ。そうかもしれない。その前は触るなんてとても出来なかった状態だったし」

「お前、俺たちがあの大広間に入り込んだ時、自分たちがどういう姿だったのか覚えてるか？」

「え、どうだったかな……。確か知恵は俺のすぐ前にいた……」

「そう。その通りだ。素っ裸で毛布もかけてないお前がふとんの上に座って、知恵はお前の膝の上に乗ってたんだ。そんな格好をしながら、お前も知恵も何もないような顔して俺たちに微笑んでたんだ。俺にはそれがまず信じられなかった。それで思ったんだ。お前も知恵も他人の目に関心がないということを。俺はその逆だ。どう他人から見られるかを常に計算しながら生きてきた……」

「それはそれですごいことじゃないか」

「小人の知恵とでも言うのかな。もっと言えばせこいんだ。生き方が。お前たちの生き方は違う。本物なんだよ。何にしても……。で、さらに言えば、俺みたいな生き方は世の中の主役にはなれない生き方なんだ。成功してもそれまでさ。だからお前が夜叉だと聞いたとき、俺にはどこかでやっぱりという気持ちも持った。やっぱり自分と同列の人間じゃないってな。しかも不思議なことにお前たちあっての俺という気がしてるんだ」

「お前の言ってる意味がよくわからないよ」

「ああ、俺にもわからない。だが、どこかでそれを感じていたから、結局お前ににつきまとい続けた。そしてこれからも……」

「変な話だな」

「ああ、だけど俺から見ればお前と知恵が一緒になるということは、何故かやっと求めていたものが完全になったということになるんだ。そう感じてる。そしてそれがやけに満足させてくれるんだ。俺の気持ちを」

「それは知恵をお前がまだ愛しているということだろう」

「いや、知恵を愛しているということとは全く別のことだと思う。言ってみれば達成感かな。長いことかけて努力してきた事業がようやく報われたと……」

「それは間違いないだろう。知恵をお前が牧場に誘ってからもう八ヶ月になる。お前ぐらいだろう。一年をこんなに目まぐるしく過ごしている奴は……」

「その程度の長さじゃない。何十年も何百年も待った重みだ」

「前世のことか？」

「おそらくな。たぶん、お前が夜叉になったことと関係があるんだ。そして知恵も。俺たち三人はきっとこういう定めになるように仕組まれてたのさ。誰かに。知恵も俺もようやくそれに気がついた。たぶん分かっていないか、知らされても思い出せない状態にされてるのはお前だけだ……。だとすれば、これからも俺たち三人は離れ

ばなれになってはいけないということになるな。俺はおそらくお前の部下、いや家来だったんだ。お前たちを守るための」

「家来……」

「ああ、そう考えればお前が目覚めなかったとき、何故俺があれほど動揺したのかも分かる……。ものすごい後悔があったんだ。しかも同じ辛さを過去に経験している……。またダメだったかってね」

啓作とまさか前世の話題をすることがあるなどとは浩一は夢にも思わなかった。だが、知恵の自分に向けられた告白と啓作の今の話がこれほど附合するのでは、それを単なる偶然で片付ける気もしなかった。

「じゃ、よかったな。お前もほっとできて。きっと頼りない主人だったんだろう。前世の俺は」

「そうかもしれない。はは。頼りない主人だったから見放せないんだ。ついでに言えば、まだ俺は十分安心できてないのさ。お前たちの現状に……」

「まだ、何かあるかもしれないと？」

「いや、そんな具体的な心配をしているわけじゃない。ただ、自分の目の届く範囲にお前たちには居て欲しいのさ。今のままだと俺が忙しくなって、俺がお前に会いに来られなくなったらもうそれっきりになる可能性が高いだろう？」

「まあ家庭を持って落ち着いたらそんなもんじゃないのか？」

「だが、それが俺には受け入れられないのさ。不安にさいなまれるんだ」

「じゃ、どうしろと言うんだ？　まさかお前と結婚しろなんて言わないだろ」

「お前と仕事の関係も作りたい……。俺は近いうちに親父の後を継ぐ。そしたら、お前に不動産の設計を依頼するから、お前もその時に独立して欲しいんだ。どんなことがあってもお前が困るようなことには絶対にしないから……」

浩一には啓作の頼みを拒む理由が今度こそ見つけられなかった。

知恵を受け入れた以上、啓作もセットのようなものなのである。

「わかった。よろしく頼む」

この返事しか思いつかなかった。

結婚式と初夜

真冬、雪が積もり始めた正円寺は、開山以来の椿事を迎えていた。本来なら年末年始の準備で忙しい時期なのに、例年以上格別に忙しくなる状態になっていた。同じ日に三組の結婚式を、しかもそのうちの一組はここの住職夫妻の結婚式という珍しい日になったのである。

住職自身が当事者のため、住職の代行を出張してやってきた岩下がすることになった。

仏式の真っ白な花嫁衣装になったのは、もちろん、淑子、芳子、知恵の三人であり、羽織袴姿の新郎は、清玄、啓作、浩一であった。

この奇妙な合同結婚式がなぜ急に行なわれることになったのか、詳細を知るものは少なかった。それどころか、当事者でも芳子などはほとんど何も知らなかった。何故この山深い寺で自分たちの結婚式が行なわれるのか、その理由を全く知らされていなかったのである。ただ啓作が命令したからおとなしく従っているだけだった。たも自分たちと同じ日に同じ場所で結婚式を挙げてくれるということを迎えられたことは何よりも嬉しかった。知恵に対する申し訳なさがかなり薄まる思いだった。しかし、すでにお腹で動きまわるのが分かるほど大きく成長した子どもが、自分の手で育てられなくなるということに多少の未練を感じてはいた。だが、その里親になる中川夫妻が、自分たちの結婚式に夫婦揃って来てくれていることが、いろいろな意味でその傷心を癒してくれていた。

だ、意外にも知恵がこんなに早く新しいパートナーを見つけ、しか

そんな芳子と知恵の姿を満足そうに眺めていた人物が一人居た。伊集院十三である。が、周囲の人間は、息子の花嫁である芳子のことはともかく、何故隣の知恵の方に微笑みを浮かべながら盛んに「おめでとう」と言うのか訝っていた。

時節柄、場所柄などの条件もあって、三組もの合同結婚式の割には参列者はそれほど多くなかった。しかも大部分のものは、突然結婚式の案内を受け取り驚いて来てみたら、三組の合同結婚式である

と初めて知らされるような塩梅だった。

淑子に招待されて一団でやってきた年寄りのグループは全く違う驚きを味わう羽目になった。彼らはあの祠の信者だったのである。清玄はいろいろ言われることを覚悟の上ですべて公にすることを決心したのである。それは祠を封鎖したことが結果的に、ヨニに世を徘徊させることとなり、今回の事態を招いたことに対する反省でもあった。祠に信者が来るようになればヨニも戻るだろうと考えたのである。が、信者たちにとっては、こともあろうにそのご神体が隣の仏教のお寺の住職の嫁に行くという事態に当然ながら当惑することになった。彼らに対しては清玄と淑子が結婚式の始まる前に修験場に集めて経緯の説明を行い、さらに今後のことについて次の提案を加えた。

今後、祠の神体は淑子の父親の書いた淑子の背中の彫り物の下絵となったヨニの絵とすること

祠に通じる通路を昔通り開放し、誰でも自由に祠を参拝できるようにすること

祠の維持管理は寺で責任をもって行うこと

その上で、寺への入信は勧誘しないが、寺の檀家として参加して欲しいと要請した。

実態がもうそれ以上どうしようもない形で進んでいることは明らかであったので、その場でただちにこの提案は信者たちに支持された。さらに言えば、ヨニが清玄に淑子を嫁にせよと告げたという話は、信者にとっては反対するあらゆる理由を失わせていた。破戒坊主と内心思っても、そもそも仏教徒でない者がそれを言うことは出来なかった。かくて管理上、祠は寺と一緒にされることになり祠の維持の目処も立つことになった。

このように様々なことが同時に解決される複雑なイベントだったが、読経を聞かされながら、深い山の中の真っ白な雪景色を背景として三人の白無垢に包まれた花嫁を見せられた参列者は、経緯はと

もかく、他の結婚式ではあまり感じたことのないほど、神聖な結婚式を見せられた感があり、それなりに感動し満足して帰っていった。実は花嫁のうちの一人はかなりの身重だったのだが、和服はそれをきれいに覆い隠していた。見た人間の多くは単に少し太ったお嫁さんとしか見なかったのである。

が、一方でこれほど神聖な場所とムードでしめやかに行なわれた結婚式とは全く対照的な催しも同時に企画されていたのである。

三組の新婚カップルは、どの三組も本当の意味での初夜などとっくの昔に終わっている状態である。浩一はきたないアパートを引き払い、知恵のアパートに転がり込んでいた。それはそこが陽子の記憶も啓作の記憶もない場所だったからである。つまり、浩一たちも事実上夫婦のような生活をすでにスタートさせていた。だから、どの三組にとっても、そのままでは結婚式当日の初夜がちっとも印象に残るものにならない。啓作の提案で結婚式の夜には、特別な想い出作りをやろうじゃないかということになったのである。啓作から見れば、清玄とは昔女遊びを一緒にした相手であり、知恵は元妻のようなものだ。つまり、複数プレイをやる抵抗は少なかった。淑子は最初その話を聞いた時は、複数ＳＭプレイと聞いて驚きを見せたものの、それに近いことをかつて祠でやっていた身である。想い出作りという言葉に結局同意した。ただし、このことは後に啓作たちを逆に驚かせることになる。

実はこのイベントを啓作が提案した一番の理由は、単なる想い出作りではなかった。それは浩一と知恵の今後を案じたことだったのである。いかに二人の仲が深まっても、啓作によって徹底的にマゾに調教された知恵をただ浩一に任せるだけでは、十分な「引き継ぎ」になっていないと考えたのである。もちろん知恵が浩一を指導はするだろう。だが、知恵に教えられることは限られる。つまり、このイベントを通じて、啓作は知恵の扱い方の基本を浩一に教えるつもりだったのだ。無論、その先は啓作のやり方では知恵にとっては十分でないことは分かっているが、少なくとも啓作が教える方が、浩

一が先に進むまでの時間を短縮できるだろうし、知恵が不満を持つ危険を避けられるだろうと考えたのである。

実際のところ、芳子の件があったことで知恵はＳ役のことを学んではいたが、そういう経験があることと、自分のごしゅじんさまを育成することは全く別のことであり、浩一のごしゅじんさまぶりはかなり中途半端なものだった。皮肉なことには、この段階での浩一は、山に行く前だったらありえないことに、相手への思いやりが中途半端にあって、まだ痛みを与えることが相手の満足を生むということを信じ切れていなかったのである。また、浩一の気持ちが知恵を受け入れ、知恵への執着心が浮かんだ途端に、それは一種の照れ、つまり平常心の喪失を浩一にもたらしていた。つまり浩一のＳ嗜好はもともとそれほど強くはなかったし、知恵を愛するという意志がそういう行動に踏み切らせるところにいくまでには成長していなかったのだ。浩一はすべての面で中途半端だった。

知恵は浩一と一緒にいられることに満足はしていたが、啓作の心配した通り、啓作と浩一の自分に対する扱いの差に起因するところで不満を密かに募らせていたこともまた事実だったのである。

それを読んでいた啓作は、浩一に対してはまず知恵にアプローチし、そして知恵から浩一にこの話をさせた。今の浩一が知恵からの願いを拒むことはありえないと考えたのだ。

作戦は成功し、浩一は驚きながらもこのイベントへの参加を承諾した。

かくて、結婚式の段取りを決めるときにすでに夜のＳＭ複数プレイパーティの段取りも同時に行なわれることになったのである。

このため三組とも結婚式直後の披露宴も合同でこの寺で行ない、翌日、翌々日と連泊で寺に宿泊することになった。当然、このことを知るものは当事者以外は誰もいなかった。清玄・淑子夫妻だけ数日の国内旅行。残りは海外への新婚旅行にすぐ出発するものだと信じられていたのである。

岩下にはもちろん事情は知らされていない。結婚式終了とともに

すぐに東京へ引き上げることになっていた。

ことはすべて順調に進んだのだが、一つだけ椿事が発生した。それは打ち合わせの途中で発覚したもので、浩一と啓作、知恵、芳子は互いに顔を見合わせることになった。

「じゃ、奴隷妻の皆さんにはこう並んでもらって……」

と啓作が仕切った時である。淑子が突然言った。

「うちはまずいの。それじゃ困りますわ」

「えっ、どうして？」

「だって、うちで奴隷になるのは彼なんですもの。ね、そうでしょ、あなた」

呆然とするメンバーに清玄が言った。

「ああ、うちはそういうことなんだ。だから奴隷妻だとちがう。ただの奴隷という言い方にしておいて欲しい」

清玄は淑子の卓越した性技によってすっかり本物のマゾに調教されていたのである。

浩一の脳裏に「ヨニの祟り」という言葉が浮かび、その瞬間、笑いがこみ上げてきた。だが、目の前で真剣になっている淑子と、神妙にしなだれている清玄の前ではそれを出すわけにはいかず、腹の底でそれを押し殺すのに死ぬほど苦労をすることになった。啓作もおそらく吹き出したいのを必死に我慢するかのような妙に表情のない、まるで白い紙の上に鉛筆の細い線だけで輪郭をさらさらと書いただけのようなのっぺりとした顔を作っていた。しばらく会話がピタッと止まった後に、ようやく啓作が落ち着いた口調でもう一度言い直した。

「じゃ、奴隷の皆さんにはこう並んでもらって……」

淑子と清玄が大まじめに頷いた。

おかしさを何とかやり過ごした後、浩一には新たな感慨が湧いた。自分が祠で会った時、淑子がまさかそういうプレイをあの和尚とするようになるなどとは想像もできなかったものだ。だが、一緒に暮らしたことで見えなかったものが見えるようになったのだろう。他

人と出会うことで知らなかった自分を知り、そして相手も自分も成長する、浩一はかつて淑子いや奇蘭が自分に教えてくれたことを思い出していた。そして自分も、かつて女性に積極的な行動がまったく取れなかった人間であったものが、知恵と一緒に暮らすようになってから、大きく変わっていたことにようやく気がついた。しかし、ほんの少し前まで、浩一は女性と二人きりになることさえも苦痛に感じる人間だったのである。

そして、さらにこの結婚式後のイベントのおかげで、浩一はもう一段の成長を遂げることになる。

啓作は縄を駆使し、何も出来ないでいる浩一の目の前で、芳子と知恵を二人を全く同じ形で縛り上げ、鴨居から片足だけを吊る形に固定したのである。無論、妊婦である芳子に配慮し、縄は腹を圧迫するような位置にはかけられていない。上半身と足だけだった。そうしておいて、啓作は、浩一に自分がやるように知恵を責めろと言ったのである。啓作がお腹を大きく出っ張らせた芳子を責めるのを横で見ながら、同じことを知恵にしていく。

浩一は持たされた鞭で知恵のお尻を恐る恐る叩く。

弱い破裂音が少しだけあがった。隣の啓作はその音を聞きつけ、浩一のやり方を見た。

「ダメだ。そんなんじゃ。お前、本気で知恵を愛するつもりがあるのか？　もっと真剣にやれ。せめてこれぐらいでないと、知恵は絶対に満足できないぞ」

啓作はそう言うとかなりの力を込めた一撃を芳子の尻に向けて放った。芳子の大きな腹がさらに前に向けて突き出され、芳子から大きな悲鳴が上がった。

浩一は、冷や汗で汗まみれの状態だった。かつて感じたことのないほどの怯えに苛まれていた。皮肉なことに煩悩に苦しむ状態だったのである。ただ目の前の光景に瞠目するばかりで身体がいうことをきかなかった。

そのとき、清玄は頭から真っ黒なマスクを被せられ視界を奪われ

た状態で、床に四つん這いになって淑子の椅子にされていた。淑子はそこに座って浩一の様子をずっと眺めていた。突然、その淑子が浩一に声をかけた。

「浩一さん、あなたが怯えてちゃダメじゃない。ほら、知恵さんの表情をよく見てご覧なさい。あなたを待ってるでしょう。知恵さんはあなたが何をしてもそのまま受け入れてくれる女(ひと)なのよ。だからあなたは自分に自信を持って、思い切り自分を知恵さんにぶつけなきゃいけないの。もし遠慮したら、知恵さんに失礼よ。ちゃんと知恵さんをよ～く見て、その願いを汲んで上げなくちゃだめじゃない」

淑子に諭され、その声を聞き、浩一はようやく落ち着きを取り戻した。本来の浩一に戻ることができた。改めて知恵の縛られた裸身を見た。確かに淑子の言うとおり、知恵は全身で何かを語っていた。縛られた裸身のあらゆるところから何かが放出されていた。

「そ、そうか……。じゃ、いくぞ、知恵」

「お願いします、ごしゅじんさま」

浩一の手による、全く遠慮のない初めての鞭の一撃が放たれた。聞いたことのないほど大きな知恵の悲鳴が上がった。だが、その瞬間、浩一は初めて知恵の心の声のようなものを聞いた気がした。その声はこう言っていた。

「ありがとうございます。やっと私を受け入れてくれて」

自分がいかに知恵の前で自分を取り繕っていたのか、そういうことにようやく浩一自身も気がついた。知恵の望んだ、自分の欲望をすべて知恵にぶつけて欲しいという言葉をどうとらえたらいいのか、ようやく分かった。女性を縛り鞭で打ちろうそくを使うことへの躊躇いが消えた。優しさとして表面上に現れる思いやりとは全く違う形の思いやりが存在することが分かった。女性の前で自分の欲望をすべてさらけ出すことが相手に対する信義だと信じることができるようになった。それが自分の知恵に対する愛の姿だと思えるようになったのである。

浩一と知恵の間にあった最後の壁が崩れた瞬間だった。

彼岸の絆　完

ウェイフさんからのあとがき

じゃがいもとニンジンと玉ねぎと牛肉があなたの目の前にあります。使う道具、調味料はあなたが欲しいものなら何でも揃う。

さて、あなたは何を作りますか？　肉じゃが？　カレー？　シチュー？　それとも……。

自己紹介が遅くなりました、『真・定住する旅人』というサイトの管理人をやっております、ウェイフと申します。

いきなり料理の話から入ってどうするんだ、そう思う方もいらっしゃるかもしれません。でも、食材＝登場人物、調味料＆調理器具＝作者のアレンジ、食器＝舞台設定と考えると、料理を作ることと小説を書くことって結構共通項があると思いませんか。

材料は同じものでも作り手によって、それどころか同じ作り手でも気分によって出来上がるものが異なる。このことが創作の最大の楽しみなんだと思います。

と、前置きはここまでにして、本題に入りましょう。

一色氏からあとがきを書いて欲しいとの依頼があったのは１ヶ月ほど前のこと。その時は本当に驚きました。もちろん誰かに依頼されてあとがきを書いたことなんてありません。なので、正直何を書いたらよいやらと、今も試行錯誤しながら書いています。

私が氏の作品を初めて読んだ時、純粋な驚きを覚えました。こんな愛の形もあるのかと。

相手が望むことに対して全力で答えること、それが愛の形。ＳＭという行為そのものが好きだからするのではなく、お互いにとって最もいい形がＳＭという行為だったからそれをする。まるでパズルのピースのように、お互いの求める、足りない部分を補い合える相手との出会い。そして、身も心も一つになる。これは理想の愛の形の一つなのではないかと私は思います。これ以上多くは語りません。

では、最後は奴隷とご主人様のＳＳ及びこのような場を与えて下さった一色氏へのお礼で締めさせていただきます。

最後になりましたが、ここまで読んでくださった皆様、このような場を与えてくださった一色氏に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

真・定住する旅人　　ウェイフ

「ごっしゅじんさま♪」

「どうしたんだい、こんな暑い日にロングコートなんて着て」

「うふふ、私、ご主人様のためにおめかしをしてみました、ジャーン！！」

「うわっ……そ、それは……！！」

「どうですかぁ。痛かったけど、ご主人様のために頑張っちゃいました♪」

「ぴ、ぴ……ピアス、なんて……し、しかもそんなところに……

ガクッ」

「あらあら、ご主人様ったら気絶しちゃいました。やっぱりご主人様には刺激が強すぎましたかね。これから頑張って慣れていただかないとね♪」

以上です。ご主人様を逆調教する奴隷さんの話です。どこにピアスをつけたかはご想像にお任せします。

作者あとがき

今回の作品「彼岸の絆」は、私にとって前作以上にチャレンジングでエクスペリメンタルな作品となった。

執筆の動機についてはありきたりである。前作「奴隷の絆」で十分描ききれなかった、不完全燃焼を起こしていたところを完全に描き出したいということである。ストーリーに特にこだわりはなかった。だから、前作と同じ登場人物を使う必要は全くなかったのであるが、ちょうどスターウォーズエピソード3公開間近というタイミングだった。テレビ他に氾濫したスターウォーズの情報が私にエピソード1という言葉を刷り込んでいった。前作の初期設定状態をエンディングとする物語を書くということ自体がチャレンジングに見えたのである。それに、まったくゼロから新しい物語を構想するよりも、作者の労力も少なくて済みそうだったし、さらに読者側から見ても物語に入りやすいだろうし、親しみやすいだろうと思ったこともある。それで前作と共通のフッテージを使うことにしたのだ。

何よりも物語を遡りながら展開させるというスターウォーズを考えたジョージ・ルーカスの気持ちに迫れる……というやる気が作品作りを早めてくれた。そんなわけで作品の基本コンセプトは「奴隷の絆エピソード1」で早期に決着した。だが、前作は構想組上げにほぼ二年もの時間を費やしたのである。結局この熟考に当てられた時間がメッセージの明快さみたいなものに繋がったのだろうと思うのだが、前作の遺産を相当引き継いでいるとは言え、やはりそういうメッセージ性の切れ味のようなものは前作には及ばなかったように思われ、私としては不満を残すことになった。もっとも完全に満足するような作品を書けたら進歩もなくなるのだろうが。

しかし、前作では孤独と苛立ちとおたく的執念深さのようなものをエンジンとして書いていたものだが、この作品については、書くこと自体を楽しむことができたのは、私にとって望外の収穫であった。

要するに第一作を公開するためにサイトを設けたことで私の親交というか交流の幅が劇的に広がったことが大きいのである。そのムードが反映したか、何を書いてもトーンが明るくなったと感じるのは私だけだろうか。

もともと小説大好き人間ではない私の小説を読む量などたかが知れていた。ところが自分で自分のサイトを立ち上げてしまうとやはりいろいろなところが気になるようになってそこに並ぶ作品や作品宣伝を一通り読むようになる。

当然他の人の表現とか発想とかにいろいろな影響を受け、自分ならこう書くだろうなどと創造的な刺激をたっぷりと味わうことになった。結果から言えば作品完成までの時間が大幅に短くなったのはこの影響によるところが大きいと思う。

特に他の作家さんと直接的な交流の持てるチャットでは、いろい

ろな意味でいい材料をもらえたと思う。

ネタ
好奇心
知識
競争心
経験談
にやりとさせられる冗談

そういうものは創作という活動のエネルギー源なのだろう。何も意欲を感じていない状態でも不思議とものを書く気を湧かせてくれた。

前のパートであとがきを書いていただいた、真・定住する旅人というサイトを主催されておられるウェイフさんもそうしたチャットで私を知り合いの仲間に加えて頂いた方である。

チャットで話をさせてもらって数日たったある日、彼女のサイトの小説を読み終わり、感想を送ろうとメルアド探しをしていて偶然裏サイトへの案内を見つけてしまった。で、そちらにいってみると、なんと「奴隷の絆」を思わせる書き出しのショートストーリーが置いてあったのである。しかも某チャットで思いついた話とあった。これを見たとき、是非「彼岸の絆」のあとがきを書いてもらおうと思いついたのである。テーマとしては似たものもあるのだが、私がそれを日常の中に現われる「非日常」として描くのに対し、彼女は日常がエロに溶け込んだウェイフワールドを描かれる方なのである。私が神様を書くとヨニになるが、ウェイフさんだとお稲荷様になるという具合に。あまりネタバレになるようなことは書けないのでご興味のある方は、是非彼女のサイトにもお寄り頂きたい。主人公独白スタイルのピリッとしたツッコミを随所に散りばめる技を使われるのも現代的なのだろう。私にはなかなかできない。……感想じゃなくてもいいです、本編のパロディでもどんなものでもいいですよとウェイフさんには、チャットでお願いしたので、実を言えば、どんなものが出てくるのかは、私も楽しみにしているのだ。それを未入手のままこれを書いているので。

もちろん、彼女にはこの「彼岸の絆」の原稿はお渡ししている。ただ、校正推敲作業前のもので特にエンディングに近い部分は、限りなく生のブロットに近い、肉付けが全然出来ていない不完全なシロモノである。それがこの秘密プロジェクト依頼時点での最新版の姿だったのだ。今にして思えばウェイフさんにはとんだ楽屋裏をお目にかけてしまったようなものである。だから、もしウェイフさんの書かれたものの内容と本編の内容に差が生じるところがあるとすれば、そういう時点差によるものとご理解頂きたい。

また、「箱庭の海」というサイトを主催されているりおさんのこともここに紹介しておかねばならないと思う。彼女とは別のチャットでお話させてもらい、メール交換などをさせて頂いていた。私はり

おさんの表現力に圧倒されたのである。彼女の作品は何度も読み返した。無論それを真似るなどということは筆力が違いすぎて到底できないのだが、逆に自分の特徴というものを自覚することができるようになった。こういうことが分かるとどういう文を自分は書くべきなのかということに自信を持った判断を下せるようになるのである。これも前作と違い、完成までの時間を大幅に短縮することに繋がった。「奴隷の絆」ではほぼまるまる五十頁ほどを全面的に書き直すような「推敲」とはとても言えない推敲をしたのである。それはこういうところの自信の無さが如実に表れたものであった。

いずれにせよ、ウェイフさんやりおさん始め、チャットやメールで接触させていただいた多くのオンライン作家さんには大変お世話になった。この作品をなんとか完成させられたこと、特に前作に比べればはるかに短い時間で完成に漕ぎ着けられたことは、皆さんの存在なしには無かっただろうと思う。

改めて謝意を表したい。

また批判であれ、評価であれ、なにがしかが聞けるということは、何よりも嬉しいところだ。今後またそうしたお話を聞けることを楽しみにしていることも合わせて申し上げておきたい。

また数としてはそう多くはなかったが、前作について暖かいメッセージをお寄せいただいた読者の方にも、改めて謝意を表したい。

それがどういうものであっても、少なくともまた書こうという私の動機と意志を下支えしていただいた。

なお、小説の中身とは全く無関係な話を最後に一つ。

サイトでも紹介しているが、私は完結した小説を電子本で出すというスタイルを私のスタイルとして選択している。賛否両論さまざまな意見があるのは百も承知しているが、やはりこれが私のスタイルだと思うのである。そしてそのスタイルもやはり進歩を模索すべきだろうと考え、より紙の本の体裁に近づける演出を加えることにした。

表紙、ウェイフさんのあとがき、このあとがき、狂告（パロディ広告）などを付け加えたのも、本物の本を手に入れた匂いに近いものを皆さんに味わっていただこうと考えた結果である。オンライン作家さんの多くが、自分のサイト全体を自分の作品世界と考え、作り込まれる傾向が強いとすれば、私の行き方は、電子本一冊で完結する紙の本を模した作品世界の構築である。ご笑覧いただければ幸いである。

平成十七年　八月

一色　強兵

ご参考

ウェイフさんの主催されているサイトはこちらです

真・定住する旅人　http://waif.sakura.ne.jp/

りおさんの主催されているサイトはこちらです

箱庭の海　http://lovelove.lovesick.jp/

（狂告の頁）

完全無修正
超高画質動画サイト
RED HOT
長谷川なあみ
絶賛配信中!
カリビアンコム プレミアム
PREMIUM

今晩は、私とエロチャット
XXXYUAXXX
18禁 ライブチャット
DXLIVE

DVD
発売決定
詳細はこちら
カリビアンコム

（狂告の頁）

エロアニメTV
アメリカより
無修正アニメを
高画質でお届け中
» CLICK «
新検索機能で
作品を一発検索

ダウンロードはお早めに！
アナルファックなんて当たり前！
秋の夜長は迫力ボディーで
大胆金髪むすめで楽しもう。
100%完全無修正！洋物ボルノ動画 ストリーミング!
米国性動画通信

完全オリジナル素人動画配信
sumusume
素娘.com
無料
サンプル

奥付

電子署名者 : kyouheiisshiki
DN: cn=kyouheiisshiki, c=JP - 日本
理由 : この文書の著者
場所 : 東京都千代田区
日付 : 2008.02.05 20:56:25 +09'00'

彼岸の絆

著者＆発行人：　一色　強兵　（いっしき　きょうへい）

k1shiki.i@gmail.com

平成１７年９月１日　初版　公開開始

公開サイト：Symphony Fantastique

Symphony Fantastique

本作品の著作権は著者に帰属します。著者の許可無く転載改変することを禁じます。

本作品はフィクションです。作品中に登場する個人、団体などすべて架空のものであり、同名の個人、団体が実在していたとしても、あるいは類似した名称のものが実在していたとしても、なんら関係はございません。